

2013 年 7 月 17 日

題目：日本型トラッキングシステムの変容
—トラッキング構造の二極化による学歴格差再生産機能—

青山学院大学大学院 教育人間科学研究科 博士後期課程

学籍番号：49109003

氏名：中西啓喜

目次

はじめに：研究の目的	1
第Ⅰ部：序章・データの概要と方法	4
序 章：本研究の位置づけと先行研究のレビューおよび分析課題の析出	
1. 本研究の理論的位置づけ	4
2. 高校教育をめぐる社会構造の変化の状況	19
3. 先行研究のレビューと分析課題の焦点化	34
4. 研究のモデル化と章構成	44
第1章：調査とデータの概要	
1. 生徒文化調査の変遷と概要	52
2. 専門学科調査の概要	60
3. データの有用性と限界	61
4. 分析の方法：量的データと質的データの位置づけ	62
5. トラックと社会階層の変数化の手続き	63
6. 基本変数の記述統計	65
7. 生徒文化データの利用と分析の独自性について	66
第Ⅱ部：普通科高校の変容	71
第2章 高校トラックへの配分メカニズム：少子化と高校定員の変容から	
1. 問題設定	71
2. 高校の現状と先行研究のレビュー	71
3. 使用する変数と分析の方法	75
4. 分析	77
5. まとめと考察	82

第3章：アスピレーションの形成メカニズム

：高まる社会不安と御破算型選抜規範に着目して

1. 問題設定	87
2. 先行研究の検討と分析課題の設定	89
3. 分析の手続きと方法	90
4. 分析1：アスピレーションの規定要因の変容	93
5. 分析2：御破算意識の変容	96
6. 結論	100

第4章：教育改革のエリートセクターへのインパクト

：少子化と「自ら学び自ら考える力」に着目して

1. 問題設定	104
2. 先行研究	107
3. データの概要	109
4. 方法と手続き	109
5. 分析1：トップ校入学者層の変化	110
6. 分析2：学習へのコミットメントの変化	112
7. 結論：1990年代の教育改革の帰結	115

第Ⅲ部：職業系専門学科高校の変容

第5章：専門学科の進路形成メカニズム：商業科と工業科の比較分析から

1. 問題設定	121
2. トラッキング研究のレビュー	122
3. 方法と手続き	124
4. 進路形成のメカニズムの分析	125
5. 結論：商業科と工業科における進路形成メカニズムの差異化	131

第6章：地方商業科の存立メカニズム：「地域」を手がかりとして

1. はじめに	134
2. 商業科の変遷と現状	135
3. データと方法	139
4. 商業科の特色	141
5. 商業科の生徒の進路形成の分析	143
6. 知見と考察	148

終章：日本型トラッキングシステムの変容

：トラッキング構造の二極化による学歴格差再生産機能

1. 知見の要約と現代型トラッキングシステムの実態	153
2. 考察	158
3. 今後の課題	163

初出一覧	166
------------	-----

引用・参考文献	167
---------------	-----

謝辞	186
----------	-----

Appendix1：生徒文化調査の調査票

Appendix2：専門学科調査の調査票

Appendix3：生徒文化調査の基礎集計表

Appendix4：専門学科調査の基礎集計表

はじめに：研究の目的

本研究の目的は、メリトクラシー規範を維持するシステムとして機能してきた日本型トラッキングシステムの変容を実証的に明らかにすることである。より具体的にいえば、日本のトラッキング構造が二極化し、人々の出身社会階層を固定ないし再生産する機能を強めたという変化を実証的に明らかにしていく。

Parsons (1959=1973) は、学校の主要な社会的機能として、「社会化」(socialization) と「配分」(allocation) を挙げた。すなわち、学校は人々を、「個人の内部に将来の役割遂行の要件として不可欠なコミットメントならびに能力を達成させる」(＝社会化) 一方で、『人材選抜』の配分機関として機能するのである。社会的な地位と教育達成が関連するため、学校は、学校内での学業達成を主たる基準として人々を選抜し、社会の役割構造の中に配分する機能を担うのである。本研究の主要な関心は、Parsons (1959=1973) の類型に従うならば、学校の選抜・配分機能の研究に位置づけることになる。その際、最も重要なタームとなるのがメリトクラシー (meritocracy) である。

メリトクラシーとは、Michael Young による造語で、彼の著書『メリトクラシー (原題: *The Rise of Meritocracy*)』(1958=1982) で用いられた。Young (1958=1982, 訳書 p.112) によるメリトクラシーの公式は、「 $I + E = M$ 」であり、生得的な知能 (IQ) と努力 (Effort) の関数を業績 (Merit) とし、メリットの優れた人々が支配する社会原理をメリトクラシーと呼んだ⁽¹⁾。

産業社会では、異なる社会的地位の機能的重要性の程度とその地位に就いている人の能力との間に密接な関係が保たれることが要求される。そのため、人々の社会的地位は、社会的出自ではなく業績により決定され、人々の業績は配分される社会的資源 (富、勢力、威信、知識・技能) の基礎になる。その結果として生み出される社会的格差は業績を反映しているため、全体として社会にとって有効な機能に貢献している。したがって、社会的格差は「正統」なものだとみなされる (例えば、Parsons 1951=1974)。このような前提から、教育社会学における社会的資源の配分をめぐる教育選抜に関する研究は、選抜がどの程度メリトクラティックであるかを争点として、教育達成を人々の業績の指標とすることで、教育と社会階層がどの程度、関連／独立しているのかを研究してきた (例えば、Karabel and Halsey(Eds) 1977=1980、Lauder, Brown, Dillabough and Halsey(Eds) 2006=2012 など)。

日本のメリトクラシーに関する研究のいくつかはトラッキング研究の文脈で蓄積されている（例えば、岩木・耳塚編 1983、竹内 1995a、樋田ほか編 2000、樋田ほか 2011a,b など）。トラッキング理論の詳細な説明は後で行うため、ここでは簡単な説明に留めるが、日本の教育社会学におけるトラッキング概念は、藤田（1980、p.118）によって「たとえば複線型の学校システムのように法制的に生徒の進路を限定するということはないにしても、実質的にはどのコース（学校）に入るかによってその後の進路選択の機会と範囲が限定される」という高校教育システムのことだと定義されている。

高校進学率が 95%を超える日本では、高校卒業時が進路選択（社会的な分化）の大きな分岐点となる^②。中学校卒業者は中学卒業とほぼ同時に高校入試を受け、そこでは「輪切り選抜」（岩木・耳塚編 1983 など）と呼ばれる方法で、彼ら・彼女らは学力（成績）に応じて多様なランク・タイプの高校へ割り振られる。そして、高校卒業直後に、進学するか就職するか、進学するならどのような学校か、就職するならどのような職に就くかによって、将来に得られる社会的資源の多寡が異なる。また、それぞれのトラックへの配分は出身社会階層によって規定され、トラッキング理論に従えば、どのランク・タイプの高校に入学できるかによって、卒業後の進路が制限される。つまり、高校格差が出身社会階層格差を固定ないし拡大する機能を有しているため、トラッキングメカニズムを指摘することによって、社会移動の構造を明らかにしてきたのである。

日本型トラッキングシステムが以上のような性格のため、従来のトラッキング研究の主要なテーマに、①トラックへの配分はどの程度メリトクラティックであるか、②トラック内での進路分化はどの程度メリトクラティックであるか、という 2 点が設定されてきた。本研究はこれらを踏襲しつつ、継時的データを用いながら、トラックと社会階層の関連の変化を明らかにし、現代版の日本型トラッキングシステムの構造と機能を探る。

これらのリサーチクエッションを明らかにしていくのに際して、本研究では、特に高校生の親世代の学歴の変化に着目する。人々の教育達成に関する研究において、親学歴は出身社会階層の重要な指標のひとつとされてきた（安田 1971）。国勢調査によれば、高校生の親世代（40 歳から 59 歳として集計）の大卒率（短大・高専含む）の変化は、男性が、1980 年＝18.6%、1990 年＝約 22.4%、2000 年＝30.5%、2010 年＝約 38.7%、女性が、1980 年＝9.7%、1990 年＝約 11.2%、2000 年＝23.1%、2010 年＝約 36.4%となっており、高学歴化が進んでいる（2010 年の数値は速報値）。高学歴化によって、世代間の学歴の価値が変わることはいくつかの研究で指摘されているが（今田 1979、片岡 1990、中澤 2010

など)、吉川 (2006、2009) は、このような親世代の高学歴化が「学歴再生産家族」を生み出しており、その結果、人々の大学進学行動は、個々人の選択だとする意識が表面化し、学歴の世代間関係の閉鎖化・固定化がもたらされ、親の所有する資本や意識によって決まると指摘する。

近年、トラッキング構造の二極化が指摘されている (樋田ほか編著 2000、樋田 2001、耳塚 2007a)。また同時に、人々の教育達成が、親の所有する財産や願望によって決められるようになるという「ペアレントクラシー」(parentocracy) が隆盛していることも指摘されており (Brown 1997=2005、耳塚 2007b など)、メリトクラシー規範のゆらぎが見られる。以上より、本研究の問題関心をより大きな文脈に位置づければ、「現代の日本型トラッキングシステムは、人々の教育達成を業績原理から属性原理へと導くように機能しているのか」ということになる。

本研究の結論を先取りすれば、トラッキングシステムは、かつては青少年を学力 (成績) に応じて社会的に分化させる機能を有していたが、現在では親世代の学歴格差を再生産する機能を果たすように変化しているのである。本研究では、日本型トラッキングシステムの変容を「トラッキング構造の二極化による学歴格差再生産機能」という視点から明らかにしていく。

第 I 部：序章・データの概要と方法

序章：本研究の位置づけと先行研究のレビューおよび分析課題の析出

第 I 部は、序章と第 1 章の 2 つの章から構成される。序章の目的は、①教育社会学全体におけるトラッキング研究の位置づけの確認し、日本のトラッキング研究がどのように蓄積されてきたかを概観する。②加えて、近年の社会構造の変化を概観し、③日本のトラッキングシステムの変容に関する先行研究を示しながら、本研究での分析課題を設定していく。④そして、分析課題を設定したうえで、社会構造の変化にともなうトラッキングシステムの変容をとらえるための理論的枠組みを検討していく。

第 1 章では、序章で設定した分析課題を解き明かすために必要なデータの概要を記述する。ここでは、本研究で「生徒文化調査」と呼ぶ調査の変遷と貢献を述べたうえで、当該調査が残した課題を提示することによって、本研究の研究課題と分析データとの妥当性を述べつつ、本研究のオリジナリティを示す。

1. 本研究の理論的位置づけ

近年、トラッキングないしトラックという用語は、しばしば「高校間格差」の構造を表す用語などとして、矮小化されて理解されることがある。そこで、本節では社会階層とメリトクラシーに関わる教育社会学の研究を概観することで、トラッキング理論のもともと の定義を示し、本研究の位置づけを明確化していく。それには、イギリスの社会学者である Halsey を中心として編まれてきた教育社会学に関する 3 編のリーディングス（『教育と社会変動（原題：*Power and Ideology in Education*）』（1977, Karabel, J. and Halsey, A. H. (Eds)), 『教育社会学—第三のソリューション—（原題：*Education: Culture, Economy, and Society*）』（1997, Halsey, A.H., Lauder, H., Brown, P. and Wells, A.S. (Eds)), 『グローバル化・社会変動と教育 1—市場と労働の教育社会学—』、『グローバル化・社会変動と教育 2—文化と不平等の教育社会学—（原題：*Education, Globalization, & Social Change*）』（2006, Lauder, H. Brown, P. Dillabough J. and Halsey, A. H. (Eds)) を手がかりとする。

これらのリーディングスによれば、教育社会学における教育と社会階層の関係の理論的視座は、機能主義理論と葛藤理論から始まる。本章では、Halsey らの理論的枠組みを手掛

かりとして機能主義理論と葛藤理論を概観していく。そしてその後に展開される、「新しい」教育社会学を加えた理論的変遷を概観することによって、トラッキング理論が、機能主義論者と葛藤論者が十分に議論してこなかった学校のスループット研究に焦点を当てた中で登場した理論概念であることを説明していく。それにより、トラッキング研究の教育社会学における位置づけを確認するとともに、その発展プロセスを概観することが可能となる。

なお、機能主義理論、葛藤理論、新しい教育社会学に関しては、膨大な研究が蓄積されている。しかし、本節におけるそれらの理論整理は、トラッキング研究の位置づけを把握するための前提を確認することを目的としているため、必要最低限のレビューに留めることを理解されたい。

詳細は後述することになるが、トラッキングはアメリカで誕生した理論概念である。よって、トラッキング理論の日米間の差異を整理することで、日本のトラッキング研究がどのように展開されてきたのかを提示する。そのうえで、近年のトラッキング研究をレビューすることで、本研究の課題を焦点化していく。

1.1. 機能主義理論・葛藤理論・「新しい」教育社会学

1.1.1. 教育における機能主義理論

教育における機能主義理論 (functional theory) は、メリトクラシーの前提となるものである^③。その誕生の背景は、「近代社会になると大きな技術革新がおり、職業上の必要技能条件が上昇する。したがって世襲や情実による人員配置は複雑な職務と不適合になる。社会的地位の高い職務は高度の技術と才能をもった人材を要求する。このような職業上の技術や技能あるいは一般的能力は学校で教えられる。したがって教育資格がもっともすぐれた技能・能力指標になる。その結果、近代社会においては学校教育によって技能を取得した者が上昇移動する」(竹内 1995a、p.11) というものであった。

教育における機能主義理論に関する古典的な実証研究には、しばしば Blau and Duncan の『アメリカの職業構造 (原題: *The American Occupational Structure*)』(1967) が参照される。この研究の主要な関心は、社会移動のメカニズムの解明であった。それと同時に、この著書には、世代間での不平等の伝達に教育が果たしている役割についての資料も多分に含まれており、「産業社会の特徴である普遍主義の拡大をめざす基本的な趨勢が、確

かに存在する」という結論が下されている (Karabel and Halsey(Eds) 1977=1980、訳書 p.22)。

もうひとつは、Parsons の「社会システムとしての学級 (原題 : The School Class as a Social System: Some of its Function in America Society)」(1959=1973) である。Parsons は、カレッジへの進学機会は、社会階層と IQ (知能指数) の両方が関連しながら規定されることを認めつつも、「ほとんど大部分の生徒にとって」は、「学業を単一の主軸」として「獲得される」ものだと主張する。

しかし、教育における機能主義理論に関する限り、Blau and Duncan (1967) や Parsons (1959=1973) の研究は、後に批判的な評価を受けることになる (例えば、Karabel and Halsey(Eds) 1977=1980、竹内 1995a)。その理由は、「メリトクラシーを過大評価」したことにある。彼らがそのような主張をしたのは、メリトクラシーが当時の時代的な趨勢命題だったことに起因する。つまり、分析の命題や仮説が「属性原理から業績原理へ」という時代の趨勢を前提としてスタートしていた。

第一に、機能主義は 1950 年代に流行したが、この時代に機能主義ないしメリトクラシーが過大評価された理由のひとつには、まず実証の困難さにあった。社会移動は、産業構造や職業構造などの変化による「強制移動」と競争による地位の交替の「純粋移動」に分類される。メリトクラシーの証明には「純粋移動」の大きさが示されねばならないが、これはデータや分析方法の点で実証が難しいテーマであったため、実証的な結果を示すに至らなかった。

第二に、実証的研究が困難な一方で、1950 年代から 1960 年代は戦後復興と経済成長の時期であり、産業構造の変化や高学歴化といった社会変動にともない、人々は親世代よりも高い学歴や専門的な職業を「強制的に」獲得することになった。それがたとえ「強制移動」の結果だったとしても、人々の感覚のうえでは、メリトクラティックな選抜を経験していたのである。

第三に、技術・能力的な効率性だけでなく、属性原理から業績原理へのシフトは、機会の平等を促進するという点で道徳的に望ましいイデオロギーとされた。つまり、メリトクラシーは、当時の規範命題だったのである (竹内 1995a、pp.14-15)。

教育が重要性を増し、普及・増大するにつれて、教育は人々に個別的な価値を表明する機会を平等に与える「業績主義的正義」を執行する中核的な制度としての役割を持つようになる。そこでの「価値」とは、「生得的な知能 (IQ)」と「動機 (努力=Effort)」を結合

したもの、すなわち「業績 (Merit)」である。Young (1958=1982) が示したこのメリトクラシーの公式は、社会移動が可能な産業社会においては、遺産として受け継いだ特権ではなく、個人の業績にもとづく教育上・職業上の成功に道を開くという意味で、人々の社会的資源の獲得に向けた意欲 (=アスピレーション) を掻き立てることになっていく

(Lauder, Brown, Dillabough and Halsey(Eds) 2006=2012、訳書 p.13)。

教育機会に関する障壁は、社会階層、性別、人種を問わず様々な社会集団間の業績に焦点をあてることによって、除去することができると信じられた。しかし、教育機会が開放されたにもかかわらず、それぞれの社会集団の構成比にしたがって教育達成の平等化がなされなかった (Coleman 1968)。そのため、社会的な出自や相続財産は、依然として強力な影響力をおよぼしているという疑惑が生まれた。その説明のため、社会集団間の葛藤が、どのようにして勝者に利益を敗者に不利益をもたらすのかについて検討がなされることになる。

1.1.2. 教育における葛藤理論

教育における葛藤理論 (conflict theory) の勃興は、メリトクラシーの機能主義的な解釈に対して懐疑的な視線が向けられたことに起因する。葛藤理論は、個人や集団の相争う利害によって生み出される社会と、その諸部分における緊張を前提にしている⁽⁴⁾。そのアプローチの中心には社会階級の問題がある。すなわち、社会的上昇移動に対するシステムティックな障害や障壁があり、それが社会階級を生み出していると推測されているのである。

教育における葛藤理論が支持される根拠は、①近代社会には、身分集団の文化に差異が存在し、②身分集団は組織の内部で、それぞれ異なった職業的地位を占める傾向がある。そして、③組織の中でそれぞれ異なった地位を占めている者は、権力を目指して互いに争い合っている、というものである (Collins 1971=1980)。

Ballantine and Hammack (2009=2011、訳書 p.28) は、教育システムについて、Weber 流の葛藤理論を次のように整理する。すなわち、「権力関係と、社会における個人の集団の対立する利害は、教育システムに影響を及ぼす。というのは、学校を形作ることが、社会における支配的な集団の利害と目的」であるため、「学校の主要な活動は、特定の『身分文化』を教えること」である、と。Parsons (1959=1973) に従うならば、学校は社会化と選抜・配分の機能を有するわけだが、社会化と選抜・配分を通じて、学校は同時に、学校

生活の中で身分文化を強化される「インサイダー」と、学校で成功するための障壁に直面する「アウトサイダー」を見つけ出し、分化させるのである。

教育における葛藤理論は、ネオ・マルクス主義、ウェーバー学派の 2 つのアプローチに大別される。以下では、Lauder, Brown, Dillabough and Halsey(Eds) (2006=2012) に基づいて、葛藤理論に関する 2 つのアプローチを概観していこう。

(1)ネオ・マルクス主義的アプローチ

ネオ・マルクス主義者は、生産手段の所有と統制に基づく経済関係こそが、教育システムとともに国家の役割を規定すると主張する。ネオ・マルクス主義者にとって、国家とは、特権階級の再生産と共通の見解となって教育の不平等の正統性を確固たるものとする支配的イデオロギーを通じて、資本主義的支配階級の利益に奉仕するものである。そして、教育は、このイデオロギーを普及促進するうえで決定的な位置を占める。

ネオ・マルクス主義者の観点は、労働者階級出身の学生の教育の失敗を、教育機会に対応する能力において不利な条件を負っているという個人属性の観点から説明するのではなく、資本主義社会の不平等な特性を指摘し、労働者階級出身者の教育の失敗が不可避であることを論証しようとする。つまり、教育システムは、社会的教育的不平等の現存の構造を再生産する手段ということになる。

Bowles and Gintis (1976=1986, 1987) の「対応理論」(Correspondence Theory) は、学校において生徒が出身階層に応じた社会化がなされ、結果として教育システムが社会的な不平等の再生産を担っていることを指摘した理論である。「中間階級や上流階級の生徒たちの学校は、自由度がたかく、自発的な勉学を期待されるが、これは上級ホワイトカラーが資本家の目的や価値を内面化して自発的に行動する労働特性と対応している。下層階級の学校は、自由度が低く指示されたことをやり、学校の規則に応じることが要求されるが、これは労働者に要求される資質と対応している」(竹内 1995a, pp.21-22)。教育システムは、メリトクラシーの選抜過程において中立的ではなく、主に労働の社会的分業の再生産にもとづいて社会的資源の不平等な配分の正当化に寄与するということである。

しかし、「資本主義的『民主主義』において、その程度は、現存の不平等を正当とみなす道徳的風土(ヘゲモニー)の創出状況に依存する」ため、人々は「自分の教育上の失敗はそうやって当然だと考え」、その結果、「近代社会が、それによって立つ正当性の支柱を 1

つだけでもつとすると、それは、教育上の成功はメリットにもとづいて達成されることになる」のである (Lauder, Brown, Dillabough and Halsey(Eds) 2006=2012、訳書 p.16)。

(2) ウェーバー学派のアプローチ

ウェーバー学派のアプローチは、社会的排除という問題に焦点を当てる。その焦点は、①専門職集団がその社会的地位や所得を維持したり強化したりするために、専門的職業へのアクセスを統制する排除的な権力をどのように行使するのか (Collins 1979=1984) と同時に、②競争者集団の有利な社会的地位をめぐる葛藤として、生計の手段をめぐる競争にも注目してきた (Lauder, Brown, Dillabough and Halsey(Eds) 2006=2012、訳書 pp.16-17)。この学派の主張は、Weber (1956=1960、訳書 p.137) の以下の記述に的確に表れているといえよう。

「われわれは、整然たる教育課程と専門試験の導入を求める声が、あらゆる分野で高まりつつあるのを聞くのであるが、これは、いうまでもなく、突然『教育熱』が高まったというようなことではなく、教育免状の所持者のために地位の供給を制限し、これらの地位を彼らだけで独占しようという努力が、その原因をなしているのである。」

Collins は「学校が作り出す身分集団文化と、彼らを採用しようとしている身分集団の文化とが一番よく合致した場合、学歴は最も強く重視」される一方、「学校文化と雇用主の文化とがくいちがう場合には、学歴は低くしか評価されない」と主張する (Collins 1971=1980、訳書 p.117)。彼は、職業に就く際に要求される学歴水準の引き上げの理由を説明するにあたって、教育は誰が「インサイダー」かを明確にし、「アウトサイダー」を締め出すという形で「身分文化」を強化しているという Weber の考え方を援用したのである (Karabel and Halsey(Eds) 1977=1980、訳書 p.40)。

1950 年代の機能主義理論やメリトクラシー規範勃興の趨勢を戦後の経済発展における規範命題だとするならば、1960 年代の葛藤理論の流行は、ニューレフト運動に原因を求められる。ニューレフトの社会学者にとって、教育と社会の機能主義的な説明は疑わしく、彼らの個人的な生活や現実には起こっている事柄とも合致しなかったのである (Karabel and Halsey(Eds) 1977=1980、訳書 pp. 35-55)。

機能主義理論と葛藤理論の対立は、個人属性帰属説明モデルと構造的説明モデルの対立として読み替えることができるが（竹内 1995a, p.19）、どちらの立場も学校をブラックボックスとして扱ってきたところに共通点がある。

例えば、Parsons (1959=1973) は、学校には選抜・配分の機能があると主張するが、なぜ学校がそのような役割を担うのかは不明である。また、葛藤論者は具体的に学校の中で何が起きているのかを明らかにしないまま、学校こそが問題の源泉であるように見なす（例えば、Bowles and Gintis 1976=1986、1987）。学業達成の階層差が生じるのはなぜなのか。巨視的社会学のアプローチでは、その政治上、イデオロギー上の立場が何であれ、この問題には明確な答えを出すことができなかった。

この段において、微視的社会学のアプローチにより、ブラックボックスとして扱われてきた学校を「文化の伝達と統制機関」として再定義するため、1970年代以降では、解釈理論的説明が用いられるようになっていく。

1.1.3. 「新しい」教育社会学

M.F.D. Young (1971) が編集した『知識と統制（原題：*Knowledge and Control: New Directions in the Sociology of Education*）』を代表的な著書として旗揚げされた「新しい」教育社会学（New Sociology of Education）は、研究テーマ・対象とその方法に新しさがあった。

まず、研究方法の点では、象徴的相互作用論、現象学的社会学、エスノメソドロジーなどエスノグラフィックな方法が登場するが、これらは巨視的社会学が学校をブラックボックスとして扱う「インプット・アウトプットモデル」へ異を唱え、「スループット」の重要性を主張するためのものであった。

次に、学校内での様々なプロセスとしてのスループットに注目するため、研究テーマ・対象は、教育制度から「カリキュラム、教授法、評価」という枠組み、教師—生徒間の相互作用へとシフトした。

学校が機能主義的に選抜するにせよ、葛藤論的に不平等を正当化するにせよ、教師が「社会の必要」（機能主義理論）や「支配集団の利害」（葛藤理論）に従って行動するのは不明なままである。教師の子どもを選抜するプロセスを解明しないことには、学校はブラックボックスのままである（竹内 1995a, p.32）。それゆえ、新しい教育社会学では、学校

や教室における内部過程・内部作用を、エスノグラフィックな方法で解き明かすことを目指した。

新しい教育社会学では、微視的な視点から学校や教室というブラックボックスを解明することが目的であり、教師の認識と期待（偏見）、予言の自己成就、ラベリング、トラッキングなどは、その過程の構造的特質と社会化のメカニズムを説明する鍵概念であった。学校における行為・実践は、階級文化、人種、性別などのシンボルを媒介した相互作用であり、その相互作用における教師と生徒の解釈と状況定義が、生徒の能力、自己イメージ、アスピレーションを形成し、進路選択などの選択的行為を位置づけていくことになる（藤田 1992）。例えば、Rist（1977=1980）や Cicourel and Kitsuse（1963=1985）が、教師が生徒の学業成績よりも属性要因に基づいて差別的な期待・処遇を与えることで、帰属的地位に基づく生徒の学業成績・進路選択の不平等という悪循環を明らかにしたことは、新しい教育社会学の大きな貢献だといえる。

1.2. トラッキング研究の動向

1.2.1. トラッキング

以上のように、トラッキングは、メリトクラシーという規範命題が達成されないことをスループットから説明するための鍵概念のひとつとして登場したのである。

トラッキング（Tracking）は、Rosebaum（1976）の著書、『不平等の生成：ハイスクールにおけるトラッキングという隠れたカリキュラム（原題： *Making Inequality: The Hidden Curriculum of High School Tracking*）』によって概念化された。トラックとは、陸上競技の走路のことだが、これをアメリカの能力別学級編成の名称に転用したのである。トラッキングとは「生徒の資質や学力、あるいはアスピレーションによって学級編成を同質化することを意図した学校の選抜システム」である（竹内 1995a、p.49）。

イギリスや他のヨーロッパ諸国とは異なり、アメリカでは中等教育が複線的に分岐されていない。アメリカのハイスクールは、地域の多様な学力の生徒を一緒に収容するという総合制の形態をとっている⁽⁵⁾。そのため、学校内に、大学進学用のトラック（academic track）、職業教育主体のトラック（vocational track）、それらのどちらにも分類されない一般トラック（general track）の3種類が編成されている。このようなトラックの編成は、公式の見解では教科別編成であり、また学年が進級するごとに柔軟に変動可能なので、固

定的な能力別編成ではない。しかし、Rosembaum (1976) が明らかにしたのは、ハイスクールで行われている選抜が、自由な競争ではなく、「トーナメント」型だったということである。

トーナメント移動 (Tournament Mobility) について具体的に説明しておこう。それにはまず、Turner (1960=1963) が描いた 2 つの移動規範 (mobility norm) について理解する必要がある。すなわち、アメリカの「競争移動 (contest mobility)」とイギリスの「庇護移動 (sponsored mobility)」である。

移動規範とは、「社会の人々に合意を与えた望ましい上昇移動様式」(竹内 1995a, pp.47-48) である。アメリカは機会の開かれた国で、努力次第で個人がいくらでも上昇移動できるといふ「成功神話」の社会である。それに対し、当時のイギリスは 11 歳余試験 (eleven plus examination) が実施される複線型教育システムだったこともあり、早期にエリート選抜が行われる社会であった。

2 つの選抜規範の差異を理解するうえで重要になるのは、到達した地位が「平等幻想」によって支持されるか、「神秘性の幻想」によって支持されるかの違いにある。競争移動で達成された地位は「勝ち取る」ものだが、庇護移動の下では、早期に一般大衆とは隔離された者がエリートとして「育てられる」のである。したがって、競争移動規範は人々に、いつか自分も勝ち取ることができるかもしれないという「平等幻想」が作動する。一方で、庇護移動規範においては、早期に隔離され育成されたエリートは、大衆とは異なる優れた能力を持っているはずだという「神秘性の幻想」が作動するのである(竹内 1995a, pp.48)。

Turner (1960=1963) は、アメリカの移動規範を提示したに留まるが、それに対し、Rosembaum (1976) はアメリカの社会移動の実態 (actual structure) を明らかにした。表 0-1 は 9 学年 (中学校最終学年) と 12 学年 (高校最終学年) の所属トラックを掛け合わせた分析結果である^⑥。これを見ると、9 学年で非進学トラック (Upper Bussiness+Lower Bussiness+General) に所属していた生徒の中に、12 学年で大学進学トラック (Upper College+Lower College) へ移動した生徒は一人もいない。反対に、9 学年で進学トラック (College) に所属していたが、12 学年で非進学トラック (Upper Bussiness+Lower Bussiness+General) へ移動した生徒が 29.3% (4.3+5.4+10.9+8.7) いる。トラック間の移動は、上方へは難しくとも、下方への移動は比較的簡単だということである。

さらに、表 0-2 はハイスクール卒業時のトラックと実際の進路の関連を示したものである。進学トラックから大学へ進学した生徒は、男女ともに 8 割を越える一方、非進学トラックからの大学進学者はほとんどいない。トーナメント移動とは、勝者には床を規定する一方で、敗者には天井を規定するのである。

表 0-1. 9 学年と 12 学年のトラックの移動 (Rosembaum 1976、p.37)

Twelfth Grade Track Placement	Ninth Grade Track Placement			
	College (%)	Upper Bussiness (%)	Lower Bussiness (%)	General (%)
Upper college	16.3	0.0	0.0	0.0
Lower college	54.3	0.0	0.0	0.0
Upper bussiness	4.3	47.4	16.0	0.0
Lower bussiness	5.4	36.8	44.0	55.6
Upper general	10.9	0.0	4.0	0.0
Lower general	8.7	45.8	36.0	44.1
Total	100.0	100.0	100.0	100.0
Number of cases	(92)	(19)	(25)	(9)
$\chi^2 = 109.1$ with 15 df				
Gamma = .66				

表 0-2. ハイスクール卒業後の進路 (Rosembaum 1976、p.89)

	Boys		Girls	
	College Track (%)	Noncollege Track (%)	College Track (%)	Noncollege Track (%)
College Attendance				
No college	14.8	95.5	20.0	95.2
Four-year college	85.2	4.5	80.0	4.8
Total	100.0	100.0	100.0	100.0
Number of cases	(27)	(67)	(35)	(42)

トラッキングのもうひとつの機能は、各トラックに配分された生徒は、所属トラックにふさわしい社会化が行われるということである。進学トラックに配分された生徒には洗練

された知識の学習やアスピレーションが加熱される。他方で、非進学トラックの生徒は、徐々に大学へ進学できないことや、自身が下位トラックの生徒であることを受け入れるほかにないように社会化されるのである。

Rosembaum (1976) の主眼は、教育は社会階層に従属して不平等を再生産するという葛藤論的な視点だけではなく、選抜システムが造り出す「トリック」としてのトラッキングメカニズムを指摘することにあった。メリトクラシーが規範命題だった社会では、選抜システムは機会均等と効率性の相反する要求を迫られることになる。その結果、継続的な選抜（機会均等）と上方移動の制限が帰結し、トーナメント型の選抜システムが出来上がったということである。

1.2.2. 日本のトラッキングの特徴：アメリカとの比較から

Rosembaum (1976) によるトラッキング理論は、アメリカにおける教育システムが持つ不平等を生成するメカニズムを説明しようとした概念であった。ここでは、アメリカのハイスクールと日本の高校を比較することから、日本型のトラッキング理論がどのように説明されているかを概観していく。

耳塚 (1996) は Clark (1985=1986) の枠組みを用いて、アメリカのハイスクール（中等教育）と日本の高校の違いを表 0-3 のように整理する。このような日米間の差異は、人々のアスピレーションを調節する機構として以下のような機能的な差異を持つ。

アメリカのハイスクールは、小学区制 (local monopoly) かつ総合制 (comprehensive schools) である。そのためアメリカのトラックは、1つのハイスクールの中で、生徒が履修する教科や教科内での成績に応じて事後的に編成される「カテゴリー」にすぎない。一方、日本の高校は、①地域(学区)にいくつかの高校が競争的に偏在しており (competition)、②それらの高校へ入学するためには入学試験が行われる (selective schools)。③有名大学への進学者を多く輩出する高校が、それらの頂点に位置している。このような特徴により、中学生は成績に応じてそれぞれの高校に配分される。そのため、日本のトラックは、高校のランク・タイプそのものを指す。

このような高校（中等教育）の日米間の違いは、その形成過程に起因する。アメリカのハイスクールは、初等教育からの延長として拡大していったのに対し、日本の高校は大学進学準備学校ないし実業学校としてスタートした (岩木 1996)。つまり、アメリカのハイ

スクールが初等教育と密接な関係にある（downward coupling）一方で、日本の高校は、上級学校との接続（upward coupling）が強いということである⁽⁷⁾（耳塚 1996）。

表 0-3. 高校教育システムの日米間の差異⁽⁸⁾（耳塚（1996）を参考に作成）

アメリカ	日本
普遍的教育（universal education）	普遍的教育（universal education）
総合制高校（comprehensive schools）	選抜的学校（selective schools）
下級学校との接続（downward coupling）	上級学校との接続（upward coupling）
地方分権（local control）	中央集権（national control）
小学区制による独占的教育（local monopoly）	学校間の競争（competition）

日米間のトラックの形態の差異は、アスピレーションの加熱・冷却メカニズムにも差異を生む。

荻谷（1991、pp.173-189）によれば、アメリカのトラッキングは、競争の後で敗者を納得させる仕組みを前提としているという。アメリカでは、ハイスクールで大学入学用のカリキュラムを選択しないと大学受験資格すらない。しかし、有資格者には誰でも入学を許すオープン・アドミッション制をとるコミュニティ・カレッジの2年間は、そういった目的のために利用される。希望する大学に入学するのに適切な履修をしなかった学生は、一度コミュニティ・カレッジに入学する。そこで良い成績を取れば、大学に編入できるかもしれない。そのような「夢」を与えておいて、一度はあきらめさせる。しかし、高校で進学用のカリキュラムを履修しなかった学生は、基本的にコミュニティ・カレッジで良い成績はとれない。学生は徐々にそのような現実を知るようになる。アメリカにおける高校と大学の接続は、高校卒業後に徐々に時間をかけて、彼ら・彼女らのアスピレーションを冷却していく。

その一方で、日本では、地域に複数の高校が、入学者の学力水準や卒業生の進路実績を基準として階層的に存在しており、青少年は高校入試（中学卒業時の学力）によって各高校へ振り分けられる。そのため、高校卒業後の進路分化をめぐる競争は、高校内部ではなく高校入試以前に繰り越されている。つまり、いわゆる「輪切り選抜」によって学力の多様な生徒をランク・タイプの異なる高校へと配分するのである（岩木・耳塚編 など）。そのため、日本では、高校階層構造の存在が「入学以前の効果（pre-entry effect）」（Kamens 1981）として青少年の教育アスピレーションを冷却するという（荻谷 1986）。

そもそも、アメリカのトラックは可視的でないため、ハイスクールの生徒は、自分の所属するトラックを正しく認識していないし、帰属意識も持たない。そのため、卒業学年になっても非現実的なアスピレーションを持つ生徒も多い (Rosembaum 1980)。それに対し、日本のトラックは階層化された高校そのものを指すため、生徒は正確な所属トラックを把握している。Rohlen (1983=1988、訳書 p.337) が、日本とアメリカの高校を比較し、日本の高校教育の特徴が「個人に許された選択の少なさ」にあり、日本の高校生は、選択にとりかこまれるアメリカの生徒とは違って、「まっすぐで狭い道」を定めた割合に合わせて歩んでいると指摘したように、日本の高校生のアスピレーションは、在籍する高校のランク・タイプに応じて分相応に調整されるのである。

以上のようにトラッキングの日米間の差異を概観すると、相対的に日本のトラッキングシステムの方が、厳密な社会的分化装置として機能していることがわかる。入試による高校への配分は、しばしば批判を受けながらも（例えば、佐々木 1976、汐見 1994 など）、実力主義にもとづいて社会成員の階級意識を分化させ、不平等を正当化させ、メリトクラシー規範を大衆化させることに成功してきたのである。

1.2.3. 日本のトラッキング：競争的なアスピレーションの焚き付け

高校教育を対象としたトラッキングシステムの日本的特徴の説明をもう少し続けよう。

日本型トラッキングシステムの最も大きな特徴のひとつとして、各高校が偏差値によって序列化された大学と結びついていることが挙げられ、人々はそれによりアスピレーションが焚き付けられる。このような高校教育システムは、「学歴主義的」という批判を受けながらも、人々にメリトクラシー規範を根付かせるためには効率的であったといえる。このように序列化された大学入試によって規定される日本型トラッキングを、竹内 (1995a) は「傾斜的選抜システム」と呼んだ。それによれば、人々が偏差値の高い大学を目指す誘引には、将来の地位達成に有利なこと（機能的価値）、まなざしとしての学歴（象徴的価値Ⅰ）、受験社会（象徴的価値Ⅱ）があり、これらが複合的に作用し、人々を受験競争に巻き込んでいくという（竹内 1995a、pp.90-92）。つまり、序列的な大学ランクと序列的な高校トラックが対応関係にあるため、人々は「分相応」の教育アスピレーションを持つように加熱／冷却されるというのである。具体的には、以下のようである。

「学校が序列化すると、受験競争への焚きつけは、学歴社会や立身出世物語などの外部に帰属させることなく、受験社会内部で自己生産できるようになる。学校ランクや偏差値ランクがそれ自体として競争の報酬となり意味の根拠となってしまうからである。偏差値 51 と 56 の僅差の学校ランクが将来の昇進や賃金に持ち越されるわけではない。にもかかわらず、偏差値やわずかな学校ランクの差が受験競争の誘引になってしまう。(中略)

しかもすべての学校がランク化つまり総序列化状態におかれれば、事態は一部の人々の間のエリート校をめぐる競争にとどまらなくなる。平均学力の生徒も、相対的上位校をめざしての競争に焚きつけられる。生徒は模擬試験などによって偏差値 55 と知らされたとき、偏差値 68 とされる学校への志願はあきらめるだろう。しかし頑張れば偏差値 60 の学校に進学できるのではないか、というようにかえって焚きつけられる。(中略) 焚きつけの作用は、偏差値上位者だけにとどまらない。中位者や下位者についてもおきる。」(竹内 2005、p.250、(カッコ内、引用者加筆))

日本のトラッキングシステムが、メリトクラシー規範の大衆化を成功させてきたのは、先に述べたような、高校入試選抜(入口)の存在だけではない。人々を実力主義にもとづいて社会成員の階級意識を分化させ、不平等を正当化させてきたのは、大学入試(出口)に応じた「分相応」のアスピレーションの焚き付けが存在してきたからである。

1.2.4. 日本のトラッキング研究の動向

トラッキング研究の動向は、大きく 2 つの視点から指摘できる。第一に、出身社会階層とトラックの関連、第二に、トラック内部での社会化に関する研究である。前者の視点からは、社会階層を再生産する機能としてのトラッキングメカニズムを探ることになる。また後者の視点では、トラック内部で見られる様々な現象、例えば、カリキュラム、進路指導、生徒文化等の実態を探ることになる。

まず、出身社会階層とトラックの関連に関する研究であるが、おおまかな知見としては、所属トラックと生徒の家庭背景は、独立的な関係ではなく、統計的に有意な偏りがあるということである。具体的には、社会経済的に裕福であるほどアカデミックなトラックに所属する。そのため、トラックへの配分は、社会階層によってなされているのである(Jencks et. al 1972=1978、Oakes 1985、Jones, Vanfossen and Ensminger 1995)。

日本でも、トラックと社会階層に関連があることはいくつかの研究から示されているが、古典的なものとしては、潮木ほか（1978）や秦（1977）の研究がある。

潮木ほか（1978）は、公立中学の3年生とその母親を対象とした調査を行い、高校の課程選択（普通科か職業科か）を規定するのには、学業成績の効果が一番強いが、その成績は出身階層により規定されていることを明らかにしている。つまり、「誰がどのように各トラックに配分されるのか」という問いに対する知見は、「業績原理を媒介とした属性原理による配分」というものであった。高校入試を契機とする学力選抜は一見するとメリトクラティックな選抜であるが、学力形成は社会階層に規定されており、結果としてトラックへの配分が社会階層によってなされているのである。

次に、トラック内部での社会化に関する研究は、生徒文化研究によって蓄積されてきた⁹⁾（例えば、岩木・耳塚編 1983、樋田ほか編 2000、樋田ほか 2011a,b など）。戦後、日本の高校教育は、単線型教育体系のもと、生徒の学力や進路の多様性に対応する仕組みとして、いわゆる「輪切り選抜」（学校ランク）および普通科と複数のタイプの職業学科を作ることによって、傾斜的な高校の階層構造を形成してきた。生徒文化研究は、このような高校間における生徒の進路・学力・学校生活をとらえることを目的としてきた。高校生の多様な学力や進路は、傾斜的なトラッキングシステムによって、個々人に応じた教育が提供されてきたのである。

このような傾斜的な高校教育が可能だったのは、当時の日本特有の教育問題であった「学歴社会」が根底にあったからである。つまり、「輪切り選抜」によって階層化された高校トラックが、受験偏差値によって傾斜的に階層化された大学ランクと対応していたのである。既述の通り、アメリカと比較すると、日本の高校は上級学校との接続（upward coupling）が強い（耳塚 1996）。そのため、日本の高校生の学習やアスピレーションは、大学受験という「隠れたエンジン」によって維持されている（Rohlen 1983=1988、訳書 p.340）。

このような傾斜的なトラッキングシステムの結果、日本の高校生は、①実力主義にもとづいて社会成員の階級意識を分化させ、不平等を正当化し、②大学入試という「隠れたエンジン」によって人々に勤勉性などの文化を根付かせる機能を果たし、③卓越したエリートではなく、一般の能力水準を高め、高い経済的生産性を生むことに貢献してきたのである（耳塚 2011）。

しかし、1990年代後半になると、トラッキングシステムの変容が指摘されるようになる。そこで指摘された変容とは、主に下位トラックにおけるいくつかの多様化であった。それ

らの多様化を具体的に挙げるならば、高校入学時の学力の多様化（樋田 2001）、希望進路の多様化（耳塚 2000a）、進路意識の多様化（荒川 2009）、学習時間の多様化（耳塚 2006）などである。それらを踏まえ、かつては傾斜的な階層構造によって人々を選抜していたトラッキングシステムの構造が、一部のトップ校とそれ以外の大部分の高校に分かれ、二極化していると指摘されている（耳塚 2007a）。トラッキングの二極化は、メリトクラシー規範の二極化をも意味する。メリトクラシー規範のゆらぎは、①エリート選抜の正統性を脅かし、②選抜からもれた非エリート層の全体社会に対する *loyalty* を低下させ、③社会的統合と経済的生産性を低下させる危険を有する（耳塚ほか 2003）。

それでは、以上のように指摘されてきたトラッキング構造の二極化は、2000 年代を通じて深化したのであろうか。すでに述べてきたように、トラッキングとは、青少年が配分されたトラックに応じた社会化がなされ、その結果、彼ら・彼女らの進路選択が制限される教育システムのことである（Rosembaum 1976）。そのため、研究の主眼は、個々人のインプット（出身社会階層や学力）の差異をアウトプット（進路）に最大化してつなぐスループットのメカニズムを明らかにすることに置かれてきた（例えば、岩木・耳塚編 1983、樋田ほか編 2000 など）。

以上より、本研究の問題関心は、トラッキング構造の二極化の深化をとらえつつ、その機能の変容を実証的に明らかにすることである。本研究のリサーチクエッションは、このような研究の文脈に位置づく。

2. 高校教育をめぐる社会構造の変化の状況

前節では、本研究の問題関心が、教育社会学研究のどこに位置づくかを示した。その結果、トラッキング概念は、メリトクラシーという規範命題における機会均等と効率性という相反する要求の妥協点のひとつとして登場したことを示した。

トラッキングであれストリーミングであれ、ある年齢ないし教育段階に達すれば、カリキュラムや学習・進路指導が生徒の学力や希望進路に応じて分かれることは、多くの国で見られる。そのため、そこで争点となるのは、人々の選抜と配分に対して、教育システムが社会階層とどのくらい独立的であるかということである。具体的にいえば、特定のトラックに特定の社会階層出身者が偏ることは望ましくないし、またトラッキングシステムが

人々の進路分化に対して社会階層の拡大ないし再生産を助長することも望ましくないということである。

このような視点からトラッキング研究の課題を検討すると次の点が浮かび上がる。①青少年のトラックへの配分はどの程度メリトクラティックであるか。②トラック内での進路分化はどの程度メリトクラティックであるか。③仮に、いずれもメリトクラティックでないのであれば、それらを存立させるメカニズムはどのように変化してきたのか、の3点である。

本節では、1990年代後半からの大きな社会変動を概観しながら、それらが高校教育に与えたインパクトを見ていく。その際に着目する社会変動は、「少子化」、「学校から職業への移行の危機」、「グローバリゼーション・知識経済と高校教育改革」、「産業構造の変化」の4つである。詳細は後述するが、これらの社会変動は、それぞれ高校教育のインプット・スループット・アウトプットに関わる要因である。これらを概観することより、トラッキング構造の二極化と機能変容をとらえるための視点を焦点化していく。

2.1. 少子化

少子化は、1990年代後半以降に起こった最もドラスティックな社会変動だといえる。政治、経済などほとんどすべての社会活動に関する前提は、人口が十分に確保されていることのうえに成り立っているとさえいえよう。それは教育選抜も例外ではない。

日本の学力や学習意欲、勤勉性などを高水準に保つための教育システムは、高等教育への入試であった（例えば、Rohlen 1983=1988）。OECDの教育調査団が「十八歳のある一日に、どのような成績をとるかによって、彼の残りの人生は決まってしまう」（OECD 1971=1972、訳書 p.92）と指摘したことに見られるように、高度成長期以降の日本は学歴社会だとされてきた。これは、しばしば批判的な議論も繰り返されてきたが（例えば、梶田 1981 など）、結果として、高等教育よりも下の教育段階における教育システムを形成する機能を有してきたのである。しかし、少子化によって多くの大学が入学定員を確保できないため、選抜的な入試が実施できなくなった。

少子化にも関わらず選抜的な入試が維持されているのは、医学部などの一部の例外を除いては、国公立大学や都市部の有名大学である（中村 2011）。そのため、大学受験による学力・学習意欲・勤勉性などの維持機能は、局所的にしか作動しなくなる。このような少子化による受験圧力の低下は、傾斜的な選抜システムとして機能してきた高校階層構造を、

都市部の有名大学を目指す上位高校と選抜度の低い大学や専門学校、就職等、進路が多様な高校へと二極化させていくという（耳塚 1995、天野 2006、耳塚 2007a）。

表 0-4. 学力の維持・保証装置の構造変化（天野 2006、p.185）

	戦前	戦後	現在
教育の発展段階 若年人口	エリート 増加	マス 増加	ユニバーサル 減少
進学需要 進学率	需>給 低位	需 $\geq$ 給 上昇	需 $\leq$ 給 飽和
中等教育の構造 高等教育の構造	複線 二元重層	普通・職業 ピラミッド	総合 分極化
中等カリキュラム 学内学力評価 選抜の方法 入学者選抜	必修制 淘汰的 入試 限定的	構造化 序列化 入試・学力 普遍的	脱構造化 多様化 学力・個性 部分的
進学意識 進学目的 動機づけ	特権 立身出世 野心	権利 上昇移動 競争	義務 非下降移動 差異化
政策理念	効率	平等	個人的自由

表 0-4 は、天野（2006）によって示された学力の維持・保証装置としての高等教育の構造の変化である。若年人口の減少（少子化）とともに進学率が飽和状態になると、入学者選抜が部分的になり、高等教育が分極化するのである。大学の受験偏差値による傾斜的な序列によって機能してきた高校教育システムであるが（竹内 1995a）、高等教育が分極化すると同時に、高校教育も分極化していくということである。そのため、1990 年代以降の高校と大学のアーティキュレーションに関する研究の焦点は、進路が多様化した下位トラックを対象として蓄積されてきた（例えば、乾編著 2006、酒井編著 2007、荒川 2009、中村編著 2010 など）。

以上のように、少子化によるトラッキング構造の変容は、主に進路（アウトプット）の多様化とそれに伴うトラック内部（スループット）の変化を研究してきた一方で、インプットの変容についての検討は決して十分になされてきたとはいえない。

前節ですでに見たように、トラッキング研究の主たる関心は、各トラックと在籍する生徒の家庭背景（インプット）とに関連があり、インプットの差がトラック内部で増幅され、結果として、教育達成や社会移動の不平等を再生産する機能をトラッキングが担っている

ということであった（例えば、Rosembaum 1976、Oakes 1985 など）。このような立場からすれば、少子化時代におけるトラックへの配分メカニズムは解明されるべきである。

本研究で着目するインプット要因に関わる社会変動は、戦後の人口の増減と高校増設ないし再編のミスマッチである。図 0-1 は、公立高校在籍者数の推移である⁽¹⁰⁾。これを見ると、戦後に 2 つの山（高校生の増加の時期）があったことがわかる。すなわち、1965 年頃は第一次ベビーブーマーの高校入学、1985 年から 1990 年頃は第二次ベビーブーマーの高校入学である。そして 1990 年以降は、高校生は減少し続けている。

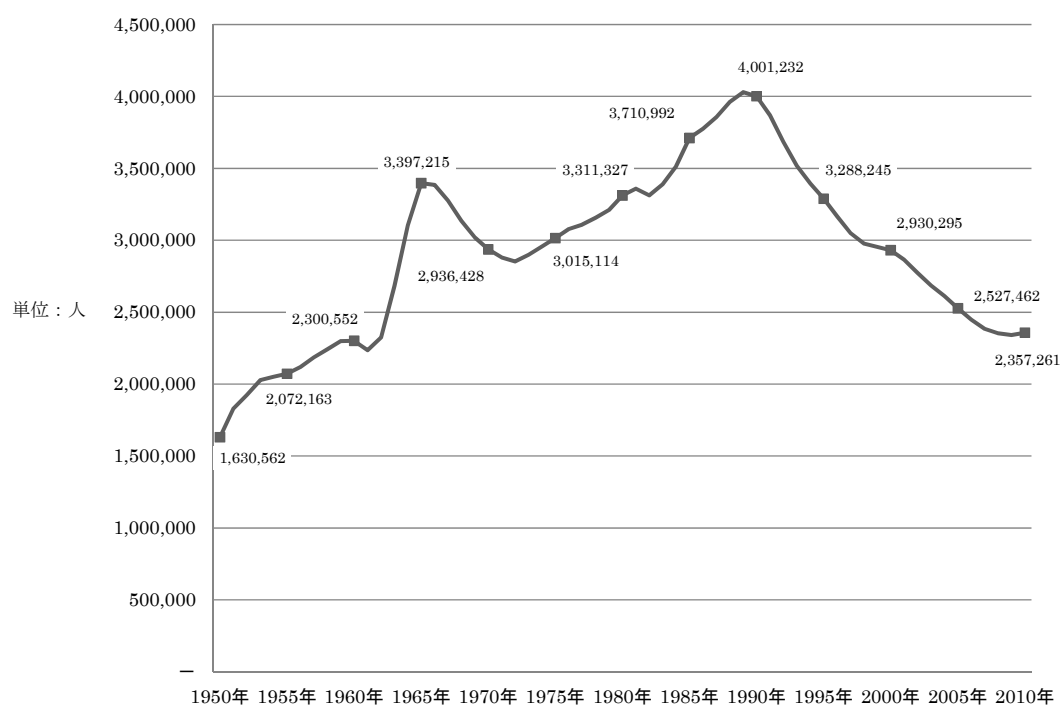
それに対して、高校数は生徒数とは対応した増減をしない。図 0-2 は公立高校数の推移である。やや歪な形だが、おおまかな傾向として読み取れるのは、①1975 年頃から 1990 年頃まで高校数が増加傾向にあり、②1990 年以降は、高校数がほとんど減っていないということである⁽¹¹⁾。

そこで、高校収容力⁽¹²⁾（1 校あたりの生徒数）の変化を算出してみると（図 0-3）、①1975 年から 1990 年頃にかけては、高校収容力は増加傾向にあるが、②1990 年以降は、高校収容力が減少傾向にあることがわかる。つまり、少子化の中で、高校は 1 校あたりの生徒数を減らすことで、高校数を維持してきたということである。

中西ほか（1997）が、高校階層構造の成立の条件として、ベビーブーマーによる入学者の増加と、高校間で入学者の学力の「質」をめぐる競争が起こっていることを挙げたように、入学者数と高校定員のバランスは、効率的な高校教育システムの成立にとって重要なファクターである。しかし、高校生の数が減り続ける一方で、高校数が減らないということは、高校入学選抜が緩和されていることになる。その結果、中学生のトラックへの選抜・配分メカニズムに変化が生じていることが予想される。

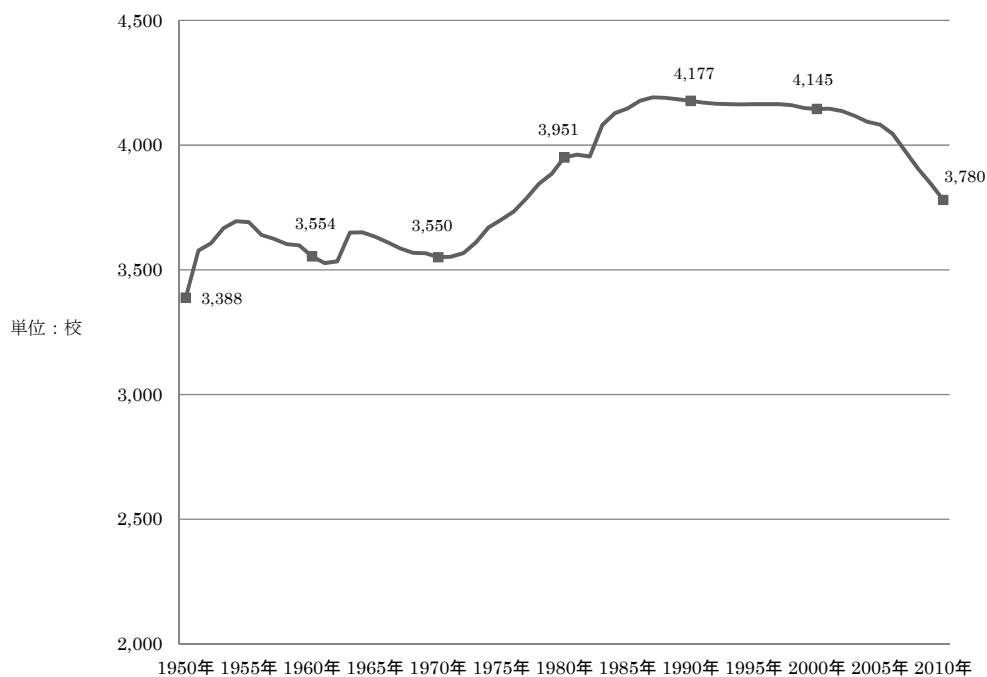
高校階層構造は、戦後の二度に亘るベビーブームによる人口の増加とともに形成されてきた（中西ほか 1997、耳塚 1995）。少子化と高校定員の変化に焦点を当てることによって、トラックへの選抜・配分メカニズムに新たな知見を付け加えることができるだろう。

図 0-1. 公立高校在籍者数の推移（学校基本調査より作成）



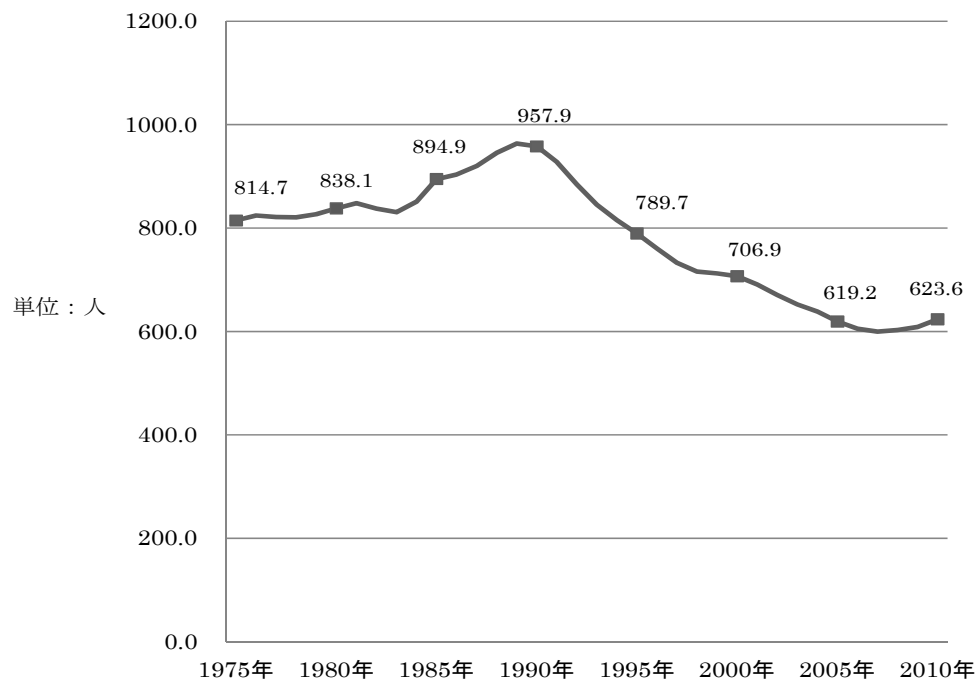
注 1) 数値は、全日制・定時制を含む全ての公立高校。

図 0-2. 公立高校数の推移（学校基本調査より作成）



注 1) 数値は、全日制・定時制を含む全ての公立高校。

図 0-3. 高校収容力の推移（学校基本調査より作成）



注 1) 数値は、全日制・定時制を含む全ての公立高校を対象に算出。

2.2. 学校から職業への移行の危機

バブル経済崩壊後、若者を取り巻く社会変動の中で最も大きく取り上げられてきたもののひとつが、無業者、フリーター、ニートと呼ばれる人々を対象とした「働かない／働けない」若者に関する問題であった。その後、これは「学校から職業への移行 (transition) の危機」という関心から多くの研究が蓄積された⁽¹³⁾（例えば、荻谷ほか 1997、矢島・耳塚編著 2001、小杉編著 2002、玄田・曲沼 2004、本田 2005a、お茶の水女子大学 2004～2012 など）。ここでは、高卒就職者に限定して、学校から職業への移行のスタイルがどのように変容したかを概観していこう。

まず、高度成長期以降の日本型雇用制度は、乾（1990、pp.141－143）がバブル経済崩壊以前当時の状況を以下のように整理している。簡潔に整理されているうえに、日本型雇用制度の変化を概観するうえで重要なため、やや長文になるが引用文を掲載しよう。

- ① 職種を特定せずに一般的能力、人柄などを基準に、新卒者を中心に本雇従業員を採用する採用制度。
- ② 一般的要素を前提として、企業内の訓練施設やジョブローテーション、OJT などにより、幅広い実務的職務遂行能力の開発・伸長をめざした従業員の教育訓練制度。
- ③ 企業内職務経験＝勤続年数を基礎にしながら、従業員の適性・職務遂行能力を判定し、人員を配置し、資格制度上の昇格を行ない、役職者の選抜を行なういわゆる「年功的昇進制度」。
- ④ 毎年一定の時期に過去一年の勤務成績を評価したうえで、個人別に基本給の改定を行なう「定期昇給制度」。
- ⑤ 勤続年数と基本給を基礎にして一定の支給率を算定されるが、自己都合、会社都合、定年退職などの退職事由によって、支給率が異なる退職金制度。
- ⑥ 五五歳という、労働者の平均的な労働可能年齢からみれば若い年齢にもかかわらず、一定年齢に達したという要件のみで、企業から退職する定年制度。

そして、これらの諸制度が総合的に機能するとき、企業は、生産量の変動や技術的変化などの際にも従業員を容易に配置転換等させられるなど経営上の理由による人員整理を最小限に止めることができ、したがって長期雇用が相対的に安定的に保障される。また、定年退職の際には、企業年金や高額な退職一時金が支払われることで、退職後の生活援助がなされる。終身雇用制度とは、こうした手年退職後の生活への一定の援助を含め、長期雇用が相対的に安定的に保障されるシステムをさす。さらに、企業内職務経験＝勤続年数が従業員の職務遂行能力を示す指標のひとつと考えられ、基本給の決定や昇進・昇格の基準として使われるため、従業員に対する処遇も、平均的には年功的なものとなっている。

このような日本型の雇用システムは、労働者個人と企業との関係が非自立的であると批判的にとられてきた一方で、労働者の「安定的」な生活をほとんど 100%に近い形で保障した。労働者とその家族は、この雇用システムの中にいる限り、定年退職までに限らず退職後までの経済的な見通しが可能であった（乾 1990、p.142）。

ところで、日本の高校と労働市場の接続は、学校推薦制をとってきた。企業は求人票を高校に提出し、高校は企業への応募者を校内で選考し、1社につき1人を推薦し、企業は

ほぼそのまま採用してきた。これは「1人1社制」と呼ばれ、日本の高卒就職の大きな特徴だとされてきた。一方で、高校での学内選考は、成績をベースとして行われてきた。それというのも、高校側にしてみれば「優秀」な生徒を推薦することで、次年度の求人数にも影響するからである。このように、企業と高校が、持ちつ持たれつで形成される「実績関係」によって、日本型の高卒就職のシステムは成り立っていたのである（樋田 1983、荻谷 1991）。

また、このような日本型高卒就職システムの特徴のひとつに、企業は求人票を提出する高校を選定できるということがある。つまり、高卒就職の中にもある種の「学歴社会」が存在しており、威信が高い高校には、有名企業からの求人票が相対的に多く集まったのである。ベビーブーマーの高校入学を契機として、高校教育の大衆化がもたらされた結果、企業は採用に際して、大量の新卒者を選考しなければならなかった。そこで、より「優秀」な人材を比較的容易に確保するためには、新卒者の能力が一元的に序列化されている必要があった。そこで高校生のほぼ全体を覆って標準化されており、個々の労働力の序列上の位置を指し示す指標として、高校入試の結果による学校間序列を用いはじめたのである。わが国における学校選抜試験は入学時に行われるため、高校の偏差値は、採用時の能力そのものを表しているわけではない。しかし、もともと未分化で潜在的な一般的教育可能性を評価するのであるから、その程度の時間的なズレはそれほど大きな意味を持たない（乾 1990、pp.169-173）。そのため、より威信の高い高校に求人票を多く提出し、学校推薦により応募してきた高校生を採用してきたのである（荻谷 1991）。

日本型の高卒就職のシステムはそれまで、若者のスムーズな移行が可能なシステムとして海外でも評価されてきた（例えば、OECD 2000、Rosembaum and Jones 2000 など）。それは、すなわち、「学校の組織的な支援の下に、卒業するかなり以前から求職活動をし、卒業と同時に安定した正規の職を得るという、新規学卒就職・採用のシステム」（小杉編著 2002、pp.1-2）だった。しかし、バブル崩壊後の不況を契機として、スムーズな移行が困難となった。繰り返しになるが、日本型の高卒就職システムは、高校への求人票に応じて、学内推薦という形で高校が企業に生徒を送り込む。そのため、前提となる高校に提出される求人票の数が減少すれば、高卒就職は難しくなるのである。そういった意味で、学校から職業への移行が不安定になったにも関わらず、「新卒主義」は未だに根強いいため、企業との実績関係がうまく維持できない学校の卒業生は、職業への移行がうまくできずに無

業者になっている（本田 2005a、酒井編著 2007 など）。このような、職業への移行の危機の増大とともに、「社会的な不安」が増大してきたことが指摘されている（山田 2004）。

それでは、このような社会的な不安の高まりによって、高校生の進路選択には、どのような変容が見られるのだろうか。経済不況による社会不安が人々を進学に向かわせることは Brubacher (1947) の指摘するところでもある。移行の危機にともなう社会不安をキータムとして高校生の進路形成の変化を明らかにすることによって、トラッキングシステムの新たな局面をとらえることができるだろう。

2.3. グローバリゼーション・知識経済と高校教育改革

本研究では、1990 年代に実施された一連の高校教育改革を、トラッキングシステムを変容させた社会構造として位置づける。よって、ここでは、その教育改革の社会的背景を概観していこう。

現代社会は、新しいテクノロジーの応用と国際的な貿易・投資の障壁の崩壊によって、グローバル知識経済の時代ということになっている（Brown and Lauder 2006=2012）。このような社会において、人々は国民あるいは工業社会の一員としてではなく、グローバル化したウェブ経済の中に生存基盤を見出さなければならなくなるという（潮木 2006）。

高度産業社会での知識の重要性は、Bell (1973=1975) の『脱工業社会の到来（原題：*The Coming of Post-Industrial Society*）』で初めて説かれた⁽¹⁴⁾。Bell (1995、訳書 p.94) による脱工業化のテーゼは以下のようなものである。表 0-5 も合わせて参照されたい。

第一に、「前工業社会」は、農業・鉱業・漁業・林業といった採取業によって産業が成り立っている。アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの多くの国の人々はこれに従事し、天候、土壌、森林資源・鉱物資源といった自然環境に依存した産業で、Bell は「自然に対するゲーム」と呼ぶ。

第二に、「工業社会」では、製造・加工業、エネルギーを機械に与えて稼働させ、大量の商品を生産する産業が中心を占める。ヨーロッパ諸国や旧ソ連、日本などはこの工業社会を経た。そこでは、人は機械に貼り付けられ、高度に調整されたやり方で労働の組織的リズムが刻まれる。これを「つくられた自然 (fabricated nature) に対するゲーム」と呼ぶ。

第三が、「脱工業社会」である。人々の活動は、処理・制御・情報に関わるものになる。これは「人間交互間 (between persons) のゲーム」と呼ばれる。より重要な点は、技術革新、特に知識と技術の関係についての新たな原則が出来上がっていることであるという。

Bell（1995）によれば、脱工業社会の特徴は、「サービスの社会」だという。工業社会におけるサービスとは、産業設備・運輸・財務・不動産など産業を補完するものであった。しかし、脱工業社会では、①教育・医療・社会事業・福祉といった「人間的なサービス」や、②分析および計画立案・設計・プログラミングなどの「専門職的サービス」が産業の中心となるというのである。

表 0-5. 社会変化の一般的図式（Bell 1973=1975、訳書 p.162）

	前工業社会	工業社会	脱工業社会
地 域	アジア アフリカ ラテン・アメリカ	西ヨーロッパ ソ連 日本	アメリカ
経済部門	第1次 採取業— 農 業 鉱 業 漁 業 林 業	第2次 製造業— 工 業 加工業	第3次 第4次 輸 送 貿 易 レクリエ 金 融 ーション 保 険 不動産 第5次 保 健 教 育 研 究 統 治
職業スロープ	農 夫 工 夫 漁 師 未熟練労働者	半熟練労働者 技術者	専門職・技術職 科学者
技 術	資源	エネルギー	情報
構 図	自然に対するゲーム	つくられた自然に対するゲーム	人間相互間のゲーム
方 法	常識 体験	経験主義 実験	抽象的理論— モデル シミュレーション 決定理論 システム分析
時間的展望	過去志向 アド・ホック的対応	アド・ホック的順応 企 画	未来志向 予 測
基 軸 原 理	伝統主義— 土地・資源の限界	経済成長— 投資決定の国家的・ 私的統制	理論的知識の中心のお よびその集成化

その後、サービスの産業は、Reich (1991=1991) によって階層的に細分化されることになる。すなわち、「ルーティン・プロダクション (生産)・サービス」、「インパースン (対人)・サービス」、「シンボリック・アナリスティック (シンボル分析的)・サービス (=シンボリック・アナリスト)」の3つである。これらの分類において、Reich が最も強調したのは、シンボリック・アナリストであった。

シンボリック・アナリストとは、問題解決者、問題発見者、戦略的媒介者のことである⁽¹⁵⁾。シンボルとは、データ、言語、音声、映像表現であり、これらは工業社会の産物である標準化された製品として世界で取引されるわけではない。シンボリック・アナリストは、「シンボル操作によって問題点を発見し、解決し、あるいは媒介する」。さらに、シンボリック・アナリストは、「現実をいったん抽象イメージに単純化し、それを組み替え、巧みに表現、実験を繰り返し、他分野の専門家と意見交換をしたりして、最後には再びそれを現実に変換する」能力を有する (Reich 1991=1991、訳書 p.245)。つまり、市場がグローバル化し、高度に技術化された社会において高い報酬・地位を得るのはこのようなシンボルを操る人々だということである。

グローバリゼーションと知識経済の社会においては、メリトクラシーの様相も変貌する。従来のメリトクラシーは、国家を単位とした、いわば「ナショナル・メリトクラシー」を前提としてきた。しかし、シンボル操作による経済はグローバル化した社会を基盤としているため、とりわけ先進国は、グローバルな経済競争で勝利するために、教育目標を「グローバル・メリトクラシー」へとシフトさせる必要が生じている (岩木 2004、潮木 2006)。

確かに、教育が適切にスキルを身につけた労働者を作り出しさえすれば、知識経済とグローバリゼーションの組み合わせは広範な利益をもたらすかもしれない。しかし、教育がそのような期待を担うことができるのかどうかということは常に議論されてきた (例えば、Brown 1997=2005、市川 2002、潮木 2006、本田 2005b、荻谷 2006、Brown and Lauder 2006=2012 など)。

このような時代の趨勢の中、1990 年代の日本は様々な教育改革を実施した。それは、いわゆる「新学力観」をめぐり行われた。情報化、グローバル化といった社会情勢が知識経済を生み (例えば、Reich 1991=1991、Thurow 2003=2004 など)、「ナレッジワーカー (knowledge worker)」が必要とされたことがその大きな背景といえる (荻谷 2006)。本田 (2005b) は、「創造性」や「個性」、「能動性」といったものが、「ポスト近代型」の能

力として求められているというが、「新学力観」をめぐる教育改革は、変動の激しい知識経済を基盤とする社会において求められる能力の育成を目指して行われたといえよう⁽¹⁶⁾。

一方で、戦後日本が学歴社会といわれてきたように、日本の社会・経済・企業は人々のメリットの指標を学歴で測定しようとしてきた。それは、ポジティブな見方をすれば、学歴は個人の能力シグナルとして人々を差別的に扱うための装置であるため（荒井 2002、2007）、学歴をメリットの指標とすることには一応の正当性はあるといえる。ところが、戦後日本の「学歴社会」は常にネガティブな文脈に置かれた用語として用いられてきたし（荏谷 1995、中村 2011）、「詰め込んだ知識量」で評価された人々（＝高学歴者）が必ずしもシンボル操作に長けているとは限らない。日本がグローバルな経済競争で勝利するためには、学歴偏重の社会（ナショナル・メリトクラシー）から脱却し、グローバル・メリトクラシーへとシフトする必要があったのである（荏谷 2006）。

グローバルな競争を中心に置いた教育政策は、確かにシンボリック・アナリストのようなグローバル経済で活躍する人材を生み出すかもしれない。しかしその一方で、仕事をめぐるグローバルな競争状態が生み出され、先進諸国の労働者の生活水準と雇用保証が脅かされ、国内で人々の貧富の格差が増すという「繁栄のパラドックス」が指摘される。しかし、それは以下のような政治的レトリックによって正統化されてきた。

「労働市場が国際的な性格をもつにいたったために、豊かな家庭背景をもつ子どもたちが恵まれない家庭背景をもつ子どもに比べて不公平な有利さをもつことはない。恵まれない子どもたちに不利な状況をもたらしているのは、特権的な家庭の子どもたちがあらゆる教育機会を享受しているという事実ではなく、高度技術・高賃金の雇用をめぐるグローバルな競争への参加を阻む要因として資格・知識・技術の欠如である。

それゆえ、『公平な』教育システムとは、もはや公平な競技場を作り出そうと試みるものではなく、すべての人の水準を向上させて高等教育へより多くの人々が入学することを促進し、グローバルな労働市場で価値が与えられている資格・知識・技術で武装させる、というものである。したがって、最高の待遇の仕事をめぐる競争は、同胞の隣人との間にあるのではなく、国家間にあるのだ。もっとも才能のある人たちを滞らせたり、親たちに私的な教育をさせないようにしたりすることは、国家的な競争力を損なうことになる。なぜなら、彼らは経済を推進させる可能性がもっとも高い人たちだからである。このことは、他の生徒たちにアスピレーションを実現させないようにすることを

意味しない。なぜなら、グローバル経済に通用する技術を開発する労力・能力・やる気を持つ人なら誰でも、その仕事につける可能性があるからである」(Brown and Lauder 2006=2012、訳書 pp.155-156)。

日本の教育改革でも、公立中高一貫校の設立といった中等教育の複線化など、公立学校を多様化し、エリート予備層を優遇的な教育で伸ばそうとした側面が指摘された⁽¹⁷⁾。例えば、斎藤(2001=2006、p.248)は、かつて教育課程審議会会長であった三浦朱門の発言を次のように紹介している。「(日本の)平均学力が高いのは、遅れている国が近代国家に追いつけ追い越せと国民の尻を叩いた結果ですよ。国際比較をすれば、アメリカやヨーロッパの点数は低いけれど、すごいリーダーも出てくる。日本もそういう先進国型になっていかなければなりません」(カッコ内、引用者加筆)。つまり、斎藤(2001=2006)によれば、一連の教育改革が知識経済社会における「リーダー」の育成を目的としており、そのような人材育成は、主に学力のエリート層を対象としていたというのである。

事実、アメリカと比べると日本の学校教育は画一的で、人々の創造的な能力を育成出来ないことはたびたび指摘されてきた(Rohlen 1983=1988、Reich 1991=1991)。そのため、高校教育に対する改革は、多様性を目指したものであった。日本の高校教育の重要な問題が、画一的なカリキュラムと、多様な関心・能力を持つ生徒たちとの適合性の欠如だということに鑑み、いくつかの多様性を持たせた改革がなされ、「新しいタイプの学校」として、単位制高校、総合制高校、6年制中等教育学校(中高一貫校)などが登場したのである(Shimabara 1995=2009)。つまり、画一的な教育制度に閉じ込められていた多様な高校生に対し、制度(カリキュラム)を多様化することによって対応しようとしたということである。

すでに見てきたように、従来の日本型トラッキングシステムは、卓越したエリートではなく、一般市民の能力水準を高め、その結果として高い経済的生産性を生むとされてきた(Rohlen 1983=1988、耳塚 2011)。しかし、グローバリゼーション・知識経済社会を背景として、1990年代の一連の高校教育改革は、エリートセクターにおいて卓越した人材の育成を奨励した。本研究では、このような教育改革を、日本型トラッキングシステムを変容させた要因のひとつとして位置づけ、トラッキングの新たな存立メカニズムを模索する。

2.4. 産業構造の変化による職業系専門学科の変容⁽¹⁸⁾

Grubb and Lazerson (2006=2012) によれば、中等教育段階における職業教育はメインストリームではなくなりつつあるという。多くの国々では、単線型の教育体系を採用している。そのため、人々は教育機会を、制度的には、制限されることがなく、高学歴化が進んでいる。また、高度な技術が必要とされる知識経済の下では、中等教育で与えられる職業的知識は役に立たないものとして扱われることもしばしばだという。

中等職業教育はどうしても産業構造の変化に 2 つの点で敏感である。第一に、学校で与えられる知識・技能が古くなるということ、第二に、職業への移行が不安定になるということである。例えば、ドイツ、オーストリア、デンマークでは、徒弟制における就労ベースの学習と学校ベースの学習を連結した強固なデュアル・システムを採用している。しかし、徒弟制は、スキルと雇用が安定している諸条件の下でより適合するものであり、変化する諸条件の下ではしばしば機能しなくなるという (Grubb and Lazerson 2006=2012、訳書 p.133)。

図 0-4 は、経済産業省による『産業活動分析』で報告された 1980 年以降の日本の産業構造の変化である (ただし、資料は総務省「労働力調査」からの重引)。これを見ると、第三次産業従事者が一貫して増加し、第一次産業従事者が一貫して減少していることがわかる。高卒の就職者が最も多く就く第二次産業については、1992 年の 2,195 万人 (シェア 34.1%) をピークとして 2010 年にはそのシェアを 24.8% と約 10 ポイント減少させている。このような第二次産業のシェアの縮小という動向からか、高卒就職者の出身学科と就職先のレリバンスが低下していることが指摘されている (橋本 1996、本田 2009、番場 2010 など)。

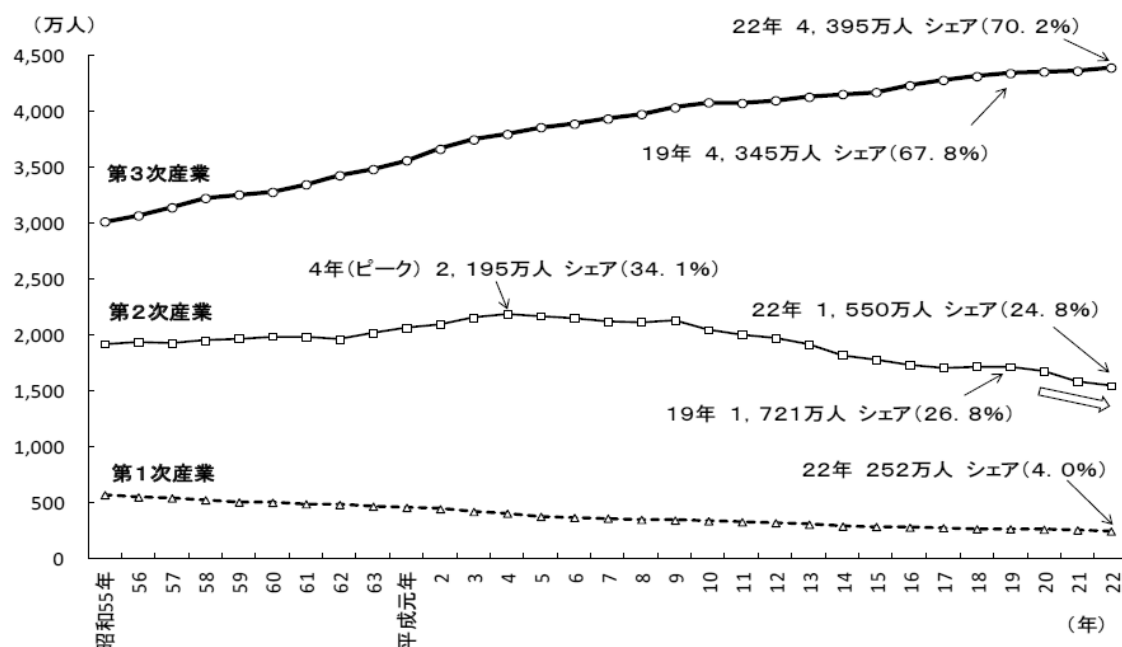
このような動向の中、日本の中等教育段階の職業教育の転換点は 1995 年だったといえる。当時、理化学研究所の理事長であった有馬朗人を座長とする「職業教育の活性化方策に関する調査研究会議」(文部省) において「スペシャリストへの道」が示され、そこでは、「今日の急速な社会の変化に対応するためには、学校教育終了後も生涯にわたり職業能力の向上に努める必要」があり、「また、これからの時代、自分の人生を切り開いていくためには、専門能力を身に付け、これをいかに活用することができるかがより重要」とされ、職業高校の呼称が、その役割と理念を明確にするため、「専門高校」へと変更された⁽¹⁹⁾。

「スペシャリストへの道」が提言された背景には、産業構造の変化だけではなく、同時に、先に見たグローバル化や知識経済化があったといえよう。そのために「専門高校」は

従来の「完成教育」といった性格を弱め「学校教育終了後も生涯にわたり職業能力の向上に努める」ことが奨励され、徐々に進学準備学校としての性格を強めていくのである（番場 2010）。

以上のような現状において、中等職業教育の変容を明らかにすることは重要な検討課題である。産業構造の変化や教育改革の結果にともなう職業トラック（vocational track）の変化を明らかにすることで、専門学科の変容と現状を示し、日本のトラッキングシステムの新たなフェーズを描き出すことが可能になるだろう。

図 0-4. 第 1～3 次産業別就業者数の動向



(注) 1. 日本標準産業分類（19年11月改定）の産業大分類により、第1次産業は、農業、林業、漁業、第2次産業は、鉱業、採石業、砂利採取業、建設業、製造業、第3次産業は、電気・ガス・熱供給・水道業、情報通信業、運輸業、郵便業、卸売業、小売業、金融業、保険業、不動産業、物品賃貸業、学術研究、専門・技術サービス業、宿泊業、飲食サービス業、生活関連サービス業、娯楽業、教育、学習支援業、医療、福祉、複合サービス事業、サービス業（他に分類されないもの）、公務（他に分類されるものを除く）の合計値としている。

2. 分類不能の業種が存在すること等から、第1～3次産業就業者数の合計と全就業者数の数字は一致しない。

資料：「労働力調査」（総務省）から作成。

資料出所：経済産業省「就業状況を中心にみた第3次産業の動向（平成23年7-9月期発表）」<http://www.meti.go.jp/statistics/toppage/report/bunseki/pdf/h23/h4a1112j1.pdf>

（2013年4月20日取得）

3. 先行研究のレビューと分析課題の焦点化

ここでは、社会構造の変化にともなうトラッキングシステムの構造と機能の変化に関する仮説を導くための理論的枠組みを検討するために、先行研究のレビューを行い、そのうえで分析課題を設定していく。

すでに述べたように、本研究における大きなリサーチクエッションは、以下の3つである。①トラックへの配分はどの程度メリトクラティックであるか。②トラック内での進路分化はどの程度メリトクラティックであるか。これらを継時的に比較分析し、③現代版の日本型トラッキングシステムを存立させるメカニズムを探る。

予め後の章で展開していく分析の結果を先取りして示せば、①トラックへの配分には、中学時成績よりも親学歴の重要性が増し、それによってトラッキング構造が二極化し、②二極化したトラックでは、質的に異なった進路指導が行われ、生徒の進路が分化する。その結果として、③トラッキングシステムによる学歴格差の再生産機能が強まっている、ということである。

以下では、これらの分析のための視点として、従来型のトラッキングシステムを成立させていた「学歴社会」、「傾斜的選抜」、「職業トラック」の3点がどのように変容しているかについての先行研究をレビューしていこう。

3.1. 学歴社会から学歴下降回避へ

本研究の第一の分析課題は、高校トラックへの選抜・配分メカニズムの変容を、学歴下降回避仮説（吉川 2006）の検証から明らかにすることである。

戦後日本の教育社会における最も重要なキーワードのひとつとして「学歴社会」があった。それは、一方では、①出身社会階層と教育達成がどのように関連するのか、獲得した教育が個人の地位達成にどれほど影響するのか、という教育社会学の古典的テーマに非常に近かったことと（潮木 1983）、②日本の教育社会学の発展（＝海外の研究へのキャッチアップ戦略）という目的から、日本特有の研究テーマだったこと（竹内 2000）などがある。また他方では、「マスコミの花形テーマ」として社会的な関心が高かったため（潮木 1983）、アカデミズムの内外を問わず、学歴社会は重要なタームだったのである。

Ishida（1992、pp.5－6）は、日本の学歴社会言説を以下の6点に整理している。

- (1)教育達成が、社会的背景から独立している。
- (2)社会経済的地位達成に対して、獲得した学歴の効果が、海外に比べて相対的に大きい。
- (3)社会経済的地位達成に対して、獲得した学歴の効果が、社会的背景よりも大きい。
- (4)社会経済的地位達成に対する高等教育の効果が、大学ランクに依存する。
- (5)獲得した学歴の効果が、初職の獲得だけでなく、その後の社会経済的地位達成に対しても継続する。
- (6)社会経済的地位達成に対する学歴の効果が、日本社会の全ての領域（segments）に渡って同質的である。

学歴社会論に関する研究は蓄積が多く、しかもそれぞれの知見が微妙に異なっているため、Ishida（1992）による整理が、日本の学歴社会の実態をどの程度的確にとらえているのか、あるいは言説に過ぎないのかを明言することは難しい（例えば、麻生・潮木編著 1977、小池・渡辺 1979、竹内 1995a、広田 2001、荻谷・本田編著 2010 など）。とはいえ、実態であれ虚構であれ、「学歴社会言説」が日本人の教育熱（＝アスピレーション）を加熱する相応に大きなファクターのひとつだったことは明言できよう（例えば、OECD 1971＝1972、Rohlen 1983＝1988、竹内 1995a など）。

戦後の日本が、教育ないし学歴に価値を置いたのには、産業構造が第一次産業から第二次・第三次産業へと変容し、人々が雇用の世界へ参入するに際して、教育（学歴）が必要とされたことにあった。人々は、産業構造の変容とともに、「教育による生まれ変わり」を経験したのである（荻谷 1995、2001、佐藤 2004、橋本 2009 など）。そのため、高校であれ大学であれ、「偏差値」という実力（学力）に応じた教育を獲得できるように見える教育装置は、人々に「学歴主義」というメリトクラシー規範を根付かせるのに一役買ったのである（荻谷 1995、2001）。

そして、戦後日本の教育熱はさらに高まり、高卒者の大学進学率も右肩上がりだった。しかし、大学進学率は 50%あたりで停滞し、これ以上は上昇しないと見込まれている（矢野・濱中 2006 など）。この要因には、機会の地域間格差、経済的要因による格差、性別間格差などが指摘されているが（小林 2008）、少なくとも、これ以上は上昇しない（高原期）というのが、大まかな合意である。吉川（2006、2009）が、現代日本の格差社会を説明するために着目したのは、この大学歴の分断線であった。吉川（2006）は、「教育による生

まれ変わり」といった性格を持った戦後型の学歴社会を「旧式学歴社会」とし、格差社会における現代の学歴主義社会を「成熟学歴社会」と名づけ、それぞれを相対化した。その詳細が表 0-6 にまとめられている。

この吉川（2006、2009）の枠組みのうち、本研究にとって最も示唆的なのが、「学歴下降回避のメカニズム」（学歴下降回避仮説）である。学歴下降回避仮説とは、Boudon（1973＝1983）、Breen and Goldthorpe（1997）からなる「相対リスク回避説（Relative Risk Aversion）」を下敷きとしたもので、「親の学歴が大卒層であれば、子弟はそれと同等かそれ以上の学歴を求めて大学進学 of 意欲を高めるが、親の学歴が高卒層であれば、高校卒業によって相対的下降がすでに回避されているため、大学進学への差し迫った欲求は作動しない」（吉川 2006、p.248）というものである。その結果、人々の大学進学行動は、個々人の選択だとする意識が表面化し、学歴の世代間関係の閉鎖化・固定化がもたらされる（吉川 2006、p.248）。

表 0-6. 旧式学歴社会と成熟学歴社会（吉川 2006、p.251）

	旧式学歴社会	成熟学歴社会
教育制度	新制・旧製の制度境界を含有する社会	新制教育制度の長期継続
教育拡大趨勢	右肩上がりの高学歴化	高水準での安定・膠着（高原期）
教育機会境界	高校進学機会と大学進学機会の二段階	大学進学機会への集約
マクロな要因	絶対的貧困の影響とその解消 ホワイトカラー上層の労働力需要拡大期	豊かさの中の不平等 ホワイトカラー上層の労働力需要の安定・膠着
ミクロな要因	大衆のメリトクラシーによる全体加熱	学歴下降回避による選択的加熱
平等化	弱い平等化の推移	反転閉鎖化・大卒固定化
時代認識	一億総中流	新しい格差・平等化

さらに吉川（2009）は、このような学歴社会の変容にともない、近年の私立中学受験ブームに対しても次のような考察を加える。すなわち、「学歴社会のかたちが変わり、それがゆとり教育を許容する風潮を生み、『教育格差』といわれるものを拡大させ、『お受験』ブームを招いている」（吉川 2009、p.168）。つまり、この大学歴の分断線こそが、教育格差の「主成分」だということのである。2000 年頃から都市部を中心に、私立中学受験が流行し、

主に教育の私事化・市場化を基盤とする教育改革の視点から説明されてきたが（例えば、Kariya and Rosembaum 1999、藤田・志水編 2000、卯月 2004、市川 2006、藤田 2006 など）、吉川（2006, 2009）は、「お受験」ブームを成熟学歴社会における学歴下降回避のメカニズムによって説明したのである。

ここには、教育達成の構造が「業績原理から属性原理」へとシフトするという趨勢を読み取ることができる。本研究では、吉川の枠組みを援用し、「学歴下降回避仮説」をキーワードとして、教育の格差を助長する要因としてのトラッキングシステムの変容に着目する。具体的には、公立の高校トラックへの配分が、次第にノンメリトクラティックなメカニズムによってなされるようになったという変化を実証的に明らかにするのである。

先述の通り、これまで、Bright Fright (Kariya and Rosembaum 1999) やリッチ・フライト（藤田 2006）と呼ばれ、富裕層が子女の教育達成をより有利にすることを目的とし、私立学校へ進学させる現象が問題視されてきた。しかし、学歴拡大にともない、公立高校と社会階層（親学歴）が関連を強めてきたのかどうかという「変化」についての研究は手付かずであった⁽²⁰⁾。階層間格差を助長する教育システムとしては、専ら私立中学・高校のみが注目されてきたのである（例えば、中川 2007、谷崎 2008、中西 2011）。その理由のひとつには、この変容を実証的にとらえるためのデータが存在していなかったことがある。そこで本研究は、公立高校と社会階層（親学歴）の関連の変化を実証的にとらえることが可能なデータを入手し、分析を展開していく。それにより、公立高校が社会的格差を助長する一側面となっていることを実証的に明らかにする。

以上より、学歴下降回避仮説の検証からトラックへの選抜・配分メカニズムを明らかにし、トラッキング構造の変化を指摘することが本研究の第一の分析課題である。

3.2. エリート選抜の存立メカニズムの変容

本研究では、エリート選抜の存立メカニズムにも焦点を当てる。古典的な教育社会学の選抜研究は、エリートの地位をめぐる選抜様式を明らかにしてきた (Turner 1960=1963、Hopper 1968=1980、山村 1976)。様々な職務が複雑化する近代社会では、エリートの地位が世襲や情実によって与えられるものではなく、選抜の結果として勝ち取るものになってきた。そのため、選抜研究の中心は、その様相を描き出すことであったといえよう。そして、そこではメリトクラシーがキーワードとなり、地位達成と出身社会階層がどのくら

い独立的であるかが問題の焦点とされてきたのである（例えば、Collins 1971=1980、1979=1984 など）。

すでに述べてきたように、竹内（1995a）が「傾斜的」と表した日本型トラッキングシステムは、人々にメリトクラシー規範を内面化させるのには適した教育システムだった。高校入試、大学入試ないし就職試験といった具合に断続的に続く地位をめぐる選抜は、高校生のアスピレーションを完全に冷却させることなく、「分相応」に調整しながら加熱した。そのため、エリート選抜の正当性が保たれてきたのである。

ところが、2000 年頃から、トラッキングシステムの二極化が指摘され始めた（樋田ほか編著 2000）。具体的には、相対的に下位のトラックにおいてのみ、学習時間が減少したり（耳塚 2006）、希望進路が多様化するなど（荒川 2009）、下位トラックにおける高校生がメリトクラシーから離脱したのである。中村（2011）は、このような状況から、日本の選抜システムをとらえる枠組みとして、「エリート選抜」と「マス選抜」を区別することを提唱した。

中村（2011）がマス選抜を提唱するに際して下敷きにしたのは、Trow（1976）が説いた現代産業社会における高等教育の構造＝歴史「理論」（structural-historical “theory”）であった。Trow は、大学進学率 15%以下を「エリート」段階、15%から 50%までを「マス」段階、50%以上を「ユニバーサル」段階としているが、この類型は、単純に高等教育の拡大が段階的に移行することを示しているのではない。例えば、高等教育が量的に拡大し、マス段階に突入しても、エリート型の高等教育機関は存続し続けるというように、どれだけ高等教育が拡大しても、エリート大学（学生）はその地位を確保し続けるということも同時に言及している（Trow 1976、訳書 pp.iii－iv）。これを踏まえつつ、中村（2011）は、これまでの教育研究や教育政策の議論が、エリート的な視点から行われることが多かったことに鑑み、Trow（1976）の理論的枠組みを用いて、現代日本の選抜システムを把握する視点としてエリート選抜とマス選抜の区分を持ち込むことの有効性を指摘した。

この枠組みから見れば、2000 年代の「高校と大学の接続」をめぐる議論は、マス選抜に集中していたといえよう。具体的にいえば、マス化（あるいは、ユニバーサル化）した大学へ入学する層の学力や学習意欲をどのように高い水準にしていくかということであり（例えば、荒井 1998、山田 2005、天野 2006 など）、他方、高校教育の側から見ると、進路多様校における生徒の進路形成メカニズムを探求する試み（例えば、中村編著 2010）であった。これらの問題群は、高等教育、高校教育の両側における喫緊のテーマであった

ためか、多くの研究が蓄積されてきた(荒井 1998、山田 2005、天野 2006、乾編著 2006、酒井編著 2007、中村編著 2010 など)。

ところが、その一方で、エリート選抜の変容や現状については実証的に明らかにされてこなかった。それには、①戦後の日本では、「エリート教育」は様々な理由から忌避されてきたことや(例えば、荻谷 1995、斎藤 2005 など)、②急増する大学進学(希望)者への対応をどうするかが直近の問題だったことにあるのかもしれない。しかし、Rohlen は、日本の高校生文化の源が大学入試にあるとし、仮に大学入試がなくなれば、高校生はアスピレーションが維持できないのではないかと示唆した(Rohlen 1983=1988、訳書 p.340)。もしそうであれば、少子化や入試形態の多様化とともに大学入試選抜が易化する中で、エリート選抜は維持されていないことになる。

確かに、エリート選抜の存立の要因については、①社会階層上位者は、選抜に勝ち抜くことのインセンティブを把握しているため、通塾などの教育投資を行っている、②内発的な学習意欲が維持されている(荻谷 2001)、③私的／公的な達成動機によってアスピレーションが加熱されている(有海 2011)などが明らかにされている。しかし、これらは意識ないし行動面における特徴を指摘した留まり、教育システムがそれらの意識・行動をどのように維持するように機能しているかに言及していない。そこで本研究では、エリート選抜を存立させるためにトラッキングシステムの機能がどのように変容してきたのかを明らかにしていく。これが第二の分析課題である。

3.3. 職業系専門学科の多様化

本研究の第三の分析課題は、現代の職業トラックの構造と機能の変容を明らかにするために、①主に工業科との比較から商業科の実態を分析し、②商業科の生徒の進路形成の実態を分析する。

単線型教育体系は、上級学校への進学機会を保障することを前提としているため、大学進学率の高まりとともに、職業系専門学科高校のアイデンティティは不明瞭になる。これは、高校教育を「進学準備教育」と位置づけるか、「完成教育」として位置づけるかの対立構造ということになる。Trow (1961=1980、訳書 pp.37-40) は、「大学進学者が増加すれば、ハイスクールは進学準備を求める生徒でみたされ」、「進学準備教育機能の強化を求める圧力が生まれ」、結果として、「進学準備教育がますます重要性を増し、中等教育にあ

てられる資源の最上の部分」を占領してしまえば、「完成教育は二流の生徒のための二流の教育になってしまう」と指摘している。

実際に日本のトラッキング研究でも、専門学科（職業系トラック）は、普通科（アカデミック・一般トラック）よりも下位ランクとして位置づけられ、現在もその構図も大きくは変わっていないが、専門学科の生徒の進路形成は大いに注目されてきた。それは、高卒就職市場の変化（橋本 1996）、進学者の出身社会階層の特徴（朴澤 2006）、大学入試形態との関連（中村 2006）、高校内部での進路指導の形態（中村 2010）などから検討されてきた。それらを総合的に踏まえると、最もアイデンティティが不明瞭な専門学科のひとつとして商業科が浮かび上がる。なぜなら、商業科は工業科と並び、専門学科の代表とされるが、既述したように、近年その性格が変わりつつある。すなわち、商業科は「就職用トラック」の機能を低下させ、「進学準備学科」としての性格を強めているのである。例えば、太田桜台高校や千早高校といった首都圏に所在する商業科は、「ビジネス教育」や「情報教育」の面で特色を強め、大学の商学部などと連携することで進学型商業教育としての特色を打ち出している⁽²¹⁾（小倉 2000、工藤 2003、番場 2010）。

本研究では、工業科との比較から商業科に焦点を当てて分析を展開していくが、以下では、それが職業トラックの構造と機能の変容を明らかにすることとどのようにつながるのかを述べていこう。

3.3.1. 商業科への注目

教育社会学において、専門学科の現代的な機能を明らかにすることを目的としたケーススタディはいくつか見られる。しかし、それらの多くは工業科を対象としてきた⁽²²⁾（例えば、樋田 2008、片山 2010、尾川 2012）。

その第一の理由には、工業科は所属する生徒数が最も多く、職業系専門学科全体の生徒数の 40%を超えるということがある⁽²³⁾。加えて、1963 年の経済審議会人的能力部会答申「経済発展における人的能力開発の課題と対策」では、「産学協同」を目的として、大学・工業高校・職業訓練機関の全面にわたる拡充・推進が提起されるなど（西本 2004、p.166）、高度成長期の専門学科には、工業科が中心に据えられていた。そのため、専門学科の機能を明らかにするに際して、工業科を手がかりとすることは妥当性があった。

第二の理由は、工業科は他の専門学科に比べるとカリキュラムや教授法が普遍的なため、研究対象として取り扱うことが比較的容易だったことにあるといえよう⁽²⁴⁾。それという

のも、経済や産業構造の劇的な変化にも関わらず、工業科のカリキュラムや教授法が変化しにくいのは、相対的に就職率を高い水準で維持してきたことに加え（表 0-7）、卒業後に就く職種にも変化がないからである。

具体的に見てみよう。表 0-8 は、学科別に見た高卒就職者の職種である。これによると、学科ごとに傾向は少しずつ異なるが、大まかには、①事務職、販売職への就職率の低下と②サービス職、運輸・通信・生産工程・労務職の就職率の上昇という傾向が確認できる。しかしそれにも関わらず、工業科の卒業生は、就く職種にほとんど変化がなく、運輸・通信・生産工程・労務職への就職者が高水準で安定している。つまり、工業科は、就職校としての性格を維持してきただけでなく、労働市場とのレリバンスを相対的に維持してきたため、職業トラックとして研究対象に選定しやすかったのである⁽²⁵⁾。

そこで、本研究で注目するのが商業科の変化である。商業科に所属する生徒数は、職業系専門学科に占める生徒数の約 34%で、工業科に次ぐ生徒数である。また、商業科数は職業系専門学科の約 32%で工業科の割合（約 23%）を上回る⁽²⁶⁾。このように、商業科は工業科と並び、専門学科の代表ともいえるが、近年その存在意義に難しさがある。

商業科の変遷を概観するために、再び表 0-7 を見てみよう。これは、学科別に見た卒業者の進路の 30 年間の変遷である⁽²⁷⁾。例えば、1980 年の学科別の就職率を見ると、普通科＝25.1%、農業科＝78.7%、工業科＝80.0%、商業科＝80.6%、水産科＝81.7%であり、①普通科と専門学科に大きな格差があること、②専門学科間には大きな差異がないことの 2 点がわかる。

しかし、1995 年になると、就職率は、農業科＝67.0%、工業科＝68.0%、商業科＝57.6%、水産科＝73.7%となり、商業科の就職率が相対的に低下していることがわかる。また、2010 年の商業科は専門学科間では、相対的に、大学等進学率が高く、就職率が低い。さらにいえば、工業科や水産科に比べると農業科の就職率が低いなど、専門学科間での就職率の分散が大きくなっている。つまり、かつてはひとつの「職業トラック」というカテゴリーとして扱うことが可能だった専門学科は多様化し、単一のカテゴリーとして扱うことが不適切になってきたのである。

また、就職者の就く職種も大きな変化がある（表 0-8）。事務職が減少し、サービス職と運輸・通信・生産工程・労務職が上昇しているのである。つまり、商業科は、「就職トラック」としての性格が崩れただけではなく、労働市場とのレリバンスも低下させているのである。

従来のトラッキング研究は、多様な専門学科を単一のカテゴリーとして扱ってきた。高等学校における職業教育は、農業、工業、商業、水産、家庭、看護、情報、福祉（文部科学省の類型）と多様であるが、従来のトラッキング研究では、多様な専門学科を「職業トラック」として一括りに扱い、時には、「進路多様校」や「下位トラック」として普通科と同じカテゴリーとして扱ってきた（例えば、岩木・耳塚編 1983、樋田ほか編 2000、中村編著 2010 など）。普通科高校をランク付けし、各ランクの卒業生がどのランクの大学へ進学するかには敏感だったにも関わらず、専門学科の多様性への関心については低かったのである。

そこで、本研究では、専門学科の構造と機能の変容を詳細に検討するため、商業科への関心を中心に据えながら、工業科を比較対象として分析を展開していく。このような商業科と工業科の変化にともない、職業トラックはどのように変化したのか。これを明らかにすることで、専門学科間の二極化を示し、日本のトラッキングシステムの新たな局面を描き出すことが可能になるだろう。

表 0-7. 学科別、卒業者の進路の変遷（学校基本調査より作成）

		1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年
大学等 進学率	普通科	43.0%	39.9%	38.1%	46.1%	53.9%	56.2%	64.0%
	農業科	7.4%	6.6%	6.0%	6.6%	11.2%	13.3%	15.7%
	工業科	9.4%	7.5%	6.4%	8.8%	15.0%	17.4%	19.2%
	商業科	8.6%	6.9%	8.2%	13.1%	19.6%	21.7%	28.9%
	水産科	10.0%	8.8%	7.1%	10.7%	11.5%	12.7%	17.5%
	総合学科	—	—	—	—	29.8%	31.8%	37.9%
		1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年
就職率	普通科	25.1%	25.4%	21.6%	13.9%	9.4%	8.5%	7.2%
	農業科	78.7%	79.0%	77.3%	67.0%	52.3%	50.1%	47.9%
	工業科	80.0%	81.4%	78.9%	68.0%	55.1%	54.2%	57.4%
	商業科	80.6%	79.7%	74.4%	57.6%	43.8%	41.1%	37.3%
	水産科	81.7%	83.3%	83.2%	73.7%	61.7%	60.5%	58.6%
	総合学科	—	—	—	—	26.6%	25.7%	24.6%

表 0-8. 学科別、高卒就職者の職業の変遷（学校基本調査より作成）

普通科		1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年
	専門的・技術的職業	2.3%	1.5%	2.0%	2.6%	3.1%	3.6%	6.4%
	事務	39.1%	27.6%	29.2%	15.7%	11.0%	9.6%	8.9%
	販売	19.8%	27.6%	20.8%	19.0%	16.0%	14.3%	12.6%
	サービス職業	9.5%	11.1%	14.0%	20.5%	24.7%	22.9%	24.8%
	保安職業	3.8%	2.8%	2.6%	3.3%	4.5%	6.2%	6.8%
	農林漁業	0.8%	0.4%	0.2%	0.5%	0.8%	0.9%	1.0%
	運輸・通信・生産工程・労務	24.6%	29.1%	31.2%	38.5%	39.9%	42.4%	39.7%
農業科		1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年
	専門的・技術的職業	3.8%	3.0%	3.4%	5.9%	4.4%	4.1%	6.6%
	事務	8.9%	6.1%	7.5%	6.0%	3.9%	3.7%	4.3%
	販売	19.8%	6.1%	16.7%	15.2%	12.5%	12.6%	9.9%
	サービス職業	8.1%	11.2%	11.2%	14.4%	18.8%	19.1%	22.0%
	保安職業	4.0%	4.0%	3.2%	1.8%	2.0%	3.5%	2.5%
	農林漁業	14.0%	9.4%	4.4%	4.6%	5.8%	5.5%	5.9%
	運輸・通信・生産工程・労務	41.4%	60.2%	53.5%	52.2%	52.7%	51.4%	48.7%
工業科		1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年
	専門的・技術的職業	5.4%	5.8%	10.4%	9.1%	7.4%	6.6%	11.0%
	事務	3.3%	2.4%	4.8%	3.5%	2.8%	2.4%	2.1%
	販売	8.4%	2.4%	5.9%	6.4%	6.1%	5.0%	3.1%
	サービス職業	3.5%	4.3%	5.0%	5.6%	7.4%	5.9%	4.9%
	保安職業	3.5%	2.6%	1.8%	2.2%	2.4%	2.8%	1.9%
	農林漁業	0.6%	0.3%	0.2%	0.2%	0.4%	0.4%	0.3%
	運輸・通信・生産工程・労務	75.4%	82.2%	71.9%	73.0%	73.5%	76.9%	76.6%
商業科		1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年
	専門的・技術的職業	1.1%	0.6%	1.6%	2.1%	2.6%	2.8%	4.4%
	事務	61.2%	39.4%	54.9%	40.3%	33.6%	36.2%	32.0%
	販売	19.7%	39.4%	17.6%	19.5%	17.5%	17.7%	15.7%
	サービス職業	5.4%	5.8%	8.6%	15.2%	18.8%	10.0%	17.4%
	保安職業	1.2%	0.8%	1.1%	1.2%	1.7%	2.6%	2.3%
	農林漁業	0.3%	0.2%	0.1%	0.2%	0.3%	0.4%	0.4%
	運輸・通信・生産工程・労務	11.0%	13.8%	16.1%	21.5%	25.5%	30.3%	27.8%
水産科		1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年
	専門的・技術的職業	1.2%	1.2%	1.8%	1.8%	2.1%	1.9%	4.0%
	事務	4.0%	2.5%	3.4%	2.6%	1.5%	2.8%	3.2%
	販売	18.0%	2.5%	18.3%	15.8%	14.5%	11.9%	8.5%
	サービス職業	5.1%	8.2%	7.3%	11.7%	15.0%	16.5%	16.3%
	保安職業	4.1%	4.1%	3.6%	1.6%	2.2%	4.6%	2.8%
	農林漁業	18.2%	20.4%	10.4%	8.2%	11.8%	9.5%	9.9%
	運輸・通信・生産工程・労務	49.3%	61.0%	55.1%	58.3%	53.0%	52.8%	55.2%

4. 研究のモデル化と章構成

4.1. トラッキングシステムの変容のモデル化

本研究は、以上に述べた「少子化」、「学校から職業への移行の危機」、「グローバリゼーション・知識経済社会と高校教育改革」、「産業構造の変化」の4つの社会変動にともなうトラッキングシステムの変容を「トラッキング構造の二極化による学歴格差再生産機能」という視点から明らかにしていく。

第一に、少子化であるが、竹内（1995a）のいう「傾斜的」なトラッキングシステムの成立の前提条件は、若年人口が選抜に耐えうるだけ十分に確保されていることである。戦後日本では、二度のベビーブームという若年人口の急増が、高校進学と大学進学を段階的に拡大させた（中西ほか 1997、耳塚 1995）。それゆえ、少子化によって高校、大学の入試選抜も様相を変える。傾斜的選抜システムは、高校入試時の学力によって階層化した高校と大学の偏差値ランクが対応していることが条件となる。それゆえ、高校入試は、第一段階の選抜として中学校までの成績に応じて人々を「分相応」の高校ランクへと配分する機能を果たしており、このような選抜の様式は、しばしば「輪切り選抜」と呼ばれてきた（岩木・耳塚編 1983）。しかし、現在の高校では、中学時成績に応じた選抜は、上位のトラックに限られ、下位のトラックでは成績による選抜が弛緩しており、トラックへの選抜・配分メカニズムが変容していることが指摘されている（樋田 2001）。その一方で、かつては偏差値によって細かく序列化されていた大学も、現在では一部の「銘柄大学」とそれ以外の大学に二極化し、入試選抜もエリート選抜とマス選抜に二極化しているという（天野 2006、中村 2011）。

以上のような、高校の「入口」と「出口」部分における選抜の二極化は、高校と大学それぞれの入学定員が、若年人口の減少（少子化）に比して大きいことに起因している。それゆえ、少子化はトラッキング構造の変容を分析する際のキータームのひとつとなる。

第二に、学校から職業へのスムーズな移行が困難になったことにともなう人々の教育達成への動機の変化である。すでに見たように、1990年代までの教育達成の動機は、大衆化した教育熱や「学歴社会」といった要因によって形成されてきた。その社会的背景には、戦後からバブル経済崩壊までの日本が、一貫して経済成長を持続してきたことが挙げられる。この時期、高校生の親世代の学歴は「拡大期」であり、子どもが親より高い学歴を獲得することが多かった。そのため、人々は産業構造の変容と学歴獲得とともに、「教育によ

る生まれ変わり」を経験し、それにともない、若者のアスピレーションが加熱されてきた（荻谷 1995、2001、佐藤 2004、橋本 2009 など）。このような教育による社会的上昇移動を人々が経験することによって、日本型トラッキングシステムは存立してきたのである。しかし、バブル経済崩壊後から続く経済不況にともなう不安定な雇用といった社会情勢の変化は、人々の間に社会不安を蔓延させた（山田 2004）。そのため、人々の教育達成の動機は、大衆化した教育熱ではなく、学歴下降や社会不安を回避するための手段という消極的なものへと変わっていった（吉川 2006、2009）。よって、学歴下降や社会不安の回避は、現代版トラッキングシステムの機能を説明するキーワードとなる。

第三に、グローバリゼーションと知識経済社会の到来にともなう高校教育改革である。すでに見てきたように、1990年代の教育改革は、知識経済社会における「リーダー」の育成を目的とした側面があったことが指摘されている（斎藤 2001=2006）。従来の日本の高校は、卓越したエリートよりも、学力に応じた傾斜的な選抜によって平均的に高水準な人材を育成してきた（Rohlen 1983=1988）。しかし、グローバル化と高度に専門化された知識経済社会において要請される人材とは、卓越したエリートであるとされる（Reich 1991=1991）。このような人材育成の理念からエリート選抜が存立していることが、変容した現代版トラッキングシステムの機能的特徴のひとつなのである。

第四に、産業構造の変化による職業系専門学科の構造と機能の変容である。もともと、竹内（1995a）のいう「傾斜的」なトラッキングシステムは、普通科高校のランクと大学偏差値の対応関係を指摘したものであって、専門学科を対象の外に置いてきた。それは、1990年代前半までの専門学科は、あくまで「就職用トラック」であり、そこでは生徒を就職に導くためのカリキュラムや進路指導が準備され、進路の決定も学校推薦を通じてなされるなど、普通科とは違う独自の進路形成メカニズムを有していたためである（樋田 1983、荻谷 1991）。

確かに、現在では職業系専門学科からの大学進学は増加してきているものの、依然として普通科との格差は残っているため、普通科と専門学科を一次元的な尺度で検討することは難しい。そこで本研究が着目するのは、専門学科間の二極化である。先の表 0-7 で見たように、今日の専門学科からの進学者は、特定の学科に偏っている。このような専門学科間の二極化に着目することによって、専門学科を包括した現代版のトラッキングシステムを提示することができるだろう。

以上のエッセンスを抽出すると、旧式のトラッキングシステムと現代版のそれとの特徴は、表 0-9 のように対比することができる。本研究では、これらの変容を各章で分析し、日本のトラッキングシステムの構造が二極化し、その機能は人々の学歴格差を再生産するように変容したことを明らかにしていく。

表 0-9. トラッキングシステムの変容

	従来のトラッキングシステム	現代のトラッキングシステム
トラックへの配分	学歴社会	学歴下降回避
トラックの存立	傾斜的選抜	エリート選抜／マス選抜
職業系トラック	就職希望者が中心のトラック	多様な進路希望者を包括するトラック

4.2. トラッキングシステムの変容を指摘する意義

ここでは、トラッキングシステムの変容を「トラッキング構造の二極化による学歴格差再生産機能」という視点から論じていくことの意義・利点を述べていこう。

1990 年代後半以降の日本社会は様々な格差が指摘されてきた(橘木 1998、佐藤 2000、山田 2004 など)。しかしその一方で、社会の格差化にともない、①トラッキングシステムの構造がどのように変化したのか、②変化したトラッキングシステムが社会的格差を助長するように機能するのか、の 2 点を総合的に検討した研究は管見の限り見当たらない。

本章で見てきたように、教育社会学は、教育システムが子どもの社会的背景の有利／不利をどのように増幅する機能を有するのかを主たる研究関心としてきた(例えば、Karabel and Halsey(Eds) 1977=1980、Lauder, Brown, Dillabough and Halsey(Eds) 2006=2012))。その際に、青少年の社会的背景の差異を増幅する教育システムとして注目されてきたのがアメリカのハイスクールを対象にして指摘されたトラッキング (Rosembaum 1976) であった。しかし、これまでに見られる一連の日本の「格差」研究は、出身社会階層の格差化にともない到達社会階層(学歴や職業達成)も格差化するという指摘に留まり、教育システムが格差を再生産するメカニズムをどのように変容させてきたのかに関心の外へ置いてきた。

そこで本研究では、現代の格差社会におけるトラッキングシステムの実態を実証的に示すことで、人々の社会移動のメカニズムの一端を明らかにする。これにより、出身社会階

層格差と到達社会階層格差をつなぐ教育システムを現代版に描き出すことが可能となるのである。

4.3. 本論文の構成

本論文は以下の通りに構成される。

序章（本章）では、メリトクラシーとトラッキングに関する研究が、教育社会学全体のどの文脈に位置づくのかを概観したうえで、1990年代後半以降の社会変動を整理し、本研究の分析課題を析出する。

第1章では、本論文で用いるデータの概要を記述する。主として用いるデータは、1979年から続く調査から得られたデータのため、調査当時の研究関心、文脈を詳細に記述しながら、データの概要を述べる。そのうえで、当該調査が見過ごしてきた事柄を述べ、それを補うための調査データの概要も記述する。

第2章では、インプットに着目して、トラックへの選抜・配分メカニズムが、中学までの成績から親学歴（社会階層）によって規定される部分が強まったことを明らかにする。

第3章では、第2章での分析結果を踏まえて、インプットの変化が進路形成（アウトプット）につながるメカニズムがどのように変化したのかを実証的に明らかにする。

第4章では、二極化したと指摘されるトラッキングの上位部分、すなわち、エリートトラックの生徒のアスピレーションがなぜ加熱され続けるのか、そのプロセスの変容を教育システムの観点から考察し、その存立メカニズムの変化を明らかにする。

第5章では、専門学科を商業科と工業科に分割し、インプット、スループット、アウトプット、それぞれの視点から商業科の現代的な特徴を分析的に明らかにする。

第6章では、現代の中等職業教育の課題が集中している象徴として、商業科の機能を細分析し、専門学科存立メカニズムを明らかにしながら、その展望を検討する。

そして終章では、以上の分析を通じて得られた知見を整理し、トラッキングシステムの構造と機能の変容を指摘し、本研究が残した課題を述べる。

〈注〉

- (1) 『メリトクラシー』の結末が、ハッピーエンドにならなかったように、メリトクラシーは、決して我々がたどり着くべき理想的な社会とはいえない。しかし、性別、人種、社会階層といった属性要因によって人々の将来が決まってしまう社会に比べれば、メリ

トクラシーの方が多少は望ましい社会だということが、本研究の基本的なスタンスであるということを付記しておく。

- (2) 近年では、都市部を中心とした中学受験率の上昇、大学・短大や専門学校といった中等後教育への進学率が上昇しており、教育選抜の時期が多様化している。そのため、高校入試が最も重要な選抜の時期だとは一概にはいえない。しかし、依然として高校受験が大多数の人々が通過する初期の教育選抜であろう。
- (3) 「機能主義理論」は Collins による用語である。なお、合意理論 (consensus theory) とも呼ばれるが、本研究では機能主義理論ないし機能理論で統一させることとする。
- (4) 闘争理論とも訳されるが、本研究では葛藤理論ないし葛藤論で統一する。
- (5) Rosembaum (1976) が分析の対象としているハイスクールは、中等教育のことであり、日本での中学校と高校の両方を指す。
- (6) トラックは、教科ごとに編成されているが、どの教科でもほとんどの生徒が同じトラックに所属しているのが現状だということを付記しておく。
- (7) 日本の高校教育は、高校三原則（男女共学、総合制、小学区制）に見られるように、戦後すぐにアメリカの中等教育を参考に形成されるはずだった。しかし、結果としてアメリカ型の教育システムは馴染まなかった。それは、戦前の日本は分岐型の中等教育システムだったが、戦後は連合軍総司令部 (GHQ) の指導により、やや「押し付けられる」形で 6・3・3 の教育制度を目指したからである。しかし、「新制中学校の新設だけで手一杯であり、新制高校の整備に当てる財源は皆無という財政事情から旧制中学校をそのまま新制高校に移行させた」（市川 2010、p.144）。そのため、戦前の旧制中学校の学校格差が拡大再生産する形で高校が出来上がり（岩木 2000）、高校間における競争的な性格が残ったのである。
- (8) 表 0-3 では、universal education を、耳塚 (1996) に倣い「普遍的教育」と記した。しかし、『新教育社会学辞典』（日本教育社会学会編 1986、pp.759-760）によれば、universal education の日本語訳は「普通教育」となっていることを付記しておく。
なお、その定義は 2 つの側面が指摘されている。それによれば、「一つは、専門教育・職業教育の対語として一般的・基礎的な教育という側面、もう一つはその時代その社会の人々が普通に共有すべき普遍的な教育という側面である」という。本研究の文脈に照らせば、表 0-3 の universal education は後者の「その時代その社会の人々が普通に共有すべき普遍的な教育」ということになる。

- (9) 生徒文化研究の詳細は第 2 章で述べる。
- (10) 以下、公立高校のみを対象とするのは、①高校トラックは主に公立高校間での序列を指すことが多く、②国立や私立に比べて人口変動や高校増設、再編の影響を受けやすいため、社会変動を把握しやすいからである。
- (11) 高校再編の影響で、2005 年を過ぎた頃から高校数は減少し始めてはいる。
- (12) 高校収容力は、学校基本調査より、各年度の「高校在籍者数÷高校数」で算出した。
- (13) ただし、海老原（2010）のように、玄田有史に対して批判的な主張を向ける立場もある。
- (14) 「知識経済」という用語の提起は Drucker（1969＝1969）によるものである。
- (15) Reich（1991＝1991、訳書 p.245）によって示される、シンボリック・アナリストの具体的な職業は、研究科学者、設計技術者、ソフトウェア技術者、建設技術者、生物工学技術者、音響技術者、公共関係専門家、投資銀行家、法律家、不動産開発専門家、専門会計士、経営コンサルタント、金融コンサルタント、税務コンサルタント、エネルギー・コンサルタント、農業コンサルタント、軍事コンサルタント、建築コンサルタント、経営情報専門家、組織開発専門家、戦略プランナー、ヘッドハンター、システム・アナリスト、広告プランナー、マーケティング戦略家、アート・ディレクター、建築家、映画監督、写真家、工業デザイナー、出版人、作家と編集者、ジャーナリスト、音楽家、テレビ・映画プロデューサー、大学教授などである。
- (16) 表 0－10 も合わせて参照されたい。

表 0－10. 「近代型能力」と「ポスト近代型能力」の特徴の比較対照（本田 2005b、p.22）

「近代型能力」	「ポスト近代型能力」
「基礎学力」	「生きる力」
標準性	多様性・新奇性
知識量、知的操作の速度	意欲・創造性
共通尺度で比較可能	個別性・個性
順応性	能動性
協調性、同質性	ネットワーク形成力、交渉力

- (17) 中央教育審議会第二次答申「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/970606.htm、2012 年 8 月 19 日取得）を参照した。

- (18) 厳密な用語の意味でいえば、専門高校ないし専門学科とは、例えば「理数科」や「国際科」のような普通教科の教育に特化した学科も含む。以上のようなことを理解したうえで、本研究では、職業系専門学科を「専門学科」・「専門高校」と表記する。文部科学省のホームページ (http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/shinkou/genjyo/index.htm、2012 年 8 月 19 日閲覧) には、「高等学校における職業教育は、農業、工業、商業、水産、家庭、看護、情報、福祉など職業に関する教育を行う専門高校を中心に行われています」と記載されており、さらに、教育社会学分野の先行研究では「専門高校」と表記されてきた。本研究の表記も、これらに倣うこととする。
- (19) 「「一スペシャリストへの道—職業教育の活性化方策に関する調査研究会議（最終報告）」について」(http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19950308001/t19950308001.html)、2012 年 9 月 3 日取得。
- (20) 学歴下降回避仮説の理論的枠組みによる親学歴と高校トラックの関連の分析は、すでに藤原（2012）が行っているが、藤原の研究は、親学歴と高校トラックの関係を一時点においてとらえたことに留まり、それらの関係がどのように変容してきたかをとらえてはいない。
- (21) 東京都立太田桜台高校 HP (<http://www.oota-sakuradai-h.metro.tokyo.jp/>) および東京都立千早高校 HP (<http://www.chihaya-h.metro.tokyo.jp/>) を参照した（2011 年 12 月 11 日閲覧）。
- (22) 近年の商業高校に関する研究は、酒井朗による都市部の商業高校を対象とした一連のケーススタディがある（酒井編著 2007、千葉・大多和 2007、風間 2007 など）。この研究は、経済不況を受け、就職難となった現代の商業高校が、企業との「実績関係」の実態を表した示唆的な研究であった。しかし、酒井らの研究では、当該商業高校を、「進路多様校」の 1 ケースとして取り上げているという点において本研究の目的とは異なっている。
- (23) 家庭科と看護科は、元々の生徒数も多くないため表から割愛した。ただし、看護科は 30 年間で進学者が急激に増加しており、今後の研究テーマとして取り扱われるべきである。
- (24) 数値は、農業科・工業科・商業科・水産科・家庭科・看護科・情報科・福祉科の生徒数の和を各工業科生徒数で割って算出した。

- (25) 片山 (2010) は、工業科におけるカリキュラムと教授法による職業選抜を Bernstein (1975=1985) の「分類 (classification)」と「枠づけ (framing)」の概念を用いて説明しようとしている。
- (26) 工業科の相対的なレリバンスの高さは、斉藤ほか編著 (2005) を参照されたい。
- (27) 数値は、農業科・工業科・商業科・水産科・家庭科・看護科・情報科・福祉科の生徒数と学科数をそれぞれ加算し、各学科の生徒数と学科数で割って算出した。

第1章：調査とデータの概要

1. 生徒文化調査の変遷と概要

本研究の分析課題を明らかにするためのメインデータは、以下、「生徒文化調査」と呼ぶ調査から得られたデータである。この調査は、高校生の生徒文化（High School Student Subculture）と進路形成のメカニズムの解明とその変容を探るために、これまでに約30年間で3度に亘り、同一の県・学区・高校を対象として実施されている。

以下では、過去3度の調査を、第二回と第三回の調査代表である樋田（樋田ほか 2011a）の整理に沿いながら、当時の関心とその学術的な貢献を記述していく。それというのも、本研究で用いるデータは、各調査年次の研究関心や時代背景・文脈で理解することによって、分析および考察が深まるからである。

また、本研究では、3度の調査をそれぞれ「第一回調査」、「第二回調査」、「第三回調査」と呼ぶが、これは第3回調査時に代表を務めた樋田による位置づけである。これらを調査の呼称とし、それぞれの学術的貢献を振り返りながら、本研究の関心に位置づけることで、共同研究における本研究のオリジナリティを明確にしていく。

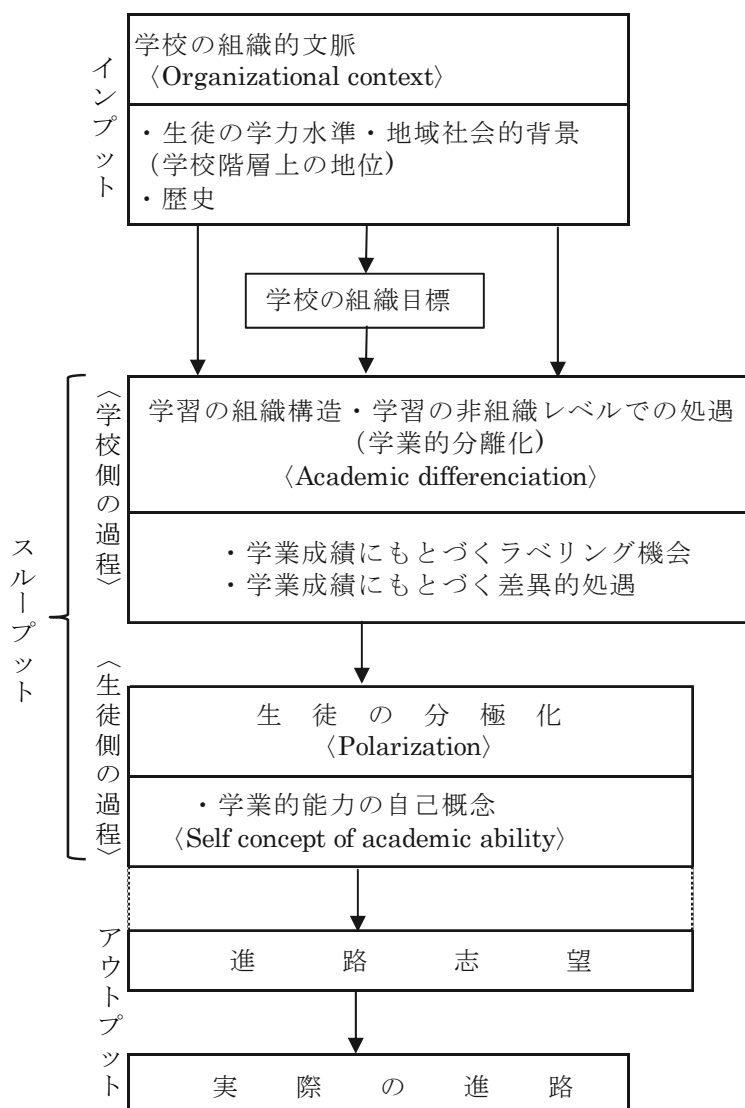
1.1. 各調査における問題関心

1.1.1. 第一回調査：1979年

第一回調査は、1979年に、松原治郎（東京大学）が研究代表となり、「高校生の生徒文化と学校経営」をテーマとして実施された。調査は、生徒にあらわれる特徴的な行動様式（＝生徒文化）が各高校に典型的にあらわれ、それが入学する生徒の学力水準に対応して形成されている高校の階層的地位や高校の教育方針と強い関連があることを踏まえ、生徒文化の形成と学校経営の関連を明らかにすることに力点が置かれた（松原ほか 1980）。つまり、「高校教育のアウトプットとして生徒文化を設定し、そのアウトプットを、学校階層上の地位（入学する生徒の学力水準＝インプット）だけでなく、両者の間に介在する学校組織の在り方（スループット）までも含めた観点から説明を試みようとしたもの」（耳塚ほか 1981）であり、その枠組みは、図1-1のようにモデル化される。そのため、1979年調査時における主要な関心は、生徒文化の分化、すなわち、生徒文化の向学校的（pro-school）―反学校的（anti-school）の分化要因を説明することであった。

また、1970 年～1980 年代には、「新しい」教育社会学の影響もあり、九州大学（例えば、白石 1978）や大阪大学（例えば、米川 1978）でもスループット研究が行われ、この時期は、日本型の生徒文化研究が勃興した時期だった。

図 1-1. 「高校生の生徒文化と学校経営」の分析枠組（耳塚ほか 1981 より）



樋田ほか（2011a）によれば、当時の調査の問題関心は、「生徒文化は学校文化と青年文化の両者の下位文化であり、両者の下位文化的性格を有して」おり、「生徒文化は学校階層上の位置に対応して自動的に形成されるのではなく、個々の高校の学校経営（学校文化）や、地域の青年文化の学校内への浸透状況（青年文化）にも影響されるはず」であり、「高校階層上の位置が同じでも形成される生徒文化は高校ごとに異なる」というものであった。

この当時の当該研究会が日本の教育社会学へ与えた最も大きな貢献は、その後のトラッキング研究やメリトクラシー研究の礎を築いたことにあったといえる。とりわけ、1997年～1999年に実施された第二回調査と比較可能な原点としてのデータを得たことにより、日本のトラッキングとメリトクラシーの変容を明らかにすることになる。

1.1.2. 第二回調査：1997年～1999年

第二回調査の主たるキーワードは「トラッキングの弛緩」であった。その背景には、①個性化・多様化を中心とする教育理念が、高校教育政策や教育現場へ浸透したこと、②第二次ベビーブーム後の18歳人口の急激な減少、高等教育進学をめぐる状況の変化、不況による高卒労働市場の変貌、③消費社会化の趨勢があった。これらの変化から、生徒文化と進路形成を規制していたトラッキングメカニズムを弛緩させているという仮説が立てられ、調査が実施された（樋田ほか 1999a,b）。

以上の3点の関心から見れば、この時期の生徒文化調査がもたらした貢献は以下のようである。

第一に、「個性化・多様化」を強調する教育言説の勃興は、総合学科を含む新しいタイプの高校を、最も象徴的な研究対象として扱うことになった。そのような高校では、多様なカリキュラムを提供する学科・コースを設置することで、生徒の興味・関心に基づく進路形成を促すことが目指された。しかし、その結果としては、新しいタイプの高校は、生徒のアスピレーションを収斂するメカニズムを欠いただけでなく、初期の選抜で敗れた者を「夢追い」型の進路へと促していることが示唆された（荒川 2009）。

第二に、少子化社会と進路形成の変容については、専門高校（学科）における部分的なトラッキングの弛緩が指摘された。耳塚（2000a）は、希望進路の変化を分析することから、高校階層上の上位と中位の高校では国公立大学進学希望者が増加（＝トラッキング規範の強化）した一方で、従来は「就職用トラック」であったはずの専門高校で進学希望者が増加したということを明らかにした。

第三に、消費社会ないしユース・カルチャーが浸透したことにより、1979年に比して、1997～1999年の高校生は、学校へのコミットを弱めていることが明らかになった（大多和 2000）。それは、かつて耳塚（1980）が指摘した、下位の高校生が地位欲求不満の反動形成として逸脱的な文化を形成するといった単純な構図ではない。特に高校階層の下位の高校生は、交友範囲や規則の遵守が学校を越えて広がる傾向にあり、地位への欲求不満か

ら学校内で教師や校則へ反抗するのではなく、そもそも学校に対してコミットしないようになったということである。

耳塚（2000b、p.216）は、以上のような変化を「トラッキングの弛緩」と結論づけることは不適切だとした。調査当初の予想では、生徒の進路や行動様式についてトラック間の差異が小さくなること、より操作的に言えば、「トラック内の散らばり」と「トラック間の差異」の比が、相対的に大きくなることが「トラッキングの弛緩」と呼べる現象であるとしていた。しかし、高校の格差規範は一方（上位の高校）では強まり、他方（下位・専門高校）では弱まったのである。

高校階層構造はしばしばピラミッド型に例えられるが、樋田（2001）は、一部の上位高校を残し、その他の高校では進路や生徒文化が多様化（弛緩）したことを踏まえ、高校階層構造が「お鏡餅型」へと変容したと示唆している。

高校階層構造の「下の部分」のトラックに在籍する生徒の多様化が第二回生徒文化調査の最も大きな知見であったといえよう。

1.1.3. 第二回調査のもうひとつの貢献

1997年～1999年にかけて実施された第二回生徒文化調査のもうひとつの貢献は、社会変動の観点から教育問題をとらえなおそうとしたことにある。

飯田（2007）の整理によれば、新しい教育社会学の影響を受けて発展してきたトラッキング研究であるが、その結果、トラッキング研究はその問題関心のベクトルを過度に学校の内部へ向けてしまい、生徒の持つ社会的格差の存在を学校の外部社会との関わりにおいて論じるという視点を欠き（金子 2002）、学校の内部効果を過大視するという結果をもたらした（竹内 1995b）。金子（2002）が「90年代の学校社会学からは、学校の内部過程や学校の諸機能を、社会現象・社会関係の編成という射程で捉え直す研究が現れている」というが、第二回生徒文化調査はその役割を果たした研究のひとつだといえる。

その点でいえば、荻谷剛彦の貢献は大きい。彼は、2000年前後に勃興したさまざまな社会的格差論について、教育における格差の問題を提起した。とりわけ、荻谷（2001、2002）の一連の研究で示唆的だったのは、社会学ないし教育社会学における重要なテーマである教育達成や社会階層の再生産のメカニズムを、1990年代の教育改革の視点から考察したことにあつた。すなわち、生徒が高校の階層に応じた進路選択から解放され、「自由な」学校生活ないし進路選択が行えるようになることを目的として、教育改革は個性化・多様化を

強調した。しかし、そのような教育改革の結果、「自由な」学校生活を過ごすのは、相対的に社会階層が低位の子女に限定され、教育ないし社会階層の再生産が教育改革によって助長されるという「思わざる結果」がもたらされたということである。

つまり、第二回生徒文化調査では、一方では下位トラックで、他方で相対的に低位な社会階層でのメリトクラシー規範が弛緩したことを明らかにしたことに学術的・社会的な貢献があるといえよう。

それから 10 年後、以上のような社会・教育変動がより深化した社会における高校教育はどのようなものであるか。2009 年～2010 年に実施された第三回生徒文化調査の関心の主眼はここに置かれることになる（樋田ほか 2011a,b）。

1.1.4. 第三回調査：2009 年～2010 年

第三回生徒文化調査の主要な関心は、単線型高校教育体系の再考であった。この頃には、高校の多様化への制度改革の趨勢は一段落したが、第二回調査までに見た社会・教育変動下で、単線型の高校教育は限界や課題が見えてきた。

単線型の教育体系とは、制度的には上級学校への進学機会を制限されないというシステムである。このシステムの下では、教育の機会均等を保証される。また、普遍的な教育を行うことによって、人々は汎用性の高い教育を獲得することができる。

しかし、近年ではネガティブな側面が看過できなくなっている。調査代表である樋田（2011a）の関心に従えば、現代における単線型高校教育体系のネガティブな側面は 3 つ指摘できる。

第一に、地域の疲弊である。高卒者の進学熱が全国的に高まったことと教育機会が都市部に集中していることから、子どもが地域から引き剥がされ、地方県が衰退していった。特に、「優秀な若者ほど流出する」というのは、地方にとって大きな問題なのである（荻谷ほか 2008 など）。

第二に、専門学科のアイデンティティが不明瞭となった。とりわけ商業科卒の就職者は全国平均でも 4 割程度に留まり、商業教育の意義が見えにくくなっている。耳塚（2000a）が第二回調査時に明らかにしたような、「就職用トラック」であったはずの専門高校（学科）からの進学者の増加がさらに深化したということである。

第三に、普通科に進路多様校や教育困難校を作り出した。そのような学校の生徒は、卒業しても満足のいく進路へ進めず、少なくない生徒がニート・フリーターになるか中退す

る。小川（2000）や青砥（2009）に見られるように、これは特に都市部の高校に顕著な現象である。

1.1.5. 生徒文化データを用いる中での本研究のオリジナリティ

それでは、以上のように生徒文化調査を整理したうえで、このデータを用いながらも、本研究がどのような点でオリジナリティを持つかを述べていこう。

第一に、トラッキングシステムの変容を、学歴下降回避仮説（吉川 2006）、エリート選抜・マス選抜（中村 2011）、職業トラックの多様化という枠組みから実証的にとらえ直すことである。本研究の主要な関心テーマのひとつである様々な社会変動にともなった高校生の出身社会階層と高校トラック・希望進路の関連の分析は、成果報告論文（樋田ほか 2011a,b）でそれぞれ樋田と岡部が分析している。しかし、それらは中間報告的な性格の強い論文であったため、示唆に富む知見は多いとはいえ、記述的な分析に留まり、明確な分析枠組みを提示していない。それに対し、本研究はトラッキングメカニズムの変容を、理論的枠組みを提示しながら社会的に解明するものである。

第二に、専門学科の実態を社会構造の変化に応じて詳細に分析していく。生徒文化調査は、職業系専門学科を「下位トラック」として取り扱ってきた。これに対して、本研究では、以下の視点から専門学科をとらえ直す。

教育社会学の定評あるリーディングス（例えば、Karabel and Halsey(Eds) 1977=1980、Lauder, Brown, Dillabough and Halsey(Eds) 2006=2012 など）を読めば、教育社会学がメリトクラシーを理念型のひとつとして扱い、社会的選抜や社会移動がどの程度メリトクラティックを争点とされてきたことがわかる。むろん、それが最も望ましい社会的価値観であるということではないが、少なくとも、近代化とともに人々の選抜は属性主義から業績主義へと変化し、またそれが望ましいことだとされてきた。そのため、教育達成をメリットの指標とし、教育と社会階層がどのように関連するのかを主たる分析課題として教育社会学の研究業績は蓄積されてきた。生徒文化研究は、日本の社会的分化が顕著である高等学校を調査研究の対象とし、日本のメリトクラシーの存立と変容のメカニズムをトラッキング研究の文脈から蓄積してきた。その結果、メリトクラシーとトラッキングのゆらぎを明らかにしたことは、樋田ほか編（2000）や荻谷（2001）が多くの教育社会学者から引用されていることから学界へ一定のインパクトを与えたことを意味しているといえるだろう。

しかし、これまでの生徒文化調査は、専門高校（学科）に対する取扱いが不十分であったことは否めない。それというのも、耳塚（1980）や大多和（2001）の論文に顕著であるが、当該調査の主たる関心事は、生徒文化の分化であり、その原因を Cohen（1955、1966＝1968）の地位欲求不満説に求めているからであろう。具体的にいえば、専門学科は中学時の成績尺度上で普通科の下に位置づけられることが多く、そのことから専門学科の生徒文化は、地位欲求不満からの反動形成だととらえようとしてきたのである。確かに、専門学科の生徒は、中学時には成績不振だった者が多いかもしれない。しかし、普通科用の尺度で専門学科を測れば、専門学科の生徒が尺度のうえで下位に位置づくのは当然である。そこで本研究では、生徒文化調査のデータを再分析することによって専門高校（学科）の実態をとらえ直す。

以上が、生徒文化データを用いながらの本研究のオリジナリティとなる。しかし、生徒文化調査はやや普通科の生徒（しかも進学希望者）を中心とした設計がなされているため、専門学科の生徒の実態を把握するためのデータとしては馴染まない。そこで、専門学科を中心とした高校生調査を独自に実施し、生徒文化調査と合わせて分析していく。これにより、生徒文化調査が見過ごしてきた専門学科の実態を明らかにしていく。

1.1.6. 生徒文化調査の調査地域・データの概要

ここでは生徒文化調査の調査対象となっている地域とその方法を記述し、本研究で用いるデータを説明しよう。表 1-1 を合わせて参照されたい。

繰り返しになるが、生徒文化調査は、①1979 年 11・12 月、②1998 年 1・2 月、2000 年 1・2 月、③2009 年 11～2011 年 3 月に、同一の高校を対象として実施された。方法は、①各校 2 年生 4 クラスに対する教室での集団自記式の質問紙調査に加え、②各高校の校長または教頭・副校長（管理職）、教務主任、進路指導主任、生徒指導主任を対象に聴き取り調査を実施している。管理職には、学校経営方針および学校全体の概況に関する聴き取り調査を行い、各主任教諭には、それぞれの校務分掌領域における教育の実態および方針に関する聴き取り調査を、半構造化面接法で行った（調査年の標記は、1979 年・1997 年・2009 年とする）。3 回とも同じ質問項目を用いているが、調査当時の関心に即して一部修正を行っている。

調査地域は、東北 α 県の 1 学区、中部 β 県の 2 学区を対象としている。1979 年と 1997 年には、東北 α 県の 5 校、中部 β 県の 6 校（すべて公立高校で計 11 校）で調査している。

しかし、これらの11校は、その後の高校増設の結果、当該地域の高校階層構造において相対的に上位の高校となったため、1999年に拡大調査が行われた。その結果、第二回調査と第三回調査では、東北 α 県では公立6校と私立2校、中部 β 県では公立13校と私立4校が加わり、合計で36の高校が調査の対象となっている。

ただし、本研究では、中部 β 県の公立高校のみを扱うこととする。中部 β 県の公立17校を対象とする理由は、中部 β 県は東北 α 県に比べて10年間で追跡可能な高校が豊富であり、2学区を対象としていることから県内の高校階層構造をほぼ網羅的に調査しているため、高校教育の変容を研究するのに適したデータだからである⁽¹⁾。

その結果、第一回調査データでは6校、第二回と第三回調査データでは17校の公立高校を本研究での分析対象とする⁽²⁾。また、各時点間の比較をより妥当なものとするため、全調査回答者のうち各年度とも1校につき125人を無作為抽出したデータを作成した⁽³⁾。

なお、本研究では、トラッキングの二極化メカニズムを詳細にとらえるために、調査高校数が豊富な第二回調査と第三回調査データを中心に分析を展開していく⁽⁴⁾。

表1-1. 生徒文化調査の概要

(1) 調査の種類	
3回にわたる調査を行った。調査対象校は同一校で、1999年からは対象校を拡大した。 また、一部の高校が途中から不参加となっている。	
a) 学校調査(聴き取り調査)	
①1979年11・12月、②1997年10・11月、1999年11月、③2009年12月に実施。 (1) 学校長、教頭に対する学校経営方針および学校全体の概況に関する聴き取り調査。 (2) 教務主任、進路指導主任、生徒指導主任に対し、それぞれの校務分掌領域に於ける教育の実態および方針に関する聴き取り。	
b) 生徒対象質問紙調査	
①1979年11・12月、②1998年1・2月、2000年1・2月、③2009年11～2011年3月に実施。 各校2年生4クラスに対する質問紙調査。教室での集団自記式。3回とも同じ質問項目(一部修正)。	
(2) 調査対象校	
a) 1979年調査	生徒調査750名(分析対象は6校で、1校につき125名を無作為に抽出)
b) 1997年調査・1999年調査	生徒調査2125名(分析対象は17校で、1校125名を無作為に抽出)
c) 2009年調査	生徒調査2007名(分析対象は17校で、1校125名を無作為に抽出)、教師調査769名

注1) 125名に満たない高校については全数とした。

注2) 調査は2地区を調査対象としているが、1999年調査はうち1地区に通学可能な地域の高校に対象校を拡大した。

注3) この表は、樋田ほか(2011a, p.5)を参考に、一部修正した。

2. 専門学科調査の概要

この調査は、生徒文化データの分析からはとらえることができない部分を補うため、以下のような研究関心から実施している。

既述のように、従来のトラッキング研究は、職業系専門学科高校を高校階層構造においては下位ランク校として位置づけてきた。そのため、専門高校のユニークな機能と構造（＝地場産業とのつながり）が見過ごされてきた可能性がある。例えば、青森県立弘前実業高校の「りんご科」⁽⁵⁾という地域の産業と密着した高校がある。その一方で、炭鉱科を所有していた高校（福岡県立筑豊工業高校など）が、炭鉱産業の衰退とともに学校規模が縮小、学科の再編ないし閉校した。工業科のように県外での就職者を多く輩出する学科もあるが、ほとんどの専門学科はあくまで地場産業とのつながりの中でこそ存在できるといえる。そこで本研究で注目・検討するのは地方商業高校（商業科）である。商業科は工業科と並び、専門学科の代表とされるが、近年その機能的な意義に存立の難しさがある。なぜなら、近年の地方商業高校は「就職学校」の機能が低下し、「進学準備学校」としての性格を強めており、卒業生を地方から教育機会の豊富な都市部へ送り込む機能を持つようになっているからである（岩木 2010）。

社会的にも学術的にも、専門学科がこのような状況に置かれていることから、商業科を手がかりとしながら、高卒者が就く地場産業と高校生の地元志向から地域と高校の関係を探ることを調査の目的として設計した。

この調査は、2011 年 9 月～2012 年 2 月に、中部地方で 2 つの商業高校を含む 12 校の高校 2 年生に対して質問紙調査を実施した。当該県は、製造関係の企業誘致に成功した工業県であるため、地場産業と専門高校という観点では、工業科とのつながりが強い。そのため、商業科から製造職への参入も多く、また進学者も多い、現代の「典型的」な商業高校だといえる。

県内の 2 つの学区をほぼ網羅的に調査し、協力を得られた高校は 12 校で、合計 1972 人の有効回答票数を得た。なお学科の内訳は、普通科＝834 人、商業科＝235 人、工業科＝424 人、農業科＝177 人、水産科＝88 人、家庭科 77 人、総合学科＝98 人、福祉科 39 人となっている。

同時に聴き取り調査も実施し、進路指導主任を中心として、調査校に長期に勤めている教員および管理職に対し、商業高校で 3 名、工業高校で 3 名に対して行った⁽⁶⁾。

3. データの有用性と限界

3.1. データの有用性

以上では、本研究で使用するデータの概要を述べてきたが、これら 2 つのデータを用いることの有用性を述べておこう。

第一に、生徒文化調査データの最大の長所は、同一の調査エリアに所在する同一の高校に対して、1979 年、1997 年、2009 年と約 30 年間に亘り 3 度の繰り返し調査 (repeated cross-sectional survey) を実施し、それにより得られたデータであるため、社会のマクロな変化にともなう教育システムの変容を実証的に明らかにすることが可能な点である。また、既述の通り、当該調査は高校のインプットとアウトプットをつなぐためのスループットの変容を明らかにすることを目的として実施されている。そのため、本研究の目的に最も有用なデータである。

第二に、専門学科調査データの長所は、従来のトラッキング研究を相対化し、現代型のトラッキングシステムを指摘することが可能な点である。従来のトラッキング研究の課題を踏まえ、専門学科調査は、①普通科高校中心の分析枠組みに偏っていたため、専門学科を中心とした高校生調査を設計し、②普通科高校中心の進路形成メカニズムとは異なった視点として地場産業とのつながりや地元志向といった項目を多く調査票に組み込んだという 2 点の特徴を持つ。専門学科調査データを分析することで、トラッキング研究に新たな視点を加えることができる。

3.2. データの限界

同時にこれら 2 つのデータを使用して分析を行うことの限界も記述しておく必要がある。

第一に、中部地方の 2 つの県を対象としていることから、このデータ分析から得られる結果が、日本社会全体を表しているものではないことを理解しておく必要がある。例えば、中部地方は、東北地方や中国地方に比べて、大学進学率も高卒就職率も高い。その意味では、この分析で対象となる高校生は、「恵まれた地域」で生まれ育っていることになる。得られる知見が、モノグラフ調査データを分析することによって描かれる日本社会の一側面に過ぎないことを受け止めなければならない。

第二に、保護者の学歴、職業、意識などの家庭背景に関するデータは、高校生が回答したものであることに注意を払う必要がある。子どもが保護者の学歴や職業を正確に把握し

ていないことは決して珍しくない。子どもの認識と保護者の実際の学歴、職業、意識にそれほど大きなズレはないだろうが、あくまで高校生が回答した結果得られる社会階層項目だということには注意を払う必要があるだろう⁷⁾。

第三に、分析の対象として私立高校（とりわけ、都市部の私立中高一貫校）を含めていないことことに注意を払う必要がある。このことは、エリートセクターの分析にとって大きな課題となる。例えば、東京大学の入学者は有名私立高校（中高一貫校含む）出身の生徒に多く占められていることが指摘されて久しい（例えば、荻谷 1995、pp.62-66）。とはいえ、本研究で公立エリート高校の約 30 年に亘る変遷を分析的に明らかにすることは、今後の私立高校を含んだエリート高校研究の礎となることが期待できる。

第四に、分析対象校の中には、総合学科高校が 2 校（各調査フィールドで 1 校ずつ）しかなく、公立中高一貫校は調査の対象地域に存在していないためデータに含まれていない。そのため、総合学科や公立中高一貫校については、本研究で指摘する選抜システムの中に位置づけることができず、それらの性格が不明瞭なままとなる。つまり、第三、第四の問題点を踏襲すれば、本研究においてトラッキングシステムの変容が指摘できるのは、「伝統的」な公立高校のみということになる。

以上のようなデータ上の制約はあるが、比較的に独立したキャッチメントエリアで長期間に亘り、しかも高校教育に特化して設計された繰り返し調査データはほとんど存在しない。そのため、このデータを用いて、インプット、スループット、アウトプットのそれぞれをつないだトラッキングシステムの変容を実証的に明らかにするには、最も適したデータである。

4. 分析の方法：量的データと質的データの位置づけ

本研究の分析は、主に質問紙調査から得られたデータの分析によって展開していく。よって、本文中に掲載する教員への学校経営に関するインタビューデータは、量的データの妥当性を「質的」に補完するために用いる。特に、すでに述べたように、生徒文化調査は繰り返し調査の長所を活かすために、基本的には同一の質問項目を用いている。しかし、同一の質問項目に対する回答結果の数値（例えば、度数やパーセント）に変化が見られても、その質的な変化までは汲み取れない。本研究では、その点を補うためにインタビュー

データを用いる。また、専門学科調査のインタビューデータも同様に、質問紙調査データの分析結果の意味を質的に読み解くために用いる。

大規模な質問紙調査を実施する場合、通常は聴き取り調査をパイロット調査として位置づけ、調査票に反映させながら実施することが多い。しかし、これらの調査では、インタビュー調査と質問紙調査は平行して同時期に行っている。そのため、各高校への調査依頼時に生徒や学校の様子を聴き取り、そこで得た情報を基に調査票とインタビュー項目を検討した。これは、調査スケジュールが限られていたためだが、一方でこれにより、高校教育を取り巻く問題関心を一度に複数の手法から観察することができることがメリットとして挙げられる。

5. トラックと社会階層の変数化の手続き

5.1. トラックの変数化の手続き

ここでは、生徒文化調査で対象とする 17 校をトラックとして分類する。本研究の目的が「トラッキングの変容」をとらえることである以上、この作業は最も重要になる。

一般的に、高校の位置は、立地する地域での威信、入学者の学力水準、卒業生の進路実績の 3 つによって決定する。とはいえ、小川（2000、p.3）によれば、地方県の高校階層構造は可視的であり、例えば、市部の公立高校が上位で、都市周辺の新興住宅地にある高校が 2 番手、3 番手の高校、さらに郡部の高校が下位といったように、当該地域住民にとっては、このような序列を示す偏差値のような客観的な数値は必要ではないという。しかし、本研究の分析が、これまでの教育社会学で確立されてきた方法を踏襲して展開されていくなれば、主観的なトラックの分類は避けなければならない。

本研究でトラックを分類するうえで用いる視点は、高校の持つ威信・歴史である。それというのも、威信は地域住民の各高校に対する眼差しを表している。そしてそれは、多くの場合、卒業生の進路実績を反映している。他方で、高校の持つ歴史に目を向ければ、「創立年」が高校の歴史として客観的な数値となる⁽⁸⁾。その結果、本研究では、17 校を以下の 4 つにカテゴライズした。

まず、「トップ校」である。このカテゴリーには 3 校が該当するが、この 3 校は当該地域において入学難易度、威信ともに高い。そして、他の普通科高校との大きな差は、東京

大学・京都大学へ進学する卒業生を恒常的に輩出しているところにある⁽⁹⁾。よって、この3校をトップ校のトラックとしてカテゴライズした。

次に、「専門校」のトラックである。これには、商業高校、工業高校、福祉系高校の5校をカテゴライズした。近年、専門校からの大学進学が注目されてきてはいるものの（例えば、中村編著 2010）、本研究の分析課題にとっては、ひとまず専門校は独立したトラックを形成することが望ましいからである⁽¹⁰⁾。

最後に、残りの普通科9校を2つに分類する。これには、創立年を用いる。すると、戦前に創立された高校と第二次ベビーブーマーのために1980年代以降に増設された高校群の2つにカテゴライズすることが可能となる。

中部β県では、1980年代以降に増設された高校が、交通の便が良かったため、入学偏差値、進路実績ともにトップ校の下に位置づいている。よって本研究では、便宜的に、1980年代以降に増設された高校を「セカンド校」、戦前に創立された高校を「サード校」と呼ぶことにする⁽¹¹⁾。

なお、日本のトラッキング研究が高校間格差を対象としてきたことから、本研究もそれを踏襲し、トラックを高校別に編成して分析に用いる。例えば、17校の中には、普職併設校が1校、総合学科が1校あるが、学校要覧などから進路実績を確認すると普通科としての性格が強いため本研究では「普通科」としてサード校にカテゴライズしている⁽¹²⁾。

5.2. 社会階層の変数化の手続き

本研究では、社会階層の変数には、父親の学歴、父親の職業、母親の学歴を用いる。

まず、父親の学歴は、教育社会学の社会階層の指標として鍵変数として扱われてきた。それは、①家庭の経済的な豊かさの最も妥当な指標である（例えば、藤田 1979）とともに、②子どもの学業成績や教育アスピレーションを規定する要因として最も説明力が高いからである（例えば、潮木・佐藤 1979）。

父学歴が経済的な変数の指標とされる一方で、母親の学歴は、家庭の文化的次元の変数の指標である。それというのも、一般的に家父長的な社会においては、母親が子どもの文化的欲求と志向を調整するからである（藤田 1979）。以上より、社会階層の変数に父親と母親の両方の学歴変数を用いることで、高校生の経済的な家庭背景だけでなく、文化的背景も含んだ指標となる。

さらに、職業もまた社会階層の指標として重要視されてきた。例えば、橋本（2006、pp.12-40）は、プーランツァス、ローマー、ライトらの階級概念の枠組みを援用し、SSM や JGSS データの職業変数をカテゴライズすることで、社会階層を操作化した。本研究では、高校生に尋ねた父職のカテゴリーを用いるため、橋本（2006）のような精緻なカテゴライズは不可能だが、「専門・管理職」、「販売・事務職」、「農林・自営職」、「労務職」の4つのカテゴリーを準備した。

以上より、父・母学歴、父職は社会階層の指標として、教育社会学で最も多用されてきた変数である。本研究もこれらに従い、親学歴と父職を社会階層の指標として以下の分析を展開していく。

6. 基本変数の記述統計

それではこの章の最後に、生徒文化調査データにおいて使用する基本的な変数を説明し、記述統計を示そう⁽¹³⁾。分析に用いる変数は各章ごとでも説明するが、ここでは各章で共通に用いる基本的な変数の構造を記述しておく。

性別は、男子=1、女子=0とした「男子ダミー」を用いる。中学成績と高校成績は、最小値=1、最大値=9に設定し、成績の自己評価を回答してもらった結果を用いる⁽¹⁴⁾。父母の学歴は、「高卒以下」、「短大・専各・高専」、「大卒・院卒」の3つのカテゴリーを準備した。父職は、「専門・管理職」、「販売・事務職」、「農林・自営職」、「労務職」の4つのカテゴリーを用いる⁽¹⁵⁾。高校生の希望進路については、「就職希望」、「専各希望」、「短大希望」、「私立大学希望」、「国立大学希望」を基本的なカテゴリーとする⁽¹⁶⁾。

詳細な数値の変化については、各章でも述べていくことになるが、ここでも少し触れておこう（表1-2）。

まず、父学歴、父職、母学歴を確認すると、おおまかな傾向として、高学歴化と専門職化の趨勢が読み取れる。事実、この30年間、日本の大学進学率は上昇し続けた。その子女にあたる高校生を分析の対象としているということである。

次に、希望進路の変化を確認すると、進学希望者の増加と就職希望者の減少の傾向が読み取れる。希望進路について、1997年から2009年への変化で注目すべき点は、国公立大学進学希望者が増加していることである。この変化のメカニズムについては、後の章で詳しく分析していくことにしよう⁽¹⁷⁾。

表 1-2. 生徒文化調査データの使用変数の記述統計

		1979年	1997年	2009年
N		750	2125	2007
トラック	トップ校	33.3	17.6	18.7
	セカンド校	33.3	23.5	24.3
	サード校	—	29.4	29.9
	専門校	33.3	29.4	27.1
性別	男子	65.7	48.5	48.5
	女子	34.3	51.5	51.5
中学成績	平均値	6.8	5.8	5.6
	標準偏差	1.8	2.1	2.2
高校成績	平均値	4.8	4.6	4.5
	標準偏差	2.0	2.1	2.2
父学歴	高卒以下	75.6	55.5	44.4
	短大・専各・高専	1.8	8.9	11.4
	大卒・院卒	22.6	35.5	44.3
父職	専門・管理職	29.8	38.8	44.3
	販売・事務職	21.7	20.9	19.2
	農林・自営職	17.7	10.4	10.8
	労務職	30.8	29.9	25.8
母学歴	高卒以下	88.0	59.7	48.2
	短大・専各・高専	4.0	26.2	30.9
	大卒・院卒	8.0	14.1	20.9
希望進路	就職希望	21.5	15.4	12.7
	専各希望	7.0	16.6	14.1
	短大希望	3.8	8.0	5.1
	私立大学希望	8.4	12.1	10.3
	国立大学希望	59.3	47.9	57.7

7. 生徒文化データの利用と分析の独自性について

本研究は、生徒文化研究会（代表：青山学院大学・教授・樋田大二郎）からデータ利用の許可を受けた上で、筆者が独自に分析を行う。

筆者は生徒文化調査の第一回調査、第二回調査には参加しておらず、第三回調査から調査メンバーとして参加している。本論文の執筆に際して第一回調査、第二回調査、第三回調査のすべての調査時点のデータを利用することについては、調査メンバー参加時の了解事項とされており、さらに、本論文の執筆に際して研究会代表から許可の確認を得ている。

また、生徒文化研究会のデータは共同研究により得られているが、本論文のための分析はすべて筆者の責任でオリジナルに分析している。また、本論文の研究視角は、研究会メンバーのアドバイスをいただいた上で筆者がオリジナルに構築したものである。なかでも

「メリトクラシーからペアレントクラシーへ」という選抜原理の移行をトラッキングシステムの機能変容の視点から分析することは、筆者独自の視角からの分析である。

最後に、生徒文化研究会データの保存と利用については、調査対象者の個人情報保護の観点から、調査メンバーのみが閲覧、分析できる。ローデータはデジタル化され、研究会参加メンバー全員が個々に厳重に保管している。データ利用の適切さの担保は、研究代表をはじめメンバー全員が業績を確認することで担保している。

- (1) 東北 α 県は、少子化の影響で高校の統廃合が多く、継続的な調査が可能な高校がやや少ない。
- (2) 中部 β 県の公立高校は合計で 19 校に協力を得ていることになるが、1 校は第三回調査からの参加で、もう 1 校は第二回調査時に保護者の学歴・職業に関する質問項目を削除することで協力を得ている。そのため、その 2 校は分析から除外した。
- (3) 高校 2 年生が 125 人に満たない高校は全数とした。
- (4) 生徒文化調査の結果は以下の報告書・著書によって発表されている。

〈第一回調査報告〉

松原治郎・武内清・岩木秀夫・渡部真・耳塚寛明・苅谷剛彦・樋田大二郎・吉本圭一・河上婦志子，1980，「高校生の生徒文化と学校経営(1)」『東京大学教育学部紀要』第 20 巻，pp.21－57.

耳塚寛明・苅谷剛彦・樋田大二郎，1981，「高等学校における学習活動の組織と生徒の進路意識—高校生の生徒文化と学校経営(2)—」『東京大学教育学部紀要』第 21 巻，pp.29－52.

〈第二回調査報告〉

樋田大二郎・耳塚寛朗・岩木秀夫・苅谷剛彦・金子真理子，1999，「高校生文化と進路形成の変容(1)—1979 年調査との比較を中心に—」『聖心女子大学論叢』第 92 集，pp.115－188.

樋田大二郎・田中葉・堀健志・大多和直樹・耳塚寛朗，1999，「高校生文化と進路形成の変容(2)—1979 年調査との比較を中心に—」『聖心女子大学論叢』第 93 集，pp.43－125.

樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦編，2000，『高校生文化と進路形成の変容』学事出版.

〈第三回調査報告〉

樋田大二郎・中西啓喜・岩木秀夫, 2011, 「単線型メリトクラシーパラダイムの再考(I) — 「高校生文化と進路形成の変容(第3次調査)」より —」『青山学院大学教育人間科学部紀要』第2号、pp.1-22.

樋田大二郎・大多和直樹・金子真理子・岡部悟志・堀健志, 2011, 「単線型メリトクラシーパラダイムの再考(II) — 「高校生文化と進路形成の変容(第3次調査)」より —」『青山学院大学教育人間科学部紀要』第2号、pp.23-44.

〈その他には、以下の著書でデータが利用されている〉

荻谷剛彦, 2001, 『階層化日本と教育危機—不平等再生産から意欲格差社会へ—』 有信堂.

荻谷剛彦, 2002, 『教育改革の幻想』 ちくま新書.

荒川葉, 2009, 『「夢追い」型進路形成の功罪—高校教育改革の社会学—』 東信堂.

シム・チュン・キャット, 2009, 『シンガポールの教育とメリトクラシーに関する比較社会学的研究—選抜度の低い学校が果たす教育的・社会的機能と役割—』 東洋館.

(5) 2012年11月20日の読売新聞 (<http://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/news/20121120-OYT8T00324.htm>、2012年12月8日取得) によれば、りんご科がある弘前実業高校(藤崎校舎)は2017年に募集停止、2019年3月に閉校が決まった。

(6) 生徒文化調査にも関わることだが、聴き取り調査は、関係教員の許可をいただいた上、ICレコーダーで録音し、文字起こした。本研究におけるインタビューデータの掲載については、プライバシーに関わる点を内容が変化しない程度に改変していることを理解されたい。

(7) 本研究で用いるデータはそれぞれ、以下の研究助成を受けている。

1. 昭和54-55年度科学研究費・一般研究(C)「高校生の生徒文化と学校経営」(代表: 松原治郎(東京大学))
2. 平成9-10年度科学研究費・基盤(B)「高校生文化と進路形成の変容: 1979年調査との比較によるトラッキングの弛緩を中心に」(代表: 樋田大二郎(聖心女子大学))
3. 平成11-12年度科学研究費・基盤(B)「高校生文化と進路形成の変容: 大都市圏高校教育の変容を中心に」(代表: 樋田大二郎(聖心女子大学))
4. 平成21-23年度科学研究費・基盤(B)「高校生文化と進路形成の変容(第3次調査): 単線型教育体系における多様化政策の課題」(代表: 樋田大二郎(青山学院大学))

5. 平成 23 年度お茶の水女子大学グローバル COE「格差センシティブな人間発達科学の創成」公募研究「地方商業高校生の進路形成の変容に関する研究：「地域」を手がかりとして」（代表：中西啓喜（青山学院大学大学院））
- (8) 通常のトラッキング研究は、単年度ないし短期間でのモノグラフ調査が多いため、入学時の受験偏差値や卒業生の進学実績によって分類が可能である。しかし、生徒文化調査は長期間に亘って実施しており、様々な社会変動（例えば、第二次ベビーブーマーに伴う高校増設、その後の少子化による高校の統廃合、大学進学率の上昇と就職率の低下）を経験しているため、入学時の受験偏差値や卒業生の進学実績によるトラック分類が不可能である。そのため、地域での威信や歴史によって分類する。
- (9) 東京大学・京都大学への進学者の有無のみで高校の卓越性は測定できるものではないかもしれない。しかし、耳塚（1990a）に見られるように、ある程度の妥当性は持つと考えられる。
- (10) 多様な専門学科を 1 つにまとめることが良いわけではない。よって、第 5 章、第 6 章では、専門学科を細分化した分析を行う。
- (11) 1979 年調査の 6 校は、この分類では、トップ校＝2 校、セカンド校＝2 校、サード校＝0 校、専門校＝2 校となる。
- (12) むろんこの手続きに問題がないわけではない。よってそれを踏まえ、高校内での学科間の差異による進路分化の分析を第 6 章で行う。
- (13) 無回答・非該当は欠損値とした。
- (14) 厳密に測定された学力・成績ではないため、数値の客観性には疑問が残るかもしれない。しかし、生徒は教師や生徒集団内においてレッテルを貼られることによって、かなり正確に自分の学業的な位置を把握しているという（Ballantine and Hammack 2009＝2011、訳書 p.329）。よって、生徒の成績の自己評価を尋ねることで、この変数は、成績の指標としてある程度は妥当性を持つと考えられる。
- (15) 回答のうち、「その他」や「父／母はいない」は欠損値とした。
- (16) もともとの選択肢には、「家事手伝い」があったが、きわめて少数のため欠損値とした。また、2009 年調査には「フリーター」、「その他」の選択肢が加えられたが、1999 年調査ではなかったため、分析から除外した。そのため、1997 年調査と 2009 年調査での希望進路項目はややずれが生じていることには注意を払う必要がある。ただし、「フリ

ーター」と「その他」合わせてもサンプル全体の 2%程度であるため、分析結果に大きな影響はないと考えられる。

(17) 詳細な数値の変化は、Appendix の基礎集計表を必要に応じて参照されたい。

ただし、インタビューデータについて各メンバーが個々人で保管するに留め、プライバシーの問題があるので当面は公開しないという旨が生徒文化研究会で決定されている。ただし、データの利用と分析結果の学術的・倫理的側面については、研究会でモニタリングしている。

また、専門学科調査のインタビューデータもプライバシーの観点から、筆者が保管するに留め、公開はしない。しかし、当該調査は、お茶の水女子大学グローバル COE プログラム、公募研究による研究助成を受けて実施している。そのため、インタビューデータの学術的・倫理的側面は、お茶の水女子大学による倫理審査を受けると同時に、博士学位請求に当たっては指導教官にモニタリング／確保していただいている。

(参考 URL : <http://www.ocha.ac.jp/introduction/guideline.pdf>、2012 年 12 月取得)

なお、生徒文化調査の結果は上記（第 1 章注 4）、松原治郎ほか（1980）、耳塚寛明ほか（1981）、樋田大二郎ほか（1999a,b）、樋田大二郎ほか編（2000）、樋田大二郎ほか（2011a,b）で、専門学科調査の結果は、お茶の水女子大学グローバル COE プログラム『PROCEEDINGS 公募研究成果論文集』20、pp.63－72（2012 年）（本論文第 6 章にて加筆修正）で報告されている。

第Ⅱ部：普通科高校の変容

第2章 高校トラックへの配分メカニズム：少子化と高校定員の変容から

1. 問題設定

この章では、階層化された高校トラックへの選抜・配分メカニズムの変容を分析し、トラッキング構造が社会階層（親学歴）によって二極化していることを明らかにする。

高校教育は、社会的分化を生み出す結節点としては、最も顕在化された教育システムである。日本の高校は、しばしばトラッキングとしての機能を有しているとされ（藤田 1980）、そこでは、インプットの偏差が、スループット（トラッキング）によって最大化されてアウトプットにつながる（飯田 2007）。それゆえ、トラックへの配分までのプロセスがメリトクラティックであるかどうか争点のひとつとされてきた（例えば、Bowles and Gintis 1976=1986、1987、潮木ほか 1978、岩木・耳塚編 1983 など）。

本章では、インプット、すなわち高校への入学に着目して分析を展開していくが、その視点は、「トラックへの配分は、どのくらいメリトクラティックなのか」である。社会の格差化が叫ばれる今日だが、高校教育システムはその格差是正に貢献しているのだろうか。それとも、格差を拡大させるデバイス（装置）としての機能を果たしているのだろうか。

以下では、高校が置かれている現状を記述し、研究をレビューすることから、高校トラックへの選抜・配分メカニズムについて先行研究が残した課題を検討し、分析課題を設定していく。

2. 高校の現状と先行研究のレビュー

2.1. 高校の社会的な文脈

先行研究のレビューに先だって、高校トラック側の変化を確認しておこう。これにより、分析対象となる高校生が置かれている社会的な文脈を明確化できる。

現代日本の重要な社会変動のひとつに少子化がある。学校基本調査より高校在籍者数を確認すると、高校進学が普遍化した 1975 年を基点（100%）とすると、団塊ジュニア世代

が高校へ入学した 1990 年には、約 130%へと増加する⁽¹⁾。しかし、2000 年には約 85%、2009 年には約 65%で、高校在籍者数は、30 年あまりの間に大きく減少している。

本来、少子化社会の中で高校入試が従来通りの「輪切り選抜」によって高校階層構造の機能を維持するためには、子どもの減少と同じ規模で高校数が減少していなければならない。しかし、高校の数（公立、全日制のみ）は、 β 県では 75 年＝約 30 校、90 年＝約 40 校、00 年＝約 40 校、09 年＝約 40 校となっており、少子化にもかかわらず、高校数はほぼ横ばいである。

そこで、高校の収容力を把握するため、1 校あたりの生徒数を算出した（図 2-1）⁽²⁾。これによれば、75 年＝約 400 人、90 年＝約 360 人、00 年＝約 240 人、09 年＝約 170 人となっており、1 校あたりの生徒数は 30 年間で大きく減少していることがわかる。

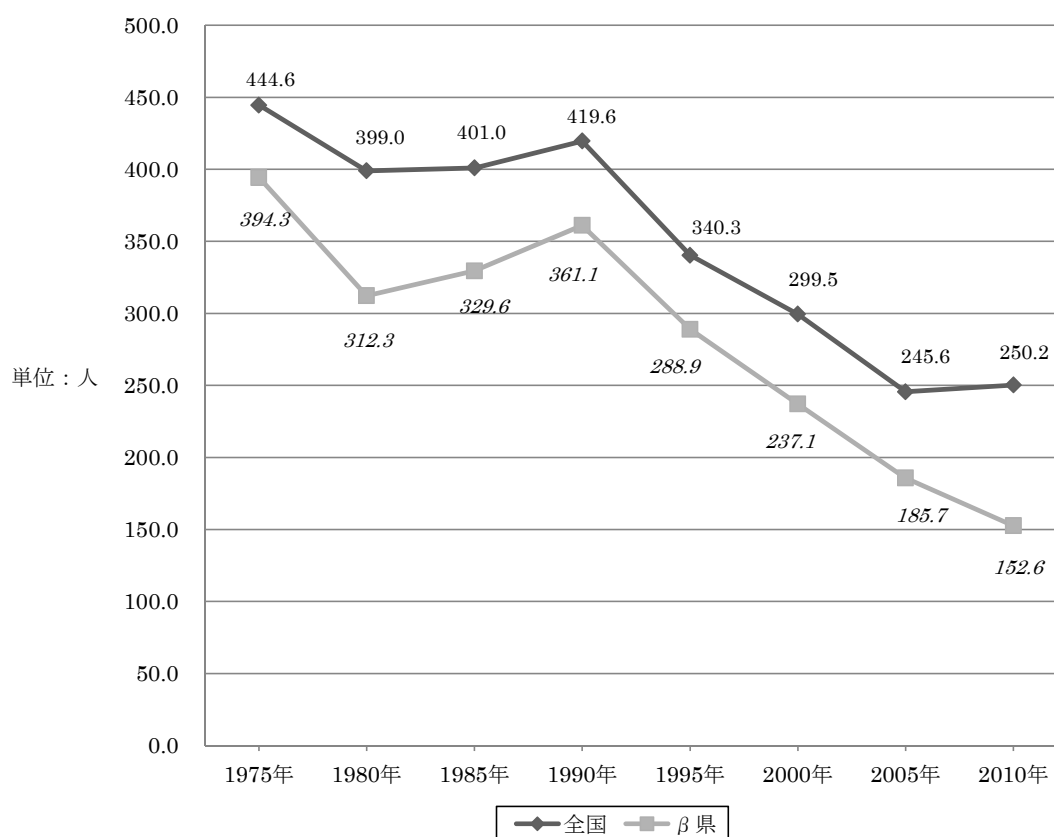
以上のデータから読み取れるのは、高校は少子化社会の中で、1 校あたりの生徒数を減らすことで、学校数を維持させてきたということである。しかし、1 校あたりの生徒数の減少は、どの高校でも平等に行われているわけではない。

表 2-1 は、本研究で調査対象とした 16 の高校の定員数をランク別に合計して平均値を算出したものである⁽³⁾。この表からは、概ね次のような傾向が読み取れる。まず、1990 年には、専門校を除き、どのランクの高校でも定員がほぼ同じであり、セカンド校の定員が最も多い。しかし、少子化が深刻化する 2005 年頃になると、セカンド校とサード校の定員数が減少し、トップ校の定員が多いことがわかる。2007 年の数値を見ると、トップ校の定員は、セカンド校やサード校よりも約 60 人から 100 人多く、学級数でいうと 2 クラスから 3 クラス多いことになる。つまり、少子化の中で、高校は相対的に上位校の定員を多めに確保し、普通科高校を中心にセカンドランク以下の高校の生徒数を減少させることによって、学校数を維持してきたのである⁽⁴⁾。

それでは、このような少子化にともなう高校定員数の変化は、高校入学者にどのような変化をもたらしたのであろうか。仮説的にいえば、上位ランクの高校の収容力が増加したということは、とりわけトップ校と社会階層の関連は弱くなったと考えることができる。

本章では、このような社会変動を背景として、高校ランクと社会階層の関連の変容を検討することにより、トラッキング構造の変容を検討する視角を得ることを目的としている。

図 2-1. 高校収容力の変化（学校基本調査より算出）



注 1)生徒文化データの分析対象に合わせて、県立全日制の高校 2 年生のみを対象として算出した。

注 2)図 0-3 は、①全公立高校、②定時制も含むので、高校数が大きく異なる。そのため、この図の数値を 3 倍しても、図 0-3 とは合致しない。

注 3)β 県の数値は、斜体で表記している。

表 2-1. 高校ランク別、1 校あたりの定員の平均人数

	1990年	1995年	2000年	2005年	2007年
トップ校	355.0	280.0	253.3	253.3	253.3
セカンド校	382.5	280.0	270.0	220.0	190.0
サード校	358.0	264.0	232.0	132.0	152.0
専門校	261.0	230.0	206.0	180.0	180.0

単位：人

2.2. 先行研究のレビューと分析課題の設定

高校トラックを経由した社会移動に関して蓄積されてきた研究には、「社会階層と社会移動の全国調査」、通称 SSM (Social Stratification and Social Mobility) 調査から得られたデータを用いた研究がある。SSM 調査は、1955 年の第 1 回調査（日本社会学会による）

以来 10 年ごとに行われている。その調査の目的は、日本社会における社会階層と社会移動の動態についてのデータを収集することである。不平等の研究には、各個人が人生を過ごしていくライフコースに沿って、詳細な経歴のデータを集める必要があるが、このようなデータは国や自治体の官庁統計による蓄積がない。長期間に渡って比較可能なデータを全国規模で集めている調査としては、この「SSM 調査」が唯一のものである。

SSM 調査は、このように社会移動の観測を目的とした大規模な社会調査であるが、その調査票の中には、中学 3 年時の成績と高校のランク・タイプを尋ねる質問項目がある。そのため、SSM が調査の歴史と設計の性格上、①青年期の学力や卒業高校といった教育を経由した社会移動を実証的にとらえることが可能であり、②社会全体の変化と高校階層構造の関連がどのように変容したかを明らかにするのに適している(中西ほか 1997)。よって、本章における先行研究のレビューは、SSM 研究を中心に行っていく。

SSM の調査票にある中学 3 年時の成績の質問項目は、「中学校 3 年生のとき、あなたの成績は学年のなかでどれくらいでしたか」である。回答は、「1 上の方」、「2 やや上の方」、「3 真ん中あたり」、「4 やや下の方」、「5 下の方」の 5 件法で 1 つを選択する⁵⁾。

荻谷(2001、2008a)は、1995 年と 2005 年の SSM 調査のデータを用いて、中学時の成績が教育達成、就職機会、初職の威信へ与える影響を分析した。それによると、人々の社会移動には、出身社会階層を統制しても、中学時の成績が独立した影響があることが明らかにされている。中学 3 年時の成績は、人々の教育達成や社会移動にとって重要な要因なのである。

ところが、教育達成の元となる学力⁶⁾が個人の能力や努力によってのみに規定されておらず、出身社会階層に多くの影響を受けることはよく知られている(例えば、Jencks et. al 1972=1978、Bowles and Gintis 1976=1986、1987、耳塚ほか 2002、荻谷・志水 2004 など)。また、学力と同様に、どのようなランク・タイプの高校へ入学するかも出身社会階層によって規定されている(例えば、Oakes 1985、中西ほか 1997、稲田 1997、荻谷 1998、中澤 2008 など)。このように先行研究をレビューすると、「社会階層→学力→高校ランク・タイプ」という構図を描くことができ、高校教育システムは、社会階層を固定化ないし再生産するためのディバイスとして機能しているといえる。

しかし、中澤(2008)は、戦後日本の文脈に照らすと、戦後、急速に拡大していった高校教育の中で、それまで中等教育に無縁だった層が、職業教育という手段を通して中等教育を受ける機会を拡大させてきた職業高校の存在は、必ずしもネガティブにのみ評価され

るべきものではない、という。例えば、荻谷（2001、p.47）がいうように、1960 年の農民たちは『手に届くところにある』チャンス」を求めて高校進学した。また、たとえ職業系の学科から高等教育への進学者が少なかったとしても、「制度上は高等教育進学機会を担保されている」ことに加え、「高卒であったとしても、普通科卒より専門・管理職に就く道が確保されていたという事実も」あり、さらに、1990 年代以降では、専門学科出身者を優先的に受け入れる大学が登場するなど、「戦後の高校が世代間再生産構造の維持、階層関係の固定化に寄与したというのは早急」だという（中澤 2008、p.42）。

それでは、少子化にともないトップ校への入学機会が拡大した近年においては、高校教育システムはどのように機能しているのか。「世代間再生産構造の維持、階層関係の固定化に寄与」しているのだろうか。それとも社会移動の自由度が増しているのだろうか。

この問いは SSM データでは解き明かすことができない。調査の設計上、困難な部分が多いことは十分に理解できるものの、SSM 調査データの特性として大規模なデータであるため、どうしても高校のランク・タイプの分類が難しい。

SSM 調査における卒業高校の弁別方法は、①卒業した高校設置者、②卒業した高校の学科を尋ねた後、③「同じ学年のうちどのくらいの人が短大や大学へ進学したか」という質問項目を置いている。つまり、SSM データにおける高校ランクの弁別は、主に調査対象者が卒業した高校の大学進学率で弁別しているということになる。しかし、この方法では、①質問形式上どうしても回答者の主観が相当に入ること、②また、高校ランクを進学率でしか弁別できないため、高校の持つ歴史や威信、高校の定員、高学歴化に伴う進学率の変化といった高校教育システムの変容を含んだ分析ができないこと、という 2 つの問題が生じる。

それに対し、本研究で用いるデータは、同じ地域の同じ高校を継続的に調査しているため、SSM データの持つ以上の課題をクリアしたうえで、少子化などの社会変動が高校へ与えたインパクトを分析することができるのである。それでは、以下で分析していこう。

3. 使用する変数と分析の方法

本章で用いる変数は、①所属トラック、②性別、③中学時成績、④父学歴、⑤父職、⑥母学歴の 6 つである。記述統計は、以下の表 2-2 を参照されたい。

表 2-2. 使用する変数の記述統計

		1997年	2009年
N		2125	2007
トラック	トップ校	17.6	18.7
	セカンド校	23.5	24.3
	サード校	29.4	29.9
	専門校	29.4	27.1
性別	男子	48.5	48.5
	女子	51.5	51.5
中学成績	平均値	5.8	5.6
	標準偏差	2.1	2.2
父学歴	高卒以下	55.5	44.4
	短大・専各・高専	8.9	11.4
	大卒・院卒	35.5	44.3
父職	専門・管理職	38.8	44.3
	販売・事務職	20.9	19.2
	農林・自営職	10.4	10.8
	労務職	29.9	25.8
母学歴	高卒以下	59.7	48.2
	短大・専各・高専	26.2	30.9
	大卒・院卒	14.1	20.9

第一の分析では、中学成績の規定要因の変化を社会階層の視点から分析する。分析の方法は、中学時成績を従属変数とした重回帰分析を用いる。独立変数には、父大卒ダミー、父専管ダミー、母大卒ダミーを用い、統制変数として男子ダミーを投入する⁷⁾。この分析は、高校トラックへの配分にとって重要な中学成績の規定要因の変化をとらえると同時に、第二の分析への準備にもなる。

第二の分析では、所属トラックの分析を中学時成績と社会階層の視点から分析していく。この分析は3つの段階を踏んでいく。

まず、所属トラックと中学時成績の関連の変化を分析する。方法は、調査年時別に、中学時成績の平均値を高校トラック間で分散分析によって比較する。

次に、所属トラックと社会階層の関連の変化を分析する。この分析には、クロスセッションによるカイ二乗検定に加え、残差分析を行う。カイ二乗検定は、クロスセッション全体における各セルの期待値と観測値のズレを検定するだけにとどまるが、残差分析を用いることにより、どのセルに統計的な偏りが大きいのかを明らかにできるのである。

なお、残差分析の結果の読み方であるが、算出される自由度調整済み標準化残差は、正規分布に従うため、統計量が1.96を超えれば5%水準で有意、2.58を超えれば1%水準で有意、3.29を超えれば0.1%水準で有意であるという結果を意味する。

最後に、所属トラックの規定要因をロジスティック回帰分析によって分析するが、これには、①普通科か専門学科と、②普通科の中のどのようなランクか、という2つの軸を用いる。①普通科か専門学科の分析には、普通科=1、専門学科=0を従属変数とした二項ロジスティック回帰分析を用いる。②普通科の中のどのようなランクかの分析には、分析対象者を普通科高校の生徒に限定し、サード校を基準カテゴリーに従属変数を設定した多項ロジスティック回帰分析を行う。独立変数には、中学時成績、父大卒ダミー、父専管ダミー、母大卒ダミーを用い、統制変数として男子ダミーを投入する⁽⁸⁾。

4. 分析

4.1. 中学3年時成績の分析

ここでは、中学3年時成績の規定要因の変化を社会階層に着目して分析していく。表2-3は、中学3年時成績を従属変数に設定した重回帰分析の結果である。

表2-3. 中学3年時成績の規定要因（重回帰分析）

	1997年		2009年	
	B	ベータ	B	ベータ
男子ダミー	- 0.272	- 0.062 **	- 0.209	- 0.046 *
父大卒ダミー	0.982	0.212 ***	0.819	0.178 ***
父専管ダミー	0.469	0.104 ***	0.513	0.111 ***
母大卒ダミー	0.166	0.027	0.342	0.063 *
定数	5.145	***	5.125	***
調整済み R ² 乗	0.076		0.073	
F 値	40.719 ***		37.426 ***	
N	1942		1839	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

まず、1997年の結果を見ていこう。これによると、男子ダミーが負で、父大卒ダミーと父専管ダミーが正で有意であり、母大卒ダミーは有意ではない。つまり、男子よりも女子で、父親が非大卒よりも大卒で、父親が専門・管理職の生徒が中学3年時の成績が高くなる傾向がわかるのである。

次に、2009年の結果を見ていこう。1997年に有意だった男子ダミー、父大卒ダミー、父専管ダミーの3つの変数は、同様に有意なままである。しかし、2009年になると、母大卒ダミーが5%水準で有意な効果をもつようになる。

国勢調査などの統計資料を確認すれば、高校生の親世代は高学歴化しており、このことは、母親の学歴はかつてよりも社会階層の指標として希少性が低まっているといえる。しかし、以上の重回帰分析の結果では、1997年には統計的に有意な効果をもたない母学歴の変数が、2009年には有意な効果をもつようになった。この結果からわかるのは、高校生の回顧的な自己評価という限定的なデータの分析ではあるが、中学3年時の成績を規定する要因には、母学歴による弁別が大きくなったということである。

それでは、このように変化した中学3年時の成績は、高校トラックへの配分に際してどのような効果をもつように変容したのであろうか。以下で分析していこう。

4.2. 高校トラックへの配分の変容

ここでは、高校トラックへの配分メカニズムの変容を分析していくが、①トラックと中学時の成績の関連、②トラックと出身社会階層という2つ視点から探っていく。

表2-4は、高校トラック間で中学3年時成績を分散分析によって比較した結果である。分散分析の結果は、両調査年ともに0.1%水準で有意であるため、高校間と中学3年時の成績には関連があり、中学3年の頃の成績が良い生徒ほど、威信の高い高校に入学していることがわかる。しかし、平均値の変化だけを確認すると、トップ校が8.19→7.77へと低下している。つまり、中学時成績の面で見れば、トップ校への入学が「容易になった」ということである。

表2-4. 調査年別、高校トラック間の中学3年時成績の平均値比較（分散分析）

	トップ校	セカンド校	サード校	専門校	F 値
1997年	8.19 (1.15)	6.83 (1.40)	5.23 (1.54)	4.10 (1.70)	687.979 ***
2009年	7.77 (1.58)	6.83 (1.41)	4.85 (1.63)	3.83 (1.75)	584.742 ***

*p<.05 **p<.01 ***p<.001
(カッコ内は標準偏差)

それでは、次に高校トラックと社会階層の関連の変化について分析していこう。

表2-5は、1997年調査の結果である。まずは、父学歴の「大卒・院卒」について見てみると、トップ校とセカンド校のセルにおいて統計的に正で有意な偏りがあり、専門校で

は負で有意な偏りが観測される。一方で、父学歴が高卒以下では、トップ校とセカンド校が負で、専門校が正で有意な偏りが見られる。

父職については、専門・管理職において、トップ校とセカンド校が正で、専門校が負で有意な偏りがある。反対に、労務職においては、トップ校とセカンド校が負で、専門校が正で有意な偏りがある。

母親の大卒・院卒の学歴については、トップ校とセカンド校が正で、サード校と専門校が負で有意な偏りがある。しかし、サード校では、母親が短大等を卒業している層が多く、反対に、専門校では母親は高卒が多く、短大等卒、大卒・院卒が少ない。

以上より、1997年調査時点の高校トラックと社会階層の関連は、①トップ校とセカンド校の生徒ほど階層が高く、②専門校の生徒ほど階層が低い。そして、③サード校がその中間的なポジションに位置していることがわかる。つまり、高校トラックのランクと社会階層が関連しており、高い社会階層の生徒ほど高い高校トラックに所属しているのである。

しかし、2009年調査時点になるとセルの統計的な偏りが変容する。表2-6がその分析結果である。まず、父大卒・院卒に着目すると、トップ校とセカンド校が正で、サード校と専門校が負で有意である。その一方で、父高卒を見ると、トップ校とセカンド校が負で、サード校と専門校が正で有意となっている。

父職では、専門・管理職を見ると、1997年調査時点では有意でなかったサード校が負で有意となっている。また、労務職に着目すれば、トップ校とセカンド校が負で、サード校と専門校が正で有意な偏りが観測される。

さらに母学歴を見ても同様の傾向で、サード校と母大卒・院卒のセルにおいて、負で有意な結果が得られた。また、母高卒以下では、トップ校とセカンド校が負で、サード校と専門校が正で有意という結果である。

以上の結果より、1997年調査と2009年調査を比較することから見えてきたのは、社会階層における、セカンド校とサード校の二極化ということになる。

表 2-5. 1997 年調査の高校トラックと社会階層の関連（数値は、自由度調整済み残差）

1997年							
		トップ校	セカンド校	サード校	専門校		χ^2 (d.f.)
父学歴	高卒以下	- 8.86 ***	- 4.00 ***	1.29	10.25 ***		192.418(6) ***
	短大・専各・高専	- 0.90	- 1.09	0.71	1.10		
	大卒・院卒	9.73 ***	4.80 ***	- 1.76	- 11.29 ***		
父職	専門・管理職	7.49 ***	2.16 *	- 1.15	- 7.43 ***		166.335(6) ***
	販売・事務職	- 1.75	3.17 **	- 0.53	- 0.94		
	農林・自営職	- 1.94	- 1.91	2.18 *	1.31		
	労務職	- 5.12 ***	- 3.84 ***	0.23	7.87 ***		
母学歴	高卒以下	- 6.14 ***	- 3.08 **	0.19	8.05 ***		126.803(6) ***
	短大・専各・高専	1.25	1.04	2.89 **	- 4.99 ***		
	大卒・院卒	7.08 ***	3.03 **	- 3.91 ***	- 5.04 ***		

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表 2-6. 2009 年調査の高校トラックと社会階層の関連（数値は、自由度調整済み残差）

2009年							
		トップ校	セカンド校	サード校	専門校		χ^2 (d.f.)
父学歴	高卒以下	- 8.75 ***	- 3.49 ***	3.77 ***	7.93 ***		62.775(6) ***
	短大・専各・高専	- 1.47	- 1.56	2.65 **	0.37		
	大卒・院卒	9.69 ***	4.49 ***	- 5.46 ***	- 8.17 ***		
父職	専門・管理職	5.83 ***	1.80	- 2.40 *	- 4.89 ***		119.295(6) ***
	販売・事務職	- 0.84	0.14	0.36	0.29		
	農林・自営職	- 2.11 *	0.66	- 0.60	1.89		
	労務職	- 4.37 ***	- 2.64 **	2.83 **	3.95 ***		
母学歴	高卒以下	- 7.87 ***	- 2.92 **	2.74 **	7.37 ***		145.783(6) ***
	短大・専各・高専	0.23	1.75	- 0.16	- 1.76		
	大卒・院卒	9.41 ***	1.60	- 3.19 **	- 7.05		

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

それでは、普通科高校と専門校への分化を規定する要因の変化を二項ロジスティック回帰分析によって確認しよう（表 2-7）。

1997 年において、普通科高校の所属を規定する変数は、負で男子ダミー、父大卒ダミー、父専理ダミー、中学成績である（すべて 0.01%水準で有意）。つまり、父大卒かつ父専門・管理職で、中学時の成績の良い女子が普通科に所属する傾向があるということである。

2009 年の結果を見ていこう。有意な変数は、負で男子ダミー（p<.01）、父大卒ダミー（p<.05）、母大卒ダミー（p<.01）、中学時成績である（p<.01）。この結果は、父大卒かつ母大卒で、中学時の成績の良い女子が普通科に所属しやすいことを表している。

2 時点での変数の効果の変化は、社会階層のどの側面が効果をもつようになったかにある。1997 年時点では、父学歴と父職が有意で、母学歴は有意ではなかった。しかし、2009 年になると、父職が有意でなくなり、母学歴が有意な効果をもつようになった。また、オ

オッズ比 (Exp(B)) によって変数の効果の順序を確認すると、1997 年では父学歴のオッズ比 (2.691) が一番高いが、2009 年では母学歴のオッズ比 (2.521) がもっとも高い。

以上より、この 10 余年間で、父親の属性よりも母親の属性 (学歴) によって普通科か専門科かの分化がなされるように変化したことがわかる。

表 2-7. 普通科高校所属の規定要因 (二項ロジスティック回帰分析)

	1997年		2009年	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)
男子ダミー	- 0.894 ***	0.409	- 0.428 **	0.652
父大卒ダミー	0.990 ***	2.691	0.397 *	1.488
父専管ダミー	0.627 ***	1.872	0.188	1.206
母大卒ダミー	0.267	1.306	0.925 ***	2.521
中学成績	0.660 ***	1.935	0.622 ***	1.863
定数	- 2.595 ***	0.075	- 2.397 ***	0.091
- 2 対数尤度	1303.752		1154.053	
χ^2 (d.f.)	563.056(5) ***		418.056(5) ***	
Cox & Snell R ² 乗	0.296		0.263	
Nagelkerke R ² 乗	0.430		0.386	
N	1607		1367	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

それでは、次に分析ケースを普通科に限定して、所属する高校ランクの規定要因を分析していこう。分析の方法は、サード校を基準カテゴリーとした多項ロジスティック回帰分析である (表 2-8)。

まずは、トップ校の変化から見ていこう。1997 年時点で有意な変数は、父大卒ダミー (p.<0.1)、父専管ダミー (p.<0.5)、中学成績 (p.<0.01) である。一方で、2009 年では、有意な変数が父大卒ダミー (p.<0.01)、母大卒ダミー (p.<0.1)、中学成績 (p.<0.01) である。統計的に有意な変数を見れば、父職が母学歴に変わったのである。

しかし、トップ校の変化はそれだけに留まらない。オッズ比 (Exp(B)) によって変数の効果の順序を確認すると、1997 年では中学成績 (6.139)、父大卒ダミー (2.115)、父専管ダミー (1.534) の順だが、2009 年になると、父大卒ダミー (3.425)、中学成績 (3.151)、母大卒ダミー (2.392) の順に変化している。つまり、トップ校への所属を規定する要因について、中学校での成績が相対的に低まり、出身社会階層の重要性が高まったのである。

次に、セカンド校の変化を見ていこう。1997 年では、有意な変数が中学成績 (p.<0.01) のみである。つまり、セカンド校とサード校の分化は、純粋に中学校での成績によって規

定されていたということである。しかし、2009 年になると、有意な変数が、中学成績 (p.<0.01) に父大卒ダミー (p.<0.01) が加わる。しかもオッズ比 (Exp(B)) を見ると、父大卒ダミーの方が中学成績よりも効果の順序が上位であることがわかる。

以上の分析より、所属するトラックへの配分メカニズムが、親学歴の点でますますノンメリトクラティックに変容していることがわかる。

表 2-8. 所属する高校ランクの規定要因 (多項ロジスティック回帰分析)

		1997年		2009年	
		B	Exp (B)	B	Exp (B)
トップ校	男子ダミー	- 0.005	0.995	- 0.241	0.785
	父大卒ダミー	0.749 **	2.115	1.231 ***	3.425
	父専管ダミー	0.428 *	1.534	0.418	1.519
	母大卒ダミー	0.333	1.396	0.872 **	2.392
	中学成績	1.815 ***	6.139	1.148 ***	3.151
	切片	- 13.769 ***		- 8.512 ***	
セカンド校	男子ダミー	- 0.118	0.889	- 0.166	0.847
	父大卒ダミー	0.278	1.320	0.937 ***	2.551
	父専管ダミー	0.145	1.157	0.187	1.206
	母大卒ダミー	0.422	1.524	0.279	1.322
	中学成績	0.655 ***	1.925	0.674 ***	1.962
	切片	- 4.309 ***		- 4.385 ***	
- 2 対数尤度		561.807		641.441	
χ^2 (d.f.)		734.986(10) ***		497.097(10) ***	
Cox & Snell R ² 乗		0.464		0.389	
Nagelkerke R ² 乗		0.524		0.438	
McFadden		0.287		0.225	
N		1177		1009	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

5. まとめと考察

ここまで、高校生を対象として、高校トラックへの選抜・配分メカニズムの変容を明らかにするための分析を行ってきた。得られた知見は、以下の通りである。

第一に、中学 3 年時の成績の規定要因は、親学歴 (社会階層) の影響が強まったことが示唆された。表 2-3 の重回帰分析において、1997 年時点では、母学歴が中学 3 年時成績に与える影響は統計的に有意ではなかった。しかし、2009 年時点では、父学歴と父職に加えて、母親が大卒であるかどうかによって中学 3 年時の成績が規定されるようになったのである。この 10 年余の間、女性は高学歴化している。このことは、母親学歴の社会階層

としての希少性が低まっていることを意味する。それにも関わらず、母学歴が中学 3 年時成績に影響するようになったということは、学力形成のメカニズムが社会階層間で格差化していることが示唆されるのである。

第二に、高校トラックと高校生の出身社会階層は関連を強めたといえる。所属トラックが普通科か専門学科かの分化についての変化は、父学歴の影響が母学歴へと変わったことに留まる。しかし、普通科内でどのランクの高校に所属するかを分析した結果、トップ校・セカンド校とサード校の間で、社会階層（親学歴）による二極化が見られた。さらにいえば、トップ校へ所属するための要因は、中学校での成績の効果が相対的に弱まり、父学歴（社会階層）の効果が強まったのである。

1990 年代後半から大規模な少子化が問題となる中、高校は 1 校あたりの生徒数を減少させることによって、高校数を維持してきた。しかし、そのような 1 校あたりの生徒数の減少は、どの高校でも均等に行われたわけではなく、地域でもっとも威信の高い高校の定員を相対的に多くしてきた⁽⁹⁾。このことから、上位の高校への進学機会は増し、本章では、高校トラックと社会階層の関係が平準化されることを仮説として分析を行ってきた。しかし、それにも関わらず、高校トラックと社会階層の関連は強まったばかりか、中学時成績の重要性も相対的に低下したのである。

教育社会学は、教育選抜がどの程度メリトクラティックであるかを争点としてきた。機能主義的な立場からすれば、高度な技能・スキルが求められる産業社会では、地位と能力との間に密接な関係が保たれることが要求されたため、人々の社会的地位は、社会的出自ではなく業績（メリット）により決定されることを求められるからである（例えば、Parsons 1951=1974）。

元来、トラッキングとは、ハイスクールでの生徒が選択する教科・科目が人種や社会階層によって偏りがあり、不平等を生成する（Making Inequality）メカニズムのことをいう（Rosembaum 1976、1980）。いくつかの点で異なるが⁽¹⁰⁾、日本も同様に高校が社会階層の再生産ないし維持する機能を有している。それゆえに、日本のメリトクラシー研究の多くは、高校を調査の主要なフィールドとしてきたし（例えば、岩木・耳塚編 1983、竹内 1995a、樋田ほか編著 2000 など）、高校入学までのプロセスが、どの程度メリトクラティックなのかを明らかにすることを試みてきた（潮木ほか 1978、中澤 2008、樋田ほか 2011a,b）。

しかし、以上の分析結果よりわかるのは、この 10 年余りの間、格差社会化が叫ばれた日本において、高校トラックはますます社会階層（親学歴）との関連を強め、社会階層間格差を助長するシステムへと変容しているのである。

本章では、高校トラックへの選抜・配分メカニズムを分析することにより、高校のインプット部分について、普通科トップ校・セカンド校とサード校の間に二極化が見られた。次の章では、高校生の希望進路を分析することによって、高校のアウトプット部分の変容を明らかにしていく。

〈注〉

- (1) 調査対象の県を特定されないため、県に関する数値は概数を提示する。
- (2) 高校収容力は、学校基本調査より、各年度の「高校在籍者数÷高校数」で算出した。
なお、以下で分析するデータと対応させるため、全日高校の 2 年生のみを対象とした。
- (3) データの掲載は、1990 年からの 5 年ごとだが、本研究で用いる調査データが 2009 年の高校 2 年生を対象としているため、調査対象者が入学する 2007 年を含む定員を記載した。
- (4) 人口変動の影響は厳密には学区単位で生じるが、データの制約上、本研究では県全体のデータのみを示すに留まっている。しかし、特定の学区にのみ顕著に人口の増減が見られるといったことはないため、県全体の数値を示すことに問題はないと考えられる。
- (5) 荻谷（2008a）が指摘するように、SSM 調査にとどまらず、回顧的に対象者の学業成績を回答してもらい得られた変数は、「認知的スキル・能力」を推察するための指標としての精度は非常に低い。成人した回答者が回顧的に振り返って答えることにより、義務教育修了までに獲得した個人のメリットの指標とも解釈できる反面、現在の成功体験から反省的に形成された自己イメージの指標ともなりうるのである。例えば、本研究の文脈に即していえば、「この高校に入れたのだから、自分の中学時の成績の程度がこのくらいだ」という具合に考えて回答する可能性もあるということである。

しかし、分析の結果から、荻谷（2008a）は「この変数が、実際の学業成績を正確に反映しているとはいえないものの、回答者は案外と自分の成績をある程度覚えていて、正直に回答しているとみてもよいのかもしれない」と結論づけている。

本研究では、荻谷（2008a）の分析結果を踏まえ、高校生の回答する中学3年時の成績は、高校生が中学時のある程度相対的に正確な学業的位置づけを把握できているものとして扱っていく。

- (6) 「学力」という用語は、「そこに特有の教育的な価値づけがなされる場合には、定義のしかたそれ自体に、教育的な価値判断が入り込む」（荻谷ほか 2004、p.3）ため、その定義は多様で、かつ議論的になりやすい。とりわけ、日本の教育界においては、その定義をめぐり、「確かな学力」（通常の知識・技能、学ぶ意欲、思考力・判断力・表現力などを含めたもの）（文部科学省 2002）や「見える学力」、「見えない学力」（岸本 1996）など、数値によって測定可能な「学力（academic achievement）」以外のものを含んで議論されることが多い。

以上のような議論を踏まえたうえで、本研究の目的が、選抜システムの現状を明らかにすることを通じて社会的資源の配分のメカニズムを探るということに鑑み、本研究では「学力」を、数値によって測定可能な academic achievement と定義する。それにより、「学力」が、学歴、職業、賃金などの獲得の源泉として位置づけることが可能となるからである。

- (7) 中澤（2003）は、荻谷（2001）を引いて、出身社会階層の継時的比較を行う際に、親学歴は時代の価値により可変的であると指摘する。この指摘は示唆的であり、本研究の分析でも注意しなければならないだろう。

しかし、時代によって変化するのは、階層構造（社会移動の出発点）だけではない。職業構造（社会移動の到達点）も変化するし、スループット要因としての高校の階層構造も変化する。例えば、現代の産業構造は第三次産業の割合が増加しているし、高校の階層構造も変化しているのである（樋田ほか編 2000、耳塚 2007a）。

分析に際して注意深くなることは重要だが、本研究では、これまでの教育社会学の方法に基づき、親学歴と親職を社会階層の指標とする。

- (8) 無回答・非該当は欠損値とした。
- (9) 具体的なデータを示すことはできないが、旧制中学から続く地域で最も威信の高い高校の定員を多くしているのは、全国的な傾向のようである。この理由は厳密には議論できないが、仮説的にいくつかの可能性を記述しておく。

まず、小川（2000、p.3）がいうように、地域のトップ校は、市内の中心地に立地していることが多い。そのため、県全体の人口の減少に比べて、立地している市の人口減少割合が小さいため、高校定員を維持することが可能である。

次に、ニードベースで考えると、最も威信の高い高校が、地域住民にとって最も人気のある（入学を希望する）学校となる。そのため、定員を多くしている。

いずれの理由にせよ、普通科高校は職業系の専門高校よりも設備等で費用がかかりにくく、また教員の加配が学級数ベースで行われるとはいえ、小規模校に比べリーズナブルである。つまり、トップ校が定員を比較的多く確保することは、財政的には非常に効率的だといえるのである。

- (10) アメリカのハイスクールと日本の高校の最も大きな違いは、形成過程の違いにあるといえる。アメリカのハイスクールは、初等教育からの延長として拡大していったのに対し、日本の高校は大学進学準備学校ないし実業学校としてスタートした（岩木 1996）。つまり、アメリカのハイスクールが初等教育と密接な関係にある一方で、日本の高校は、上級学校との接続（upward coupling）が強いということである（耳塚 1996）。

第3章：アスピレーションの形成メカニズム：高まる社会不安と御破算型選抜規範の変容に着目して

前章では、高校トラックとインプット（社会階層・親学歴）の関連の変化を分析した。この章では、アウトプットすなわち希望進路の変化に着目して分析を展開していく。

1990年代後半以降の高校生の進路の変化、とりわけ進学率の上昇と就職率の低下の要因については、すでに研究が多く、研究が蓄積されている。そこで本章では、アスピレーションのトラック間の二極化を①希望進路の変化に加え、②すでに「大衆化」と呼ばれるレベルにまで拡大した大学進学における分化に焦点を当てる。

周知の通り、日本の大学は偏差値によってランキングされており、その偏差値ランクに対応するように、高校では各高校トラックに応じたレベルのアスピレーションが形成されるとされてきた（竹内 1995a）。

前章では、インプットの側面で高校階層構造が二極化したことを明らかにしたが、本章では、アウトプットの側面における二極化を検証し、トラッキングシステムの機能変容を示す。

1. 問題設定

わが国の大学等進学率は、1990年から一貫して上昇してきた。学校基本調査の大学・短大進学率を5年ごとに見れば、1990年に約30%、1995年に約37%、2000年に約45%、2005年に約47%、2010年には約54%とこの20年間で急速に上昇してきた。単純にこのような大学進学率の変化をみれば、日本の高校生はますますアスピレーション⁽¹⁾を加熱されている状態にあることになる。このような社会的背景から、1990年代後半から2000年代にかけては、トラッキング研究の文脈で、どのような高校生が大学進学をするようになったかの研究が蓄積されてきた（耳塚 2000a、中村 2006、中村編著 2010 など）。

1990年代には、日本の高校における大学進学に向けた選抜の特徴は、アスピレーションの加熱と冷却が「トラック間」ではなく、「トラック内部」に作動する「層別競争移動」であるとされてきた。例えば、高校階層のトップ高校においても成績下位者には押し下げ効果が作動し、アスピレーションが冷却される。逆に、2番手、3番手の高校であろうとも成績上位者には押し上げ効果が生じ、アスピレーションが加熱される。学力の絶対水準で

はなく、所属集団での相対水準によって加熱・冷却が作動するのである（竹内 1995a、pp.100－110）。

ところが、2000年代になると、高校階層構造の二極化が指摘されてきた（樋田 2001、耳塚 2006、耳塚 2007a）。耳塚（2007a）は、かつてはピラミッド型であった日本の高校階層構造が、一部のトップ校とそれ以外の大部分の高校に分かれ、「お鏡餅型」へと変容し、学歴競争がトップ校に閉じ込められたという。

すでに述べた通り、日本の高校での大学進学に向けたアスピレーションの加熱・冷却メカニズムは、「トラック間」ではなく、「トラック内部」で生じるところに特徴を持つ（竹内 1995a）。耳塚（2007a）のいうように、一部のトップ校を除いた高校で脱受験化しているのであれば、アスピレーションの加熱と冷却が「トラック内部」ではなく、「トラック間」に作動しているのではないだろうか。本研究の主眼は、これを実証的に明らかにすることにある。

本章において、トラックの分化を検討するのに際し注目するのは、「御破算型選抜規範」である。竹内（1991a）は、アメリカのトーナメント型選抜規範と比較して、以下のよう

に説明する。

高校入試から大学入試、さらには就職への断続的な選抜はトーナメント型の移動規範である。トーナメント移動の理念型は、敗者には経歴の天井を、勝者には経歴の底を定義することである。しかし、日本では、セカンド校の生徒がトップ校の生徒よりも高い偏差値の大学へ進学するといった事例が多い。つまり、純粋なトーナメントからの逸脱が大きいのである。これが「御破算型選抜規範」である。

アメリカのハイスクールでは、所属トラックが進学に不利になるように調整される（Cicourel and Kitsuse 1963＝1985）のに対し、日本の高校では、大学進学

の選抜試験に対して、出身高校や高校内での教育達成が、制度面で重要視されない。それゆえ、アメリカでは、アスピレーションの加熱・冷却がトラック間で生じるのに対し、日本ではトラック内部で作動する。これが御破算型選抜規範の特徴である。

アスピレーションの加熱・冷却メカニズムがトラック間で二極化していることを実証的に分析することによって、本章はメリトクラシー規範のゆらぎを把握できるという意義を持つ。メリトクラシー規範のゆらぎは、①エリート選抜の正統性を脅かし、②選抜からもれた非エリート層の全体社会に対する loyalty を低下させ、③社会的統合と経済的生産性を低下させる危険を有する（耳塚ほか 2003）。以上で設定した分析課題を検証することに

よって、日本のメリトクラシーの現状と問題点を実証的に明らかにすることができるだろう。

2. 先行研究の検討と分析課題の設定

日本の高校における傾斜的な選抜システムを維持させてきた最も大きな要因は、「学歴社会」である。それは、高校階層構造が大学の偏差値ランクと対応するようにして、高校生に「分相応」のアスピレーションを持てるように加熱・冷却してきたのである。

学歴社会とは、地位達成に対する学歴の影響が相対的に大きい社会だと定義できるが、戦後日本の教育社会において学歴、とりわけ大学の学校歴は最もセンシティブな事柄だった。潮木（1983）によれば、学歴ないし学歴社会といったテーマは、当時の日本社会にとって「マスコミの花形テーマ」であり、教育学会内で「指導的な役割を演じている人々」のほとんど全てが何らかの学歴社会をテーマとする著書・論文を発表していたという。しかし、実態として未だに学歴社会かどうかは別としても、学歴へのセンシティブさは、近年では低まり、少なくとも、「マスコミの花形テーマ」ではなくなった。

そのひとつめの理由は、高度に情報化された知識経済の登場により、技術革新や経済のグローバル化による環境の変化が激しい社会の中で、学歴を「能力」の指標とすることに限界があることが指摘され始めた（荻谷 2006）。同時に、従来の受験競争において獲得される知識は、例えば「詰め込み型の知識」といわれるように評判が悪かったし、いわゆる「銘柄大学」出身者の持つ「能力」へ懐疑的な視点が向けられてきたことにも理由がある（例えば、海老原 2009）。

加えて、高い学歴を得るために費やす労力に対して、得られる社会的報酬が相対的に低まってきたことにある。竹内（1991b）は、これを豊かな時代にともなう「受験のポスト・モダン現象」と呼んだ。豊かな社会においては、「人を前向きに駆りたてるドラマチックな成功という人参も、後ろから駆りたてるドラマチックな失敗という鞭」もない。人々にとって学歴取得は「諦めきれない」ものではなく、そもそもその競争に「のらない」ものなのだという（竹内 1991b、pp.172－174）。その後、教育問題の中心課題は、学力低下（岡部ほか編 1999、市川（伸一） 2002 など）や学力格差問題（耳塚ほか 2002、荻谷・志水編著 2004 など）へとシフトし、学歴社会への関心は、「マスコミの花形テーマ」ではなくなっていった。

第二の理由は、バブル崩壊後から続く経済不況により、人々の関心が、学歴獲得よりも学校から職業への移行の問題に移ったことにある。とりわけ、いわゆるニート・フリーターへの関心が高まってきたように、1990年代後半以降は、若者の移行に関する危機を指摘する研究は多い（例えば、荻谷ほか 1997、矢島・耳塚編著 2001、小杉編著 2002 など）。

それでは、以上のような学歴社会から雇用不安へといった高校生の進路を取り巻く社会変動は、高校生のアスピレーションをどのように変化させたであろうか。Brubacher (1947)によれば、経済不況下では、それを教育により回避しようとするため、進学率が上昇するという。日本の社会的な文脈からいえば、移行が困難になることによって高校生の不安が高まり、学歴取得による「ドラマチックな成功」が見えにくくなっているにも関わらず、アスピレーションが加熱されるということがありえるのではないか⁽²⁾。より仮説的にいえば、高校生のアスピレーションを規定する要因が、学歴社会へのコミットから社会不安へとシフトしたことが考えられるということである。これをトラック間の二極化の視点から実証的に明らかにするところが、本章の第一の分析課題である。

本章の第二の分析課題は、上記の問いをさらに深め、大学進学希望者において、より高い学歴を望むのは誰かを明らかにすることである。すなわち、「誰が御破算型選抜へと参入するのか」を分析する。すでに述べた通り、御破算型選抜規範は、アスピレーションの加熱・冷却がトラック間ではなく、トラック内部で作動するところに特徴を持つ（竹内 1991a）。本章で、アスピレーションの加熱・冷却の規定要因の変化をトラックに注目して分析することで、御破算型選抜規範が崩れたのかどうかを検討するのである。

具体的な分析を操作レベルでいえば、回帰式にトラックと高校での成績の変数を同時に投入する。仮に、トラックを統制しても、高校成績が有意であれば、アスピレーションの加熱・冷却がトラック内部に作動していることになる。反対に、成績変数が有意ではなく、トラック変数が有意であれば、アスピレーションの加熱・冷却がトラック間に作動しているということになる。この変数の効果の違いを2つの調査時点で比較する。

以上の2つの分析からトラック間の二極化を明らかにすることにより、日本のトラッキングシステムの機能変容をとらえることが可能になる。

3. 分析の手続きと方法

分析に用いる変数は、まずは、すでに設定している4分類のトラックである。

アスピレーションの指標には、「就職」、「専各」、「短大」、「四年制大学」の4つの希望進路カテゴリーと希望教育年数として、就職=12、短大、専各=14、大学=16としてリコードした変数を用いる⁽³⁾。

学歴社会の肯定意識には、「今の日本では、学歴があれば自分の望む生き方を選ぶことができる」、社会不安意識の指標には、「社会に出てからうまくやっていけるかどうか心配だ」という質問項目をそれぞれ用いる（変数名は、「学歴社会肯定感」、「社会不安感」とする）。これらは4件法で尋ねた質問項目で、準備した選択肢は、4=該当、3=やや該当、2=やや非該当、1=非該当、である⁽⁴⁾。

第一の分析で用いる方法は希望教育年数を従属変数に設定した重回帰分析である。独立変数は次の通りである。「学歴社会肯定感」と「社会不安感」は回答結果をバックコードし、最小値=1～最大値=4として投入する。トラックの変数は、専門校を基準カテゴリーとして、トップ校ダミー、セカンド校ダミー、サード校ダミーを投入する。それらに加え、アスピレーションのトラック間の二極化要因を探るため、「学歴社会肯定感」、「社会不安感」と各トラックの変数の交互作用項を投入する。また、統制変数には、性別（男子ダミー）と、高校成績（最小値1～最大値9）、階層要因として、父大卒ダミー、父専管ダミー、母大卒ダミーを投入する。

第二の分析である御破算意識の変容の分析では、分析ケースを大学進学希望者に限定し、本章で、「とりあえず進学志向」、「高偏差値志向」と呼ぶ大学進学に際する2つの意識的な側面を検討する。これにもクロス分析を用いる。

「とりあえず進学志向」の指標には、「将来何をやりたいかわからないが、とりあえず進学しておきたい」、「できれば推薦で進学したい」、「あくせく勉強しないでも、どこかに入学できればよい」の3つの質問項目を用いる⁽⁵⁾。

「高偏差値志向」の指標に用いるのは、「そんなにレベルは高くないが、どうしても入りたい学部や学校がある」、「偏差値よりも学校の個性を見て選びたい」、「一流といわれる大学には、努力しても入れないと思う」、「本当の勝負は、高校入試ではなくて大学入試だと思う」、「学部にはとらわれずとにかく一流の大学に入っておきたい」の5つである⁽⁶⁾。

最後に、御破算意識を分析する。その指標には、「本当の勝負は、高校入試ではなくて大学入試だと思う」を用いる。ここでの分析には、クロス集計とカイ二乗検定に加え、残差分析を行う。通常のクロス集計は、セルごとのパーセントを比較するだけにとどまるが、残差分析を用いることにより、どのセルに統計的な偏りが大きいのかを明らかにできるの

である。なお、残差分析の結果の読み方であるが、算出される自由度調整済み標準化残差は、正規分布に従うため、統計量が 1.96 を超えれば 5%水準で有意、2.58 を超えれば 1%水準で有意、3.29 を超えれば 0.1%水準で有意であるという結果を意味する。

さらに、トラック変数と高校成績変数の効果を比較するため、御破算意識（該当＝1、非該当＝0）を従属変数とした二項ロジスティック回帰分析を行う。

トラックの変数は、サード校を基準カテゴリーとして、トップ校ダミー、セカンド校ダミー、専門校ダミーを投入する。高校成績の変数には、高校での成績の自己評価を最小値 1～最大値 9 として投入する。統制変数には、性別（男子ダミー）と、階層要因として、父大卒ダミー、父専管ダミー、母大卒ダミーを投入する。

なお、使用する変数の詳細については、以下の表 3-1 を参照されたい⁽⁷⁾。

表 3-1. 使用する変数の記述統計

		1997年	2009年
N		2125	2007
トラック	トップ校	17.6	18.7
	セカンド校	23.5	24.3
	サード校	29.4	29.9
	専門校	29.4	27.1
性別	男子	48.5	48.5
	女子	51.5	51.5
高校成績	平均値	4.6	4.5
	標準偏差	2.1	2.2
父学歴	高卒以下	55.5	44.4
	短大・専各・高専	8.9	11.4
	大卒・院卒	35.5	44.3
父職	専門・管理職	38.8	44.3
	販売・事務職	20.9	19.2
	農林・自営職	10.4	10.8
	労務職	29.9	25.8
母学歴	高卒以下	59.7	48.2
	短大・専各・高専	26.2	30.9
	大卒・院卒	14.1	20.9
希望進路	就職希望	15.4	12.7
	専各希望	16.6	14.1
	短大希望	8.0	5.1
	私立大学希望	12.1	10.3
	国立大学希望	47.9	57.7
希望教育年数	平均値	14.9	15.1
	標準偏差	1.5	1.4
学歴社会肯定感	平均値	2.6	2.6
	標準偏差	1.0	0.9
社会不安感	平均値	3.0	3.2
	標準偏差	0.8	0.8

4. 分析 1：アスピレーションの規定要因の変容

4.1. 希望進路の変化

ここでは、トラック別に希望進路の変化を確認する。結果は図 3-1 である。図中に数値が記載されているのは、大学進学希望者と就職希望者のパーセントである。

まず、大学希望率に注目して図をみると、トップ校とセカンド校では微増といえるかもしれないが、もともと 9 割を超えていたため、ほとんど変化ないといえよう。大学希望率に関していえば、最も顕著な変化があるのはサード校で、約 10 年間でおよそ 10 ポイントの増加である。専門校がそれに続き、約 6 ポイントの増加となっている。

それでは、国公立別、大学進学希望者の変化を確認しておこう。表 3-2 は、四年制大学への進学希望者のみを取り出し、希望しているのが国公立か私立かを示したものである。国公立大学希望について見ていくと、トップ校は 94.9%→96.8%とほぼ変化なし。しかし、セカンド校では 87.4%から 95.5%へと増加している。その一方で、サード校では 66.2%→68.6%と約 2 ポイントの上昇に留まっている⁽⁸⁾。本章の問題関心に即していえば、セカンド校とサード校におけるアウトプットの二極化は、国公立大学進学希望の側面で顕在化しているといえよう。

図 3-1. トラック別、希望進路の変化（図中の数値は就職希望者と四大希望者の割合）

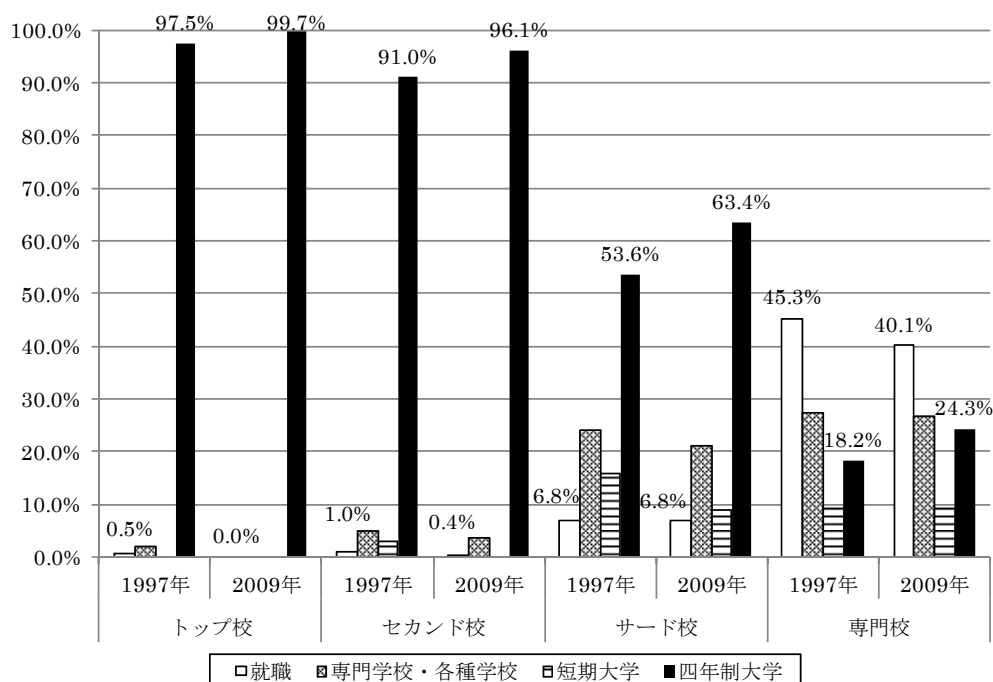


表 3-2. 国公立別の大学進学希望者の変化

	トップ校		セカンド校		サード校		専門校	
	1997年	2009年	1997年	2009年	1997年	2009年	1997年	2009年
I. 私立四年制大学	5.1	3.2	12.6	4.5	33.8	31.4	59.8	42.9
II. 国公立四年制大学	94.9	96.8	87.4	95.5	66.2	68.6	40.2	57.1
四年制大学 (I + II)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
N	355	373	436	465	325	366	107	126

4.2. 学歴肯定感と社会不安感の変化

ここでは、学歴肯定感と社会不安感の変化を確認していく。まずは、全体の数値の変化であるが、図 3-2 に見られるように、学歴肯定感については、1997 年が 53.2% で 2009 年が 52.2% であり、ほとんど変化はないといえる。社会不安感については、1997 年＝78.5% から 2009 年 84.8% へと微増している。

次に、トラック別に変化を分析した結果が表 3-3 である。学歴社会肯定感については、①トップ校とセカンド校での低下、②サード校で横ばい、③専門校では上昇という傾向が見られる。また、トラック別の社会不安感、すべてのトラックで上昇傾向である。

以上の結果から、全体的な社会不安の高まりに反して、学歴社会を肯定する意識が上位トラックでは低下し、下位トラックでは横ばいないし上昇していることがわかる。

図 3-2. 学歴肯定感と社会不安感の変化（数値は該当者の%）

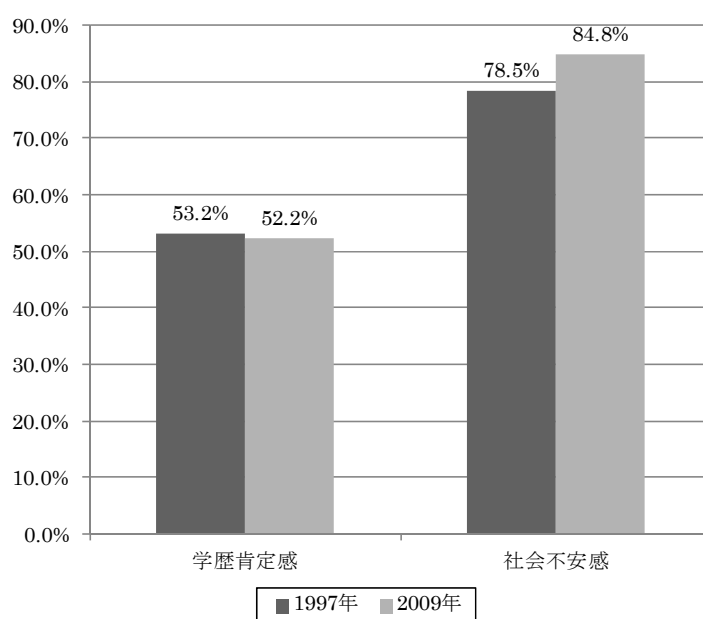


表 3-3. トラック別、学歴肯定感と社会不安の変化（数値は該当者の%）

	学歴肯定感		社会不安感	
	1997年	2009年	1997年	2009年
トップ校	49.1	45.3	77.8	83.7
セカンド校	54.3	50.3	76.7	83.6
サード校	56.3	56.2	79.6	85.7
専門校	51.8	54.3	79.1	85.8

※数値はColumn%

4.3. アスピレーションの規定要因の変化

ここでは、従属変数に希望教育年数を設定した重回帰分析によってアスピレーションの規定要因の変化を分析していく（表 3-4）。

1997 年の重回帰分析の結果、統計的に有意な変数は、男子ダミー、父大卒ダミー、父専管ダミー、母大卒ダミー、高校成績、トップ校ダミー、セカンド校ダミー、サード校ダミー、学歴社会肯定感の 9 つの変数で、全てが正で有意である。つまり、①女子よりも男子で、②社会階層が高く、③高校での成績が良く、④専門校との対比において、普通科に所属しており、⑤学歴社会にコミットした意識を持っているという要因によりアスピレーションが規定されているということである。

続いて、2009 年の重回帰分析の結果で統計的に有意な変数は、父大卒ダミー、高校成績、トップ校ダミー、セカンド校ダミー、サード校ダミー×社会不安感の 5 つの変数である。①社会階層が高く、②高校での成績が良く、③専門校との対比において、トップ校とセカンド校に所属しており、④サード校に所属しながら社会不安を感じている生徒が高いアスピレーションを持つということである。

2 時点での変化について記述していこう。まず、社会階層要因と高校での成績がアスピレーションを規定していることには、大きな変化はないといえる。しかし、所属トラックによる影響は、2 つの点で変化が見られる。1997 年ではサード校ダミーが有意だが、2009 年には有意ではない。つまり、アスピレーションの調整機能として所属するトラックの効果がセカンド校とサード校の間での二極化が見られるのである。

さらに、本章の目的に沿って学歴肯定感と社会不安感から分析結果を解釈すると、第一に、1997 年には、トラックに関係なく、学歴社会肯定感が高い生徒ほどアスピレーション

が加熱されることがわかる。第二に、その傾向は 2009 年にはなくなり、サード校に所属する生徒のみが社会不安からアスピレーションを加熱されている。

以上の分析結果から、①1997 年では学歴社会肯定感によって加熱されていたアスピレーションが、2009 年には加熱されなくなり、②その一方で、社会不安感によるアスピレーションの加熱がサード校でのみ見られたということである。アスピレーションの規定要因がトラック間で変容し、トラックの二極化が示唆される。

表 3-4. アスピレーションの規定要因（重回帰分析）

	1997年		2009年	
	B	ベータ	B	ベータ
男子ダミー	0.240	0.081 ***	0.046	0.017
父大卒ダミー	0.225	0.073 ***	0.220	0.080 ***
父専管ダミー	0.153	0.050 **	0.037	0.014
母大卒ダミー	0.201	0.048 *	- 0.057	- 0.017
高校成績	0.077	0.109 ***	0.091	0.141 ***
トップ校ダミー	2.154	0.577 ***	1.499	0.462 ***
セカンド校ダミー	2.259	0.652 ***	1.404	0.462 ***
サード校ダミー	1.803	0.553 ***	0.408	0.129
学歴社会肯定感	0.100	0.066 *	- 0.048	- 0.034
社会不安感	- 0.037	- 0.020	- 0.133	- 0.075
トップ校ダミー×学歴社会肯定感	- 0.034	- 0.025	0.041	0.033
トップ校ダミー×社会不安感	0.121	0.102	0.157	0.158
セカンド校ダミー×学歴社会肯定感	- 0.090	- 0.073	0.073	0.067
セカンド校ダミー×社会不安感	0.113	0.103	0.157	0.168
サード校ダミー×学歴社会肯定感	- 0.022	- 0.020	0.070	0.065
サード校ダミー×社会不安感	- 0.042	- 0.042	0.262	0.281 *
定数	12.625	***	13.830	***
F 値	96.794	***	68.934	***
調整済み R2 乗	0.498		0.449	
N	1546		1336	

注) 各トラックの基準カテゴリーは専門高校

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

5. 分析 2：御破算意識の変容

5.1. 大学進学に対する意識の変化

以下では、分析ケースを大学進学希望者に限定し、学歴に対する意識の継時的変化を 2 つの側面から分析する。結果は表 3-5 である（網掛けは、顕著に変化したセル）。

まず、「とりあえず進学志向」を検討する。「将来何をやりたいかわからないが、とりあえず進学しておきたい」は、全体的に少し数値が上昇しているが、トップ校とサード校で

の変化が顕著で、トップ校で約 16 ポイント、サード校で約 18 ポイントも増加している。

「できれば推薦で進学したい」は、セカンド校とサード校での減少は特に顕著だが、注目すべきは両トラック間での数値の差である。セカンド校とサード校の数値の差は、1997 年では約 16 ポイントだが、2009 年では 30 ポイント近くもの差に広がっている。「あくせく勉強しないでも、どこかに入学できればよい」は、全体的に微減しているが、10 ポイント以上変化したトラックはない。

次に、「高偏差値志向」を検討する。「そんなにレベルは高くないが、どうしても入りたい学部や学校がある」は、トップ校ではほぼ横ばいであるが、その他のトラックではやや上昇している。顕著に数値が上昇したのはサード校である。「偏差値よりも学校の個性を見て選びたい」は、全体的に減少傾向だが、専門校のみ数値が高い。「一流といわれる大学には、努力しても入れないと思う」は、セカンド校の数値が低下した一方で、サード校と専門校では横ばいである。「本当の勝負は、高校入試ではなくて大学入試だと思う」は、トップ校とセカンド校の数値が上昇で、サード校と専門校では横ばいである。「学部にはとらわれずとにかく一流の大学に入っておきたい」はほぼ横ばいである。

これらの分析結果から、「とりあえず進学志向」はサード校で高まり、「高偏差値志向」はトップ校とセカンド校で高まったことが示唆される。大学進学希望者の意識の側面で、セカンド校とサード校の二極化が見られたといえる。

表 3-5. 大学進学に対する意識の変化（数値は該当者の％）

	トップ校	セカンド校	サード校	専門校	χ^2 二乗検定
とりあえず 進学志向	将来何をやりたいかわからないが、とりあえず進学しておきたい				***
	1997年	35.5	45.0	34.5	
	2009年	51.3	50.5	52.5	
	できれば推薦で進学したい				***
	1997年	15.5	38.8	54.8	
	2009年	8.9	17.2	45.6	
	あくせく勉強しないでも、どこかに入学できればよい				**
	1997年	5.4	8.3	9.5	
	2009年	4.8	4.7	8.2	
高偏差値志向	そんなにレベルは高くないが、どうしても入りたい学部や学校がある				
	1997年	23.7	28.9	27.4	
	2009年	31.6	32.5	38.0	
	偏差値よりも学校の個性を見て選びたい				**
	1997年	25.9	28.4	23.4	
	2009年	22.4	20.0	18.9	
	一流といわれる大学には、努力しても入れないと思う				***
	1997年	19.7	36.2	38.8	
	2009年	17.2	30.8	38.0	
	本当の勝負は、高校入試ではなくて大学入試だと思う				***
	1997年	56.1	50.0	42.8	
	2009年	68.6	63.9	43.2	
	学部にはとらわれずとにかく一流の大学に入っておきたい				**
	1997年	6.8	4.8	4.6	
	2009年	9.8	3.9	1.9	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

5.2. 御破算型選抜規範の分析

ここでは、御破算意識の分析を行う。その指標には、先の分析にも用いた「本当の勝負は、高校入試ではなくて大学入試だと思う」という質問項目を用いる。分析には、クロス集計とカイ二乗検定に加え、残差分析を行う。その分析結果が表 3-6 である。

まず、パーセントの値を調査年度間で比較すると、トップ校が 56.1%から 68.6%へ、セカンド校が 50.0%から 63.9%へと大きく上昇している。一方で、サード校と専門校の値は、42.8%から 43.2%へ、18.7%から 23.8%へとそれぞれ上昇はしているが、トップ校・セカンド校に比べると数値の上昇が小さい。

次に、各セルの自由度調整済み残差の有意水準を年度間で比較する。1997 年では、トップ校が正で有意 ($p<.001$)、専門校が負で有意 ($p<.001$) となっている。しかし、2009 年では、トップ校・セカンド校が正で有意、サード校・専門校が負で有意となっている（すべて、 $p<.001$ ）。注目すべきは、セカンド校が正で有意になったことと、サード校が負で

有意になったことである。このことは、セカンド校とサード校の間で、御破算意識の二極化が大きくなったことを意味する。

それでは、トラックと高校成績は御破算意識にどのように効果を与えるのだろうか。これを検討するため、御破算意識（該当＝1、非該当＝0）を従属変数とした二項ロジスティック回帰分析を行った（表 3－7）。

二項ロジスティック回帰分析の結果では、1997 年データでは高校成績が正で、専門校ダミーが負で有意である。このことは、御破算意識を持つのは、①高校成績が高いこと、②サード校との対比においてトップ校に所属しており、専門校に所属していないことの 2 つの要因であることがわかる。

一方で 2009 年データでの結果では、高校成績が有意でなくなり、セカンド校ダミーが 0.1%水準で統計的に有意になっている。サード校との対比において、御破算意識を持つのは、①トップ校とセカンド校に所属していること、②専門校に所属していないことの 2 つへと変化したことを指し示している。

加えて、この分析結果で注目すべきは高校成績の変数である。1997 年では高校成績が効果を持つが、2009 年には効果がなくなっている。つまり、高校生の御破算意識は、トラック内での業績ではなく、トラックそのものに規定されるようになったということである。

表 3－6. トラック別、御破算意識（上段＝該当者の％、下段＝自由度調整済み残差）

	1997年				χ^2 二乗検定
	トップ校	セカンド校	サード校	専門校	
本当の勝負は、高校入試	56.1	50.0	42.8	18.7	***
ではなくて大学入試だと思う	4.01 ***	1.51	- 1.82	- 6.16 ***	
	2009年				χ^2 二乗検定
	トップ校	セカンド校	サード校	専門校	
本当の勝負は、高校入試	68.6	63.9	43.2	23.8	***
ではなくて大学入試だと思う	5.60 ***	4.71 ***	- 5.48 ***	- 7.46 ***	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表 3-7. 御破算意識の規定要因の変化（二項ロジスティック回帰分析）

	1997年		2009年	
	B	Exp (B)	B	Exp (B)
男子ダミー	- 0.049	0.953	- 0.210	0.811
高校成績	0.075 *	1.077	0.031	1.031
父親・大卒ダミー	- 0.228	0.796	0.053	1.054
父親・専門管理職ダミー	0.176	1.192	- 0.023	0.977
トップ校ダミー※	0.610 ***	1.840	0.865 ***	2.376
セカンド校ダミー※	0.309	1.362	0.739 ***	2.093
専門校ダミー※	- 1.225 ***	0.294	- 1.363 ***	0.256
定数	- 0.597 **	0.550	- 0.193	0.824
- 2 対数尤度	1303.52		1190.537	
χ^2 (d.f.)	47.133(7) ***		93.894(7) ***	
Cox & Snell R ² 乗	0.047		0.095	
Nagelkerke R ² 乗	0.063		0.128	
N	975		938	

※基準カテゴリー：サード校

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

6. 結論

本章では、高校生のアウトプット（アスピレーション）のトラック間の二極化を、希望教育年数と大学進学希望者の御破算意識という 2 つの軸から分析してきた。得られた知見は以下のようなものである。

第一に、希望教育年数の分析結果は、以下の 2 点である。

まず、トラック別の希望進路の変化である。セカンド校では国公立大学希望者の割合が上昇している一方で、サード校ではセカンド校ほどではない。さらにいえば、サード校は私立大学志望と専門・各種学校への進学希望者の割合が約 10 年間でほぼ横ばいとなっており、セカンド校とサード校の間で二極化が見られた。

次に、アスピレーションを学歴社会肯定感と社会不安感と名付けた意識に着目して分析した。その結果、1997 年には学歴社会肯定感、トラックに無関係にアスピレーションを規定する要因であった。しかし 2009 年になると、アスピレーションを加熱する要因が、学歴社会肯定感ではなく、下位トラックの生徒の社会不安感へとシフトした。知識経済の到来や「受験のポスト・モダン」（竹内 1991b）によって、学歴競争は「ドラマチックな成功」や「ドラマチックな失敗」という側面は強調されなくなったかもしれない。しかし、

その一方で、学校から職業への移行などの高まる社会不安が、トラックの下位においてアスピレーションを高めているのである。

第二に、御破算意識の分析結果は以下の2点である。

まず、大学進学希望者の進学意識の変化である。本章で、「とりあえず進学志向」、「高偏差値志向」と名付けた2つの進学意識の各トラックでの変化を分析した。その結果、トップ校・セカンド校では、「とりあえず進学志向」が低下し、「高偏差値志向」が高まったが、一方で、サード校では「とりあえず進学志向」が高まり、「高偏差値志向」の数値は約10年前からほぼ横ばいであることが明らかになった。ここでも、セカンド校とサード校の二極化が見られた。

そして、御破算意識がセカンド校とサード校で二極化したことである。トーナメントの初戦である高校入試の結果、セカンド校へと入学した生徒は、約10年前よりも大学入試というリターンマッチ（＝御破算）に向けたアスピレーションが高まったことが示唆される。一方、セカンド校との相対的な意味ではあるが、サード校の生徒は、約10年前よりもリターンマッチへの意欲を持ちにくくなっているといえよう。

以上の分析結果はアスピレーションを規定する要因として、トラックそのものの効果が強まったことを意味する。かつては、トラックを統制しても高校での成績が高ければ、リターンマッチへの意欲が高まったのであるが、現在では高校での成績は有意な効果をもっていなかった。つまり、御破算型選抜規範に対する意識はセカンドランクの高校に押し込められ、高校間の隔たりがセカンド校とサード校の間で顕著になったのである。

日本の高校における大学進学に向けた選抜は「層別競争移動」であった（竹内 1995a、pp.100-110）。その特徴は、アスピレーションの加熱と冷却は、「トラック間」に作動するのではなく、「トラック内部」に生じるところにある。しかし、本研究の分析ではそうではなかった。確かに、1997年データの分析では、トラックを統制しても高校での成績が御破算意識に有意な効果があり、層別に競争することでアスピレーションの加熱・冷却メカニズムが成立していた。一方で、2009年データでは、トラックの効果が強まり、高校成績の効果が有意ではなくなった。現代の高校では、大学進学に向けたアスピレーションの加熱と冷却が、「トラック内部」ではなく、「トラック間」に生じているのである。

戦後、日本の高校教育は、単線型教育体系のもと、生徒の学力や進路の多様性に対応する仕組みとして、いわゆる「輪切り選抜」（学校ランク）によって、高校の階層構造を形成してきた（例えば、岩木・耳塚編 1983）。このような「能力主義的トラッキング」によっ

て、日本の高校はそれぞれの高校生に対し「分相応」のアスピレーションを焚きつけてきた（竹内 1995a）。しかし、本章の分析では、セカンド校とサード校の間でアスピレーションの加熱・冷却の二極化が10年間で深化したことがみられた。すなわち、トラック間でメリトクラシー規範がゆらいでいるのである。

本章では、高校階層構造上でのセカンド校とサード校がアスピレーションの側面で二極化が進んだことを明らかにした。次章では、この知見を踏まえ、上位トラックにおける学習へのコミットメントの動機付けの要因を探っていく。

〈注〉

- (1) アスピレーションとは、社会的資源の獲得に向けた意欲のことを意味する（竹内 1995a）。高校生の大学進学意欲に対しては、「進学アスピレーション」や「教育アスピレーション」と示されることが多いが、本章では以下の表記を「アスピレーション」で統一させることにする。
- (2) 近年では、高学歴社会において経済的に大学進学できない層への関心もより高まってきている（例えば、矢野・濱中 2006、小林 2008 など）。
- (3) もともとの選択肢には、「家事手伝い」があったが、きわめて少数のため欠損値とした。また、2009年調査には「フリーター」、「その他」の選択肢が加えられたが、1997年調査ではなかったため、分析から除外した。そのため、1997年調査と2009年調査での希望進路項目はややずれが生じていることには注意を払う必要がある。ただし、「フリーター」と「その他」合わせてもサンプル全体の2%程度であるため、分析結果に大きな影響はないと考えられる。
- (4) これらの質問項目が学歴社会のコミットメントや社会不安そのものを表しているわけではないかもしれない。しかし、それらの社会的意識の一側面を表しているだろう。
なお、準備した回答のワーディングは、「今の日本では、学歴があれば自分の望む生き方を選ぶことができる」では、1＝とてもそう思う、2＝どちらかといえばそう思う、3＝どちらかといえばそう思わない、4＝全然そう思わない、「社会に出てからうまくやっていけるかどうか心配だ」では、1＝非常に感じる、2＝やや感じる、3＝あまり感じない、4＝全く感じない、である。

- (5) 「できれば推薦で進学したい」という質問項目が「とりあえず進学志向」の指標となるとはいいい切れない。しかし、一部には確かにそのような側面があるため（例えば、中村 2006 など）、本研究では「とりあえず進学志向」の一側面として用いる。
- (6) ただし、「そんなにレベルは高くないが、どうしても入りたい学部や学校がある」、「偏差値よりも学校の個性を見て選びたい」、「一流といわれる大学には、努力しても入れないと思う」の3つは、「高偏差値志向」の反転項目として用いる。
- (7) 無回答・非該当は欠損値とした。
- (8) なお、専門校においては、国公立大学を希望する割合が 40.2%から 57.1%へと大きく上昇しているが、ここでは積極的に解釈を加えない。専門校の変化の詳細な分析は、第 5 章以降で行う。

第4章：高校教育改革のエリートセクターへのインパクト：少子化と「自ら学び自ら考える力」に着目して

ここまで、トラッキングの構造と機能の二極化を、インプット（第2章）、アウトプット（第3章）の側面から探ってきた。そこで浮かび上がる次の研究課題は、「なぜ上位トラックの生徒は、高いアスピレーションを維持し続けているのか」である。2000年代には、下位トラックを対象とした研究が数多く蓄積してきた（例えば、乾編著 2006、酒井編著 2007、中村編著 2010 など）。しかしその一方で、上位トラックは変化していないものとして扱われ、そこに着目した研究は少数に留まり（荻谷 2001、有海 2011）、教育システムの変化からの説明はなされてこなかった。そこで本章では、上位トラックの存立メカニズムの変化を扱うのである。

1990年代後半以降、高校生に限らず、日本の学生の学習意欲低下が指摘されてきた。それは、豊かな時代にともなう「受験のポスト・モダン現象」（竹内 1991b）、少子化による大学受験圧力の低下（耳塚 1995）、即時充足的な価値（藤田 1997）や自己実現志向（片瀬 2005）といった多様化した価値観の登場など、若者が学習へ向かうための外的な誘引が価値を低めているためである。そのような状況で、上位トラックでの学習はなぜ維持されているのだろうか。本章では、上位トラックを存立させるために、トラッキングシステムの機能がどのように変容してきたのかを明らかにしていく。

1. 問題設定

本章では、1970年代から継続的に行われている生徒文化調査のデータから、①トラッキングシステムの新たな局面を示唆するとともに、②1990年代の教育改革の結果を示すことを目的としている。

1990年代から続く少子化・経済不況、さらには教育改革を背景として、高校生を取り巻く環境は大きく変容した。例えば、高校生の進路選択の面では、少子化は大学入学選抜試験を易化させ、ほぼ同時期に起こった経済不況は、高卒就職を困難にし、高校卒業者の進学率（大学・短大や専門学校を含む）を押し上げた。日本の高校生の勤勉さは、大学受験という隠れたエンジンによって支えられていた（例えば、Rohlen 1983=1988）。そのため、

中等後教育への進学が容易となった 1990 年代には、高校生の学習離れが起こった（荻谷 2002）。

また、1990 年代は教育改革の時代であった。当時の教育改革の潮流は、児童・生徒の「個性」や「自ら学び自ら考える力」を強調した。1999 年に発行された『高等学校学習指導要領』の総則（p.1）には、以下のようにある。

「学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、生徒に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かし特色ある教育活動を展開する中で、自ら学び自ら考える力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。」（下線部、引用者）

このような教育改革により、教師は児童・生徒の「統制」から撤退し、結果として、児童・生徒の学習離れを引き起こした（例えば、荻谷 2002、荒川 2009）。

以上のような社会変動を経験した高校は、階層構造が二極化し、①銘柄大学への進学者を輩出するのは一部のエリートトラックに限られ、ノンエリートトラックの高校生は「脱受験化」し、②勤勉性などの文化もまたエリートトラックの生徒にのみ限られるという特徴を持つという指摘がされた（耳塚 2007a）。

そのため、2000 年代の高校教育研究の多くは、多様化が指摘された下位校（専門高校を含む）に焦点を当ててきた（例えば、乾編著 2006、酒井編著 2007、中村編著 2010 など）。しかしその一方で、高校教育研究は、トップ校を対象とした研究の蓄積が少なかったが、それには、以下の理由が考えられる。

第一の理由は、1990 年代の経済不況下において高校教育をフィールドとする教育社会学の関心の主題が高卒無業者研究であったためである（例えば、荻谷ほか 1997、矢島・耳塚編著 2001、小杉編著 2002 など）。そのため、卒業生のほとんどが大学進学するトップ校の生徒のトランジションは問題視されることがなかった。

第二の理由は、トップ校の課題を描き出すのに十分なデータを欠いてきたことにあったといえる。長期間に亘り、同一の学区を対象とし、高校階層構造の変容を分析するのに耐えうるだけのデータの収集は極めて少ない⁽¹⁾。それゆえ、トップ校の変化を実証的にとらえることが不可能だった。本章で用いるデータは、30 年間に渡り、同一の高校を 3 時点で

継続的に調査したデータであり、高校生の変化をとらえるのに適したデータである。これにより、トップ校の変化を実証的にとらえることができる。

それでは、この 30 年間の高校の変化を実証的にとらえることが可能なデータを入手したうえで、トップ校において検討すべき課題とは何であろうか。

第一の課題は、少子化社会の到来によるトップ校の変化を実証的に分析することである。数値の詳細は後で示すが、日本の 18 歳人口は 40 年前のおよそ 6 割程度に減少している。戦後の二度に渡るベビーブームを背景として拡大してきたわが国の高校教育であるが（中西ほか 1997、耳塚 1995）、2000 年代に入り、特に顕著になった若年人口の減少という社会変動が、高校の入学者層の変化と無関係であるはずがない。

トップ校での第二の課題は、少子化と教育改革の影響を受けての学習コミットメントの変化である。耳塚（1995）は、当時、日本の高校階層構造は、高校教育改革と少子化と大学入試の影響をあわせて考えると、高校教育システムの中核に位置するエリート普通科高校と、その他の高校に分極化していくと予測した。しかし、少子化と大学入試選抜の多様化がもたらすインパクトは、おそらく当時の耳塚の予測をはるかに上回る。人数の面での「大学全入」とどまらず、有名大学も例外ではなく大学受験は易化しており（小林 2007）、トップ校であっても生徒の学習離れが無関係ではなくなったのではないだろうか。それゆえ、このような社会的趨勢を踏まえた、トップ校へのインパクト、すなわち学習コミットメントの変化を実証的に分析する必要がある。

これらの問題群を解き明かす鍵として、本研究では、教師の指導に注目する。2000 年代の教師と生徒のかかわりに関する研究は、これまでの下位ランクの高校生の進路形成や学業コミットメントとの関連から蓄積されてきた（風間 2007、千葉・太多和 2007、乾編著 2006）。これらの研究は、学習から離脱した下位ランク高校の生徒の学習や進路決定を支援するために、教師が個別的に対応する状況を描き出したものである。もし、本章のデータ分析の結果、トップ校の生徒が多様化していたとしよう。ならば、トップ校においても、下位校と同様に教師が個別的に生徒を指導する必要が生じているかもしれない。

以上より、本章ではトップ校入学者の学力水準と学習コミットメントの変化、それに対応する教師に焦点を当てて、高校階層構造の変容を明らかにし、1990 年代の教育改革の結果を示すことを目的とする。

2. 先行研究

2.1. 少子化社会の中のトップ校

日本の高校は、かつては有名大学への進学者を多く輩出する高校を頂点とする「ピラミッド型」の階層構造をなしているとされてきた。そこでは、高校生の学力や進路、高校生活の多様化に対応する仕組みは、いわゆる「輪切り選抜」および普通科と複数のタイプの専門学科による多様で階層的な構造として形成されてきた（例えば、岩木・耳塚編 1983）。

このような階層構造の上位に位置する高校は、黄（1998、p.4）のエリート高校の定義を援用すれば、高校入学選抜難易度、当該地域での威信、卒業生の進路実績の3点において決定されているといえる。また、先行研究では、トップ校に所属する生徒は、向学校的で、学習へのコミットが高く（例えば、武内 1972、耳塚 1980）、1990年代に高校生文化が多様化したとはいえ、トップ校の生徒文化は維持しているとされてきた（耳塚 2007a）。

しかし、少子化社会の到来は、トップ校にも変化をもたらす。以下では、学校基本調査から、本章の調査対象県である中部β県を中心に、トップ校の変化を検討する。

高校在籍者数は、高校進学が普遍化した1975年を基点（100%）とすると、団塊ジュニア世代が高校へ入学した1990年には、約130%へと増加する⁽²⁾。しかし、2000年には両県ともに約85%、2009年には両県ともに約65%で、高校在籍者数は、30年あまりの間で大きく減少している。

本来、少子化社会の中で高校入試が従来通りの「輪切り選抜」によって高校階層構造の機能を維持するためには、子どもの減少と同じ規模で高校数が減少していなければならない。しかし、すでに述べたように、高校の数（公立、全日制のみ）は、75年＝約30校、90年＝約40校、00年＝約40校、09年＝約40校となっており、少子化にもかかわらず、高校数はほぼ横ばいである。また、1校あたりの生徒数は、75年＝約400人、90年＝約360人、00年＝約240人、09年＝約170人となっており、1校あたりの生徒数は30年間で大きく減少していることがわかる。

以上の数値から読み取れるのは、高校は少子化社会の中で、1校あたりの生徒数を減らすことで、学校数を維持させてきたということである。しかし、1校あたりの生徒数の減少は、どの高校でも平等に行われているわけではない。第3章で述べたことの繰り返しになるが、少子化の中で、高校は相対的に上位校の定員を多めに確保し、普通科高校を中

心にセカンドランク以下の高校の生徒数を減少させることによって、学校数を維持してきたのである⁽³⁾。

それでは、このような不均等な生徒数の変化は、トップ校入学者の学力水準にどのような変化をもたらしたのであるだろうか。本章では、個票データを用いて、少子化にともなう、トップ校の生徒の変容を実証的に明らかにする⁽⁴⁾。

2.2 高校教育改革の中のトップ校

1990年代の教育改革は、いわゆる「新学力観」をめぐる行われた。人々の能力を「詰め込んだ知識量」で評価する学歴偏重の社会からの脱却を図ったのである。情報化、国際化といった社会情勢が知識経済を生み（例えば、Reich 1991=1991、Thurow 2003=2004など）、「ナレッジワーカー（knowledge worker）」が必要とされたことがその大きな背景といえる（荻谷 2006）。

また、本田（2005b）は、現代の日本では、「創造性」や「個性」、「能動性」といったものが、「ポスト近代型」の能力として求められているというが、「新学力観」をめぐる教育改革は、変動の激しい知識経済を基盤とする社会において求められる能力の育成を目指して行われたといえよう。

しかし一方で、教育改革はエリート教育の側面を含むとの指摘もあった。例えば、斎藤（2001=2006、p.248）は、かつて教育課程審議会会長であった三浦朱門の発言を次のように紹介している。「（日本の）平均学力が高いのは、遅れている国が近代国家に追いつけ追い越せと国民の尻を叩いた結果ですよ。国際比較をすれば、アメリカやヨーロッパの点数は低いけれど、すごいリーダーも出てくる。日本もそういう先進国型になっていかなければなりません」（カッコ内、引用者加筆）。つまり、斎藤（2001=2006）によれば、一連の教育改革が知識経済社会における「リーダー」の育成を目的としており、そのような人材育成は、主に学力のエリート層を対象としていたというのである。

すでに述べたように、教育改革のインパクトは、中位・下位の高校に対して作用し、しかもネガティブな効果を持った（荻谷 2002、荒川 2009）。それでは、エリートセクターであるトップ校へのインパクトはどうか。「ポスト近代型能力」（本田 2005b）である「意欲」や「能動性」、さらにいえば、「自ら学び自ら考える力」を培うことができたのであろうか。そこで、本章では、トップ校の生徒の学習コミットメントの変容を質的にとらえる。

具体的には、高校生への質問紙調査データから学習行動の量的な変化を分析すると同時に、教師への聴き取り調査から高校生の学習の質的な変容を明らかにするのである。

3. データの概要

本章で用いるデータは、①質問紙調査から得られたデータに加え、②各高校の校長または教頭・副校長（管理職）、教務主任、進路指導主任、生徒指導主任を対象とした聴き取り調査のデータを用いる。管理職には、学校経営方針および学校全体の概況に関する聴き取り調査を行い、各主任教諭には、それぞれの校務分掌領域における教育の実態および方針に関する聴き取り調査を、半構造化面接法で行った。調査は、1979年11・12月、1997年10・11月、2009年12月に実施しているが、ここでは2009年のインタビューデータのみを用いる。

本調査は、1979年、1997年、2009年と30年間に渡る3時点で継続的に調査している。つまり、1990年代をまたいだ3時点で調査を実施しているため、「教育改革の時代」であった1990年代の帰結を示すことが可能であるという点で大きなメリットを持つ。

4. 方法と手続き

4.1. 方法

前述のように、本研究では、①少子化社会の下で、トップ校への入学者層が多様化しているのかどうか、②仮に多様化しているのであれば、学習コミットメントの変化はどうか、またそれに教師はどのように対応しているのか、これら2つを分析することを目的としている。

第一の分析では、まず、トップ校への入学者層の変化の分析をするため、トップ校に在籍する生徒の中学時成績の平均値と標準偏差を時系列的に比較する。中学時成績には、高校生への質問紙調査において、中学時の成績を回顧的に尋ねたものを用いる。次に、以上で設定した中学時成績の数値の変化の要因を探るため、高校での成績の分散の変化と教師の聴き取り調査データを用いる。

第二の分析では、トップ校の入学者層の変化にともなう学習へのコミットメントの変化を分析する。学習へのコミットメントの指標には、自宅での学習時間を用いる。学習時間

が受験圧力の指標になりうることは、すでに荻谷（2000）の述べるところである⁽⁵⁾。少子化や教育改革の影響により、トップ校の生徒の学習時間はどのように変容しているのだろうか。また、この学習時間の変化には、教師がどのようにかかわっているのか。これらの問いに対し、生徒への質問紙調査データと教師への聴き取り調査データを用いて分析を行う。

4.2. 分析の手続き

本章の分析では、1979 年当初から実施されている 6 校に対象を限定する。全体としてのサンプルサイズの減少はまぬがれない。しかし、このデータを用いることで、トップ校の変化をより長期的なスパンで分析することが可能となるのである。

分析は、1979 年・1997 年・2009 年の 3 つの時点別に行う。調査対象高校数は 6 校である。これらをトップ校（2 校）、セカンド校（2 校）、専門校（2 校）として高校トラックを作成した。これら 3 つのトラックの間で、①中学時の成績（自己評価）、②高校（現在）での成績（自己評価）、③学習へのコミットメントの 3 つの変化を分析する。

中学成績には、「あなたの中学卒業時の成績は中学校の中でどのくらいですか」という質問項目に対し、「下位（1）」から「上位（9）」で回答した自己評価の結果を用いる。

高校での成績には、「学校で今の成績はどのくらいですか」という質問項目に対し、「下位（1）」から「上位（9）」で回答した自己評価の結果を用いる⁽⁶⁾。

学習へのコミットメントの指標である学習時間は、自宅で勉強する時間を尋ね、カテゴリーの中央値を分単位で数量化した⁽⁷⁾。

教師の指導の指標には、「生徒がわかるまで、ていねいに教える先生」がどのくらいいるかの割合を尋ね、「たくさんいる＝3」、「少しいる＝2」、「ほとんどいない＝1」の 3 件法で回答してもらった結果を、連続変数として使用する⁽⁸⁾。

5. 分析 1：トップ校入学者層の変化

ここでは、中学時成績の変化を記述し、その変化のメカニズムを教師への聴き取り調査から明らかにする。

表 4-1 は、中学時成績の平均値と標準偏差を算出した結果である。数値の変化をトップ校に注目して見ると、79 年＝8.21（S.D.＝1.28）、97 年＝8.52（S.D.＝0.75）、09 年＝

7.72 (S.D.=1.74) となっている。つまり、平均値が低下して、標準偏差が上昇していることがわかる。用いている変数は、トップ校在籍者の相対的な入学以前の学力の指標ではあるが、継時的にみると、トップ校への入学者の学力が低下し、多様な学力層が入学してきていることがわかる。

表 4-1. 中学時成績の変化

	1979年		1997年		2009年	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
トップ校	8.21	1.28	8.52	0.75	7.72	1.74
セカンド校	7.06	1.36	7.03	1.36	6.81	1.53
専門校	5.17	1.19	4.83	1.52	4.46	1.57
全体	6.81	1.79	6.79	1.97	6.33	2.12

それでは、なぜトップ校の生徒は中学時成績が低下し、標準偏差が上昇した（入学層の学力が分散した）のであろうか。それは、以下の教師のインタビュー結果が答えている⁽⁹⁾。

昨今、β県も結構、生徒数の減少ということで、その割には、本校や他のトップ校は定員が減っていない。そういうことから考えれば、おのずと上下間の格差が開くということで、かなり上下の差が、以前にも増して広がりつつあります。そのために、どの学校もそうなんです、下位層についての手当て、いわゆる常識的なことが身に着いていない生徒が結構いるわけなので、そういう面で、指導は、もっと懇切、小まめに、丁寧にやるべきだなということをやっているということですね。（トップ校 1、進路指導主任）

非常に今までどおり優秀な子どもたちがもちろんいるんです。で、入ってうまくこの学校に合って伸びていく生徒もいるんですけど、逆に、非常に苦しいというか、そこら辺の差が激しいですね。差が激しくなってきた、どこに焦点を合わせて指導していくのかっていう、そういった問題は、今やっぱりちょっと強く出てきているかなと思いますね。（トップ校 2、進路指導主任）

それでは、高校内での成績の変化を見ていこう。表 4-2 は、高校生の現在の成績の自己評価を上位（9～7）、中位（6～4）、下位（3～1）に分類し、調査年度ごとに集計したも

のである。これを見ると、成績上位層の割合が、45.3%→39.2%→30.1%と減少しているのに対し、成績下位層の割合は、5.7%→11.4%→22.1%と大幅に増加している傾向にある。つまり、入学定員を拡大し、入学者の中学校時の学力の分散が大きくなったため、高校での学習についていけない生徒が増加しているのである。

表 4-2. 高校での成績の変化（トップ校のみ）

	1979年	1999年	2009年
上位	45.3	39.2	30.1
高校成績 中位	49.0	49.4	47.8
下位	5.7	11.4	22.1
合計	100.0	100.0	100.0
N	245	245	249

少子化にも関わらず、高校数を維持できたのは、1校あたりの生徒数を減らしてきたからである。しかし、トップ校の定員を減少させなかったために、入学してくる生徒の学力の分散が大きくなってきた。このような変化を教師も感じているようである。

さらにいえば、調査対象とした2校のトップ校で、教師は現在の入学してくる生徒の学力分散が大きくなっていることを指摘していることに加え、実際の数値としても、そのような傾向が見られた。以上より、少子化の影響と不均等な高校定員の減少により、トップ校へ入学する層が多様化したことを実証的に明らかにできたといえよう⁽¹⁰⁾。

6. 分析2：学習へのコミットメントの変化

先の分析で、トップ校入学者層の多様化が明らかになった。それでは、学習へのコミットメントはどのように変化しているのだろうか。

表 4-3 は、学習時間の平均値と標準偏差の変化である。トップ校に注目して、この表の結果を見ると、79年＝164.9分（S.D.＝69.7）、97年＝123.5分（S.D.＝63.3）、09年＝130.9分（S.D.＝56.0）となっている。学習時間は97年時よりも微増し、若干のV字型の変化がみられる。

このような学習時間の増加という変化は、先のトップ校入学者層の多様化と合わせて考えるとパラドキシカルな結果であるといえる。一般的に考えれば、在籍する生徒が多様化すれば、学習時間も分散が大きくなり平均時間が減少するはずである。以下では、生徒の

多様化と学習時間のパラドキシカルな関係のメカニズムを明らかにするために、教師の指導に注目して、分析を展開していく。

表 4-3. 学習時間の変化

	1979年		1997年		2009年	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
トップ校	164.9	69.7	123.5	63.3	130.9	56.0
セカンド校	140.5	72.6	90.4	56.0	91.3	58.2
専門校	34.7	51.6	11.1	36.3	16.6	29.5
全体	113.2	86.3	75.6	71.0	79.5	68.6

※単位：分

まず、高校生の教師の指導に関する認識は、どのように変化しているのかを記述しよう。表 4-4 は、その値の変化である。これを見ると、「ほとんどいない」の数値が減少し、「たくさんいる」の数値が増加していることがわかる。つまり、生徒の認識では、教師はきめ細やかに指導するようになってきていることがわかる。

表 4-4. 教師の指導の変化（数値は、トップ校のみの%）

		1979年	1997年	2009年
生徒がわかるまで、 ていねいに教える先生	たくさんいる	14.4	36.9	48.4
	少しいる	57.2	47.0	42.4
	ほとんどいない	28.4	16.1	9.2
合計		100.0	100.0	100.0
N		250	249	250

それでは、このようなきめ細やかな指導は、学習時間に影響を与えているのだろうか。表 4-5 は、トップ校の生徒のみを対象に、学習時間を従属変数に設定し、独立変数に中学成績、高校成績、教師の指導の 3 変数を投入した重回帰分析の結果である。

この結果を見ると、1979 年には高校成績が 0.1%水準で有意だが教師の指導は有意ではない。1997 年も同様の傾向である。しかし 2009 年になると、引き続き、高校成績は有意だが、教師の指導の効果が 5%水準で有意な効果をもつようになっている。つまり、1979 年には成績が良かった高校生ほど学習時間が長かったが、それから 30 年の間で、教師がどれだけきめ細やかに指導したかどうかが、学習時間の増減を規定するようになってきているということである。

表 4-5. 学習時間の規定要因の変化（トップ校のみを対象とした重回帰分析）

	1979年		1997年		2009年	
	B	β	B	β	B	β
中学成績	1.162	0.021	-2.878	-0.034	-1.056	-0.033
高校成績	14.469	0.443 ***	6.869	0.237 ***	6.027	0.241 ***
教師の指導ダミー	-6.471	-0.033	9.094	0.069	13.744	0.123 *
定数	80.364	**	113.833	*	103.414	***
F値	19.655 ***		5.236 **		6.308 ***	
調整済みR2乗値	0.190		0.050		0.061	
N	239		243		246	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

それでは、以下では、このような量的分析の結果を、教師の聴き取り調査データから質的に検討していこう。

とにかく必要なのは、特に予習にかける勉強時間というものを確立させるということ
なことは、ずっと、日々、生活記録表というものを付けさせてやっていますよね。

（インタビュアーが「伝統的に実施しているのか」と質問）

ここ最近の生徒の質を見て、そういう手厚い指導を始めたということになりますね。
かつては、本校は、ほんとに、まさに「自主性」という言葉のとおり、ある意味で放
っておいてもやったんですよね。（トップ校 2、進路指導主任）

このように、トップ校の教師は、近年入学してくる生徒が多様化していることを感じ取
り、きめ細やかに学習指導を行うことにより、対応していることがわかる。また、トップ
校 2 の進路指導主任が述べるように、生活記録等を生徒に課すことによって学習時間を教
師が管理している。

数量データの分析結果から、トップ校の生徒の学力水準の多様化と学習時間の増加とい
う相反する関係がみられたが、このような変化は、教師のきめ細やかで個別的な学習指導
によってなされていたのである。

その一方で、教師が生徒に手厚い対応をしすぎているという現状に対する危惧は、以下
の聴き取りからわかる。

ある時期、「自己学習能力」なんて言われた時代があったかもしれないですけども、「自己学習能力」に頼っていては、子どもたちをある程度のレベルまで上げられないっていうような、そういう気持ちもあって、どんどん手厚くやっていく。それで、最終的には、3年になっても、まだそういう癖が抜けないっていうような、そういうジレンマといたしますか、こちら側もあって、その辺りは常に、どこまで手を掛けて、どう離していくかみたいなことは、ずっと課題になっているんじゃないかと思います。(トップ校 1、教務主任)

1990年代には、「自ら学び自ら考える力」を特徴とした教育改革が打ち出された。しかし、そのような教育改革の下では、トップ校の生徒の能動的な学習態度が育成されないことを危惧し、現場の教師たちは、きめ細やかで個別的に生徒を指導することで対応してきたことがわかる。

7. 結論：1990年代の教育改革の帰結

本章では、2000年代には蓄積されてこなかったトップ校における課題を設定し、以下の知見を得た。

第一に、トップ校への入学者の学力レベルの低下と多様化である。本調査のデータの数値の変化は、トップ校の生徒の絶対的な学力水準の低下を意味するものではない。あくまで継時的に比較した相対的な変化である。しかし、少子化にともなう入学定員の縮小を経験しなかったトップ校は、入学者の学力水準の低下と多様化を引き起こした。

第二に、学習時間の増加である。90年代に学習時間が低下したが、再び増加している。このことは、一見すると学業コミットメントへの回復を意味するように思える。

しかし第三に、学力の多様化と学業コミットメントの回復という相反する現象を可能にしたのは、教師のきめ細やかで個別的な学習指導の結果だということである。かつて Rohlen は、日本の高校生文化の源が大学入試にあるとし、仮に大学入試がなくなれば、普通科高校の生徒は勤勉性が維持できないのではないかと示唆した(Rohlen 1983=1988、訳書 p.340)。しかし、大学入試という「エンジン」に代わり、トップ校の生徒の勤勉性(学習コミットメント)を補償したのは、教師のきめ細やかな学習指導であったのである。

それでは、以上の知見は、これまでに蓄積されてきた高校教育研究にどのような問題を提起するだろうか。

まずひとつには、トップ校の生徒の学力多様化によって、日本の高校階層構造の新たな局面が示唆される。日本の高校は、かつては有名大学への進学者を多く輩出する高校を頂点とする「ピラミッド型」の階層構造であったとされる（例えば、岩木・耳塚編 1983）。しかし、90年代後半になると、高校階層構造は、「お鏡餅型」とであると指摘された（樋田 2001、耳塚 2007a）。「お鏡餅型」の高校階層構造は、①変化しないエリート層と②ノンエリートトラックの生徒の多様化という2つの特徴を持つが、本研究の知見は、高校階層構造の新たな局面を浮かび上がらせている。すなわち、入学層の学力分散の広がりがみられ、トップ校の生徒も多様化しているのである。

次に、本章の知見は、少子化社会におけるトップ校のエリートセクターとしての位置の再検討を迫る。少子化の中で、高校は1校あたりの生徒数を減少させることで高校の数を維持してきた。それにもかかわらず、トップ校は生徒数を減らさなかったため、学力の多様な生徒が入学してくることとなった。トップ校が、エリート養成学校として機能するためには、生徒数の再編が求められるかもしれない。

さらに、本章では、90年代の教育改革の帰結を示すことにより、トップ校の生徒の「自ら学び自ら考える力」の低下という問題の提起が可能となる。90年代の教育改革は、児童・生徒の個性を重視し、自己学習能力の育成を推進する教育政策であった。このような教育政策の下、教師たちは生徒を指導することから撤退していった（荒川 2009 など）。しかし、本章のインタビューデータで見たように、現在では教師たちは手厚く指導し、多様化した生徒に対応しているのである。

以上のような現状を、樋田（2010）は試験的に「個別主義的面倒見主義」と名付け、説明を試みている。90年代の「個性化」・「多様化」、「自ら学び自ら考える力の育成」を特色とした教育改革は、教師を「指導することから撤退」させ、その結果、高校生の学習離れを引き起こした（例えば、荻谷 2002）。樋田（2010）が提示した枠組みから見れば、教師はこのような学習離れへの対応策として、生徒を個別的かつ面倒見的に手厚く指導してきたことが示唆される。

しかし一方で、個別的で面倒見的な指導方法が、生徒が「自己学習能力」を獲得する機会を奪っていることを教師は危惧している。トップ校での「個別主義的面倒見主義」への

変化は、90年代の「個性化」・「多様化」、「自ら学び自ら考える力の育成」を特色とした教育改革が現代までに残した意図せざる結果であるといえよう。

〈注〉

- (1) 例えば、片瀬一男らの「教育と社会に対する高校生の意識調査」（海野・片瀬 2008）、耳塚寛明らの「青少年期から成人期への移行についての追跡的調査」（お茶の水女子大学 2004～2012）がある。
- (2) 調査対象の県を特定されないため、県に関する数値は概数を提示することを了承されたい。
- (3) データの掲載は、1990年からの5年ごとだが、本研究で用いる調査データが2009年の高校2年生を対象としているため、調査対象者が入学する2007年を含む定員を記載した。
- (4) 人口変動の影響は厳密には学区単位で生じるが、データの制約上、本章では県全体のデータのみを示すに留まっている。しかし、特定の学区にのみ顕著に人口の増減が見られるといったことはないため、県全体の数値を示すことに問題はないと考えられる。
- (5) 学習コミットメントを高校生の意識レベルでとらえる研究もあるため（例えば、堀 2000）、トップ校のみを対象とし、いくつかの意識変数の変化を表4-6に示した。必要に応じて、参照されたい。

表4-6. 学習コミットメントの意識変数の変化（トップ校のみを対象とした該当者の％）

	該当者の％	
先生の授業を熱心に聞いているほうだ	1979年	50.2
	1997年	67.2
	2009年	76.0
授業でわからない点は、いつまでもそのまましておかないほうだ	1979年	44.0
	1997年	46.8
	2009年	57.4
先生の授業の進め方が早すぎて、ついていけない科目が多い	1979年	36.1
	1997年	45.2
	2009年	41.8
先生や親の期待にこたえるために、勉強しなければならないと思うことがある	1979年	59.2
	1997年	48.4
	2009年	59.8

- (6) これらの成績に関する変数を用いるうえで注意すべき点は、決してこれが高校生の客観的な学力を表したものではないということである。しかし、時系列的にこの変数をトラック間で平均値と標準偏差を比較した時に変化があれば、それは相対的な意味ではあるが、各トラックへ参入する生徒の学力層の変化を分析できると考えられる。
- (7) 学習時間は、「ほとんどしない＝0 分」、「30 分くらい＝15 分」、「1 時間くらい＝45 分」、「1 時間～2 時間＝90 分」、「2 時間～3 時間＝150 分」、「3 時間～4 時間＝210 分」、「4 時間～5 時間＝270 分」、「5 時間以上＝330 分」として数量化した。
- (8) 無回答・非該当は欠損値とした。
- (9) 教師のインタビューデータは、基本的には、インタビュアーの「近年の入学者にはどのような傾向があるか」、「近年の指導上の懸案事項はあるか」という質問に対しての回答であるが、半構造化面接法での、やや自由な会話の中での発言である。なお、聴き取り調査の時点では、生徒への質問紙調査が終了しておらず、インタビュアーも調査対象の教師も、生徒調査の数値を把握していない。
- (10) 入学者の学力多様化の要因には、少子化の他に推薦による高校入試の影響が考えられるが、近年では、推薦入試の規模は縮小ないし廃止の方向へと向かっている（例えば、毎日新聞、2009 年 11 月 4 日、朝刊）。調査対象県も同様の傾向にあるため、推薦入試によるトップ校入学者の学力多様化の影響は小さいと思われる。

第Ⅲ部：職業系専門学科高校の変容

第Ⅱ部では、生徒文化調査のデータを用いることで、主に普通科高校の変容を明らかにしてきた。第Ⅲ部では、専門学科の構造と機能の変容と存立のメカニズムを実証的にとらえていくが、それには以下の点に着目していく。

第一に、商業科と工業科の差異である。従来の高校をフィールドとしたメリトクラシー研究は、普通科はランク別に検討するものの、多様な専門学科は一括りにして普通科の対比カテゴリーのひとつとして扱ってきた。それは、本研究の第Ⅱ部での分析も同様である。しかし、産業構造や高卒労働市場の変化に応じて、高校も変化しているはずである。第5章では、専門学科を代表する商業科と工業科の2つを対比させることから、専門学科の変容をとらえる視点を構築していく。

第二に、商業科の現代的な機能の詳細な分析である。それには、地域に着目しながら考察を進める。繰り返しになるが、例えば、青森県立弘前実業高校には「りんご科」という地域の産業と密着した高校がある。薬売り商人の地域として有名な富山県の滑川高校には「薬業科」がある。しかしその一方で、炭鉱科を所有していた高校（福岡県立筑豊工業高校など）が、炭鉱産業の衰退とともに学校規模の縮小、学科の再編ないし閉校したように、多くの専門高校（学科）はあくまで地場産業とのつながりの中でこそ存在しているといえる。

その際に本研究で、最も注目・検討すべき対象として浮かび上がるのが、地方商業科である。商業科は近年、その存在意義に難しさがある。現在に至るまでに蓄積された商業科の困難さの詳細は第6章で記述するが、近年の地方商業科は「就職学校」の機能が低下し、「進学準備学校」としての性格を強めている。このことは、商業科が地域（地場産業）との関わりも同時に弱めていることを意味する。このような関心から、地域性に着目しながら商業科の現状と課題を検討していく必要がある。

第三に、上の2つの問題に大きく関連して、高校生を対象とした調査設計の問題がある。中村（2011、p.206）が「研究者集団がエリート選抜に目を向けすぎてきた」というように、従来のトラッキング研究は、非エリートとされる専門高校生のリアリティを把握しそこなっている可能性がある。全ての高校生が意欲的に勉強に取り組み、学校にコミットする。その結果として、より威信の高い学校や職業に就き、結果として、高い賃金を得る。それは確かに、選抜と配分の一側面を的確にとらえているといえる。それ故に、日本の生

徒文化研究は、Hargreaves（1967）や Lacy（1970）から影響を受けながら、①学校化されたメリトクラシーに適応的な生徒が誰であるか、②誰が学校文化から逸脱するのかという問いに対し、社会階層や隠れたカリキュラム（Hidden curriculum）という視点から関心を払ってきた（松原ほか 1981、耳塚ほか 1982 など）。それゆえに、調査の枠組み、質問項目等はエリート高校生ないし普通科の生徒を中心として実施されてきた。

第Ⅲ部では、以上の課題を踏まえ、①多様な専門学科の差異とその変容をとらえること、②専門学科を主眼に置いた高校生調査の結果について述べていく。

第5章：専門学科の進路形成メカニズム：商業科と工業科の比較分析から

1. 問題設定

本章の目的は、商業科と工業科の生徒の四年制大学進学希望の規定要因の継時的な変化を比較分析することにより、専門学科の構造と機能の変容を実証的に明らかにすることである。

職業系のトラックは、しばしば社会的再生産の機構として扱われ（例えば、Rosenbaum 1976、Bowles and Gintis 1976=1986、1987、Oakes 1985 など）、日本でも、専門学科高校がそれに相当し、人々の教育達成ないし社会移動を制限することが指摘されてきた⁽¹⁾（例えば、中西ほか 1997 など）。確かに、専門学科は、高校生の教育達成に対して負の影響を与える機関として扱われることが多い。しかし、日本の高卒就職システムは、若年者の効率的な職業への移行を可能にすると評価され（例えば、Rosembaum and Jones 2000 など）、とりわけ、専門学科は「就職用トラック」として、高卒就職者の「スムーズな移行」（荻谷 1991）の大部分を担ってきた。しかし、1990年代になると、経済不況を背景として、わが国の大学進学率は右肩上がりに上昇してきた。その際、高校から職場への「スムーズな移行」（荻谷 1991）が困難になった専門学科からの大学進学という「トラッキングの弛緩」（樋田ほか編 2000）が注目され⁽²⁾、2000年代にはいくつかの研究が蓄積されてきた（例えば、耳塚 2000a、酒井編著 2007、中村編著 2010 など）。

ところが一方で、それらのほとんどは、多様な専門学科をひとつのカテゴリーとして扱うことが多く、専門学科間の差異に着目したものは少なかった。そのため、専門学科の機能の詳細な変化をとらえきれずにいる。具体的な例を挙げよう。表5-1は、学校基本調査より作成した過去30年の普通科・商業科・工業科別の進路である。これを見ると、大学等進学率・就職率は、1980年から1990年までは、商業科と工業科の間に大きな差は無い。しかし、1995年以降になると両学科間の差が開き出し、相対的に商業科は「進学準備学校」となっている。つまり、過去においては「就職用トラック」としてひとくくりにすることも可能だった専門学科だが、近年では各々の学科の進路が多様化しているのである。

しかし、数は少ないながらも、いくつかの学科を比較することから、商業科が相対的に進学用トラックになってきたことは、すでに示されている（例えば、中村 2010、岡部 2009）。そこで、本章では、商業科と工業科の進路形成の比較分析に留まらず、約10年間の商業

科と工業科の機能の時代的な変遷を実証的に明らかにしていく。より操作的に言えば、高校生の大学進学希望の規定要因の長期的な変化を分析するのである。すなわち、①インプット（性別、社会階層、中学時成績）、②スループット（高校成績、指導様式）がそれぞれどのように変化してきたのか、そして、③それら 2 つの変化が、専門高校生の進路形成にどのように影響しているのか（アウトプットの変化）を分析するのである。

これらを分析し、商業科と工業科の時代的な変化を実証的にとらえることにより、専門学科の機能の変容を明らかにしていく。これらの作業から、これまでに蓄積されてきた日本のトラッキング研究に新たな知見を付け加えることが可能になるだろう。

表 5-1. 学科別、卒業者の進路の変化

	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年
大学等進学率							
全体	32.5%	31.0%	31.0%	38.1%	45.7%	47.9%	55.1%
普通科	43.0%	39.9%	38.1%	46.1%	53.9%	56.2%	64.0%
商業科	8.6%	6.9%	8.2%	13.1%	19.6%	21.7%	28.9%
工業科	9.4%	7.5%	6.4%	8.8%	15.0%	17.4%	19.2%
就職率							
全体	41.8%	40.3%	34.6%	25.1%	18.3%	17.1%	15.5%
普通科	25.1%	25.4%	21.6%	13.9%	9.4%	8.5%	7.2%
商業科	80.6%	79.7%	74.4%	57.6%	43.8%	41.1%	37.3%
工業科	80.0%	81.4%	78.9%	68.0%	55.1%	54.2%	57.4%

1)学校基本調査各年度より作成

2)全日制のみ対象

2. トラッキング研究のレビュー

わが国の高校と社会階層の関連の変遷を辿ると、戦後の高校教育拡大期においては、高校へ進学する者としらない者の格差だったが（潮木 1975）、高校進学率が 90%を超えるようになった頃では、普通科—専門学科間あるいは普通科内の学力ランクの格差へと深化していったという（秦 1977）。その後の、高校間格差と社会階層の研究は、主に SSM データの分析から導かれることが多いが、それらも概ね秦（1977）と同様の傾向を指摘している（例えば、中西ほか 1997、稲田 1997、荻谷 1998、中澤 2008 など）。

一方で、わが国のスループット研究は、1970 年代以降に、いわゆる「新しい教育社会学」ないし「解釈的アプローチ」のインパクトを受け（金子 2002）、高校生徒文化研究の文脈で発展してきた（例えば、岩木・耳塚編 1983 など）。すなわち、高校を調査のフィールド

として、「入学時のインプットと卒業時のアウトプットの間のスループットに焦点を当て、そこにインプットの偏差を増幅してアウトプットにつなげるメカニズムを見出すこと」を主たる研究課題とし、「この課題の探求を通じて生徒の進路を導く学校の内部過程を明らかに」しようとする試みであった（飯田 2007、p.44）。

1990年代後期になると、経済不況による高卒無業者の増加や少子化による受験競争の緩和などを背景として、高校生の進路形成に焦点を当てたスループット研究が数多く蓄積されてきた。それらのいくつかは、高校が選抜機関から進路選択支援機関へと変容し、現代高校生の進路形成には、生徒の能力やアスピレーションといった個人が所有する要因が相対的に低まり、進路指導という学校内での構造的なインタラクションの影響が大きくなっていると指摘した（千葉・大多和 2007、風間 2007）。しかし、以上の研究は、示唆に富む知見を蓄積してきた一方で、以下のような課題を残したといえる。

まず、高校間格差と社会階層の関連に関する研究には、高校教育をブラックボックスとして扱いすぎてきたことが指摘できる。これは、多くの研究がSSMデータを使用することの限界ということになるが、コーホート別に高校ランク・タイプを媒介とした社会移動の分析では、高校内での成績や進路指導（スループット）の変化をとらえることができなかった。

次に、スループット研究の問題点のひとつには、進路形成には、学校内部でのスループット要因の影響が高まってきたことが示唆されている一方で、高校間格差と社会階層をはじめとする様々なインプット要因の関連がどのように変化してきたのかを観測できていないことである。そのため、進路形成メカニズムの変容が、インプットの変化によるものか、スループットの変化によるものかが明確ではなかった。

近年蓄積されてきたスループット研究がこのような課題を残したのは、それらを実証的にとらえるだけの調査データがなかったからである。いずれの調査も単年ないし数年間のモノグラフ調査であり、同時に、中村ら（2010、pp.26－29）のいうように高校生の社会階層に関わるデータの収集は、学校を通じての集団自記式調査では難しいことが多い。そのため、高校教育を媒介要因としての「インプット・スループット・アウトプット」の長期的な変容をとらえるだけのデータが不足していた。しかし、本章で用いるデータは、同一学区において同一の高校を継続的に調査したデータであり、しかもすべてのデータに社会階層項目も含まれている。このデータを分析することによって、高校教育を経由した教育達成のメカニズムの変容をとらえることができる。

以上の先行研究のレビューより設定する本章の分析課題は、①専門学科に在籍する生徒がどのように変化したか、②専門学科内部での進路指導がどのように変化したかの2点を示し、③それらの変化が、生徒の進路形成にどのように影響しているかを明らかにすることの3点である。

3. 方法と手続き

3.1. 方法

前述のように、本章の分析課題は、①専門学科に在籍する生徒がどのように変化したか、②専門学科内部での進路指導がどのように変化したかの2点を示し、③それらの変化が、生徒の進路形成にどのように影響しているかを明らかにすることである。

第一の分析では、①専門学科に在籍する生徒の変化を分析するため、所属学科（商業科か工業科か）と性別、父親の学歴、中学時成績の関連を時系列的に比較し、その規定要因を二項ロジスティック回帰分析によって明らかにする。さらに、②進路指導の指標として、受験指導、就職指導の2つの変化を時系列的に比較する。進路指導の指標には、在籍する高校の教育面の特色と思われることは何かを尋ねた質問項目を使用する。用いるのは、「教科指導に力を入れている」、「受験指導に力を入れている」、「就職指導に力を入れている」の3つの変数で、これらに対して、「あてはまる=1」、「あてはまらない=2」の2択で回答してもらった⁽³⁾。

第二の分析では、進路形成のメカニズムを明らかにするため、希望進路を従属変数とし、性別、父学歴、中学時の成績、高校での成績を独立変数に設定した二項ロジスティック回帰分析を行う。

3.2. 分析の手続き

分析は、97年・09年の2つの時点別に行う。調査した高校のうち、商業科、工業科それぞれ2校ずつ（計4校）を分析の対象とする。これら2つの専門学科カテゴリー間で、①インプットとスループットがどのように変化したか、②それらの変化が進路形成にどのような影響を与えるかを分析していく。

次に、用いる変数の指標を記述する。従属変数である希望進路（アウトプット）には、大学進学希望=1、それ以外の希望進路=0を設定する。

独立変数の手続きを記述しよう。インプットには、性別、父親の学歴、父親の職業、母親の学歴（社会階層の指標）⁽⁴⁾、中学時成績を用いる⁽⁵⁾。スループットとしては、高校成績（最小値＝1、最大値＝9）を連続変数として、さらに商業科＝1、工業科＝0とした商業科ダミーを投入する。

4. 進路形成のメカニズムの分析

4.1. 専門学科はどう変わったか：インプットとスループットの変化

ここでは、インプット（性別、社会階層、中学時成績）とスループット（進路指導）に着目して、商業科と工業科の変化を分析していく。

表 5-2 は、性別（男子比率）と中学時の成績を 3 つのカテゴリー（9～7＝上位、6～4＝中位、3～1＝下位）に分けて、調査年時別に各学科で示したものである。まず、男子比率を見ると、商業科では 43.2%から 39.0%へ、工業科では 84.7%から 83.4%へと微減してはいるが、ほぼ横ばいだといえる。

次に、中学時成績の変化だが、おおまかにいえば、両学科ともに入学者の学力は「低下」している傾向が読み取れる。商業科では、成績上位層がほとんど増えていない（7.7%→8.8%）一方で、中位層が減少し（73.0%→56.4%）、下位層が増加しているのである（19.4%→34.8%）。同様に、工業科でも上位層と中位層の割合が少なくなり（それぞれ、10.0%→8.4%、51.0%→46.5%）、下位層が増加しているのである（39.0%→45.0%）。

それでは、在学者の社会階層の変化を確認しよう。図 5-1 は、商業科生徒の社会階層の変化である。まず、父学歴を確認すると、大卒・院卒が 20.3%から 36.3%へと大幅に増えている。父職では、専門・管理職が 19.8%から 36.1%へ増加し、母学歴でも短大・専各・高専が 19.0%から 29.1%へと増加し、商業科の生徒の社会階層が高くなったことが示唆される。

一方、工業科の生徒はどうか（図 5-2）。父親の学歴で見ると、大卒・院卒が 15.3%から 21.5%と、増加してはいるが、商業科と比べるとそれほど大きな増加幅ではない。父職と母学歴を確認しても同様で、上昇傾向ではあるが、微増にとどまっている。

以上のクロスセッショナルな分析により、商業科と工業科の変化を確認した。それでは、従属変数を商業科＝1、工業科＝0 に設定した二項ロジスティック回帰分析によって、所属学科の分化の規定要因を明らかにしよう。

表 5-3 が、二項ロジスティック回帰分析の結果である。まず、1997 年の結果を記述していこう。男子ダミーが負で有意である。オッズ比 (Exp(B)) が 0.139 ということは、女子に比べて男子だと商業科へ所属する確率のオッズが 0.139 倍上がるということを意味する。つまり、女子ほど工業科よりも商業科へ所属する傾向があるということである。次に、中学成績が正で有意である。オッズ比 (Exp(B)) が 1.251 ということは、中学成績のパラメーターが 1 増加すると、工業科よりも商業科へ所属する確率のオッズが 1.251 倍増加するということである。つまり、工業科生徒よりも商業科生徒の方が、中学成績が高いことを意味している。

続いて、2009 年の結果を記述していこう。男子ダミーが負で有意、中学成績が正で有意なことは変わらない。しかし、父大卒ダミーが 5%水準で正で有意になっている。この結果、商業科と工業科の分化に際して、社会階層（父学歴）というノンメリトクラティックな要因の重要性が高まってきたことを意味している。

それでは、商業科と工業科で、高校内部では指導の形式をどのように変化させてきたのかを確認しよう。図 5-3 では、「教科の指導に力を入れている」「受験指導に力を入れている」「就職指導に力を入れている」の 3 つに対する該当者の割合を学科間で比較し、年度ごとに示した。

まず、教科指導については、両学科ともに数値は上昇しており、相対的に商業科の方が割合が高いことは一貫した傾向である。学科間の差は、1997 年では 7.8 ポイント、2009 年では 10.7 ポイントであり、差はそれほど開いていない。

次に、受験指導を確認すると、これについては学科間で大きな差がある。1997 年では、商業科＝45.6%、工業科＝28.1%で、2009 年では、商業科＝75.0%、工業科＝44.1%である。元々学科間の差は大きかったが、2009 年になるとその差がさらに拡大するのである。

そして、就職指導であるが、両学科ともに数値は上昇してはいるが、数値に学科間の差異はほとんどない。

以上の分析結果からわかるのは、工業科に比べて商業科には、①高い社会階層の子女が入学するようになってきており、②そこでは、受験指導が積極的に行われている、という 2 つの変化である。

表 5-2. 調査年時別、各学科の中学時成績の変化

		商業科		工業科	
		1997年	2009年	1997年	2009年
性別	男子比率	43.2	39.0	84.7	83.4
中学時成績	上位	7.7	8.8	10.0	8.4
	中位	73.0	56.4	51.0	46.5
	下位	19.4	34.8	39.0	45.0

図 5-1. 商業科生徒の社会階層の変化

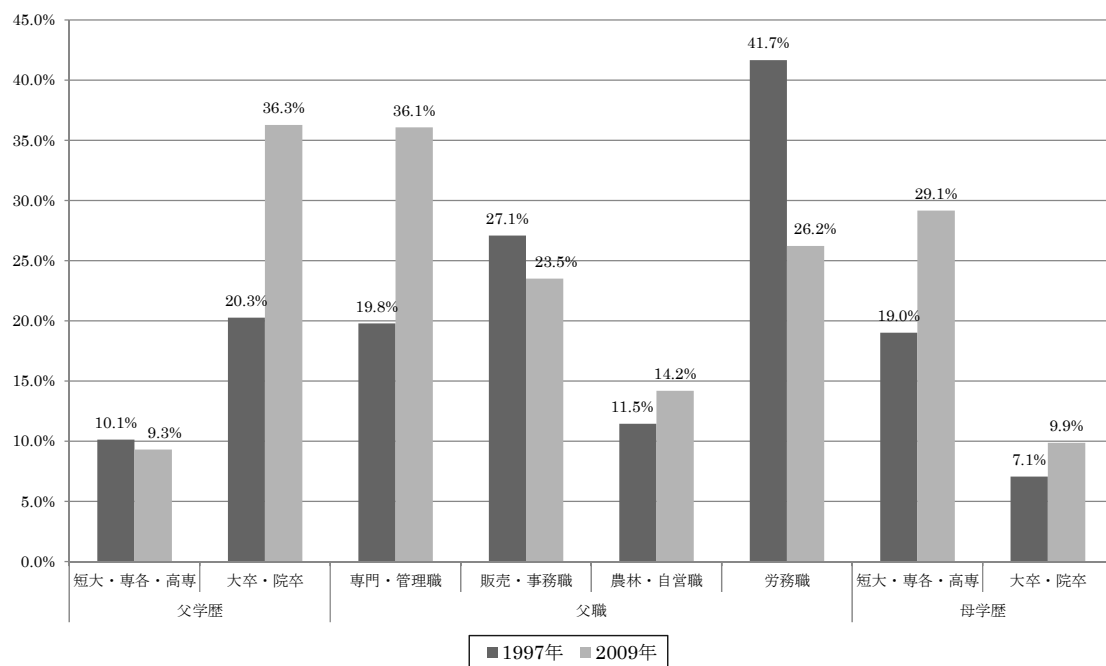


図 5-2. 工業科生徒の社会階層の変化

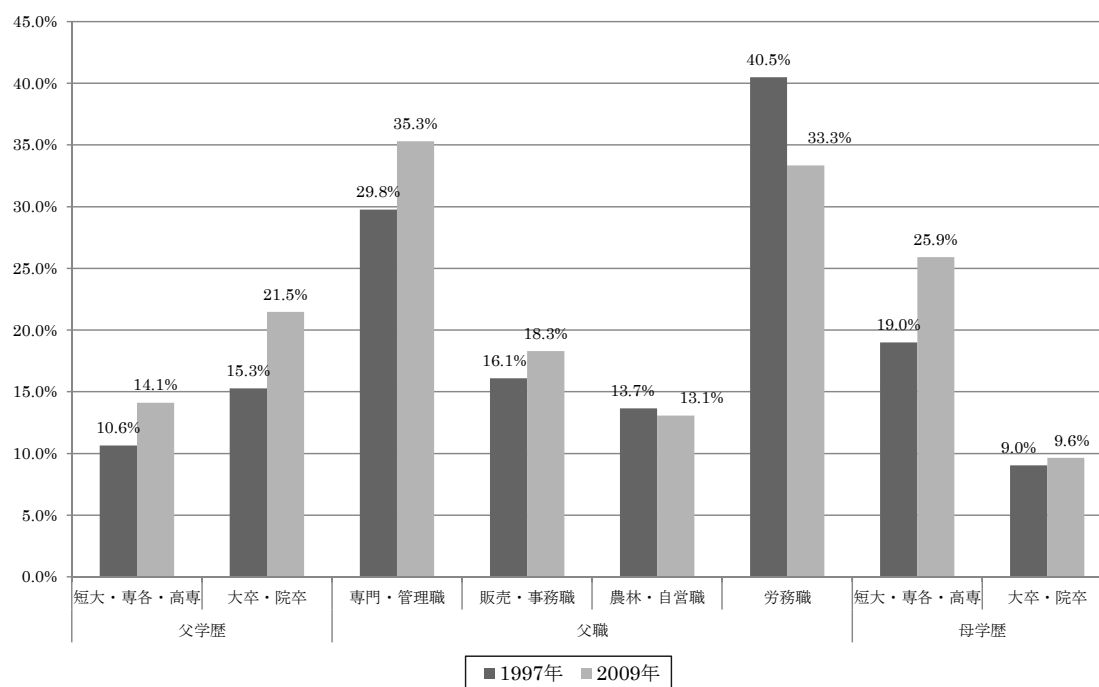
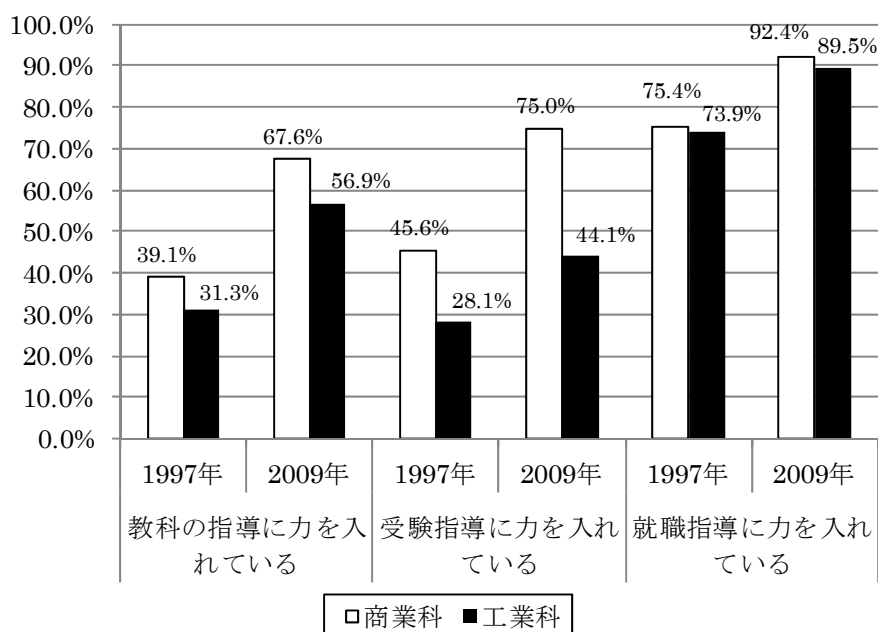


表 5-3. 所属学科の規定要因（商業科=1 とした二項ロジスティック回帰分析）

	1997年		2009年	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)
男子ダミー	- 1.975 ***	0.139	- 2.049 ***	0.129
父大卒ダミー	0.331	1.392	0.746 *	2.108
父専管ダミー	- 0.174	0.841	- 0.139	0.870
母大卒ダミー	0.022	1.022	- 0.032	0.968
中学成績	0.224 **	1.251	0.158 *	1.171
定数	0.233	1.263	0.699	2.012
- 2対数尤度	403.034		350.129	
χ^2 (d.f.)	83.530(5) ***		75.432(5) ***	
Cox & Snell R ² 乗	0.212		0.216	
Nagelkerke R ² 乗	0.282		0.289	
N	351		310	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

図 5-3. 学科と進路指導の特色の継時的変化



4.2. 専門学科はどう変わったか：アウトプットの変化

ここでは、進路形成の規定要因の変化を分析していく。まずは、学科別に希望進路の変化を記述しておこう（表 5-4）。

商業科では、就職希望者が微減している（32.5%→26.9%）。工業科の就職希望は反対に微増しており（55.9%→60.1%）、現在も高い水準を保っている。つまり、工業科が就職希望者の割合が維持ないし増加しているのに対し、商業科では進学希望者が増加しているのである。

表 5-4. 調査年時別、各学科の希望進路の変化

	商業科		工業科	
	1997年	2009年	1997年	2009年
就職希望	32.5	26.9	55.9	60.1
専各希望	31.2	25.7	24.6	21.8
短大希望	6.8	9.4	8.1	4.8
私立大学希望	19.0	15.5	5.9	6.9
国立大学希望	10.5	22.4	5.5	6.4
合計	100.0	100.0	100.0	100.0
N	237	245	236	188
進学希望者率	67.5	73.1	44.1	39.9
大学進学希望者率	29.5	38.0	11.4	13.3

それでは、以下では進路分化の規定要因を分析していこう。表 5-5 は、従属変数に大学進学希望=1、それ以外の希望進路=0 とした二項ロジスティック回帰分析の結果である。

まず、1997 年の分析結果を確認すると、男子ダミー、父大卒ダミー、母大卒ダミー。高校成績、商業科ダミーがすべて正で統計的に有意な変数である。次に、2009 年の分析結果を見ると、有意な変数は、男子ダミー、高校成績、商業科ダミーである（すべて正で有意）。

この 2 時点の変数の変化からわかるのは次の事柄である。①1997 年時点ではすでに商業科に所属することによって工業科よりも大学進学になりやすかったということ。②さらに、父大卒ダミーと母大卒ダミーが有意なことから、社会階層による進路分化がなされていたのである。③しかし、2009 年になると、社会階層に関する変数が有意でなくなった。また商業科ダミーのオッズ比（Exp(B)）を確認すると、7.099 から 9.844 へと上昇しており、商業科トラックが相対的に強まったことを意味している。

以上より、専門高校生の進路分化には、社会階層要因の直接的な効果が低まり、商業科トラックの効果が強まったことがわかるのである。

表 5-5. 大学進学希望の規定要因の変化（二項ロジスティック回帰分析）

	1997年		2009年	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)
男子ダミー	2.342 ***	10.401	1.418 ***	4.128
父大卒ダミー	0.885 *	2.423	0.506	1.659
父専管ダミー	0.612	1.845	0.086	1.090
母大卒ダミー	1.305 *	3.688	0.243	1.276
中学成績	0.141	1.151	0.032	1.032
高校成績	0.334 ***	1.396	0.394 ***	1.483
商業科ダミー	1.960 ***	7.099	2.287 ***	9.844
定数	- 7.035 ***	0.001	- 5.489 ***	0.004
- 2対数尤度	234.950		281.884	
χ^2 (d.f.)	91.832(7) ***		80.486(7) ***	
Cox & Snell R ² 乗	0.240		0.236	
Nagelkerke R ² 乗	0.385		0.336	
N	335		299	

*p<.05 ***p<.001

5. 結論：商業科と工業科における進路形成メカニズムの差異化

本章では、商業科と工業科を対象として、インプットとスループット変化が、進路形成（アウトプット）に与える影響の変化を分析することによって、専門学科の構造と機能の変容を明らかにしてきた。これまでの分析から得られた知見は以下の通りである。

第一に、構造の変化として、両専門学科と生徒の親学歴の関連の変化である。父学歴、父職、母学歴の変化で見たとき、工業科と比べて商業科に高い社会階層の子女が在籍するようになっている。また、二項ロジスティック回帰分析の結果においても、商業科の在籍には、父学歴の点で社会階層が重要性を増しており、専門学科間での二極化が見られる⁶⁾。

第二に、機能の変化として、高校内部での進路指導を継時的に比較したところ、商業科は工業科よりも進学準備学科としての性格を強めてきたことがわかった。すでに、学校基本調査や先行研究（中村 2010、岡部 2009）から明らかにされているように、商業科は工業科と比べると大学進学（希望）者が増加してきた。そのような進路の変化と同じくして、高校内での受験指導が工業科よりも商業科の方が多くなってきたのである。

第三に、機能の変化として、大学進学希望の点での進路分化の規定要因を分析した結果、1997年には社会階層による分化がなされていたが、2009年には階層変数は有意ではなくなり、商業科トラックの変数が効果を強めていた。

以上の分析結果を総合して考察を加えると、商業科と工業科は、インプット、スループット、アウトプットすべての点で差異化していることがわかる。工業科と比べると、商業科には高い階層の子女が在籍し、受験指導を受け、大学進学するように変容しているのである。商業科が工業科とは異なったトラックを形成しているのである。

このような、職業系トラックが教育達成に有利になるという現象は、海外の研究では見られず、またそこでの進路指導は社会的再生産を助長するものとして扱われることが多い（例えば、Cicourel and Kitsuse 1963=1985、Young (Eds) 1971 など）。しかし、本章の分析では、そのような結果が得られなかった。この結果には、2つの要因が考えられる。ひとつめは、就職の面で「スムーズな移行」（荻谷 1991）が困難になってきたため、教師達が生徒を進学に仕向けることで職務を果たそうとしていること。そして、もうひとつには、日本的な平等主義教育が関わっていると推察できる。すなわち、日本の教育は、平等主義を基盤としており、教師が生徒を差異的に扱うことを嫌う（荻谷 1995、上間 2009）。そのため、教師の職業的満足や使命感は、社会階層が高く学校に適応的な生徒の指導だけ

ではなく、相対的に階層低位の生徒に対し積極的に働きかけることによっても達成されているのかもしれない⁷⁾。

それでは、これまでに得られた知見から、専門学科を取り扱ってきた従来のトラッキング研究の課題を述べていこう。

トラッキング研究が取り扱うべき課題は、トラックと社会階層がリンクすること、そしてそのリンケージがトラック内部で増幅され、結果としてトラッキングシステムが教育達成ないし社会移動を制限し、社会的再生産に寄与しているということであった

(Rosembaum 1976、Oakes 1985)。日本においても専門学科は「就職用トラック」として同様の機能が指摘されてきた。しかし、従来の研究は、多様な専門学科をひとつのカテゴリーとして扱うことが多く、専門学科間の差異に着目したものは少なかった。本章で商業科と工業科を継時的に比較分析した結果、商業科は相対的に高い社会階層とのリンケージを強め、進路指導による大学進学援助機能の強化と大学進学（希望）者の増加という現状が見られた。むしろ、これには厳密な因果関係を言及することはできないし、おそらく同時並行的な変化だったのであろう。しかし、結果として、商業科と工業科は、インプット・スループット・アウトプットの全ての点で差異化してきたことが明らかになった。

今後のトラッキング研究では、専門学科をひとつのカテゴリーとして扱うことが不適切なことが示唆される。日本の専門学科は、伝統的なトラッキングシステムとして普遍的に教育達成を制限する機能を有しているとはいえない難くなってきたのである。

〈注〉

- (1) 職業系トラックが失業のリスクを減少させるセーフティネットとしての機能を持つと指摘する海外の研究もあることを付記しておく（例えば、Arum and Shavit 1995）。
- (2) ただし、耳塚（2000b、pp.215－222）のいう「トラッキングの弛緩」とは、進路選択の「トラック内の散らばり」と「トラック間の差異」の比が相対的に大きくなっていくことである。それに対し、本章でいう「トラッキングの弛緩」は、あくまで専門学科内における進路選択の多様化を意味し、樋田らが用いた概念とは少し異なることを注意されたい。
- (3) なお、この進路指導の変数には注意が必要である。この変数は、高校の指導の特色を生徒がどう受け取っているかを尋ねたものであって、決して客観的な指導の量を表したものではない。しかし、これらの質問項目に肯定的に回答する生徒の割合を継時的に比

較することで、ある程度は進路指導の客観的な量の指標となるだろう。また、須藤(2007)のように、質問紙調査から得られた子どもがどのような授業を受けているかという認識の割合を授業方法の指標として、学力への効果を測定した研究もあり、生徒が受ける指導の認識を進路指導の効果の指標とすることにも一定の妥当性を持つと考える。

- (4) 親学歴、父職については、「父／母はいない」、「その他」を欠損値とした。
- (5) 無回答・非該当は欠損値として扱った。
- (6) 性別については、本章では積極的に解釈を与えないが、商業科において男子比率が著しく低下した一方で、大学進学希望の規定要因として男子ダミーが有意であり続けたことから、教育達成のジェンダー間格差という問題を指摘できるだろう。
- (7) その詳細なプロセスについては、上間(2009)を参照されたい。

第6章：地方商業科の存立メカニズム：「地域」を手がかりとして

1. はじめに

1990年代中期のバブル景気の終焉以降、高校生の進路選択、とりわけ就職については困難を極めている。このような高卒就職難は、これまでに卒業生の多くを就職へと導いてきた専門学科でその困難がより大きい。そのため、この10余年間では専門学科を対象とした研究がいくつか蓄積されてきた（例えば、日本労働支援機構 2003、酒井編著 2007 など）。このような状況を踏まえ、本章は、商業科に焦点を当て、その現状を明確にしていく。

後の節で詳しく述べることになるが、商業科（高校）は元来、生徒に簿記や経理、営業に関する科目を学習させることにより、即戦力となる事務職員の育成を目的としてきた（番場 2010）。しかし、従来は高卒者の職だったものに、より上位の学歴の者が就くという「学歴代替雇用」の傾向が、商業分野ではより顕著に強まったため、商業科は他の専門学科よりも卒業生の進路選択が難しくなっている（酒井編著 2007、風間 2007）。それでは、生徒の進路が多様化する中で、商業科はどのような機能を果たしているのだろうか。本章では、試験的に、①小学科と②「地元志向」という2つに焦点を当て、商業科生の進路選択の分析を展開していく。

小学科とは、例えば、商業科でいえば「商業科」や「国際科」、工業科でいえば「機械科」や「建築科」というように、専門高校（学科）内での教育をより産業とのかかわりを密接にするために専門分化させた学科のことである。

商業に関する小学科は、1970年の学習指導要領の改訂において、商業科、経理科、事務科、情報処理科、秘書科、営業科、貿易科が設置された。その後、小学科は1989年にも改訂され、「国際経済科」が新設、「事務科」と「情報処理科」が統合し「情報処理科」へ、「営業科」が「流通経済科」へ、「経理科」は「会計科」へという4つの変更があった。番場（2010）によれば、1989年の学習指導要領改訂時の商業科目編成の特徴は、①商業から流通へ、②国際化への適応、③情報科目の強化の3点だったという。それを受けて、現在の商業高校の多くは、商業科・情報科・国際科を所有していることが多い。本章では、そのような理念の下に設置された商業に関する小学科が、生徒の進路分化にどのように関わるのかを検討する。

次に、商業科生の「地元志向」に着目する。専門学科は地場産業とのつながりの中でこそ存在している。そこで、「地元志向」を手がかりとして、商業科と地域のつながりを検討していく。

なお、本章の構成は次の通りである。第2節では、文献および学校基本調査の数値の推移から、戦後の商業科（高校）の変遷を検討し、分析課題を設定する。第3節でデータと方法を述べ、第4節と第5節で分析を行う。最後に第6節で、分析結果から得られた知見を整理し、それらに理論的考察を加えていく。

2. 商業科の変遷と現状

2.1. 経済変動からみる商業科の変遷と現状

1963年の経済審議会人的能力部会答申「経済発展における人的能力開発の課題と対策」（以下、経済審六三答申）において、当時の職業（専門）学科高校は大きく性格づけられたといえる。それは、大学・（工業）高校・職業訓練機関の全面にわたる「産学協同」の拡充・推進を提起するとともに、「ハイタレント＝マンパワー」の養成ともからめながら、「能力主義」に基づく社会と学校制度の大がかりな再編の必要を提起した（西本 2004, p.166）。

このような、産業界の要請に応じた職業学科の拡充と推進といった教育改革は、子どもたちの進路を早期に制限する学校制度という点で、差別的な教育としてしばしば批判を受けた（例えば、佐々木 1976、汐見 1994 など）。しかし、高校教育のレリバンズという観点からみれば、現在よりも「優れた」時代だったといえる。右肩上がりに成長する経済下では、量的にも質的にも人材が求められ、そして高校教育を受けた団塊の世代がそれを満たしたのである。

経済審六三答申における高校教育の増設と多様化・細分化は工業高校が中心であったが、商業高校も十分恩恵にあずかった。以下では、高度成長期とバブル景気を軸として、番場（2010, pp.144－146）が整理した商業高校の4つの段階（フェーズ）を詳しく見ていく。

まず、第一フェーズは、戦後から高度成長期までの時期である。この時期、商業科への進学者は家業としての商店の跡継ぎや商店等の事務の重要な担い手として期待され、一定のステータスを維持していた。また、当該地域にある有力企業への就職者、地方公務員や地域の中小企業向けの金融機関としての信用金庫・信用組合などへの就職者も多かったという。この頃の、商業科卒業者は、地域経済を人材供給において支えていたのである。

第二フェーズは、高度経済成長期である。卒業者は企業の販売員や企業の営業担当者・事務職員として重宝された。この時期、第一フェーズほどのステータスはなくなったものの、即戦力として、卒業者は社会において一定の優位的な地位を占めていた。経済審六三答申は、この時期のものである。職業レリバンスを質的にも量的にも満たしていたという意味において、商業高校の「全盛期」だったといえる。

しかし、第三フェーズ、すなわち、高度成長期の終焉からバブル期になると事態は変わる。商業科の衰退は急激に進み、高等学校全体の序列化された階層のなかにおいて商業高校は低く位置づく。卒業後も、商業科で学んだ知識を生かせる職業に就くとは限らない状況もあらわれる。

この頃を境に、スーパーマーケットやコンビニエンスストアが増加する一方で家族経営の小売店が減少する。同時に、高学歴化によって、大学生ないし大卒者が増加したため、スーパーマーケットやコンビニエンスストアの従業員には、大学生アルバイトや主婦パートが割り当てられ、経営マネジメントは大卒者が担うようになったという（番場 2010、p.90）。バブル期だったため、就職率の落ち込みはなかったが、それは商業科に限ったことではなかった。つまり、この段において、高等学校商業教育と労働市場のレリバンスはほとんどなくなったといえる。

第四フェーズは、1990年代から現在までに続く時期である。この時期になると、少子化のなかで、商業科卒業者をターゲットとして学生を確保したい大学・短大が増加してくる。それに対応するように、例えば、東京都立太田桜台高校や千早高校のように、ビジネス教育を打ち出し、進学型商業教育を重点的に行う高校も登場するようになる⁽¹⁾。

工業高校では相対的に職場とのレリバンスが保たれているという（斉藤・田中・依田 2005、p.213）が、以上の番場（2010）の整理を概観すると、高度成長期の終焉とともに商業科はその優位性を主張できなくなったことがわかる。約 30 年に亘る商業高校における困難の根深さが確認できよう。

2.2. 学校基本調査からみる商業科の変遷と現状

ここでは、学校基本調査から商業科の変化を確認しよう。

表 6-1 は、1980 年から 2010 年までの 30 年間の学科別の進路を 5 年ごとにまとめたものである。商業科の変化の傾向をとらえやすいように、普通科と工業科も掲載した。これを見ると、全体としての大学等進学率の上昇と就職率の低下わかる。次に学科別にその傾

向を確認すると、普通科と商業科の大学等進学率が30年間で約20ポイント増加しているのに対し、工業科では10ポイント程度に留まる。また、専門・各種学校進学率においては、商業科は普通科と工業科よりも10ポイント前後高い。1980年の商業科と工業科の進学率・就職率が同程度だったことから、商業科は時代とともに普通科と工業科の中間的なポジションへと変化してきていることがわかる。

表 6-1. 学科別進路の推移

	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年
大学等進学率							
全体	32.5%	31.0%	31.0%	38.1%	45.7%	47.9%	55.1%
普通科	43.0%	39.9%	38.1%	46.1%	53.9%	56.2%	64.0%
商業科	8.6%	6.9%	8.2%	13.1%	19.6%	21.7%	28.9%
工業科	9.4%	7.5%	6.4%	8.8%	15.0%	17.4%	19.2%
専各進学率							
全体	—	—	—	—	17.3%	19.2%	15.9%
普通科	—	—	—	—	16.4%	18.0%	14.1%
商業科	—	—	—	—	22.3%	26.7%	25.5%
工業科	—	—	—	—	18.1%	19.4%	16.0%
就職率							
全体	41.8%	40.3%	34.6%	25.1%	18.3%	17.1%	15.5%
普通科	25.1%	25.4%	21.6%	13.9%	9.4%	8.5%	7.2%
商業科	80.6%	79.7%	74.4%	57.6%	43.8%	41.1%	37.3%
工業科	80.0%	81.4%	78.9%	68.0%	55.1%	54.2%	57.4%

1)学校基本調査各年度より作成

2)全日制のみ対象

それでは、進学者が増加する一方で、商業科から就職した者はどのような職種に就いてきたのだろうか。表 6-2 が商業科就職者の推移である。数値の変化が大きいセルには網掛けをしている。この30年間で低下したのは、卸売業・郵送業、金融業・保険業である。特に金融業・保険業については、1995年頃には就職者全体の4%程度で、ほとんどが金融関係の職に就けないことがわかる。反対に、製造業等とサービス業が大きく増加し、その2つのカテゴリーで就職者全体の7割を占めている。このように就く職種の推移を見ても、商業科を卒業したことの優位性は低下の一途を辿っていることがわかる。

以上の学校基本調査の数値から、①商業科が「準進学校」へと変貌していること、②就職者の多くが製造業等やサービス業に参入し、金融関係への職への参入者はほとんどいなくなっているという現状が確認できよう。

表 6-2. 商業科卒業の就職者の産業

	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年	変化の傾向
農林漁業（計）	0.4%	0.2%	0.2%	0.2%	0.4%	0.4%	0.6%	
製造・建設・ 鉱業・電気ガス（計）	26.1%	34.7%	34.2%	33.2%	33.1%	35.4%	37.6%	→上昇
情報通信業						1.7%	1.8%	
運輸業・郵送業	3.6%	3.8%	4.2%	4.5%	4.2%	4.5%	5.8%	
卸売業・小売業	37.7%	33.7%	31.6%	29.7%	27.2%	23.1%	23.1%	→低下
金融業・保険業	16.0%	9.3%	8.8%	4.7%	3.4%	3.3%	3.8%	→低下
不動産業・物品賃貸業	0.2%	0.2%	0.3%	0.3%	0.4%	0.3%	0.8%	
サービス（計）	12.6%	15.4%	17.9%	24.3%	28.1%	27.6%	34.7%	→上昇
その他（計）	3.4%	2.7%	2.8%	3.1%	3.2%	3.6%	4.3%	

学校基本調査各年度より作成

2.3. 分析課題の設定

ここまで、文献および学校基本調査の整理から、商業科（高校）の約 30 年に亘る根深い困難を確認してきた。これらの現状を受け、ここでは本章の分析課題を設定する。

第一に、小学科に焦点を当てた商業科内での進路分化の分析である。文献整理や学校基本調査の検討から、商業科（高校）の変化を概観することはできた。とはいえ、地方県においてより顕著だが、商業高校は地域住民にとって、「就職高校」としてのチャーターを維持している。そのため、従来の就職希望者と増加する進学希望者の両方を対象とした進路指導が必要とされている。本章では、試験的に小学科がその役割を担っているという仮説から分析を試みる。

元々トラッキングは、学校内で履修するカリキュラムのパターンによって進路選択が制限されるメカニズムの存在を指摘した概念（Rosenbaum 1976、Oakes 1985）だが、日本のトラッキング研究は、ほとんどが高校間を対象とした教育達成の格差に注目してきた（藤田 1980、岩木・耳塚編 1983 など）。また、学校内での進路分化への注目も、社会階層（耳塚 2000a、朴澤 2006 など）、あるいは、学内成績や習熟度別学級（菊池 1988、耳塚 1990b など）といった学力による分化を対象としてきた。

小学科の設置は、当初、細分化された職業に細分化された高等学校専門教育を受けた生徒の参入を可能にすることを目指したものであった（番場 2010）。しかし、例えば、特に英語を重視する国際科のカリキュラムは、高学歴化の煽りを受け、相対的に進学用の学習と結びつきやすいことが予想される。小学科に着目することで、学校内の進路分化という点で、トラッキング研究に新たな知見を付け加えることができるだろう。

第二に、商業科生の「地元志向」による進路分化を検討する。それというのも、従来の教育社会学は、地場産業とのつながりから専門学科（高校）を検討するという視点を欠いてきた。このような、「地域と高校」への注目は、吉川（2001）のいう「ローカル・トラック」研究に連なる。吉川は、地方高校生の進路選択には、メリトクラティックな価値観とは異なる各地域特有のパターンがあると指摘している。吉川（2001）は進学校の卒業者の地域移動から「ローカル・トラック」理論を提唱するが、「地域と高校」への関係は、普通科高校よりも専門高校の方が密接だと考えられる。

以上の2つの分析課題に共通するテーマには、「ノンメリトクラティックな進路選択」を指摘することができる。教育社会学は伝統的に、社会的資源の配分の多寡が学校を通じた選抜によって決定されるという視点から教育と選抜への関心を払ってきた。すなわち、学力や学校での成績が高いほど、社会的資源の獲得に向けた野心（＝アスピレーション）が高く、より高いレベルの教育を求めると位置づけてきたのである（例えば、Karabel and Halsey(Eds) 1977=1980、天野 1982、竹内 1995a など）。しかし、現時充足的な価値（藤田 1997）や自己実現志向（片瀬 2005）といった価値観の多様化がみられる現在では、決して学力をベースとした進路選択が行われているとはいえない。さらに、富江（1997）は、高校階層の中位から下位に位置する高校生の進路選択は、「地元」であることを重視するという。このような問題関心から、本章では、小学科と地元志向という2点に着目することによって、商業科生のノンメリトクラティックな進路形成のメカニズムを明らかにしていく。

3. データと方法

3.1. データの概要

ここでは、本章のデータと方法を記述していく。本章では、高校生の質問紙調査および進路指導教員への聴き取り調査から得られたデータの分析から、商業科生の進路形成メカニズムを明らかにしていくが、本章では、大きく2つの分析の手順を展開していく。

主に分析の対象とするのは、中部地方に所在する2つの商業科である^②。当該県は、製造関係の企業誘致に成功した工業県であるため、地場産業と専門高校という観点では、工業高校とのつながりが強い。そのため、商業科から製造職への参入も多く、また進学者も多い、現代の「典型的」な商業科（高校）だといえる。

質問紙調査は、2011年9月～2012年2月に、12の高校で、教室での集団自記式で実施した。全体での有効回答票数は1972人であった。県内の2つの学区をほぼ網羅的に調査した。協力を得られた学科とそれぞれの回答者数は、普通科＝834人、商業科＝235人、工業科＝424人、農業科＝177人、水産科＝88人、家庭科77人、総合学科＝98人、福祉科39人である⁽³⁾。

メインの分析対象となる2つの商業高校は、いずれも商業科、情報科、国際科の3つの小学科を持っている⁽⁴⁾。また、回答した生徒の選定については次のようである。例えば1学年に5クラスの商業高校は、商業科3クラス、情報科1クラス、国際科1クラスという構成となっていることが多い。本章では、各学科1クラスの調査を依頼し、調査対象の商業高校2校から、商業科2クラス（78人）、情報科2クラス（78人）、国際科2クラスずつ（79人）のデータを回収することができた⁽⁵⁾。

聴き取り調査は、進路指導主任を中心として、商業高校で3名、工業高校で3名の調査校に長期に勤めている教員および管理職に対して行った⁽⁶⁾。

3.2.方法と手続き

すでに述べたが、本章の分析は、商業科における進路分化を①小学科と②地元志向という2点に注目することで、ノンメリトクラティックな進路選択を指摘することを目的としている。

第一の分析は、ややデータの記述に留まるが、他学科との比較から商業科の特徴を明らかにしていく。比較するのは、希望進路、保護者が生徒に期待する希望進路に加え、「部活動への参加は、進路の決定に役立つと思う」、「服装や行動が乱れで、高校のイメージが悪くなると自分たちの進路が不利になると思う」、「これまでの卒業生が築き上げてきた進路実績を自分たちで壊したくない」、「高校を選ぶ時に、高校の大学推薦枠に魅力を感じた」といった専門学科を中心として準備した各項目である（それぞれ4件法）。

第二に、商業科の分析のひとつめでは、進学希望の規定要因を小学科に焦点を当て、二項ロジスティック回帰分析を用いて分析していく。性別、高校での成績や保護者の学歴期待⁽⁷⁾に比して、所属する小学科は進路選択にどのように規定しているのかを明らかにする。

さらに第二の分析を深め、ノンメリトクラティックな進路分化を検討するため、進学希望者と就職希望者が進路選択に際して重視する事柄を、クロス集計およびカイ二乗検定によって分析する。

希望進路は、大学、短大、専門・各種学校を1つのカテゴリーとした「進学希望」と「就職希望」の2つのカテゴリーを用い、その他は欠損値とした。高校での成績は、最小値1～最大値10とした生徒本人の自己評価を用いる^⑧。性別は、男子=1、女子=0とした男子ダミーで、保護者の進学期待は、保護者が進学することを期待している（と思っている）かどうかを高校生に尋ねた結果からダミー変数化して用いる。

進路選択および働く時に重視する事柄を尋ねた質問項目は、①高校卒業後の進路を選ぶ際に考える事柄（4件法、項目：「自分の興味や関心」、「自分の成績」、「家庭の状況」、「現在の学校のコース」、「将来の職業とのつながり」、「進学する学校や就く職の地位が高いこと」、「実家から近いこと（地元であること）」）、②働く時に重視すること（5件法、項目：「高い収入を得ること」、「高い地位につくこと」、「打ち込めるものをもつこと」、「人並みに暮らすこと」、「趣味を楽しむこと」、「のんびり暮らすこと」、「周囲の人とうまくやっていくこと」、「仕事に生きること」）のそれぞれを用いる。

4. 商業科の特色

ここでは、他学科と比較した時の商業科の特色をいくつかの点から確認する。

まずは、表6-3で希望進路を確認しよう。国公立・私立合わせて大学進学希望率が一番高いのは、普通科だが、商業科はそれに次いで二番目に高い。短大や専門・各種学校まで含めると工業科以外の専門学科も進学希望者が多いものの、四年制大学に限定すると、商業科は相当に希望者が多いことがわかる。反対に、就職希望者については、普通科、商業科、福祉科以外の学科はすべて高い水準だといえる。つまり、生徒の希望進路の点で確認する限り、商業科は他の専門学科よりもかなり普通科に近いといえよう。

次に、保護者の希望進路を確認すると（表6-4）、保護者が進学を希望している割合は、普通科、福祉科、商業科、総合学科が3割を超えている。その一方で、保護者の就職希望が3割を超えないのは普通科と福祉科のみである。つまり、保護者の期待から見れば、商業科は、進学と就職の両方が期待されている学科ということになる。

最後に、進路と学校に対する意識を学科間で確認しよう（表6-5）。まず、「部活動への参加は、進路の決定に役立つと思う」、「服装や行動が乱れで、高校のイメージが悪くなると自分たちの進路が不利になると思う」、「これまでの卒業生が築き上げてきた進路実績を自分たちで壊したくない」といった項目を確認すると、普通科と総合学科に比して、専門

学科の割合が高い⁹⁾。専門学科での進路は、進学にせよ就職にせよ学校からの推薦によってなされるため、これらの項目が相対的に普通科よりも高くなるといえる。

ここで特に注目したいのは、「高校を選ぶ時に、高校の大学推薦枠に魅力を感じた」という項目である。商業科が最も高い数値である。工業科と比べると特にその数値の高さが際立っているのがわかる¹⁰⁾。

以上より、近年の商業科は、(1)生徒の希望進路の面では、普通科に近いということ、(2)保護者の希望進路の面では、進学と就職の両方を求められているということ、(3)学校への意識の面では、進路決定が推薦に依存する分だけ学校帰属的な意識が高く、入学時に大学推薦枠に惹かれて入学する層がいる、という3点がわかる。

表 6-3. 学科別、希望進路の比較

	普通科	商業に 関する学科	工業に 関する学科	農業に 関する学科	水産に 関する学科	家庭に 関する学科	総合学科	福祉に 関する学科
国公立四年制大学	47.9	12.1	2.6	1.2	0.0	0.0	4.2	5.1
私立四年制大学	14.8	18.2	2.9	1.2	1.2	2.6	4.2	7.7
短期大学	4.2	6.1	0.7	4.2	2.4	1.3	3.1	20.5
専門・各種学校	11.0	16.9	9.7	16.7	18.8	23.4	19.8	20.5
就職	7.1	27.3	61.8	51.2	50.6	49.4	40.6	25.6
家業を継ぐ	0.4	0.0	1.4	0.6	2.4	0.0	2.1	0.0
成績次第	7.1	7.8	10.7	12.5	10.6	6.5	9.4	10.3
就職はしない	3.7	4.8	1.0	3.6	0.0	3.9	2.1	2.6
進学はしない	2.5	5.2	8.3	8.3	9.4	9.1	8.3	5.1
その他	1.2	1.7	1.0	0.6	4.7	3.9	6.3	2.6
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
N	827	231	420	176	88	77	98	39

表 6-4. 学科別、保護者の希望進路の比較

	普通科	商業に 関する学科	工業に 関する学科	農業に 関する学科	水産に 関する学科	家庭に 関する学科	総合学科	福祉に 関する学科
進学することを強く希望	42.5	15.2	3.8	4.1	2.4	3.9	13.5	12.8
どちらかといえば進学することを希望	23.1	16.5	6.9	10.0	7.1	7.8	17.7	23.1
どちらかといえば就職することを希望	5.7	23.4	26.6	26.5	22.4	18.2	21.9	17.9
就職することを強く希望	3.0	10.0	27.3	20.0	34.1	14.3	15.6	7.7
あなたの判断のみに委ねている	25.6	35.1	35.4	39.4	34.1	55.8	31.3	38.5
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
N	827	231	420	176	88	77	98	39

表 6-5. 学科別、進路と学校意識の比較（該当者の%）

	普通科	商業に 関する学科	工業に 関する学科	農業に 関する学科	水産に 関する学科	家庭に 関する学科	総合学科	福祉に 関する学科
部活動への参加は、 進路の決定に役立つと思う	64.8	82.0	80.0	80.1	74.7	80.0	63.0	73.7
服装や行動が乱れて、高校のイメージが 悪くなると自分たちの進路が不利になると思う	57.4	83.3	76.2	75.0	71.6	66.7	63.4	82.1
これまでの卒業生が築き上げてきた 進路実績を自分たちで壊したくない	52.2	63.5	70.0	62.2	74.7	57.9	45.2	89.7
高校を選ぶ時に、 高校の大学推薦枠に魅力を感じた	13.8	27.9	12.1	11.6	21.8	5.3	23.7	15.4

5. 商業科の生徒の進路形成の分析

5.1. 質問紙調査データ分析

進学希望の規定要因を分析する前に、小学科の特徴を確認しておこう。表 6-6 では、男子比率、保護者の進学希望比率、高校および中学校での成績の自己評価の平均値（カッコ内は、標準偏差）を示した。これによれば、商業科と情報科に比べると、国際科は男子が少なく、保護者が進学を期待している生徒が多いことがわかる。高校での成績は、3つの小学科ともに、平均値はほぼ中央値に近く、標準偏差も 2.5 程度にまとまっている。中学時の成績については、国際科、情報科、商業科の順でやや高く、標準偏差も小さいという特徴がある。

次に、小学科別の希望進路である（表 6-7）。就職希望者の割合に注目すると、商業科で 39.0%、情報科で 35.5%、国際科で 7.7%となっており、国際科の就職希望者が顕著に少ないことがわかる。反対に、私立大学への進学希望者が国際科では多いが、短大や専各への進学希望者は小学科による差はほとんどないことがわかる。

以上より、商業科内での小学科間の特徴は、①女子が多いこと、②進学を期待する保護者の多さ、③中学時の成績がやや高いこと、④進学希望者が多い、という 4 点において国際科が商業科と情報科と差があるといえる。

表 6-6. 小学科間の特徴（カッコ内は、標準偏差）

	商業科		情報科		国際科	
男子の比率（%）	32.9	—	35.5	—	16.5	—
保護者の進学希望比率（%）	22.1	—	21.3	—	50.6	—
高校での成績（平均値、標準偏差）	5.3	(2.4)	5.2	(2.4)	5.5	(2.5)
中学校での成績（平均値、標準偏差）	6.2	(2.2)	6.5	(2.1)	6.8	(1.8)

表 6-7. 小学科別の希望進路

	商業科	情報科	国際科	全体
国公立四年制大学	7.8	13.2	15.4	12.1
私立四年制大学	10.4	5.3	38.5	18.2
短期大学	5.2	6.6	6.4	6.1
専門・各種学校	16.9	15.8	17.9	16.9
就職	39.0	35.5	7.7	27.3
成績次第	13.0	7.9	2.6	7.8
就職はしない	1.3	5.3	7.7	4.8
進学はしない	6.5	5.3	3.8	5.2
その他	0.0	5.3	0.0	1.7
合計	100.0	100.0	100.0	100.0
N	77	76	78	231

表 6-8 は、進学希望=1、就職希望=0 とした従属変数に対し、独立変数に性別、高校成績、保護者の進学期待、所属小学科を投入した二項ロジスティック回帰分析の結果である⁽¹¹⁾。統計的に有意な変数は、保護者の進学希望ダミーと国際科ダミーである（いずれも、 $p<.01$ ）。つまり、他の要因を統制しても、所属する小学科が進路をする規定要因となるということである。

オッズ比（EXP(B)）から結果を解釈すると、保護者が進学を期待していると考えている生徒は、そのでない生徒に比べて進学希望になる確率のオッズが約 23.9 倍高まるということ、国際科に所属している生徒は、商業科に所属している生徒よりも進学を希望する確率のオッズが約 8.4 倍高まるということを意味している。

この分析における示唆的な結果は、高校成績が有意でないことである。つまり、商業科生の進学希望か就職希望かの分化には校内での成績は関係しないということである。

表 6-8. 進学希望の規定要因（二項ロジスティック回帰分析）

	B	Exp(B)
男子ダミー	- 0.309	0.734
高校成績	0.021	1.021
保護者進学希望ダミー	3.176 ***	23.951
情報科ダミー (ref.商業科)	0.084	1.088
国際科ダミー (ref.商業科)	2.134 ***	8.449
定数	- 0.475	0.622
- 2 対数尤度	67.746	
χ^2 (d.f.=5)	159.190 ***	
Cox & Snell	0.315	
Nagelkerke	0.439	
N	181	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

では、就職希望者と進学希望者では、進路選択ないし職業選択についてどのような意識の差異があるのだろうか。結果は表 6-9 に示した。

希望進路別に、「進路選択に際して考慮すること」の各項目の数値の差を分析すると、統計的に有意差がみられたのは、「自分の興味や関心」、「将来の職業とのつながり」、「実家から近いこと」の 3 つであった。つまり、進学を希望する生徒ほど、自分の興味や関心や将来の職業とのつながりから進路選択し、就職を希望する生徒ほど実家から近いことを重視した進路選択を行うということである。

その一方で、「働くに際し考慮すること」については、すべての項目において就職希望者と進学希望者に数値の差はなかった。この結果は、進学を希望する生徒ほど高い収入や地位を望むというメリトクラティックな価値志向に基づいた進路選択がなされていないことを示唆している。

表 6-9. 希望進路別、価値志向（数値は、該当者の％）

		希望進路	
		就職 (N=63)	進学 (N=123)
進路選択に際し 考慮すること	自分の興味や関心	88.7	99.2 ***
	自分の成績	91.9	89.4
	家庭の状況	67.7	67.5
	現在の学校のコース	62.3	57.7
	将来の職業とのつながり	65.0	89.4 **
	進学する学校や職の地位が高いこと	48.3	47.5
	実家から近いこと	57.4	35.0 **
働くに際し 考慮すること	高い収入を得ること	87.3	87.4
	高い地位につくこと	44.4	40.3
	打ち込めるものをもつこと	85.7	89.1
	人並みに暮らすこと	88.7	89.9
	趣味を楽しむこと	88.9	89.9
	のんびり暮らすこと	74.6	86.6
	周囲の人とうまくやっていくこと	96.8	97.5
	仕事に生きること	36.5	36.1
注)統計量は、カイ二乗検定より算出		*p<.05 **p<.01 ***p<.001	

5.2. 聴き取り調査データ分析：就職希望者の地元志向と事務職志向

以上の分析結果のひとつに、就職希望者が進学希望者に比して、地元志向であることが示唆された。ここでは、就職希望者がどのようなことを重視した進路選択を行うのかを教員へのインタビューデータの結果からみていこう。進路指導教諭は、以下のようにいう。

就職には、何を優先順位で上のほうに持ってくるかといったときに、「地元で」というのが優先順位として上に来ることが多いです。これは、女の子でも男の子でも一緒です。その結果が、この（資料の製造職就職者数を指して）数値にも表れていると思います。

家から通えるというのが結構大きいポイントみたいです。「せっかく、あそこの枠があるのに」という状態でも、少し遠いという理由で行かないということもあります。

この聴き取り結果より、商業科生の就職者のプライオリティが地元であることがわかる。そして、進路選択の第二のポイントとして、企業の規模や威信ではなく、事務職であるかどうかを重視するということがあるようである。

例えば、〇〇とか△△とか（いずれも全国的に有名な工業系企業）で求人がありましたが、なかなか希望者が出ません。名前の通った一流企業というより、事務職という希望があるので、製造に興味を示す子が結構少ないです。

このような地元志向が根強い一方で、調査した 2 つの商業高校の進路指導教諭は、今後の懸案事項として、製造職への就職者の減少と事務職枠の確保を挙げている。商業科の学習内容と就職先のレリバンスでは、どうしても商業科から製造職への就職は、職に就いた後の待遇にも不利に働く。例えば、工業科の進路指導教諭は以下のようにいう。

製造職の場合に、なぜ工業高校は就職が有利なのかというと、生産のラインではなくて、例えば生産のメンテナンス、ものをさわるのではなくて、製造の機械の面倒を見られるというところが、工業高校が有利なところだと思います。

確かに、生産機械そのものの製造やメンテナンスということになれば、どれだけ難易度の高い商業や情報処理に関する資格を取得したところで、工業高校出身者には全くかなわないことになる。

それでは、今後の商業科（高校）について、現場の教員はどのように考えているのだろうか。参考意見のひとつとしての記述に留まるが、以下に掲載しておこう。

各学校によってだいぶ違うと思いますし、既に進学校化している商業高校が、全国にはいくつもあります。進学者のほうで圧倒的に多いとか、かなり上位の難関大学にたくさん送り込むことがあります。地域的な特性もあると思います。ただ、「本校は」となった場合は、進学者ばかりが集まってきません。進学したければ、行ける普通高校が周りにいくつもあります。その中で進学校としてやっていくかというところ、そこはあまり可能性はないでしょう。この地域では、やはり就職者の受け皿として、そういう部分がどうしても核として残ってきます。その子たちは、やはり地域に残りたいです。地域の企業も、本校から採りたいというところは続いていくだろうと思います。保護者も、全部ではありませんが、本校に来たからには就職させたいという人も根強い

ます。半分弱ぐらいは、就職させようと思って来させているでしょうし、半分弱ぐらいは、進学させたいと思って来させていると思います。

この聴き取りからわかるのは、現在の商業科（高校）の機能は、高等学校商業教育というコンテンツと就く職業のレリバンスによって保たれているのではなく、むしろ高校そのものの持つ「伝統」によって就職機能を維持させているということである。

6. 知見と考察

本章では、商業科生の進路形成を、①小学科と②地元志向に焦点を当てて分析してきた。分析より得られた知見は以下の3点である。

第一に、他学科との比較から商業科の特色を確認したところ、(1)生徒の希望進路の面では普通科に近く、(2)保護者の希望進路の面では、進学と就職の両方を求められており、(3)入学時には、大学推薦枠に惹かれて入学する層がいる、ということがわかった。

第二に、小学科に着目して、商業科生の進路分化に対してもっとも強い規定要因は保護者の進学期待であった。しかし、保護者の進学期待を統制しても、国際科に所属している生徒ほど進学を希望するようになる、すなわち所属する小学科によって進路が規定されていることがわかった。また、高校での成績では進路分化しないことも明らかになった。

第三に、就職希望者と進学希望者とで進路選択における価値志向を比較した。その結果、(1)進学を希望する生徒ほど、自分の興味や関心や将来の職業とのつながりから進路選択し、(2)就職を希望する生徒ほど実家から近いことを重視した進路選択を行うということが明らかになった。その一方で、「高い収入を得る」や「高い地位につく」といった、いわゆる「上昇志向」的な価値観は、希望進路による差異がみられなかった。

また、教師への聴き取りによれば、就職希望者は、第一に地元であることを、第二に事務職であることを重視し、たとえ有名企業であっても、製造職であるという理由や「少し遠い」といった理由で希望しないという。

それでは、これらの知見は、これまで蓄積されてきた研究に対して、どのような貢献ができるだろうか。

第一に、進路形成機能という点では、商業科は相当に普通科に近いということである。それというのも、生徒の大学進学希望率が高いだけでなく、他の専門学科よりも相対的に

保護者も進学を希望している。さらに、それだけではなく、入学時において、商業科の持つ大学推薦枠を見て、戦略的に入学する層もいるのである。日本の高校は階層構造を成しており、専門学科はその底辺部分に位置づけられることが多かった。それゆえに、中学生にとっても、どのようなランク・タイプの高校へ入学できるかが教育アスピレーションを規定し、その際には、職業系トラックへの進学希望者の教育アスピレーションは冷却されていると指摘されてきた (Kariya and Rosebaum 1987、Nakanishi 2011)。しかし、近年のトラッキングのゆらぎによって、商業科は相対的に進学することが期待できるトラックへ変容したのである。

第二に、商業科における小学科に着目したことで、トラッキング研究に新たな知見を付け加えることができるだろう。従来のトラッキング研究は、教育達成の高校間格差へ関心を払ってきたため、専門高校（学科）はひとつのカテゴリーとされることが多かった（例えば、岩木・耳塚編 1983、樋田ほか編 2000）。また、学校内での進路分化への視点も、社会階層による分化（耳塚 2000a、朴澤 2006）、あるいは学校内成績や習熟度別学級（岩木・耳塚編 1983、菊池 1988 など）といった学力による分化が中心的だった。そのため、細分化された専門高校内部の小学科の持つ進路分化機能を見過ごしてきたといえよう。

元来、小学科は高度経済成長期に、専門高校（学科）の教育を細分化し、産業とのかわりを密接にすることを目的として設置された。しかし、産業界は商業科卒業者に高い専門性を期待しておらず、実際には細分化された小学科に見合うような求人はなかった（番場 2010、p.69）。おざなりにされたかのように思えた小学科であったが、高卒就職難と中等後教育拡大期を迎え、「進路多様校化」した現代の商業科においては、学校内部におけるトラッキングに類似した機能を果たすようになっているのである。

第三に、「地域と高校」という視点から商業科へ着目することにより、ノンメリトクラティックな価値志向による進路選択という側面が明らかになった。富江（1997）は、地方における高校ランクの中位から下位の高校では、地元志向による進路選択が見られるという。ローカリティを優先した進路形成、すなわちローカル・トラック（吉川 2001）である。さらに、本章では、商業科を対象とすることによって、地元志向と事務職志向という2つの価値志向を抽出することができた。

伝統的な教育社会学は、社会的資源の配分の多寡が学校を通じた選抜によって決定されるという視点から教育と選抜への関心を払ってきた（例えば、Karabel and Halsey(Eds) 1977=1980、天野 1982、竹内 1995a など）。しかし、本章で得られた分析の結果によれ

ば、地方商業科生は、①高校内での成績が良いから進学を希望するわけではないということ、②また、就職希望者も有名企業への就職というより、「地理的に近い」ことや「事務職」であることを優先するという。これら 2 つの知見は、ノンメリトクラティックな価値志向によって進路を選択していることが示唆しているといえよう。

現代の商業科が果たしている機能は、いわゆる「銘柄大学」への進学者数を競う普通科進学校や、中堅技術者養成を目指す工業高校(厳密な意味で機能しているとはいえない)のような「専門」に特化した高校教育ではなく、進路多様性に対応した教育であることがわかる。つまり、「伝統」という名の下に、就職希望者の受け皿として機能する一方で、高学歴化の煽りを受けながら進学実績を向上させていくという 2 つの機能を担わなければならないのである。

番場(2010、pp.208-213)によれば、今後の商業科の展望は、純粋な職業準備学校ではなく、①進路多様性を強調するか、②普通教育としての商業に関する教育を専門教育とするかの 2 つだという。学校基本調査(表 6-2)で確認したように、実態としての商業科生は、製造職を敬遠し、事務職(かつ地元)を志向しているにも関わらず、製造関係の職への就職率は上昇傾向にある。このことは、商業科の実態と「産業界の要請」がマッチしていないことを意味している。商業科は、進学用科目の増加といったカリキュラム編成だけではなく、学校数の減少を含めた再編成が必要になるかもしれない。今後も、進路多様性を前提とした商業科の実態に関する研究が蓄積されていくべきであろう。

〈注〉

- (1) 太田桜台高校 HP (<http://www.oota-sakuradai-h.metro.tokyo.jp/>) および千早高校 HP (<http://www.chihaya-h.metro.tokyo.jp/>) を参照した(平成 23 年 12 月 11 日閲覧)。
- (2) 調査の対象となった地域は、県レベルでいえば工業誘致に成功しているため、製造関係も事務関係もそれなりの雇用は存在している。しかし、調査エリアに限っていえば、工業誘致も県内の他の地域に比べれば成功しているとはいえないが、事務職への参入が難しい。また、中部地方の経済・産業の中心である愛知県へのアクセスも悪い。そのため、商業科出身者は、就職であれ進学であれ、「地元」を志向するほど進路選択が難しくなるという特徴を有している。
- (3) 前章までの分析では、学校間の差異の変容に焦点を当ててきた。しかし、ここでの分析は、学校内の進路分化の要因として小学科に注目するため、ここでのカテゴリーは、

いくつかの学校間の差を表してはいない。しかし、商業科と工業科については、独立した商業高校と工業高校 2 校ずつである。

- (4) 無回答・非該当は欠損値として扱った。
- (5) ただし、両高校において名称は異なっているが、機能的には類似しているといえる。
そのため、便宜的に「商業科」、「情報科」、「国際科」と呼ぶことにする。
- (6) 聴き取り調査は、関係教員の許可をいただいた上、IC レコーダーで録音し、文字に起こした。本研究におけるインタビューデータの掲載については、プライバシーに関わる点を内容が変化しない程度に改変していることを理解されたい。
- (7) 学校での集団自記式調査だったため、親学歴等の社会階層項目の質問が許可されなかった。よって、直接的な保護者の希望進路を階層項目の指標として用いる。
- (8) 高校での成績は、所属するクラス、すなわち小学科での成績を答えてもらった。厳密に測定された学力・成績ではないため、数値の客観性には疑問が残るかもしれない。しかし、生徒は教師や生徒集団内においてレッテルを貼られることによって、かなり正確に自分の学業的な位置を把握しているという (Ballantine and Hammack 2009=2011、訳書 p.329)。よって、生徒の成績の自己評価を尋ねることで、この変数は、成績の指標としてある程度は妥当性を持つと考えられる。
- (9) 総合学科についての結果は、調査対象となった総合学科は、2000 年頃まで普通科だったことに起因していると思われる。
- (10) 本論では、「高校を選ぶ時に、高校の大学推薦枠に魅力を感じた」について全体の値を示したが、大学進学希望者に限定した数値を表 6-10 に示すので、必要に応じて参照されたい。ここでも、商業科の値が高いことがわかる。

また、総合学科が相当高い数値に見えるが、元々の大学進学希望者が 7 名で、この項目の該当者が 3 名と、基数が小さいためパーセントの値が大きいことに注意されたい。

表 6-10. 学科別、大学進学希望者のみの「高校を選ぶ時に、高校の大学推薦枠に魅力を感じた」の該当%

	普通科	商業に 関する学科	工業に 関する学科	農業に 関する学科	水産に 関する学科	家庭に 関する学科	総合学科	福祉に 関する学科
高校を選ぶ時に、 高校の大学推薦枠に魅力を感じた	13.5	37.1	17.4	0.0	0.0	0.0	42.9	0.0

(11) 変数間の多重共線性をロジスティック回帰分析に使用した変数の相関係数を表 6-11 に示す。必要に応じて参照されたい。

表 6-11.ロジスティック回帰分析に使用した変数の相関係数

	進学希望 ダミー	男子 ダミー	高校成績	保護者進学 希望ダミー	商業科 ダミー	情報科 ダミー
進学希望ダミー	—					
男子ダミー	-.021	—				
高校成績	.012	-.120	—			
保護者進学希望ダミー	.459 ***	.121	.011	—		
商業科ダミー	-.226 **	.074	-.013	-.145 *	—	
情報科ダミー	-.180 *	.115	-.041	-.153 *	-.497 ***	—
国際科ダミー	.395 ***	-.187 **	.054	.295 ***	-.502 ***	-.502 ***

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

終章：日本型トラッキングシステムの変容：トラッキング構造の二極化による学歴格差再生産機能

ここまで、日本型トラッキングシステムの構造が二極化し、その機能が人々の学歴格差を再生産するようになっていることを明らかにしてきた。それは、従来の社会的格差に関する研究（例えば、橘木 1998、佐藤 2000、吉川 2006 など）が、出身社会階層の格差化にともない到達社会階層（学歴や職業達成）も格差化するという指摘に留まり、教育システム自体の変容に関心の外へ置いてきたためである。そこで本研究では、現代の格差社会におけるトラッキングシステムの構造と機能を示し、出身社会階層格差と到達社会階層格差をつなぐ教育システムを現代版に描き直すことを目的としてきたのである。

本章では、第 1 節において、第 2 章から第 6 章までの 5 つの分析から得られた知見を要約して、現代型トラッキングシステムの実態を提示する。第 2 節では、本研究で得られた知見が、従来のトラッキング研究に対してどのように貢献しているかを検討する。最後に、第 3 節では、この研究の今後の課題を述べて結びとする。

1. 知見の要約と現代型トラッキングシステムの実態

1.1. 知見の要約

第 2 章では、少子化にともなう高校定員の不均等な減少を背景としたトラックへの選抜・配分メカニズムの変容を、中学 3 年時成績と社会階層（親学歴）の視点から分析した。その結果、得られた知見は以下の 2 点にまとめられる。

① 中学 3 年時の成績の規定要因は、社会階層（親学歴）の影響が強まったことが示唆された。重回帰分析において、1997 年時点では、母学歴が中学 3 年時成績に与える影響は統計的に有意ではなかった。しかし、2009 年時点では、母親が大卒であるかどうかによって中学 3 年時の成績が決まるようになったのである。

② 高校トラックと高校生の出身社会階層（親学歴）は関連を強めた。所属トラックが普通科か専門学科かの分化についての変化は、父学歴の影響が母学歴へと変わったことに留まる。しかし、普通科内でどのランクの高校に所属するかを分析した結果、トップ校・セカンド校とサード校の間で、社会階層（親学歴）による二極化が明らかになった。さらに

いえば、トップ校へ所属するための要因は、中学校での成績の効果が相対的に弱まり、社会階層（親学歴）の効果が強まったのである。

1990年代後半から大規模な少子化が問題となる中、高校は1校あたりの生徒数を減少させることによって、高校数を維持してきた。しかし、そのような入学定員の減少は、どの高校でも均等に行われたわけではなく、地域で最も威信の高い高校の定員を相対的に多くしてきた。このことから、上位の高校への進学機会は増し、高校トラックと社会階層の関係が平準化されることが期待された。しかし、それにも関わらず、高校トラックと社会階層（親学歴）の関連は強まったばかりか、中学時成績の重要性も相対的に低下したのである。

第3章では、高校生のアスピレーションを(1)希望教育年数と(2)より高いランクの大学を目指しているかの2つのレベルに分け、その形成メカニズムの変容を分析した。得られた知見は以下の4点である。

①トラック別の希望進路は、セカンド校では国公立大学希望者の割合が上昇したが、サード校は私立大学志望と専門・各種学校への進学希望者の割合が約10年間でほぼ横ばいとなっており、セカンド校とサード校の間で二極化が見られた。

②高校生のアスピレーションは、1997年には学歴社会を肯定する意識によって、所属トラックに無関係にアスピレーションを規定されていた。しかし2009年になると、アスピレーションを加熱する要因が、学歴社会肯定感ではなく、下位トラックの生徒の社会不安感へとシフトした。

③大学進学希望者の進学意識の変化を明らかにした。「とりあえず進学志向」、「高偏差値志向」と名付けた2つの進学意識の各トラックでの変化は、(1)トップ校・セカンド校では、「とりあえず進学志向」が低下し、「高偏差値志向」が高まった。(2)一方で、サード校では「とりあえず進学志向」が高まり、「高偏差値志向」の数値は約10年前からほぼ横ばいであった。ここでも、セカンド校とサード校の二極化が見られた。

④御破算意識が、セカンド校とサード校の間で二極化された。トーナメントの初戦である高校入試の結果、セカンド校へと入学した生徒は、約10年前よりも大学入試というリターンマッチ(=御破算)に向けたアスピレーションが高まったことが示唆される。一方、セカンド校との相対的な意味ではあるが、サード校の生徒は、約10年前よりもリターンマッチへの意欲を持ちにくくなっているといえよう。

以上の分析結果はアスピレーションを規定する要因として、トラックスそのものの効果が強まったことを意味する。竹内（1995a）は、日本の高校生のアスピレーションを加熱・冷却するメカニズムが、傾斜的な高校教育システムにあると指摘した。しかし、第4章での分析結果では、アスピレーションの加熱／冷却システムとしてのトラッキングが、傾斜的ではなく二極化したことが示唆された。

第4章では、2000年代の高校教育研究が、マス選抜に集中していたため、エリート選抜の存立メカニズムの変化を明らかにした。得られた知見は、以下の3点である。

①エリートセクターは、少子化にともなう入学定員を縮小しなかったため、入学者の学力水準は低下・多様化した。

②学習時間は、1990年代に減少したが、再び増加している。このことは、一見すると学業コミットメントへの回復を意味するように思える。

③しかし、学力の多様化と学業コミットメントの回復という相反する現象を可能にしたのは、教師のきめ細やかで個別的な学習指導の結果だった。

かつて Rohlen は、日本の高校生文化の源が大学入試にあるとし、仮に大学入試がなくなれば、普通科高校の生徒は勤勉性が維持できないのではないかと示唆した（Rohlen 1983 = 1988, p.340）。しかし、大学入試という「エンジン」に代わり、トップ校の生徒の勤勉性（学習コミットメント）を補償したのは、教師のきめ細やかな学習指導であったのである。

第5章では、商業科と工業科を対比しながら、入学者の社会階層、学科内での指導の特色の変化を分析し、それらが専門学科の生徒の進路形成にどのような変貌を遂げながら関連しているかを分析した。得られた知見は、以下の3点である。

①商業科の生徒は、工業科の生徒に比べて、父親の学歴が高くなっている。1990年代には、商業科と工業科の生徒の間で、父親の大卒率には大きな差はなかった。しかし2000年代になると、商業科には、工業科に比べると父親の学歴が高い生徒が多く在籍するようになったのである。職業系専門学科への配分において、社会階層（親学歴）の重要性が増していることが示唆される。

②高校内部での進路指導の特色を継時的に比較したところ、商業科は工業科よりも進学準備学科としての性格を強めている。商業科は工業科と比べると大学進学（希望）者が増

加しており、そのような進路の変化と同じくして、商業科では受験指導を相対的に多く実施するようになってきたのである。

③大学進学希望の規定要因を分析した結果、1997年には社会階層（父学歴）による分化がなされていたが、2009年には階層変数は有意ではなくなり、商業科トラックの変数が効果を強めていた。

以上の分析結果から、商業科と工業科は、インプット、スループット、アウトプットすべての点で差異化していることがわかる。工業科と比べると、商業科は父親の学歴が高い生徒が在籍し、受験指導を受け、大学進学するように変容しているのである。つまり、商業科が工業科とは異なったトラックを形成しているのである。

第6章では、第5章での結果を踏まえ、商業科の持つ現代的な機能と意義を、(1)進路意識の他学科との比較、(2)商業科における小学科、(3)地元志向に着目して検討した。得られた知見は以下の通りである。

①進路形成機能の点では、商業科は相当に普通科に近い。生徒の大学進学希望率が高いだけでなく、他の専門学科よりも相対的に保護者も進学を希望している。さらに、それだけではなく、入学時において、商業科の持つ大学推薦枠を見て、戦略的に入学する層もいるのである。近年のトラッキングのゆらぎによって、商業科は相対的に進学することが期待できるトラックへ変容したのである。

②商業科における小学科に着目したことで、トラッキング研究に新たな知見を付け加えることができた。元来、小学科は高度経済成長期に、専門高校（学科）の教育を細分化し、産業とのかかわりを密接にすることを目的として設置されたが、産業界は商業科卒業者に高い専門性を期待しておらず、実際には細分化された小学科に見合うような求人はなかった（番場 2010、p.69）。おざなりにされたかのように思えた小学科であったが、高卒就職難と中等後教育拡大期を迎え、「進路多様校化」した現代の商業科においては、学校内部におけるトラッキングに類似した機能を果たすようになっているのである。

③「地域と高校」という視点から商業科へ着目することにより、ノンメリトクラティックな価値志向による進路選択という側面が明らかになった。すなわち、地元志向と事務職志向という2つの価値志向を抽出することができた。

伝統的な教育社会学は、社会的資源の配分の多寡が学校を通じた選抜によって決定されるという視点から教育と選抜への関心を払ってきた（例えば、Karabel and Halsey(Eds)

1977=1980、天野 1982、荻谷 1991、竹内 1995a など)。しかし、地方商業科生は、ローカリティや希望の職種を優先し、ノンメリトクラティックな価値志向によって進路を選択していることが示唆された。

1.2. 現代版トラッキングシステムの実態

以上の分析結果から現代版トラッキングシステムの実態は、表 7-1 のように整理することができる（表中には、便宜的に上位・下位と表記した）。

表 7-1. 現代版トラッキングの実態

	普通科	職業系専門学科
インプット	上位：親が大卒の子女が多く在籍 下位：在籍者の親学歴はほぼ変化なし	商業科：親が大卒の子女が多く在籍 工業科：在籍者の親学歴はほぼ変化なし
スループット	上位：御破算意識の高まり 下位：相対的な社会不安の上昇	商業科：進学指導の重点化 工業科：就職指導が中心のまま
アウトプット	上位：国公立大学志望者の増加 高学歴志向化 下位：私立大学、専各を中心とした 進路形成で変化なし	商業科：国公立大学進学志望者の増加 工業科：大多数が就職希望者で変化なし

まずは、普通科について見ていこう。インプット部分では、高校生の親学歴が大卒か非大卒かで、高校が上位と下位とに二極化した。大学進学率は約 50%で推移し、これ以上の上昇は見込まれていない（矢野・濱中 2006）。この大卒学歴の分断線（吉川 2006、2009）が、高校のインプット部分の二極化をもたらしたのである。このようなインプットの二極化は、スループットでの二極化につながる。具体的には、上位の高校では親学歴の上昇を背景として御破算意識が高まったが、下位の高校では社会不安が高まった。そしてスループットの二極化により、インプットの二極化はアウトプットの二極化に接続される。すなわち、1990 年代後半から 2000 年代にかけて、上位トラックでは国公立大学志向や高学歴志向が高まったが、その一方で、下位トラックでは大学進学希望者のほとんどが私立大学志望で、専門・各種学校進学希望者も多いままほとんど変化がなかったのである。

次に、職業系専門学科間の二極化について述べていく。専門学科のインプット部分では、高校生の親学歴が大卒か非大卒かの二極化が商業科と工業科の間に見られた。またスループットに着目すると、商業科では進学指導に重点が置かれるようになった一方で、工業科では就職指導が中心のままであった。その結果、商業科は特に国公立大学進学志望率の上

昇という点で「準進学用トラック」へと変容したが、工業科は就職希望者が多く「就職用トラック」としての機能を維持している。

以上が、現代版トラッキングシステムの実態である。それでは、これらの知見が、従来のトラッキング研究にどのように貢献しているのかを検討していこう。

2. 考察

2.1. トラッキング構造の二極化と学歴格差再生産機能

本研究のトラッキング研究への貢献は、第一に、継時的データを用いて、トラッキング構造が二極化したことを明らかにし、その分断線を顕在化させたことである。すなわち、普通科では、セカンドランク高校とサードランク高校の間で、専門学科では、商業科と工業科の間で二極化しているのである。

これまでも、トラック間の二極化を指摘する研究はあった（例えば、樋田ほか編 2000、耳塚 2007a など）。しかし、それらは主に高校と大学の接続の観点から論じてきた。それというのも、日本の高校生のアスピレーションは、大学入試によって統制されてきたからである（Rohlen 1983=1988）。しかし、一部のエリート大学を除き、大学入試が多様化・易化した現在では、ノンエリートトラックに在籍する高校生のアスピレーションは、大学入試によって規定されにくくなってきたのである（耳塚 2007a）。このような背景から、2000年代には、ノンエリートトラックの高校生に焦点を当てた研究が蓄積され（例えば、乾編著 2006、酒井編著 2007、中村編著 2010）、その結果として、大学入試に関して、マス選抜とエリート選抜を区別することの重要性が指摘された（中村 2011）。しかし、一連の研究の貢献は大きいものの、それらはすべて、①一時点のモノグラフ調査であり、②ノンエリートトラックを中心として対象にしてきたため、エリートトラックとノンエリートトラックの分断線を曖昧にししかとらえることができなかった。

専門学科間（商業科と工業科の間）の分断線を顕在化させたことにも本研究にオリジナリティがある。従来のトラッキングと教育選抜に関する研究は、主に普通科高校を対象とし、専門学科はひとつのカテゴリーとして扱われるか、あるいは、普通科底辺校と一緒に「進路多様校」や「下位トラック」として一括りに扱われてきた。しかし、学校基本調査や生徒文化調査データの分析から明らかになったのは、かつては「就職用トラック」としてカテゴライズ可能だった専門学科が、在籍者の社会階層（インプット）、進路指導（スル

ープット)、希望進路(アウトプット)の各領域で大きく分化しており、商業科と工業科を同じカテゴリーとして扱うことが難しくなっているということである。

社会階層(親学歴)によるトラックへのインプットの二極化のメカニズムの説明には、吉川(2006、2009)が指摘するように、高校生の親世代の学歴の変化の視点を用いることが有用だと考える。従来の高校トラックの配分メカニズムは、「輪切り選抜」(岩木・耳塚編 1983 など)と呼ばれるような、高校入試選抜によって説明されてきた。むろん、高校入試に至るまでの学力形成には、出身社会階層が影響しており、「階層→学力→高校トラック」という経路が指摘されてきた(例えば、潮木ほか 1978、岩木・耳塚編 1983 など)。しかし、吉川(2006、2009)は、現代の教育格差(主に大学進学格差)を説明する要因のひとつに、「学歴下降回避のメカニズム」(学歴下降回避仮説)を挙げる。学歴下降回避仮説とは、「親の学歴が大卒層であれば、子弟はそれと同等かそれ以上の学歴を求めて大学進学の意欲を高めるが、親の学歴が高卒層であれば、高校卒業によって相対的下降がすでに回避されているため、大学進学への差し迫った欲求は作動しない」というものである。その結果、人々の大学進学行動は、個々人の選択だとする意識が表面化し、学歴の世代間関係の閉鎖化・固定化がもたらされるという(吉川 2006、p.248)。

学歴下降回避仮説は、教育拡大と人々の教育格差という社会変化を背景とした教育達成への動機をミクロレベルで説明したものであるが、本研究の関心は、そのような学歴の世代間関係の閉鎖化・固定化を助長する教育システムとしてのトラッキングの変容を実証することであった。その結果、高校トラックと社会階層(親学歴)は関連を強めていることが明らかになった。

それだけではない。本研究のトラッキング研究への第二の貢献は、日本型トラッキングシステムの特徴であった傾斜的な選抜機能(竹内 1995a)が影を潜めたことを明らかにした点である。第4章で述べたように、日本の高校における選抜は「層別競争移動」であり、高校生のアスピレーションの加熱と冷却は、「トラック間」に作動するのではなく、「トラック内部」に生じるところがその特徴であった(竹内 1995a、pp.100-110)。しかし、本研究で得られた知見では、高校生のアスピレーションの加熱と冷却が、「トラック内部」ではなく、「トラック間」に生じていた。

これら2つ知見を合わせれば、現代のトラッキングシステムは、在籍生徒の学歴獲得を親学歴の格差に応じて再生産する機能を持つように変容していることが示唆される。すなわち、トラッキングシステムが、人々の社会階層間格差の再生産に寄与しているのである。

加えて、従来までも、私立中学への受験を通じて社会的な分化が早期化されていると指摘されてきた（例えば、Kariya and Rosebaum 1999、市川 2006 など）。しかし、本研究では、公立高校への配分メカニズムにおいてさえ、親学歴（社会階層）による二極化が進んでおり、トラッキング構造が二極化していることを明らかにした。その点にも、トラッキング研究に対する貢献があるだろう。

2.2. エリート選抜の存立メカニズムの変化

本研究では、1990 年代に実施された高校教育改革の結果を明らかにすることで、これまでにほとんど研究対象とされなかったエリートトラックの高校生のアスピレーションが維持されるメカニズム（エリート選抜）の変容を示したことに貢献がある。

グローバル競争と高度な知識経済の時代に突入し、「画一的」だと批判された日本の教育システムは（Rohlen 1983=1988、Reich 1991=1991）、6 年制中等教育学校（中高一貫校）などの「新しいタイプの学校」を誕生させ（Shimabara 1995=2009）、エリート教育の要素も取り入れてきた（斎藤 2001=2006）。そして、それら一連の教育改革のインパクトは、中位・下位の高校に対してネガティブな効果をもたらした（例えば、荻谷 2002、荒川 2009 など）。しかし、本研究の分析の結果を見ると、上位の高校に対してもポジティブな影響をもたらしたとはいえない。

現代の日本では、「創造性」や「個性」、「能動性」といったものが、「ポスト近代型」の能力として求められ（本田 2005b）、グローバル競争と変動の激しい知識経済を基盤とする社会において必要とされる能力の育成が求められている。しかし、日本の学力を高い水準で支えるのは、結局は大学入試であり続け、少子化や選抜試験の多様化によって大学入試が易化すると、教師が「個別主義的面倒見主義」（樋田 2010）的に指導することが必要となる。この現状を踏まえれば、少なくとも「能動性」に関する限りは、エリートセクターにおいて、「ポスト近代型」の能力が育成されているとはいえず、エリート創出のための高校教育改革は成功していないだろう。

Trow (1976) や中村 (2011) は、高等教育が量的に拡大し、マス段階に突入しても、エリート型の高等教育機関は存続し続けると指摘する。確かに、エリート大学は「従来型」の学力入試選抜を維持していくだろう。その点においては、エリート選抜は存続し続けるといえるかもしれない。しかし、本研究のように高校教育の側から見れば、エリート選抜は、その存立メカニズムを変化させているのである。

今後ますます少子化が見込まれ、大学入試選抜が易化する日本社会では、教師のきめ細やかな指導と限られた数のエリート大学への入試によってエリート選抜を維持させることにも限界があるかもしれない。

2.3. 商業科から見る職業系専門学科の現状

商業科と工業科の比較から専門学科の変容を明らかにし、商業科の現代的な構造と機能を詳細に明らかにした点にも、本研究のトラッキング研究に対する貢献がある。

Grubb and Lazerson (2006=2012) が指摘するように、日本も例外ではなく、中等教育段階における職業教育は不明瞭だという決断が下されるだろう。単線型の高校教育体系は、人々の教育機会を、制度的には制限しないため高学歴化が進み、「就職用トラック」はその機能が曖昧になる。この10年余の間で、商業科には、他の専門学科よりも親が高学歴な生徒が在籍するようになった。そのため商業科は、学歴下降回避のメカニズム（吉川2006、2009）によって、進学準備学校（学科）としての機能が期待されているのである。

さらに、高度な技術が必要とされる知識経済の下では、中等教育で与えられる職業的知識は役に立たないため、情報（情報科）や外国語（国際科）といったシンボル操作に関する小学科は、進学準備用の小学科として機能している。結果として、商業科の現状および展望は、中等教育段階の職業教育を施す教育機関（「就職用トラック」）ではありえないであろう。

また、就職希望者の地元志向に着目して考察すると、商業科で教えられる教育内容は職業とのレリバンスが弱い（「産業界からの要請」とマッチしていない）ため、就職機能については、地域内での学校の「伝統」を強調することで、その機能を果たしている。

番場（2010、pp.208－213）は、今後の商業科の展望として、純粋な職業準備学校ではなく、①進路多様性を強調するか、②普通教育としての商業に関する教育を専門教育とするかの2つを指摘する。しかし、これは商業科だけでなく、その他の専門学科も同様の展望を持つかもしれない。

2.4. まとめ：日本型トラッキングシステムの実態

それでは、本研究で得られた知見は、日本型のトラッキング理論をどのように現代版へと描き直すことができるだろうか。本節の最後にこれを検討していこう。

まずは、日本の教育社会学におけるトラッキング概念の定義とその研究関心を振り返っておこう。藤田（1980、p.118）によれば、日本のトラッキングの定義は、「たとえば複線型の学校システムのように法制的に生徒の進路を限定するということはないにしても、実質的にはどのコース（学校）に入るかによってその後の進路選択の機会と範囲が限定される」という教育システムのことである。その研究関心は、高校間の「格差を切り口に学校の内部過程＝トラックの内実を照らし出し」、「入学時のインプットと卒業時のアウトプットの間のスループットに焦点を当て、そこにインプットの偏差を増幅してアウトプットにつなげるメカニズムを見出すこと」（飯田 2007、p.44）であった。

1990年代まで、トラッキングが作動するメカニズムには、産業構造の大規模な変化と右肩上がりの経済成長、それにともなう教育の拡大が背景にあった（荻谷 1995、竹内 1995a、橋本 2009）。同時に、「学歴社会」が成立し始め、そこでは「輪切り選抜」によって序列化された高校トラックと序列的な大学偏差値とが対応関係にあったため、人々は「分相応」のアスピレーションを持つように調整されてきたのである。そこには、人々が偏差値の高い大学を目指す誘引として、将来の地位達成に有利なこと（機能的価値）、まなざしとしての学歴（象徴的価値Ⅰ）、受験社会（象徴的価値Ⅱ）があり、これらが複合的に作用し、人々を「分相応」に受験競争に巻き込んでいった（竹内 1995a、pp.90－92）。

その結果、1990年代までのトラッキングシステムは、高校生を、①実力主義にもとづいて社会成員の階級意識を分化させ、不平等を正当化し、②大学入試という「隠れたエンジン」（Rohlen 1983＝1988）によって人々に勤勉性などの文化を根付かせる機能を果たし、③卓越したエリートではなく、一般の能力水準を高め、高い経済的生産性を生むことに貢献し（耳塚 2011）、人々にメリトクラシー規範を根付かせるのに効率的な機能を果たしていた。

しかし、本研究を通じて見てきた現代（2000年代）におけるトラッキングの構造と機能は変わった。トラッキングの構造は、高校生の出身社会階層の格差化（具体的には、親の学歴格差化）によって二極化した。またその機能は、上位トラックではより高い学歴獲得を目指すように機能し、下位のトラックでは社会不安を回避するための手段としてアスピレーションが加熱させるという具合に二極化している。

このようにしてトラッキングシステムを継時的に対比すると、高校生のアスピレーションは、かつては経済成長を背景として、一次元的な教育的価値尺度（＝大衆教育社会）によって所属トラックに応じて「分相応」に調整されてきた。それに対し、格差社会の現代

においては、二極化したトラックに応じて全く異なった教育的価値尺度（一方では高学歴志向、もう一方では社会不安）によってアスピレーションが形成され、世代間の学歴格差が再生産されているといえよう。具体的に換言すれば、メリトクラシー規範がトラック間において二極化しているのである。

様々な社会的「格差」が指摘された 2000 年代には、多くの「格差研究」が蓄積されてきた（例えば、橘木 1998、佐藤 2000、荻谷 2001、山田 2004 など）。しかし、一連の日本の「格差」研究は、出身社会階層の格差化にともない到達社会階層（学歴や職業達成）も格差化するという指摘に留まり、教育システムが格差を再生産するメカニズムをどのように変容させてきたのかに関心の外へ置いてきた。そこで本研究では、青少年の社会的背景の有利／不利を増幅する教育システムのひとつとしてトラッキングシステムの変容に焦点を当て、人々の社会移動のメカニズムの一端を探ってきた。その結果、本研究で得られた知見からは、「現代の日本型トラッキングシステムは、人々の教育達成を業績原理から属性原理へと導くように機能している」ということが明らかになった。かつて「学歴社会」を背景として、青少年を学力（成績）に応じて社会的分化させていたトラッキングシステムは、現在では、高校生の親学歴の分断線（吉川 2006、2009）に合わせてその構造を二極化させ、人々の学歴格差を再生産するように機能しているのである。

近年、人々の教育達成が、メリトクラシーからペアレントクラシーへと移行しており、そこでは、個々人の努力や知能ではなく、親の所有する財産や願望が重要になると指摘されている（Brown 1997=2005、耳塚 2007b など）。本研究では、学歴という親の所有する財産ないし資本（Bourdieu and Passeron 1970=1991）に応じて二極化したトラッキング構造が、世代間の学歴格差を再生産させるよう機能していることを明らかにした。その点において、本研究の知見からは、現代のトラッキングシステムが、メリトクラシーからペアレントクラシーへという趨勢を加速させるデバイス（装置）として機能していることを示唆することができるかもしれない。

3. 今後の課題

ここまで、本研究では、日本型トラッキングシステムの変容を「トラッキング構造の二極化による学歴格差再生産機能」という視点から明らかにしてきた。最後に本研究が残した課題を記述しておこう。

第一に、学歴下降回避仮説についてである。本研究の検証は、親学歴の変化と高校トラックの関連の変化を示したに過ぎず、この仮説を間接的に検証するに留まるということである。本研究では、トラッキングシステムの変容を説明する理論的枠組みとして、学歴下降回避仮説を用いた。しかし、学歴下降回避仮説は、子どもの教育達成に関する「願望」が親の学歴によって異なることを指摘した理論枠組みである。そのため、今後は親の子どもに対する教育意識や願望を分析モデルに取り込んだ教育達成のメカニズムを探る必要がある。

第二に、エリート選抜について、教師のきめ細やかな学習指導の結果、高校生の学習時間が増加したことを明らかにしたが、「どのような階層出身の生徒が学習指導に乗るのか」という点を検討していない。例えば、教師の指導にコミットしやすいのは、学校に価値を置く社会階層の高い生徒かもしれない（例えば、Willis 1977=1985、耳塚 1980 など）。本研究では、教師の学習指導によってエリート選抜が維持されることは示唆できたが、上位トラックでの学習指導が、人々の学歴格差を再生産する機能を持つのかどうかまでは検討することができなかった。今後は、この視点から詳細な分析を行う必要があるだろう。

第三に、専門学科の現代的な機能を、商業科を対象としてしかとらえていない。今後は、農業科などもケーススタディの対象としながら、専門学科の展望を総合的にとらえていくことが求められる。

第四に、用いたデータの精度に関する問題である。本研究のデータ、特に生徒文化調査データは、約 30 年に亘り回収された貴重なデータである。そのため、このデータから得られる知見も多いが、あくまで高校の「スループット」を研究するための調査だということに注意を払う必要がある。樋田ほか（2011a,b）を引いて調査開始当時の関心を述べるなら、隠れたカリキュラム（hidden curriculum）を可視化することを目的とした調査なのである。そのため、用いた学力変数は高校生本人の「自己評価」に過ぎないし、アウトプットに関する分析も、「希望進路」の分析であって、大学や職業への移行メカニズムを明らかにしたわけではないということにも注意する必要がある。

とりわけ、アウトプットの指標が「希望進路」に留まることの課題は大きい。本研究では、①データ上の制約、②従来のトラッキング研究の多くが、希望進路をアウトプットの指標として扱ってきたこと（耳塚ほか 1981、耳塚 2000a など）、③日本の青少年は希望進路と実際の進路の差が小さいこと（Kariya and Rosembaum 1987、荻谷 1986、1992 など）、といった事情を踏まえて、「希望進路」をアウトプットの指標として分析してきた。

しかし、近年では、高校在学中に希望進路がシフトするという現象が増えていることも指摘されており（中村 2010）、アウトプットの指標を「希望進路」とすることの限界について考慮しなければならない。よって今後は、パネルデータを用いて、高校卒業後の進路を追跡的に明らかにしていくことを計画している⁽¹⁾。

第五に、インタビューデータの位置づけと利用方法について課題が残った。第1章で述べたように、本研究の分析手法は、主に繰り返し調査から得られたデータを統計的に分析し、その量的な変化を、インタビューデータによって質的に補うことを掲げた。しかし、質的に補うという点では、量的分析が中心となってしまう本論文の中でのインタビューデータの活用が不十分であり、トラッキングシステム変容についての質的な詳細がとらえきれなかった。

第六に、高校を「伝統的」な枠組みでしかとらえておらず、例えば、公立中高一貫校、総合学科などを含んだ高校の変化が明らかにできなかった。公立中高一貫校や総合学科が、どのような社会階層と結びつきやすいかは、いくつかの研究によって明らかにされているが（荒川 2009、樋田 2009 など）、その関係がどのように変わっていくのかをモニタリングしていく必要があるだろう。

第七に、私立高校を対象としていないことにある。この課題はさらに2つに分かれる。ひとつには、2000年頃から都市部を中心に、特に富裕層の間で子女の教育達成をより有利にすることを目的とした私立中学受験が流行し、公立学校から離れるという現象が指摘されている（Kariya and Rosebaum 1999、藤田 2006）。もうひとつには、高度成長期における高校教育拡大に際して私立高校が担った役割を考えれば（児玉 2008、相澤ほか 2009、香川ほか 2012）、私立高校の変容も今後検討されるべきである。私立高校に関するいずれの課題も、本研究では対象とすることはできなかった。

〈注〉

- (1) このような高校生の実際の進路に関する追跡的研究の試みは、2003年度より「青少年期から成人期への移行についての追跡的研究」(Japan Educational Longitudinal Study)のプロジェクトの一環として計画している（調査代表：お茶の水女子大学・耳塚寛明）。

〈初出一覧〉

以下の章は、投稿論文等をもとに、加筆修正したものである。

第 3 章 中西啓喜，2011，「日本の教育選抜システムの再検討―層別競争移動に注目して―」『子ども社会研究』第 17 号，pp.53－65.

第 4 章 中西啓喜，2011，「少子化と 90 年代高校教育改革が高校に与えた影響―「自ら学び自ら考える力」に着目して―」『教育社会学研究』第 88 集，pp.89－116.

第 5 章 中西啓喜，2013，「職業系専門学科の変容―商業科と工業科の比較分析から―」『青山学院大学教育学会紀要教育研究』第 57 号，pp.73－84.

第 6 章 中西啓喜，2012，「地方商業高校生の進路形成に関する研究―「地域」を手がかりとして―」『PROCEEDINGS お茶の水女子大学グローバル COE プログラム公募研究成果論文集』20，pp.63－72.

〈引用・参考文献〉

- 相澤真一・児玉英靖・香川めい, 2009, 「戦後日本の教育拡大の地域的布置—1960年代における都道府県間の私立高校の役割の差異に着目して—」『アジア太平洋研究』第34号, pp.57—78.
- 天野郁夫, 1982, 『教育と選抜』第一法規.
- 天野郁夫, 2006, 『大学改革の社会学』玉川大学出版部.
- 青砥恭, 2009, 『ドキュメント高校中退—いま、貧困がうまれる場所—』ちくま新書.
- 荒井克弘, 1998, 「高校と大学の接続—ユニバーサル化の課題—」『高等教育研究』第1集, pp.179—196.
- 荒井一博, 2002, 『教育の経済学・入門—公共心の教育はなぜ必要か—』勁草書房.
- 荒井一博, 2007, 『学歴社会の法則—教育を経済学から見直す—』光文社新書.
- 荒川葉, 2009, 『「夢追い」型進路形成の功罪—高校教育改革の社会学—』東信堂.
- 有海拓巳, 2011, 「地方／中央都市部の進学校生徒の学習・進学意欲—学習環境と達成動機の質的差異に着目して—」『教育社会学研究』第88集, pp.185—205.
- Arum, R. and Shavit, Y., 1995, “Secondary Vocational Education and the Transition from School to Work,” *Sociology of Education*, Vol.68, No.3, pp.187-204.
- 麻生誠・潮木守一編著, 1977, 『学歴効用論—学歴社会から学力社会への道—』有斐閣.
- Ballantine, J.H. and Hammack, F.M., 2009, *The Sociology of Education: A Systematic Analysis 6th Edition*, Pearson Education, Inc. (=2011, 牧野暢男・天童睦子監訳『教育社会学—現代教育のシステム分析—』東洋館出版社).
- 番場博之, 2010, 『職業教育と商業高校—新制高等学校における商業科の変遷と商業教育の変容—』大月書店.
- Bell, D., 1973, *The Coming of Post-Industrial Society*, Basic Books Inc. (=1975, 内田忠男・嘉治元郎・城塚登・馬場修一・村上泰亮・谷嶋喬四郎訳『脱工業社会の到来—社会予測の一つの試み— 上・下』ダイヤモンド社).
- Bell, D., 1995, *The Impact of Intellectual Society* (山崎正和・林雄二郎ほか編訳『知識社会の衝撃』TBSブリタニカ).
- Bernstein, B., 1975, *Towards A Theory of Educational Transmission*, Routledge (=1985, 萩原元昭訳『教育伝達の社会学—開かれた学校とは—』明治図書).

- Blau, P. and Duncan, O., 1967, *The American Occupational Structure*, Wiley and Sons.
- Boudon, R., 1973, *L'inégalité des chances: La mobilité sociale dans les sociétés industrielles*, Armond Colin (=1983, 杉本一郎・山本剛朗・草壁八朗訳『機会の不平等—産業社会における教育と社会移動—』新曜社) .
- Bourdieu, P. et Passeron, J. C., 1970, *La Reproduction Éléments pir une théorie du système d'enseignement*, Editions de Minuit (=1991, 宮島喬訳『再生産—教育・社会・文化—』藤原書店) .
- Bowles, S., and Gintis, H., 1976, *Schooling in Capitalist in America*. Basic Books (=1986、1987, 宇沢弘文訳『アメリカ資本主義と学校教育—教育改革と経済制度の矛盾—(1)(2)』岩波書店) .
- Breen, R. and Goldthope, J. H., 1997, “Explaining Educatinal Differencals: Towards a Formal Rational Theory”, *Rationality and Society*, 9(3), pp.275-305.
- Brown, 1997, “The ‘Third Wave’: Education and the Ideology of Parentocracy.” In Halsey A.H., H. Lauder, P. Brown & A.S. Wells (Eds) *Education: Culture, economy, and society*, pp. 393-408.
- Brown, P., 1997, “Cultural Capital and Social Exclusion: Some Observations on Recent Trends in Education, Employment, and the Labour Market.” In A.H. Halsey, H. Lauder, P. Brown and A.S. Wells (Eds) *Education: Culture, Economy, and Society*, Oxford Univ. Press (= 2005, 「文化資本と社会的排除」住田正樹・秋永雄一・吉本圭一編訳『教育社会学—第三のソリューション—』九州大学出版会, pp.597-622) .
- Brown, P., 2000, “The Globalization of Positional Competition?” *Sociology* 34/4, pp.633-653.
- Brown, P., 2006, “The Opportunity Trap,” in H. Lauder, P. Brown, J. Dillabough and A. H. Halsey (Eds), *Education, Globalization, & Social Change*, Oxford Univ. Press, pp.381-397.
- Brown, P. and Lauder, H., 2006, “Globalization, knowledge and the Myth of the Magnet Economy”, In Lauder, H. Brown, P. Dillabough J. and Halsey, A. H. (Eds), *Education, Globalization, & Social Change*, Oxford Univ. Press (=2012, 「グローバル化・知識・マグネット経済の神話」広田照幸・吉田文・本田由紀編訳『グローバル化・社会変動と教育 1—市場と労働の教育社会学—』東京大学出版会, pp.153-177) .

- Brubacher, J., 1947, *A History of the Problems of Education*, McGraw-Hill, Inc.
- 千葉勝吾・大多和直樹, 2007, 「選択支援機関としての進路多様校における配分メカニズム—首都圏大都市 A 商業高校の進路カルテ分析—」『教育社会学研究』第 81 集, pp.67-87.
- Cicourel, V. A. and Kitsuse I. J., 1963, *The Educational Decision-Makers*, Tuttle-Mori Agency, Inc (=1985, 山村賢明・瀬戸知也訳『誰が進学を決定するか』金子書房) .
- Clark, B. R., 1985, “The High School and the University: What Went Wrong in America” *Phi Delta Kappan*, Feb., pp.391-397(Part 1), Mar., pp.472-475(Part 2) (=1986, 耳塚寛明抄訳「高校と大学—どこがアメリカで狂っているのか—」『IDE—現代の高等教育—』3 月号, pp.55-59 (その 1), 4 月号, pp.74-80 (その 2), 5 月号, pp.64-71 (その 3)) .
- Coleman, J., 1968, “The Concept of Equality of Educational Opportunity”, *Harvard Educational Review* 38, pp. 7-22.
- Cohen, A. K., 1955, *Delinquent Boys: The Culture of the Gang*, The Free Press, Glencoe, Illinois.
- Cohen, A. K., 1966, *Deviance and Control*, Prentice Hall (=1968, 宮沢洋子訳『逸脱と統制』至誠堂) .
- Collins, R., 1971, “Functional and Conflict Theories of Educational Stratification”, *American Sociological Review* 36, pp.1002-1019 (=1980, 潮木守一・天野郁夫・藤田英典編訳「教育における機能理論と葛藤理論」『教育と社会変動 上』東京大学出版会, pp.97-125) .
- Collins, R., 1979, *The Credential Society: An Historical Sociology of Education and Stratification*, Academic Press (=1984, 大野雅敏・波平勇夫訳『資格社会—教育と階層の歴史社会学—』有信堂高文社) .
- Drucker, P., 1969, *The Age of Discontinuities*, Transaction Publications (=1969, 林雄二郎訳『断絶の時代—来たるべき知識社会の構想—』ダイヤモンド社) .
- 海老原嗣生, 2009, 『学歴の耐えられない軽さ—やばくないか、その大学、その会社、その常識—』朝日新聞出版.
- 海老原嗣生, 2010, 『「若者はかわいそう」論のウソ』扶桑社.
- 黄順姫, 1998, 『日本のエリート高校—学校文化と同窓会の社会史—』世界思想社.

- 藤原翔, 2011, 「Breen and Goldthorpe の相対的リスク回避仮説の検証—父親の子どもに対する職業・教育期待を用いた計量分析—」『社会学評論』62(1), pp.18—35.
- 藤原翔, 2012, 「高校選択における相対的リスク回避仮説と学歴下降回避仮説の検証」『教育社会学研究』第91集, pp.29—49.
- 藤田英典, 1979, 「社会的地位形成過程における教育の役割」富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会, pp.329—361.
- 藤田英典, 1980, 「進路選択のメカニズム」天野郁夫・山村健編『青年期の進路選択』有斐閣, pp.105—129.
- 藤田英典, 1992, 「教育社会学におけるパラダイム転換論—解釈学・葛藤論・学校文化論・批判理論を中心として—」森田尚人・藤田英典・黒崎勲・片桐芳雄・佐藤学編『教育学年報1 教育研究の現在』世織書房, pp.115—160.
- 藤田英典, 1997, 『教育改革—共生時代の学校づくり—』岩波新書.
- 藤田英典・志水宏吉編, 2000, 『変動社会のなかの教育・知識・権力—問題としての教育改革・教師・学校文化—』新曜社.
- 藤田英典, 2006, 『教育改革のゆくえ—格差社会か共生社会か—』岩波ブックレット.
- 玄田有史・曲沼美恵, 2004, 『ニート—フリーターでもなく失業者でもなく—』幻冬舎.
- Grubb, W. N. and Lazerson, M., 2006, “The Globalization of Rhetoric and Practice: The Education Gospel and Vocationalism”, In H. Lauder, P. Brown, J. Dillabough, and A. H. Halsey, (Eds), *Education, Globalization, & Social Change*, Oxford Univ. Press (=2012, 「レトリックと実践のグローバル化—「教育の福音」と職業教育主義—」広田照幸・吉田文・本田由紀編訳『グローバル化・社会変動と教育1—市場と労働の教育社会学—』東京大学出版会, pp.129—151) .
- Guile, D., 2006, “What is Distinctive About the Knowledge Economy?: Implication for Education”, In H. Lauder, P. Brown, J. Dillabough, and A. H. Halsey, (Eds), *Education, Globalization, & Social Change*, Oxford Univ. Press (=2012, 「知識経済の特徴とは何か?—教育への意味—」広田照幸・吉田文・本田由紀編訳『グローバル化・社会変動と教育1—市場と労働の教育社会学—』東京大学出版会, pp.179—198) .
- Halsey, A.H., Lauder, H., Brown, P. & Wells, A. S. (Eds), 1997, *Education: Culture, Economy, and Society*, Oxford Univ. Press (=2005, 住田正樹・秋永雄一・吉本圭一編訳『教育社会学—第三のソリューション』九州大学出版会) .

- Hargreaves, D. H., 1967, *Social Relations in a High School*, Routledge & Kegan Paul.
- 橋本健二, 1996, 「高校教育の社会的位置の変遷と高校教育改革」 耳塚寛明・樋田大二郎
編『多様化と個性化の潮流をさぐる—高校教育改革の比較教育社会学—』学事出版,
pp.74-87.
- 橋本健二, 2006, 『階級社会—現代日本の格差を問う』講談社選書メチエ.
- 橋本健二, 2009, 『「格差」の戦後史—階級社会 日本の履歴書—』河出ブックス.
- 橋本紀子・木村元・小林千枝子・中村新之祐編著, 2011, 『青年の社会的自立と教育—高度成長期日本における地域・学校・家族—』大月書店.
- 秦政春, 1977, 「高等学校格差と教育機会の構造」『教育社会学研究』第 32 集, pp.67-79.
- 樋田大二郎, 1983, 「日本の高校生の就職と学校」岩木秀夫・耳塚寛明編『現代のエスプリ・高校生—学校格差の中で—』至文堂, pp.184-192.
- 樋田大二郎・耳塚寛朗・岩木秀夫・荻谷剛彦・金子真理子, 1999a, 「高校生文化と進路形成の変容(1)—1979 年調査との比較を中心に—」『聖心女子大学論叢』第 92 集, pp.115-188.
- 樋田大二郎・田中葉・堀健志・大多和直樹・耳塚寛朗, 1999b, 「高校生文化と進路形成の変容(2)—1979 年調査との比較を中心に—」『聖心女子大学論叢』第 93 集, pp.43-125.
- 樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・荻谷剛彦編, 2000, 『高校生文化と進路形成の変容』学事出版.
- 樋田大二郎, 2001, 「高校階層構造は変わった—輪切り選抜からお鏡餅選択へ—」樋田大二郎・岩木秀夫・耳塚寛明・荻谷剛彦・大多和直樹『高校生文化と進路形成の変容—大都市圏高校教育の変容を中心に—平成 11 年度—平成 13 年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究報告書』, pp.8-13.
- 樋田大二郎, 2008, 『工業高校の現代的役割とレリバンスにかんする研究』平成 18 年度～平成 19 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書.
- 樋田大二郎, 2009, 「中学受験を巡る家庭環境の実態」森下展安編著『10 歳の選択—中学受験の教育論』ダイヤモンド社, pp.16-34.
- 樋田大二郎, 2010, 「制度の多様化から指導の個別性へ」『週刊教育資料』11 月 8 日号, pp.26-27.

- 樋田大二郎・中西啓喜・岩木秀夫, 2011a, 「単線型メリトクラシーパラダイムの再考(I) —「高校生文化と進路形成の変容(第3次調査)」より—」『青山学院大学教育人間科学部紀要』第2号、pp.1-22.
- 樋田大二郎・大多和直樹・金子真理子・岡部悟志・堀健志, 2011b, 「単線型メリトクラシーパラダイムの再考(II) —「高校生文化と進路形成の変容(第3次調査)」より—」『青山学院大学教育人間科学部紀要』第2号、pp.23-44.
- 樋田大二郎・中西啓喜・岡部悟志, 2012a, 「単線型メリトクラシーパラダイムの再考・第2次報告:シンガポールとの高校生徒文化比較研究(1)」『青山学院大学教育人間科学部紀要』第3号、pp.1-21.
- 樋田大二郎・シム チュン キャット・金子真理子, 2012b, 「単線型メリトクラシーパラダイムの再考・第2次報告:シンガポールとの高校生徒文化比較研究(2)」『青山学院大学教育人間科学部紀要』第3号、pp.23-34.
- 広田照幸, 2001, 『教育言説の歴史社会学』名古屋大学出版会.
- 本田由紀, 2005a, 『若者と仕事—「学校経由の就職」を超えて—』東京大学出版会.
- 本田由紀, 2005b, 『多元化する「能力」と日本社会—ハイパー・メリトクラシー化のなかで—』NTT出版.
- 本田由紀, 2009, 『教育の職業的意義—若者、学校、社会をつなぐ—』ちくま新書.
- Hopper, E. I., 1968, "A Typology for the Classification of Educational Systems" *Sociology* No.2, pp.29-46 (=1980, 「アメリカ中等教育の構造変動」潮木守一・天野郁夫・藤田英典編訳『教育と社会変動 下』東京大学出版会, pp.1-18) .
- 朴澤泰男, 2006, 「中等後教育進学に対する所得の効果」『若年者の就業行動・意識と少子高齢社会の関連に関する実証研究』厚生労働科学研究費補助金・政策科学推進研究事業・平成17年度総括報告書, pp.103-116.
- 堀健志, 2000, 「学業へのコミットメント—空洞化する業績主義社会についての一考察—」樋田大二郎ほか著『高校生文化と進路形成の変容』学事出版, pp.165-183.
- 市川伸一, 2002, 『学力低下論争』ちくま新書.
- 市川昭午, 2002, 「90年代—教育システムの構造変動—」『教育社会学研究』第70集, pp.5-20.
- 市川昭午, 2006, 『教育の私事化と公教育の解体—義務教育と私学教育—』教育開発研究所.

- 市川昭午, 2010, 『教育政策研究五十年—体験的研究入門—』 日本図書センター.
- 飯田浩之, 2007, 「中等教育の格差に挑む—高等学校の学校格差をめぐって—『教育社会学研究』 第 80 集, pp.41—60.
- 今田幸子, 1979, 「学歴構造の趨勢分析」 富永健一編『日本の階層構造』 東京大学出版会, pp.133—158.
- 稲田雅也, 1997, 「職業系中等学歴の社会的 position づけの変遷—SSM 調査データの 40 歳時職に着目して—」『教育社会学研究』 第 61 集, pp.123—141.
- 乾彰夫, 1990, 『日本の教育と企業社会—一元的能力主義と現代の教育=社会構造—』 大月書店.
- 乾彰夫編著, 2006, 『18 歳の今を生きぬく—高校 1 年目の選択—』 青木書店
- Ishida, H. 1992, *Social Mobility in Contemporary Japan: Educational Credentials, Class and the Labour Market in Cross-national Perspective*, Palgrave Macmillan.
- 岩木秀夫・耳塚寛明編, 1983, 『現代のエスプリ・高校生—学校格差の中で—』 至文堂.
- 岩木秀夫, 1996, 「欧米の教育改革の潮流と日本の教育改革—単線型的体系化の観点からみた試論—」 耳塚寛明・樋田大二郎編『多様化と個性化の潮流をさぐる—高校教育改革の比較教育社会学—』 学事出版, pp.156—175.
- 岩木秀夫, 2000, 「高校教育改革の動向—学校格差体制（日本型メリトクラシー）の行方—」 樋田大二郎ほか編『高校生文化と進路形成の変容』 学事出版, pp.21—47.
- 岩木秀夫, 2004, 『ゆとり教育から個性浪費社会へ』 ちくま新書.
- 岩木秀夫, 2010, 「“スペシャリストへの道” bound for “六次産業”」『青少年問題』 第 637 号（第 57 巻 新年号） 財団法人 青少年問題研究会, pp.2—7.
- 岩木秀夫, 2011, 「学校の家庭・地域インフラの変動（1）—地方に人がいなくなる（限界集落）—」 岩木秀夫・大淀昇一『教育入門—文献で読み解く教育の社会的基盤—』 放送大学教育振興会, pp.35—46.
- 岩木秀夫・大淀昇一, 2011, 『教育入門—文献で読み解く教育の社会的基盤—』 放送大学教育振興会.
- Jencks, C. S. et al, 1972, *Inequality: A Reassessment of the Effect of Family and Schooling in America*, Basic Books (=1978, 橋爪貞雄・高木正太郎訳『不平等』 黎明書房).

- Jones, J. D., Vanfossen, B. E., and Ensminger, M. E., 1995, "Individual and Organizational Predictors of High School Track Placement" *Sociology of Education* Vol. 18(4), pp.287-300.
- 香川めい・相澤真一・児玉英靖, 2012, 「高校教育機会はどうのように提供されたのか?—地方自治体の事例の比較検討による類型化の試み—」『応用社会学研究』No.54, pp.143—160.
- 梶田孝道, 1981, 「業績主義社会のなかの属性主義」『社会学評論』32(3), pp.70-87.
- Kamens, D. H., 1981, "Organizational and Institutional Socialization in Education" in Kerckhoff ed., *Research in Sociology of Education and Socialization* vol 2, JAI Press, pp.116—126.
- 金子真理子, 2002, 「90年代の学校社会学の展開—選抜・学校内過程・社会変動—」『東京大学社会科学研究所紀要 社会科学研究』第53巻1号, pp.37—76.
- Karabel, J. and Halsey, A. H. (Eds), 1977, *Power and Ideology in Education* Oxford Univ. Press (=1980, 潮木守一・天野郁夫・藤田英典編訳『教育と社会変動 上・下』東京大学出版会) .
- 荻谷剛彦, 1983, 「学校格差と生徒の進路形成」岩木秀夫・耳塚寛明編著『現代のエスプリ・高校生—学校格差の中で』至文堂, pp.69—78.
- 荻谷剛彦, 1986, 「閉ざされた将来像—教育選抜の可視性と中学生の「自己選抜」—」『教育社会学研究』41, pp.95—109.
- Kariya, T. and Rosebaum, J. E., 1987, "Self-Selection in Japanese Junior High Schools" *Sociology of Education*, Vol. 60 (3), pp.168-180.
- 荻谷剛彦, 1991, 『学校・職業・選抜の社会学—高卒就職の日本的メカニズム—』東京大学出版会.
- 荻谷剛彦, 1992, 『アメリカの大学・ニッポンの大学—TA・シラバス・授業評価—』玉川大学出版部.
- 荻谷剛彦, 1995, 『大衆教育社会のゆくえ—学歴主義と平等神話の戦後史—』中公新書.
- 荻谷剛彦・粒来香・長須正明・稲田雅也, 1997, 「進路未決定の構造—高卒進路未決定者の析出メカニズムに関する実証的研究—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第37号, pp.45—76.

- 苧谷剛彦, 1998, 「教育・機会と階層—平等主義のアイロニー」佐伯胖・黒崎勲・佐藤学・田中孝彦・浜田寿美男・藤田英典『教育の政治経済学』岩波書店, pp.83-107.
- Kariya, T. and Rosenbaum, J., 1999, 'Bright Fright: Unintended Consequences of Detracking Policy in Japan', *American Journal of Education* 107 (May 1999), pp.210-230.
- 苧谷剛彦, 2000, 「学習時間の研究—努力の不平等とメリトクラシー—」『教育社会学研究』第 66 号, pp. 213-230.
- 苧谷剛彦, 2001, 『階層化日本と教育危機—不平等再生産から意欲格差社会へ—』有信堂.
- 苧谷剛彦, 2002, 『教育改革の幻想』ちくま新書.
- 苧谷剛彦・志水宏吉編著, 2004, 『学力の社会学—調査が示す学力の変化と学習の課題—』岩波書店.
- 苧谷剛彦, 2006, 「学歴社会から学習資本社会へ—「自ら学ぶ力」べた褒め社会の光と影—」『中央公論』3月号, pp.234-245.
- 苧谷剛彦・安藤理・有海拓巳・井上公人・高橋渉・平木耕平・漆山綾香・中西啓喜・日下田岳史, 2008, 「地方公立進学校におけるエリート再生の研究」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 47 集, pp.51-86.
- 苧谷剛彦, 2008a, 「学業成績を規定する要因の変化—中学校 3 年時点の成績自己評価の分析—」中村高康編『階層社会の中の教育現象』2005 年 SSM 調査シリーズ 6, pp.35-47.
- 苧谷剛彦, 2008b, 『教育再生の迷走』筑摩書房.
- 苧谷剛彦・本田由紀編著, 2010, 『大卒就職の社会学—データからみる変化—』東京大学出版会.
- 片岡栄美, 1990, 「三世代間学歴移動の構造と変容」菊池城司編『現代日本の階層構造 3 教育と社会移動』東京大学出版会, pp.57-83.
- 片瀬一男, 2005, 『夢の行方—高校生の教育・職業アスピレーションの変容—』東北大学出版会.
- 片山悠樹, 2010, 「専門高校の職業選抜」中村高康編著『進路選択の過程と構造』ミネルヴァ書房, pp.118-140.

- 風間愛理, 2007, 「ポスト・メリトクラシーにおける高校進路指導—若年労働市場の狭隘化と学校組織の変容—」『お茶の水女子大学人間文化創成科学論叢』第10巻, pp.187-196.
- 菊池栄治, 1988, 「高等学校における習熟度別学級編成の背景と効果—社会学的パースペクティブから—」『日本教育経営学会紀要』第30集, pp.75-90.
- 岸本裕史, 1996, 『見える学力、見えない学力』大月書店.
- 小林雅之, 2008, 『進学格差—深刻化する教育費負担—』ちくま新書.
- 小林哲夫, 2007, 『ニッポンの大学』講談社現代新書.
- 吉川徹, 2001, 『学歴社会のローカル・トラッカー地方からの大学進学—』世界思想社.
- 吉川徹, 2006, 『学歴と格差・不平等—成熟する日本型学歴社会—』東京大学出版会.
- 吉川徹, 2009, 『学歴分断社会』ちくま新書.
- 菊池栄治, 1986, 「中等教育における「トラッキング」と生徒の分化過程—理論的検討と事例研究の展開—」『教育社会学研究』第41集, pp.136-150.
- 小池和男・渡辺行郎, 1979, 『学歴社会の虚像』東洋経済新報社.
- 児玉英靖, 2008, 「戦後日本の高校教育供給システムにおける私立高校の役割—進学率停滞をともしなわれない教育拡大はいかにして可能となったか—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第48号, pp.125-133.
- 近藤博之, 2000, 「階層研究と教育社会の位相」近藤博之編『日本の階層システム3 戦後日本の教育社会』東京大学出版会, pp.3-13.
- 小杉礼子編著, 2002, 『自由の代償／フリーター—現代若者の就業意識と行動—』日本労働研究機構.
- 工藤栄一郎, 2003, 「高校—大学間における簿記会計接続教育の課題—商業高校出身者に対する調査から—」『熊本学園商学論集』第9巻第2号, pp.133-149.
- Lacy, C., 1970, *Hightown Grammar*, Manchester University Press.
- Lauder, H. Brown, P. Dillabough J. and Halsey, A. H. (Eds), 2006, *Education, Globalization, & Social Change*, Oxford Univ. Press (=2012, 広田照幸・吉田文・本田由紀編訳『グローバル化・社会変動と教育1—市場と労働の教育社会学—』、荻谷剛彦・志水宏吉・小玉重夫編訳『グローバル化・社会変動と教育2—文化と不平等の教育社会学—』東京大学出版会).

- Lowe, J., 2000, "International Examination, National System and the Global Market", *Compare*, 29/3:317-330,363-377.
- Lucas, Samuel R. 2001, "Effectively Maintained Inequality: Education Transitions, Track Mobility, and Social Background Effects," *American Journal of Sociology* 106(6): 1642-1690.
- 松原治郎・武内清・岩木秀夫・渡部真・耳塚寛明・荻谷剛彦・樋田大二郎・吉本圭一・河上婦志子, 1980, 「高校生の生徒文化と学校経営(1)」『東京大学教育学部紀要』第 20 卷, pp.21-57.
- 耳塚寛明, 1980, 「生徒文化の分化に関する研究」『教育社会学研究第』35 集, pp.111-122.
- 耳塚寛明・荻谷剛彦・樋田大二郎, 1981, 「高等学校における学習活動の組織と生徒の進路意識—高校生の生徒文化と学校経営(2)—」『東京大学教育学部紀要』第 21 卷, pp.29-52.
- 耳塚寛明, 1988, 「学校における教科指導」松本良夫ほか編『学校』情報開発研究所, pp.283-302.
- 耳塚寛明, 1990a, 「高校教育と卓越性問題」『信濃教育』第 1238 号, pp.8-12.
- 耳塚寛明, 1990b, 「学習指導の組織と機能」黒羽亮一・牟田博光編著『教育内容・方法の革新』教育開発研究所, pp.131-156.
- 耳塚寛明, 1995, 「少子化社会の到来と学校教育—“受験戦争”の行方と学校の社会化機能の危機—」『季刊 子ども学』Vol.8, pp.114-119.
- 耳塚寛明, 1996, 「高校教育改革と教育構造」耳塚寛明・樋田大二郎編『多様化と個性化の潮流をさぐる—高校教育改革の比較教育社会学—』学事出版, pp.88-102.
- 耳塚寛明, 2000a, 「進路選択の構造と変容」樋田大二郎ほか編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版, pp.65-82.
- 耳塚寛明, 2000b, 「おわりに—予見と失望と驚き—」樋田大二郎ほか編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版, pp.215-222.
- 耳塚寛明・金子真理子・諸田裕子・山田哲也, 2002, 「先鋭する学力の二極分化」『論座』11 月号, pp.212-227.

- 耳塚寛明・荻谷剛彦・樋田大二郎・岩木秀夫・荒川葉・堀健志・シム チュン キャット・金子真理子, 2003, 『メリトクラシー規範の比較教育社会学』平成 13 年度－平成 15 年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(1)報告書.
- 耳塚寛明, 2006, 「学習基本調査の結果からみえること」 Benesse 教育研究開発センター『第 4 回学習基本調査・国内調査報告書 高校生版』, pp.13－19.
- 耳塚寛明, 2007a, 「高校の現在」『IDE』4 月号, pp.4－9.
- 耳塚寛明, 2007b, 「小学校学力格差に挑む－だれが学力を獲得するのか－」『教育社会学研究』第 80 集, 23－39.
- 耳塚寛明, 2011, 「高校教育と質保証」教育振興基本計画部会（第 11 回）配付資料 中央教育審議会教育振興基本計画部会 委員懇談会ヒアリング 平成 23 年 10 月 20 日（木）（URL:http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo9/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2011/10/26/1312455_2.pdf）2012 年 8 月 10 日取得.
- 耳塚寛明, 2012, 「高校教育の質保証をどう進めるか」『月刊高校教育』2 月号, 学事出版, pp.86－89.
- 文部科学省, 1999, 『高等学校学習指導要領』.
- 文部科学省, 2002, 「確かな学力の向上のための 2002 アピール「学びのすすめ」」（<http://www2.edu-ctr.pref.okayama.jp/edu-c/kenkyu/eisei/bangumi/rokuga/h13/182-1.PDF>）2012 年 12 月 8 日取得.
- 文部科学省, 2009, 『高等学校学習指導要領解説 総則編』.
- 文部科学省, 『学校基本調査』各年度.
- 中川さおり, 2007, 「誰が医者になるのか－医学部入試選抜システムと文化的再生産についての社会学的考察－」『お茶の水女子大学人間文化創成科学論叢』第 10 集, pp.207－216.
- 中村高康, 1996, 「推薦入学制度の公認とマス選抜の成立－公平信仰社会における大学入試多様化の位置づけをめぐる一」『教育社会学研究』第 59 集, pp.145－165.
- 中村高康, 2006, 「専門高校からの大学進学－アスピレーションの推移分析から－」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第 32 巻, pp.125－144.
- 中村高康, 2010, 「四大シフト現象の分析」『進路選択の過程と構造－高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ－』ミネルヴァ書房, pp.163－183.

- 中村高康編著, 2010, 『進路選択の過程と構造—高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ—』 ミネルヴァ書房.
- 中村高康, 2011, 『大衆化とメリトクラシー—教育選抜をめぐる試験と推薦のパラドクス—』 東京大学出版会.
- 中西啓喜・平木耕平, 2009, 「地域を潤す源流となれ!—山形県・長井工業高校の事例—」 『青少年問題』第 637 号 (第 57 巻 新年号) 財団法人 青少年問題研究会, pp.48—53.
- 中西啓喜, 2010, 「専門高校の課題の原点を探る—1979 年・1997 年高校生調査データの再分析から—」 『青山学院大学教育人間科学部紀要』第 1 号, pp.113—125.
- Nakanishi, H., 2011, 'A Study of Junior High School Students' Educational Aspiration in Present-Day Japan, with a Focus on the Tracking and the Pre-Entry Effect', *Proceedings Selected Papers* Vol. 13, Ochanomizu University Global COE Program, pp.123-128.
- 中西祐子・中村高康・大内裕和, 1997, 「戦後日本の高校間格差成立過程と社会階層—1985 年 SSM 調査データの分析を通じて—」 『教育社会学研究』第 60 号, pp.61—82.
- 中西祐子, 2000, 「学校ランクと社会移動—トーナメント型社会移動規範が隠すもの—」 近藤博之編著 『日本の階層システム 3—戦後日本の教育社会—』, pp.37—56 東京大学出版会.
- 中西祐子, 2011, 「公立学校制度改革と親の意識の地域差—誰が「脱出」オプションを選択できるのか?—」 石川由香里・喜多加実代・中西祐子・杉原名穂子編著 『格差社会を生きる家族—教育意識と地域・ジェンダー—』 有信堂高文社, pp.33—60.
- 中澤渉, 2003, 「教育社会学における実証研究の諸問題—教育社会学の自己反省の試み—」 『教育社会学研究』第 72 集, pp.151—169.
- 中澤渉, 2008, 「戦後高校教育の拡大と高校間格差構造の変容—進学高校の選択と出身階層の関係—」 米澤彰純編 『教育達成の構造』2005 年 SSM 調査シリーズ 5, pp.37—55.
- 中澤渉, 2010, 「学歴の世代間移動の潜在構造分析」 『社会学評論』61(2), pp.112—129.
- 日本教育社会学会編, 1986, 『新教育社会学辞典』 東洋館.
- 日本労働支援機構, 2003, 『学校から職場へ—高卒就職の現状と課題—』 調査研究報告書 No.154.
- 西本勝美, 2004, 「企業社会の成立と教育の競争構造」 渡辺治編 『日本の時代史 27 高度成長と企業社会』 pp.157—189.

- 西野淑美, 2002, 「大学進学において都市規模が持つ意味」伊藤由樹子ら(編)『全国大学生活協同組合連合会「学生生活実態調査」の再分析(1991年から2000年)』東京大学社会科学研究所, pp36-50.
- Oakes, J., 1985, *Keeping Track: How Schools Structure Inequality*, Yale University Press.
- お茶の水女子大学, 2004~2012, 『青少年期から成人期への移行についての追跡的研究』JELS 第1集~第15集.
- OECD, 1971, *Reviews of National Policies for Education: Japan*, OECD (=1972, 深代惇郎訳『日本の教育政策』朝日新聞社).
- OECD, 2000, *From Initial Education to Working Life: Making Transition Work*, OECD.
- 小川洋, 2000, 『なぜ公立高校はダメになったのか—教育崩壊の真実—』亜紀書房.
- 尾川満宏, 2012, 「トランジションをめぐる「現場の教授学」—ある地方工業高校における学校と職業の接続様式—」『子ども社会研究』18号, pp.3-16.
- 小倉昭治, 2000, 「商業高校と高等教育機関への接続」『産業教育』第50巻(2), pp.4-7.
- 岡部恒治・西村和雄・戸瀬信之編, 1999, 『分数ができない大学生—21世紀の日本が危ない—』東洋経済新報社.
- 岡部悟志, 2009, 「都立専門高校の生徒の大学進学希望とその規定要因」『都立専門高校の生徒の学習と進路に関する調査』ベネッセ教育開発センター, pp.138-146.
- 大多和直樹, 2000, 「生徒文化—学校適応—」樋田大二郎ほか編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版, pp.185-213.
- 大多和直樹, 2001, 「「地位欲求不満説」再考—上層:生徒文化・下層:若者文化モデル試論—」『犯罪社会学研究』第26巻, pp.116-140.
- Parsons, T., 1951, *The Social System*, The Free Press (=1974, 佐藤勉訳『社会体系論』(現代社会学体系14)青木書店).
- Parsons, T., 1959, "The School Class as a Social System: Some of its Function in America Society" *Harvard Educational Review*, Vol.29, No.4, pp.297-318 (=1973, 「社会システムとしての学級—アメリカ社会における若干の機能—」武田良三監訳『社会構造とパーソナリティ』新泉社, pp.171-201).
- Reich, R. B., 1991, *The Work of Nations*, Alfred A. Knopf, Inc. (=1991, 中谷巖訳『THE WORK OF NATIONS—21世紀資本主義のイメージ—』ダイヤモンド社).

- Rist, R. C., 1977, “On Understanding the Processes of Schooling: The Contributions of Labeling Theory.” In J. Karabel, and A. H. Halsey, (Eds), *Power and Ideology in Education*, Oxford University Press. (=1980, 「学校教育におけるレイベリング理論」 潮木守一・天野郁夫・藤田英典編訳『教育と社会変動 上』東京大学出版会, pp.205-225) .
- Rohlen, T. P., 1983, *Japan's High Schools*, University of California Press (=1988, 友田泰正訳『日本の高校—成功と代償—』サイマル出版会) .
- Rosenbaum, J., 1976, *Making Inequality: The Hidden Curriculum of High School Tracking*, Wiley-Interscience.
- Rosenbaum, J., 1980, “Track Misperceptions and Frustrated College Plans”, *Sociology of Education* Vol.53 (April), pp.74-88.
- Rosenbaum, J., and Jones, S. A., 2000, “Interactions between High Schools and Labor Markets,” In M. T. Hallinan (Eds), *Handbook of the Sociology of Education*, Springer, pp.411-436.
- 斎藤貴男, 2001, 文藝春秋編『教育の論点』文藝春秋 (=2006, 「国家のためでもなく企業のためでもなく」 山内乾史・原清治編『リーディングス 日本の教育と社会 1 学力問題・ゆとり教育』日本図書センター, pp.248-260) .
- 斎藤貴男, 2005, 『人間選別工場』同時代社.
- 斎藤武雄・田中喜美・依田有弘編著, 2005, 『工業高校の挑戦—高校教育再生への道—』学文社.
- 酒井朗編著, 2007, 『進学支援の教育臨床社会学—商業高校におけるアクションリサーチ—』頸草書房.
- 佐々木亨, 1976, 『高校教育論』大月書店.
- 佐藤（粒来）香, 2004, 『社会移動の歴史社会学—生業/職業/学校—』東洋館出版社.
- 佐藤俊樹, 2000, 『不平等社会日本—さよなら総中流—』中公新書.
- 佐藤俊樹, 2001, 「「新中間大衆」誕生から二十年—「がんばる」基盤の消滅—」「中央公論」編集部編『論争・中流崩壊』中公新書ラクレ, pp.15-31.
- Shimabara, N. K., 1995, “Restructuring Japanese High Schools: Reforms for Diversity”, *Education Policy*, Vol.9, No.2, pp.185-200 (=2009, 井本佳宏訳「日本の高校再編—多様性を目指した改革—」 L. MacDonald 編著, 菊地栄治・山田浩之・橋本鉦市監訳『リ

- ーディングス 日本の教育と社会 20 世界から見た日本の教育』日本図書センター,
pp.156－171) .
- Shingleton, J., 1989, “Gambaru: A Japanese Cultural Theory of Learning,” In Shields,
James J. (Eds) *Japanese Schooling*, Pennsylvania State University Press, pp.8-15.
- 汐見稔幸, 1994, 「企業社会と教育」坂野潤治・宮地正人・高村直助・安田浩・渡辺治編
『日本近現代史 4 戦後改革と現代社会の形成』岩波書店, pp.289－329.
- 白石義郎, 1978, 「高等学校における生徒文化の形態と機能に関する調査研究(1)―生徒文
化の類型を中心として―」九州大学教育学部紀要(教育学部門) 第 24 集, pp.147－164.
- 須藤康介, 2007, 「授業方法が学力と学力の階層差に与える影響―新学力観と旧学力観の
二項対立を超えて―」『教育社会学研究』第 81 集, pp.25－44.
- 橘木俊詔, 1998, 『日本の経済格差―所得と資産から考える―』岩波新書.
- 橘木俊詔, 2006, 『格差社会―何が問題なのか―』岩波新書.
- 橘木俊詔, 2010, 『日本の教育格差』岩波新書.
- 武内清, 1972, 「〈研究ノート〉生徒の下位文化をめぐって」『教育社会学研究』第 27 号,
pp.173－178.
- 竹内洋, 1991a, 「日本型選抜の探求―御破算型選抜規範―」『教育社会学研究』第 44 集,
pp.34－56.
- 竹内洋, 1991b, 『立志・苦学・出世―受験生の社会史―』講談社現代新書.
- 竹内洋, 1995a, 『日本のメリトクラシー―構造と心性―』東京大学出版会.
- 竹内洋, 1995b, 「学校効果というトートロジー」竹内洋・徳岡秀雄編著『教育現象の社会
学』世界思想社, pp.2－18.
- 竹内洋, 2000, 「日本の教育社会学―過去と未来―」藤田英典・志水宏吉編『変動社会の
中の教育・知識・権力』新曜社, pp.68－89.
- 竹内洋, 2005, 『立身出世主義―近代日本のロマンと欲望―』世界思想社.
- 谷崎奈緒子, 2008, 「誰が中学受験の準備をするのか―地域の教育構造に着目して―」
『SSJDA－38 教育選択と教育戦略に関する実証研究』東京大学社会科学研究所,
pp.87－98.
- Thurow, L. C., 2003, *Fortune Favors the Bold: What We Must do to Build A New and
Lasting Global Prosperity*, Harper Collins Publishers, Inc. (=2004, 三上義一訳『知
識資本主義』ダイヤモンド社) .

- 富江英俊, 1997, 「高校生の進路選択における「地元志向」の分析—都市イメージ・少子化との関連を中心に—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 37 巻, pp.145—154.
- Trow, M. A., 1961, “The Second Transformation of American Secondary Education”, *International Journal of Comparative Sociology* 2, pp.144-165 (=1980, 「アメリカ中等教育の構造変動」潮木守一・天野郁夫・藤田英典編訳『教育と社会変動 下』東京大学出版会, pp.19—42) .
- Trow, M. A., 1976, 天野郁夫・喜多村和之訳『高学歴社会の大学—エリートからマスへ—』東京大学出版会 (=1972, “The Expansion and Transformation of Higher Education”, *The International Review of Education* Vol. XVIII, Feb.-March, 1974, “Problems in the Transition Elite to Mass Higher Education”, *Policies for Higher Education: General Report of the Conference on Future Structure of Post-secondary Education*, OECD, 1975, “Elite Higher Education: An Endangered Species?”, *Graduate School of Public Policy (Working Paper)*, No. 44, December) .
- ※本研究における引用箇所が日本語版の「序文」であるため、このような表記とする。
- 粒来香・林拓也, 2000, 「地域移動から見た就学・就職行動」近藤博之編『日本の階層システム 3 戦後日本の教育社会』東京大学出版会, pp.57—76.
- 塚原修一・小林淳一, 1979, 「社会階層と移動における地域の役割」富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会, pp.232—271.
- 塚原修一・野呂芳明・小林淳一, 1990, 「地域と社会階層」直井優・盛山和夫編『現代日本の階層構造①—社会階層構造と過程』東京大学出版会, pp.127—149.
- Turner, R. H., 1960, “Sponsored and Contest Mobility and the School System” In A. H. Halsey, J. Floud, and C. A. Anderson (Eds), *Education, Economy, and Society: A Reader in the Sociology of Education*, The Free Press (=1963, 「教育による階層移動の形態」清水義弘監訳『経済発展と教育』東京大学出版会, pp.63—91) .
- 卯月由佳, 2004, 「《教育機会の平等》の再検討と《公共財としての教育》の可能性—公立学校からの退出を事例として—」『教育社会学研究』第 74 集, pp.169—187.
- 上間陽子, 2009, 「貧困が見えない学校—競争の時代区分で見る学校から排除される子ども・若者たち—」湯浅誠・富樫匡孝・上間陽子・仁平典宏編著『若者と貧困—いま, ここからの希望を—』明石書店, pp.139—159.
- 海野道郎・片瀬一男, 2008, 『〈失われた時代〉の高校生の意識』有斐閣.

- 水牛健太郎, 2006, 「はじめに」 文春新書編集部編『論争 格差社会』 文藝春秋, pp.7－16.
- 潮木守一, 1975, 「進路決定過程のパス解析—高校進学過程の要因分析—」『教育社会学研究』第 30 集, pp.75－85.
- 潮木守一・藤田英典・秦政春・佐藤智美・滝充, 1978, 「教育意識の構造に関する事例研究」『名古屋大学教育学部紀要』第 25 巻, pp.167－230.
- 潮木守一・佐藤智美, 1979, 「社会階層と学業成績に関する実証的研究 (その 1)」『名古屋大学教育学部紀要』第 26 巻, pp.117－135.
- 潮木守一, 1983, 「学歴の社会学—その理論的検討—」『教育社会学研究』第 38 集, pp.5－14.
- 潮木守一, 2006, 「転換点に立つ教育社会学」『教育社会学研究』第 78 集, pp.7－24.
- Weber, M., 1956, *Wirtschaft und Gesellschaft, Grundriss der verstehenden Soziologie*, vierte, neu herausgegebene Auflage, besorgt von Johannes Winckelmann, Kapitel IX. *Soziologie der Herrschaft* (=1960, 世良晃志郎訳『支配の社会学 I』創文社) .
- Willis, P. E., 1977, *Learning to Labor: How Working Class Kids Get Working Class Jobs*, Westmead: Saxon House (=1985, 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども—学校への反抗 労働への順応—』筑摩書房) .
- Whitty, G., 2002, *Making Sense of Education Policy*, Paul Chapman Publishing Ltd., A SAGE Publication Company (=2004, 堀尾輝久・久富善之監訳『教育改革の社会学—市場, 公教育, シティズンシップ—』東京大学出版会).
- 山田昌弘, 2004, 『希望格差社会—「負け組」の絶望感が日本を引き裂く—』筑摩書房.
- 山田礼子, 2005, 『一年次 (導入) 教育の日米比較』東信堂.
- 山村賢明, 1976, 「日本における社会移動の様式と学校」石戸谷哲夫編『変動する社会の教育』第一法規, pp.163－184.
- 矢野眞和・濱中淳子, 2006, 「なぜ、大学に進学しないのか—顕在的需要と潜在的需要の決定要因—」『教育社会学研究』第 79 巻, pp.85－104.
- 矢島正見・耳塚寛明編著, 2001, 『変わる若者と職業世界』学文社.
- 安田三郎, 1971, 『社会移動の研究』東京大学出版会.
- 米川英樹, 1978, 「高校における生徒下位文化の諸類型」『大阪大学人間科学部紀要』第 4 巻 pp.183－208.

Young, M. F. D. (Eds), 1971, *Knowledge and Control: New Directions in the Sociology of Education*, Collier Macmillan.

Young, M., 1958, *The Rise of Meritocracy*, Transaction Pub (=1982, 窪田鎮夫・山元卯一郎訳『メリトクラシー』至誠堂) .

謝辞

この博士論文は、私が 2009 年に青山学院大学大学院教育人間科学研究科博士後期課程に入学してからの約 4 年半で書き上げたものである。本論文を書き上げるにあたり、本当にたくさんの方々のご指導やサポートをいただいた。

青山学院大学大学院では、指導教官の樋田大二郎先生および審査・指導に関わってくださった先生方には、多くの時間を割いていただいた。心よりお礼を申し上げたい。

生徒文化研究会の岩木秀夫先生、耳塚寛明先生、荻谷剛彦先生、堀健志先生、大多和直樹先生、シム・チュン・キャット先生、金子真理子先生、岡部悟志氏にも感謝を申し上げたい。特に、耳塚先生には、私が青山学院大学に入学する以前から現在に至るまで多くの研究指導をいただいております、また研究会に参加するきっかけもいただいた。本論文で用いた主たるデータは、生徒文化研究会によって得られており、データの利用を許可していただいた。また、当該データの分析の視点や枠組みについてはの多くは、この研究会での議論から得ることができた。この研究会に参加させていただいたことが、私の研究にとって大きな財産となっている。

調査の過程で私の研究に関わってくださった教育関係者の方々にも感謝の気持ちをお伝えしたい。皆様に調査への多大なご協力をいただいたことによりデータ蒐集が可能になっただけでなく、「今、何が問題なのか」を把握することができた。また、皆様との出会いによって、私は研究へのモチベーションを常に高く保つことができた。本研究の成果が、調査対象地域の教育に活かされることを願うばかりである。

そして、本論文の提出に際して、論旨の確認や誤字・脱字チェックなどに何度も協力いただいた小川美里氏、柚木彩香氏にも心より感謝を申し伝えたい。

最後に、私の両親、家族にも感謝したい。様々な不安があるにも関わらず、私が学問の世界に飛び込むことを了解し、経済的にも精神的にもいつも私を支えてくれた。

これら多くの人々の協力、援助によって本研究は結晶した。

2013 年 7 月

中西啓喜

Appendix1 : 生徒文化調査の調査票

1. 現代高校生の生活と意識（生徒用調査票）

現代高校生の生活と意識

1979. 11～12

東京大学教育社会学研究室

研究代表者 教授 松 原 治 郎

Q1. 学校名

Q2. 学年・組

Q3. 性別 (1. 男 2. 女)

Q4. あなたはふだん、次のことをどの位しますか。A～Cのそれぞれについてあてはまる番号に○をつけて下さい（ただし、土曜日、休日をのぞいた日の平均時間を考えて下さい）

A. 家での勉強

B. テレビを見る

C. ラジオを聞く

1. ほとんどしない
2. 30分くらいまで
3. 30分から1時間
4. 1時間から2時間
5. 2時間から3時間
6. 3時間から4時間
7. 4時間から5時間
8. 5時間以上

Q5. あなたは現在自由参加の部活動に参加していますか。次の中から、一つだけ選んで○をつけて下さい。

1. 運動部・文化部の両方に参加している。
2. 運動部に参加している。
3. 文化部に参加している。
4. 以前は参加していたが、現在は参加していない。
5. 参加したことはない。

Q6. あなたの総合的な成績は、学校の中で次のうちのどこに位置していると思いますか。それぞれについて、あてはまる位置の番号に○をつけて下さい。

A. 学校での今の成績は、どの位ですか。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
(下位)			(中位)				(上位)		

B. 中学校卒業時の（あなたの中学校の中での）成績はどの位でしたか。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
(下位)			(中位)				(上位)		

C. 今の成績は別として、あなたの本当の能力からすると、あなたの成績は、どの位だと思いますか。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
(下位)			(中位)				(上位)		

Q7. 友人関係についてうかがいます。A～H のそれぞれについて、「1. はい」、「2. いいえ」のいずれか一方の番号に○をつけて下さい。

- A. 学校の中に親しい友人がいる
- B. 学校の外に親しい友人がいる
- C. 学年のちがう友人がいる
- D. 異性の友人がいる
- E. 学校外の友人との方が気が合う
- F. 休みの日に友人とあそびに行くことがよくある
- G. 友人の家へよくあそびに行く
- H. 友人とは表面的なつきあいが多

Q8. あなたの学校の教育面の特色と思われることは何ですか。A～M のそれぞれについてあてはまる番号に○をつけて下さい。（1. そう思う 2. そう思わない）

- A. クラブや部活動に力を入れている
- B. ホーム・ルーム活動に力を入れている
- C. 生徒会活動に力を入れている
- D. 校則を守らせることに力を入れている

- E. 教科の指導に力を入れている
- F. 受験指導に力を入れている
- G. 就職指導に力を入れている
- H. 体育祭・文化祭などの行事に力を入れている
- I. 選択科目が多い
- J. 実技、実習、実験が多い
- K. 授業の内容をできるだけやさしくしている
- L. 全体の授業時間数が多い
- M. 授業の時能力・適性や進度などに応じたクラス編成をしている

Q9. A. あなたは、学校にもっとこうしてほしいと思うことがありますか。A～Oのそれぞれについてあてはまる番号に○をつけて下さい。（1. とくにそう思う 2. ややそう思う 3. あまりそう思わない 4. 全くそう思わない）

- A. クラブや部活動をもっと充実させてほしい
- B. ホーム・ルーム活動をもっと充実させてほしい
- C. 生徒会活動をもっと充実させてほしい
- D. 体育祭・文化祭などの行事をもっと充実させてほしい
- E. 規則をもっと徹底させてほしい
- F. 教科の指導にもっと力を入れてほしい
- G. 受験指導にもっと力を入れてほしい
- H. 就職指導にもっと力を入れてほしい
- I. 選択科目をもっとふやしてほしい
- J. 実技、実習、実験をもっとふやしてほしい
- K. 授業の内容をもっとやさしくしてほしい
- L. 全体の授業時間数をへらしてほしい
- M. 将来の職業に役立つことをもっと教えてほしい
- N. 規則をもっとゆるやかにしてほしい
- O. 授業の時、能力・適性や進度などに応じたクラス編成をしてほしい

B. では、A～Oのなかで、あなたがもっともこうしてほしいと思うことはどれですか。一つ選んで下の□に記入して下さい。

Q10. あなたの学校の規則についてうかがいます。つぎのそれぞれについて、「1. はい」、「2. いいえ」のいずれか一方の番号に○をつけて下さい。

- A. 校則は校則だから当然守るべきだと思う
- B. きちんとした社会人になるために規則は守るべきだ
- C. 注意や罰を受けるから仕方なく規則に従っている
- D. 集団生活をうまくやっていくために規則を守るべきだ
- E. みんなから白い眼で見られないために規則を守るべきだ
- F. 先生からよく見られるためにも規則に従っている

Q11. あなたは次のことについて興味・関心をもっていますか。A～Jのそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけて下さい。（1. はい 2. いいえ）

- A. 文学・哲学
- B. ニューミュージック・ロック・ポップス
- C. ゲームセンター・パチンコ
- D. パーマ・リーゼント
- E. オートバイ
- F. 喫茶店
- G. 異性
- H. 喫煙
- I. 飲酒
- J. ひとり旅

Q12. 次に、授業や勉強のことについてうかがいます。次のA～Pのそれぞれについて「1. はい」「2. いいえ」のいずれか一方を選び番号に○をつけて下さい。

- A. 先生の授業を熱心に聞いている方だ
- B. 家でもきちんと勉強する方だ
- C. 授業でわからない点は、いつまでもそのままにしておかない方だ
- D. 今の自分の成績に満足している
- E. 他人の試験の成績が気になる方だ
- F. 高校での勉強は、自分の興味・関心にあわないものが多い
- G. 先生の授業の進め方が早すぎて、ついていけない科目が多い
- H. 先生や親の期待にこたえるために、勉強しなければならないことがある
- I. 授業がきっかけとなって、さらに詳しいことを知りたくなることがある

- J. どうして、こんなことまで勉強しなければならないのかと疑問に思うことがある
- K. 落第しない程度の成績をとってればいいと思う
- L. 試験がおわると勉強したことをすぐ忘れてしまう方だ
- M. 教科書の内容がむずかしすぎて、ついていけない科目が多い
- N. よい成績をとると、友達に優越感を感じる
- O. 試験の成績がよかった時よりも、授業の内容がよくわかった時の方がうれしい
- P. いくら勉強しても、大切なものが身についていないと思うことがある

Q13. 次のような意見について、あなたはどのように思いますか。A～Jのそれぞれについて、あてはまる番号を一つ選び○をつけて下さい。（1. ひじょうにそう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. 全然そう思わない）

- A. 現在の高校での勉強は暗記中心だ
- B. 学校では勉強のできる生徒が幅をきかせている
- C. 勉強することは高校生の本分だ
- D. 努力すれば、誰でもよい成績をとることができる
- E. 今の日本の社会では、学校での成績によって将来が決まる
- F. 今の学校の試験では、本当の能力ははかれない
- G. 高校での勉強は、将来、就職や生活に役立つ
- H. 現在の高校での勉強は、受験に役立つだけだ。
- I. 勉強をなまけて成績の悪い者が、将来、損をするのは仕方がないことだ
- J. 授業での先生の説明は、表面的でものたりない

Q14. あなたは、学校生活のどんな時に、充実感を感じますか。次の、A～Hのそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけて下さい。（1. 大いに充実感がある 2. やや充実感がある 3. あまり充実感がない 4. 全然充実感がない）

- A. 英・国・数・理・社の授業
- B. その他の授業・実習
- C. ロングのホーム・ルーム活動
- D. 必修のクラブ活動
- E. 自由参加の部活動

- F. 生徒会、委員会活動
- G. 学校行事（文化祭・体育祭・合唱大会・スポーツ大会など）
- H. 学校での友人とのつきあい

Q15. この学校にあなたのことを認めてくれたり期待してくれる先生がいますか。
あてはまる番号を一つだけ選んで○をつけて下さい。

- 1. たくさんいる
- 2. 少しいる
- 3. 全然いない

SQ (1, 2 と答えた人だけ答えて下さい)

その中で、あなたのことを最も認めてくれたり期待してくれているのはどの先生ですか。一つ選んで○をつけて下さい。

- 1. クラブ・部活動の先生
- 2. クラス担任の先生
- 3. 英語の先生
- 4. 数学の先生
- 5. 国語の先生
- 6. 理科の先生
- 7. 社会科の先生
- 8. 商業、工業などの専門科目の先生
- 9. 体育や音楽、美術の先生
- 10. 保健室の先生

Q16. あなたの学校の先生には、次のような先生がどの位いますか。次の A～G についてそれぞれあてはまる番号を一つ選んで○をつけて下さい。（1. たくさんいる 2. 少しいる 3. ほとんどいない）

- A. 校則違反はおおめにみる先生
- B. 授業中、成績のよい生徒を中心に指名する先生
- C. 生徒がわかるまで、ていねいに教える先生
- D. 道で会うと声をかけてくる先生
- E. 授業中の生徒のおしゃべりをあまりしからない先生
- F. 生徒の意見を大事にする先生
- G. 細かいことまで口うるさい先生

Q17. あなたは次のように感じるがありますか。次の A～K にそれぞれについてあてはまる番号に○をつけて下さい。(1. よくある 2. たまにある 3. ほとんどない 4. 全然ない)

- A. できることなら他の高校にかわりたい
- B. 今いるクラスにとけ込めない
- C. 学校を休みたいという気持ちになる
- D. 早く社会に出て働きたい
- E. この学校での生活にはりあいを感じる
- F. この学校のやり方に不満を感じる
- G. 学校にいるときよりも学校の外での生活の方が楽しい
- H. この学校の生徒であることは誇りである
- I. 学校生活は楽しい
- J. 授業以外での先生との接触に満足している
- K. 先生に親しみを感じる

Q18. あなたが現在かよっている高校は、この地域の他の高校とくらべて、どの位すぐれていますか。(1)～(8)のそれぞれについてあてはまる番号を一つ選んで○をつけて下さい。(1. すぐれている 2. ややすぐれている 3. ややおとっている 4. おとっている)

- (1)運動部の強さ
- (2)文化部のレベル
- (3)学力のレベル
- (4)就職の実績
- (5)生徒のまじめさ
- (6)文化祭、体育祭の活発さ
- (7)自由な校風
- (8)生徒のまとまり

Q19. あなたが現在通っている学校で、最も誇れる者はなんですか。上の(1)～(8)の項目のうち、一つ選んでその項目の番号を下の□に記入して下さい。

Q20. あなたは次のように感じるがありますか。A～E のそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけて下さい。（1. 非常に感じる 2. やや感じる 3. あまり感じない 4. 全く感じない）

- A. 社会に出てからうまくやっていけるかどうか心配だ
- B. 将来の自分と今の学校生活がどうつながるのかわからない
- C. 将来のためを考えるよりも今の生活を楽しみたい
- D. 自分には人よりすぐれたところがある
- E. たいいていのことはうまくこなすことができる

Q21. あなたは現在通っている学校についてどう思っていますか。一つ選んで○をつけて下さい。

- 1. はじめから今の学校に入りたかった
- 2. 本当は他の学校に入りたかった
- 3. 特に入りたい学校はなかった

Q22. あなたが希望する卒業後の進路は、次のどれですか。一つだけ選んで○をつけて下さい。

- 1. 就職
- 2. 家事・家の手伝い
- 3. 各種学校・専修学校
- 4. 短期大学
- 5. 4年制大学（私立）
- 6. 4年生大学（国公立）

Q23. あなたのおとうさん（または、それにかわる人）は、どのような職業についていますか。あてはまる番号一つに○をつけて下さい。

- 1. 専門的・技術的な仕事（医師・技術者・教員・住職など）
- 2. 管理的な仕事（役所や会社で課長以上の役職に就いている人）
- 3. 事務的な仕事（役所や会社、商店などで事務的な仕事をしている人）
- 4. 販売関係の仕事（店員、セールスマン、外交職員など）
- 5. 農林漁業
- 6. 自営商工業（小売店主や、工場経営者など）
- 7. 運輸・通信従業者（運転手、郵便配達、鉄道関係など）

8. 技術工・労務関係の仕事（工員、または大工、左官などの職人及び人夫など）
9. サービス関係の仕事（理髪師、ホテル・旅館の従業員など）
10. その他（具体的に ）

Q24. あなたのご両親が最後に卒業された学校はどれですか。おとうさん、おかあさんのそれぞれについてあてはまる番号を選んで、下の□の中に記入して下さい。

1. 旧制 尋常小学校、高等小学校
新制 中学校
2. 旧制 中学校、師範学校、高等女学校、実業学校
新制 高等学校
3. 短期大学、各種学校
4. 旧制 高等学校、高等師範学校、高等専門学校
大学、大学院
5. その他
6. 父（母）はいない

Q25. あなたのご家族は、どのような家に住んでいますか。あてはまる番号を一つ選んで○をつけて下さい。

1. 一戸建て（持家）
2. マンション（持家）
3. 一戸建て（賃借り） マンション（賃借り）
4. アパート・団地
5. 社宅・公務員住宅
6. 借間・住み込み
7. その他

I				
1	2	3	4	5

1998 年 1 月 ~ 2 月

現代高校生の生活と意識に関する調査

高校生徒文化研究会

研究代表者 聖心女子大学助教授

樋田大二郎

調査へのご協力をお願い

このアンケートは、高校生のみなさんが、日頃どのような生活をし、どのようなことを考えているかをおたずねするものです。みなさんに無記名で記入していただいたあと、結果はすべて統計的に処理しますので、みなさんの回答が誰かに知られるようなことは、決してありません。

それでは、ありのまま、思うままにお答えください。

Q 1 . 学校・クラス		高校	2 年		組	- 6 ~ 8
Q 2 . 学科						9 ~ 10
コース(系)						
Q 3 . 性別	☐ 1 . 男 ☐ 2 . 女					11

Q 4 . あなたはふだん、次のことをどのくらいしますか。A ~ C のそれぞれについてあてはまる番号に○をつけて下さい。(ただし、土曜日、休日をのぞいた日の平均時間を考えて下さい)

	ほとんど しない	30分 くらいまで	30分から 1時間	1時間から 2時間	2時間から 3時間	3時間から 4時間	4時間から 5時間	5時間以上	12 ~ 14
A . 家で勉強する	1	2	3	4	5	6	7	8	
B . テレビを見る	1	2	3	4	5	6	7	8	
C . 電話で話をする	1	2	3	4	5	6	7	8	

Q 5 . あなたはふだん次のことを週に何日くらいしますか。A、B のそれぞれについて答えて下さい。(ただし、土曜日、休日も含めます。)

A . 部活動	週		日	15 ~ 16
B . 街をぶらぶらする	週		日	

Q 6 .あなたは現在自由参加の部活動に参加していますか。次の中から、一つだけ選んで○をつけて下さい。

17

- 1 . 運動部・文化部の両方に参加している
- 2 . 運動部に参加している
- 3 . 文化部に参加している
- 4 . 以前は参加していたが、現在は参加していない
- 5 . 参加したことはない

Q 7 .あなたは学校外で、次のような勉強をしていますか。A～Cのそれぞれについてあてはまる番号に○をつけて下さい。

18～20

- A . 家庭教師についている …………… 1 . ついている 2 . ついていない
- B . 通信教育や宅配の家庭学習教材をとっている …… 1 . とっている 2 . とっていない
- C . 放課後や日曜日に、学習塾や予備校に行っている・ 1 . 行っている 2 . 行っていない

Q 8 .あなたの総合的な成績は、学校の中で次のうちのどこに位置していると思いますか。A～Cのそれぞれについて、あてはまる位置の番号に○をつけて下さい。

21～23

A . 学校での今の成績は、どのくらいですか。

1	2	3	4	5	6	7	8	9
----- ----- ----- ----- ----- ----- ----- -----								
(下位)	(中位)	(上位)						

B . 中学校卒業時の（あなたの中学校の中での）成績はどのくらいでしたか。

1	2	3	4	5	6	7	8	9
----- ----- ----- ----- ----- ----- ----- -----								
(下位)	(中位)	(上位)						

C . 今の成績は別として、あなたの本当の能力からすると、あなたの成績は、どのくらいだと思いますか。

1	2	3	4	5	6	7	8	9
----- ----- ----- ----- ----- ----- ----- -----								
(下位)	(中位)	(上位)						

Q 9 .友人関係についてうかがいます。A ～ Qのそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけて下さい。

24 ～ 40		
A . 学校の中に親しい友人がいる……………	1 . はい	2 . いいえ
B . 学校の外に親しい友人がいる……………	1 . はい	2 . いいえ
C . 学年のちがう友人がいる……………	1 . はい	2 . いいえ
D . 異性の友人がいる……………	1 . はい	2 . いいえ
E . 学校外の友人とのほうが気が合う……………	1 . はい	2 . いいえ
F . 休みの日に友人とあそびにいくことがよくある……………	1 . はい	2 . いいえ
G . 友人の家へよくあそびにいく……………	1 . はい	2 . いいえ
H . 友人とは表面的なつきあいが多……………	1 . はい	2 . いいえ
I . つきあっている彼氏・彼女がいる……………	1 . はい	2 . いいえ
J . 友人の多いことが重要である……………	1 . はい	2 . いいえ
K . 初対面の人と気軽につきあ……………	1 . はい	2 . いいえ
L . ベル友がいる……………	1 . はい	2 . いいえ
M . 友人に悩み事を相談する……………	1 . はい	2 . いいえ
N . 他校の生徒とつきあうときに、 進路や勉強の話はしない……………	1 . はい	2 . いいえ
O . 自校の生徒とつきあうときに、 進路や勉強の話はしない……………	1 . はい	2 . いいえ
P . 他校の生徒とたくさん友達になりたい……………	1 . はい	2 . いいえ
Q . 学校が違って、生徒の趣味や遊び方は 同じようなものだ……………	1 . はい	2 . いいえ

Q 10 .あなたの学校の教育面の特色と思われることは何ですか。A ～ Pのそれぞれについてあてはまる番号に○をつけて下さい。

41 ～ 56		
A . 部活動に力を入れている……………	1 . はい	2 . いいえ
B . ホ - ム・ル - ム活動に力を入れている……………	1 . はい	2 . いいえ
C . 生徒会活動に力を入れている……………	1 . はい	2 . いいえ
D . 校則を守らせることに力を入れている……………	1 . はい	2 . いいえ
E . 教科の指導に力を入れている……………	1 . はい	2 . いいえ
F . 受験指導に力を入れている……………	1 . はい	2 . いいえ
G . 就職指導に力を入れている……………	1 . はい	2 . いいえ
H . 体育祭・文化祭などの行事に力を入れている……………	1 . はい	2 . いいえ
I . 選択科目が多い……………	1 . はい	2 . いいえ
J . 実技、実習、実験が多い……………	1 . はい	2 . いいえ
K . 授業の内容をできるだけやさしくしている……………	1 . はい	2 . いいえ
L . 全体の授業時間数が多い……………	1 . はい	2 . いいえ

M . 授業のとき能力・適性や進度などに応じた クラス編成をしている……………	1 . はい	2 . いいえ
N . 特色あるコースや学科がある……………	1 . はい	2 . いいえ
O . 生徒の興味関心に応じた指導に力を入れている……………	1 . はい	2 . いいえ
P . 将来の生き方を考えさせる指導に力を入れている……	1 . はい	2 . いいえ

Q 11 . あなたは、学校にもっとこうしてほしいと思うことがありますか。A ～ S のそれぞれについてあてはまる番号に○をつけて下さい。

	57 ～ 75			
	とくに そう思う	やや そう思う	あまり そう思わない	全く そう思わない
A . 部活動をもっと充実させてほしい……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
B . ホ・ム・ル・ム活動をもっと充実 させてほしい……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
C . 生徒会活動をもっと充実させてほしい…	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
D . 体育祭・文化祭などの行事を もっと充実させてほしい……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
E . 規則をもっと徹底させてほしい……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
F . 教科の指導にもっと力を入れてほしい…	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
G . 受験指導にもっと力を入れてほしい……	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
H . 就職指導にもっと力を入れてほしい……	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
I . 選択科目をもっとふやしてほしい……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
J . 実技、実習、実験をもっとふやしてほしい	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
K . 授業の内容をもっとやさしくしてほしい	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
L . 全体の授業時間数をへらしてほしい……	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
M . 将来の職業に役立つことをもっと 教えてほしい……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
N . 規則をもっとゆるやかにしてほしい……	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
O . 授業の時、能力・適性や進度などに 応じたクラス編成をしてほしい……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
P . 将来の生き方を考えさせる授業を してほしい……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
Q . 心の悩みを相談できるカウンセラーを 置いてほしい……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
R . 生徒の興味関心に応じた授業をして ほしい……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
S . 細かいところまで面倒見のよい教科 指導をしてほしい……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4

Q 12 .あなたの学校の規則についてうかがいます。A ～ Hのそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけて下さい。

2 ～ 9		
A . 校則は校則だから当然守るべきだと思う ……………	1 . はい	2 . いいえ
B . きちんとした社会人になるために規則は守るべきだ ……	1 . はい	2 . いいえ
C . 注意や罰を受けるから仕方なく規則に従っている ……	1 . はい	2 . いいえ
D . 集団生活をうまくやっていくために規則を守るべきだ ・	1 . はい	2 . いいえ
E . みんなから白い眼で見られないために規則を守るべきだ	1 . はい	2 . いいえ
F . 先生からよく見られるためにも規則に従っている ……	1 . はい	2 . いいえ
G . 校則がなくてもあまり問題はおこらないと思う ……	1 . はい	2 . いいえ
H . 校則や規則はあまり気にしていない ……………	1 . はい	2 . いいえ

Q 13 .あなたは次のことについて興味・関心をもっていますか。A ～ Nのそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけて下さい。

10 ～ 23		
A . 文学・哲学……………	1 . はい	2 . いいえ
B . ニュ - ミュ - ジック・ロック……………	1 . はい	2 . いいえ
C . ゲ - ムセンタ - ・パチンコ……………	1 . はい	2 . いいえ
D . 茶髪・ロン毛・パ - マ・リ - ゼント……………	1 . はい	2 . いいえ
E . オ - トバイ・車……………	1 . はい	2 . いいえ
F . 喫茶店……………	1 . はい	2 . いいえ
G . 異性……………	1 . はい	2 . いいえ
H . 喫煙……………	1 . はい	2 . いいえ
I . 飲酒……………	1 . はい	2 . いいえ
J . ひとり旅……………	1 . はい	2 . いいえ
K . インターネット……………	1 . はい	2 . いいえ
L . テレビゲーム……………	1 . はい	2 . いいえ
M . プリクラ……………	1 . はい	2 . いいえ
N . カラオケ……………	1 . はい	2 . いいえ

Q 14 .次のことがらはあなたにどの程度当てはまりますか。A ～ Lのそれぞれについてあてはまる番号に○をつけて下さい。

24 ～ 35				
	とても あてはまる	まあ あてはまる	あまり あてはまらない	全然 あてはまらない
A . 制服のスカートを短くしたり、 変形した制服を着たりする ……………	1 ———	2 ———	3 ———	4
B . 学校で少しでもよい成績をとりたい ……	1 ———	2 ———	3 ———	4
C . ファッションや流行を意識する ……………	1 ———	2 ———	3 ———	4
D . 見知らぬ異性に声をかける / かけられる	1 ———	2 ———	3 ———	4
E . 先生に反発を感じる ……………	1 ———	2 ———	3 ———	4
F . 趣味に打ち込む ……………	1 ———	2 ———	3 ———	4
G . 先生にどう思われているか気になる ……	1 ———	2 ———	3 ———	4

	とても あてはまる	まあ あてはまる	あまり あてはまらない	全然 あてはまらない
H. 友達にどう思われているか気になる ……	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
I. テレビ等でいわれる今どきの「女子高生」や「高校生」と見られたい ……	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
J. 授業を集中して聞く ……	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
K. 制服も街に行くときのファッションになる ……	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
L. 制服を脱ぐとのびのびとした気分になる	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4

Q 15. 授業や勉強のことについてうかがいます。A ~ Vのそれぞれについてあてはまる番号に○をつけて下さい。

	36 ~ 57	
A. 先生の授業を熱心に聞いているほうだ ……	1. はい	2. いいえ
B. 家でもきちんと勉強するほうだ ……	1. はい	2. いいえ
C. 授業でわからない点は、いつまでもそのままにしておかないほうだ ……	1. はい	2. いいえ
D. いまの自分の成績に満足している ……	1. はい	2. いいえ
E. 他人の試験の成績が気になるほうだ ……	1. はい	2. いいえ
F. 高校での勉強は、自分の趣味・関心にあわないものが多い ……	1. はい	2. いいえ
G. 先生の授業の進め方が早すぎて、ついていけない科目が多い ……	1. はい	2. いいえ
H. 先生や親の期待にこたえるために、勉強しなければと思うことがある ……	1. はい	2. いいえ
I. 授業がきっかけとなって、さらに詳しいことを知りたくなることがある ……	1. はい	2. いいえ
J. どうして、こんなことまで勉強しなければならぬのかと疑問に思うことがある ……	1. はい	2. いいえ
K. 落第しない程度の成績をとっていればいいと思う ……	1. はい	2. いいえ
L. 試験が終わると勉強したことをすぐ忘れてしまうほうだ	1. はい	2. いいえ
M. 教科書の内容がむずかしすぎて、ついていけない科目が多い ……	1. はい	2. いいえ
N. よい成績をとると、友だちに優越感を感じる ……	1. はい	2. いいえ
O. 試験の成績がよかった時よりも、授業の内容がよくわかった時のほうがうれしい ……	1. はい	2. いいえ
P. いくら勉強しても、大切なものが身についていないと思うことがある ……	1. はい	2. いいえ
Q. 受験や就職のためには、学校の授業や補習(講習)だけで充分だと思う ……	1. はい	2. いいえ
R. 受験や就職のためには、学校での補習(講習)が必要だと思う ……	1. はい	2. いいえ

S . 自分の進路に役立たない科目はほとんど勉強しない・・・	1 . はい	2 . いいえ
T . 通知票より外部の模擬試験の結果が気になる	1 . はい	2 . いいえ
U . 将来ふつうに生活するのに困らないくらいの 学力があればいい	1 . はい	2 . いいえ
V . できるだけいい大学や就職先に入れるよう、 成績を上げたい	1 . はい	2 . いいえ

Q 16 . 次のような意見について、あなたはどのように思いますか。A ~ Nのそれぞれについて
あてはまる番号に○をつけて下さい。

	58 ~ 71			
	ひじょうに そう思う	どちらかと いえば そう思う	どちらかと いえば そう思わない	ぜんぜん そう思わない
A . 現在の高校での勉強は暗記中心だ	1	2	3	4
B . 学校では勉強のできる生徒が幅を きかせている	1	2	3	4
C . 高校生である以上、勉強すべきだ	1	2	3	4
D . 努力すれば、だれでもよい成績を とることができる	1	2	3	4
E . いまの日本の社会では、学校での 成績によって将来が決まる	1	2	3	4
F . いまの学校の試験では、本当の能力 ははかれない	1	2	3	4
G . 高校での勉強は、将来、職業や生活 に役立つ	1	2	3	4
H . 現在の高校での勉強は、受験に役立 つだけだ	1	2	3	4
I . 勉強をなまけて成績の悪い者が、 将来、損をするのはしかたないことだ	1	2	3	4
J . 授業での先生の説明は、表面的で ものたりない	1	2	3	4
K . 将来のことを気にするよりも今を 楽しんだほうがよい	1	2	3	4
L . 今の日本では、学歴があれば自分の 望む生き方を選ぶことができる	1	2	3	4
M . あくせく勉強してよい学校や会社に入っ ても、将来の生活に大した変わりはない	1	2	3	4
N . 今の日本の社会は男女平等の社会だ	1	2	3	4

Q 17 . あなたは、学校生活のどんな時に、充実感を感じますか。A ～ G のそれぞれについてあてはまる番号に○をつけて下さい。

	72 ～ 78			
	大いに 充実感 がある	やや 充実感 がある	あまり 充実感 がない	ぜんぜん 充実感 がない
A . 英・国・数・理・社の授業……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
B . その他の授業、実習……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
C . ロングのホーム・ルーム活動……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
D . 部活動……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
E . 生徒会、委員会活動……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
F . 学校行事（文化祭、体育祭、 合唱大会、スポーツ大会など）……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
G . 学校での友人とのつきあい……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4

Q 18 . それでは、あなたにとって次のことはどのくらい大切ですか。A ～ L のそれぞれについてあてはまる番号に○をつけて下さい。

	2 ～ 13			
	非常に 大切である	やや 大切である	あまり 大切でない	全然 大切でない
A . 学校で勉強しているとき……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
B . 部活動をしているとき……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
C . 家でひとりでいるとき……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
D . 友だちとしゃべっているとき……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
E . 友だちと電話をしているとき……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
F . テレビゲームをしているとき……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
G . 彼氏・彼女と一緒にいるとき……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
H . 街でぶらぶらしているとき……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
I . 趣味に打ち込んでいるとき……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
J . 家族といっしょにいるとき……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
K . 学校にいるとき……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4
L . 雑誌を見ているとき……………	1 — — —	2 — — —	3 — — —	4

Q 19 . あなたの学校には、次のような先生がどのくらいいますか。A ～ K についてそれぞれあてはまる番号に○をつけて下さい。

	14 ～ 24		
	たくさんいる	少しいる	ほとんどいない
A . 多少の校則違反はおおめにみる先生……………	1 — — —	2 — — —	3
B . 授業中、成績のよい生徒を中心に指名する先生……………	1 — — —	2 — — —	3
C . 生徒がわかるまで、ていねいに教える先生……………	1 — — —	2 — — —	3
D . 道で会うと声をかけてくる先生……………	1 — — —	2 — — —	3
E . 授業中の生徒のおしゃべりをあまりしからない先生……………	1 — — —	2 — — —	3
F . 生徒の意見を大事にする先生……………	1 — — —	2 — — —	3
G . 細かいことまで口うるさい先生……………	1 — — —	2 — — —	3
H . あなたを認めてくれたり期待してくれる先生……………	1 — — —	2 — — —	3

	たくさんいる	少しいる	ほとんどいない
I . なにかにつけて他校と比べる先生	1	2	3
J . 生徒から信頼されている先生	1	2	3
K . 生徒にからかわれる先生	1	2	3

Q 20 . あなたは学校の先生にどんなことを望んでいますか。A ~ Hのそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけて下さい。

	とても 望んでいる	まあ 望んでいる	あまり 望んでいない	25 ~ 32 全く 望んでいない
A . 受験や就職に関する指導やアドバイス ..	1	2	3	4
B . 学校外での友人関係や遊び方について のアドバイス	1	2	3	4
C . クラスの人間関係についてのアドバイス ..	1	2	3	4
D . 将来の生き方についてのアドバイス	1	2	3	4
E . いじめが起きたときの問題解決	1	2	3	4
F . 家族についての悩みを聞くこと	1	2	3	4
G . 恋愛についての悩みを聞くこと	1	2	3	4
H . 生徒と友達同士のように話すこと	1	2	3	4

Q 21 . あなたは次のように感じる場合がありますか。A ~ Pのそれぞれについてあてはまる番号に○をつけて下さい。

	非常に 感じる	やや 感じる	あまり 感じない	33 ~ 48 全く 感じない
A . できることならほかの高校にかわりたい ..	1	2	3	4
B . 今いるクラスにとけ込めない	1	2	3	4
C . 学校を休みたいという気持ちになる	1	2	3	4
D . 早く社会に出て働きたい	1	2	3	4
E . この学校での生活にはりあいを感じる ..	1	2	3	4
F . この学校のやり方に不満を感じる	1	2	3	4
G . 学校にいる時よりも学校の外での生活 のほうが楽しい	1	2	3	4
H . この学校の生徒であることは誇りである	1	2	3	4
I . 学校生活は楽しい	1	2	3	4
J . 授業以外での先生との接触到満足している	1	2	3	4
K . 先生に親しみを感じる	1	2	3	4
L . できることなら他の学科・コースに かわりたい	1	2	3	4
M . 学校が休みだと、時間をもてあます	1	2	3	4
N . 何のために学校に行くのか、とくに 考えたことはない	1	2	3	4
O . 学校での生活は退屈だ	1	2	3	4
P . 自分にとって学校はなくてはならない ..	1	2	3	4

Q 22 .あなたは次のように感じるがありますか。A ～ E のそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけて下さい。

			49 ～ 53
	非常に 感じる	やや やや感じる	あまり 感じない
			全く 感じない
A . 社会に出てからうまくやっていける			
かどうか心配だ	1	2	3
B . 将来の自分と今の学校生活がどうつ			
ながるのかわからない	1	2	3
C . 将来のためを考えるよりも今の生活			
を楽しみたい	1	2	3
D . 自分には人よりすぐれたところがある ..	1	2	3
E . たいていのことはうまくこなすこと			
ができる	1	2	3

Q 23 .あなたは現在通っている学校についてどう思っていますか。一つ選んで○をつけて下さい。

1 . はじめから今の学校に入りがかった
2 . 本当は他の学校に入りがかった
3 . 特に入りたい学校はなかった

Q 24 .あなたは現在の高校・学科・コースを選択する際に、次のことをどれだけ重視しましたか。A ～ L のそれぞれについてあてはまる番号に○をつけて下さい。

			55 ～ 66
	とても 重視した	まあ 重視した	あまり重視 しなかった
			全く重視 しなかった
A . 教育面での特色	1	2	3
B . 生徒の雰囲気	1	2	3
C . 制服のデザイン	1	2	3
D . 伝統	1	2	3
E . 自分の成績	1	2	3
F . 自分の興味・関心	1	2	3
G . 将来希望する進路	1	2	3
H . 学校の設備	1	2	3
I . 通学時間	1	2	3
J . 部活動	1	2	3
K . 進学や就職の実績	1	2	3
L . 自分の得意科目・不得意科目	1	2	3

Q 25 .あなたが希望する卒業後の進路は、次のどれですか。 一つだけ選んで○をつけて下さい。

67

- 1 . 就職
- 2 . 家事・家の手伝い
- 3 . 専門学校・各種学校
- 4 . 短期大学
- 5 . 4 年制大学（私立）
- 6 . 4 年制大学（国公立）

→ 1 と 2 を選択した人は Q 2 6 へ移して下さい

→ 3,4,5,6 を選択した人（大学、短大、専門学校・各種学校への進学希望者）にお聞きます。

S Q 1 . 次のことは、あなたにあてはまりますか。 あてはまる番号すべてに○をつけて下さい。

68 ~ 75

- 1 . そんなにレベルは高くないが、どうしても入りたい学部や学校がある
- 2 . 将来何をやりたいかわからないが、とりあえず進学しておきたい
- 3 . あくせく勉強しないでも、どこかに入学できればよい
- 4 . 偏差値よりも学校の個性を見て選びたい
- 5 . 一流といわれる大学には、努力しても入れないと思う
- 6 . 学部にはとらわれずとにかく一流の大学に入っておきたい
- 7 . 本当の勝負は、高校入試ではなくて大学入試だと思う
- 8 . できれば推薦で進学したい

→ S Q 2 .あなたは推薦入試について次のように思うことがありますか。 A ~ D のそれぞれについてあてはまる番号に○をつけて下さい。

76 ~ 79

	とても そう思う	まあ そう思う	あまり 思わない	全く 思わない
--	-------------	------------	-------------	------------

A . 推薦入試のほうが本当の

自分の能力を見てもらえる …………… 1 ——— 2 ——— 3 ——— 4

B . 推薦入試よりも一般入試

のほうが公平だ …………… 1 ——— 2 ——— 3 ——— 4

C . どうすれば推薦入試に合格

できるかよくわからない …………… 1 ——— 2 ——— 3 ——— 4

D . 推薦入試の基準には、部活

動や生徒会活動など勉強以外の

ことが関係している …………… 1 ——— 2 ——— 3 ——— 4

Q 26 . あなたのおとうさん (または、それにかわる人) は、どのような職業についていますか。 あてはまる番号一つに○をつけて下さい。

80

- 1 . 専門的・技術的な仕事 (医師・技術者・教員・住職など)
- 2 . 管理的な仕事 (役所や会社で課長以上の役職に就いている人)
- 3 . 事務的な仕事 (役所や会社、商店などで事務的な仕事をしている人)
- 4 . 販売関係の仕事 (店員、セ - ルスマン、外交職員など)
- 5 . 農林漁業
- 6 . 自営商工業 (小売店主や、工場経営者など)
- 7 . 運輸・通信従業者 (運転手、郵便配達、鉄道関係など)
- 8 . 技術工・労務関係の仕事 (工員、または大工、左官などの職人及び人夫など)
- 9 . サ - ビス関係の仕事 (理髪師、ホテル・旅館の従業員など)
- 10 . その他 (具体的に)

Q 27 . あなたのご両親が最後に卒業された学校はどれですか。おとうさん、おかあさんのそれぞれについてあてはまる番号を選んで、下の□の中に記入して下さい。

81 ~ 82

- 1 . 中学校
- 2 . 高等学校
- 3 . 短大、各種・専門学校、高専
- 4 . 大学、大学院
- 5 . その他
- 6 . 父 (母) はいない

父親

母親

以上でおわりです。ご協力ありがとうございました。

--	--	--	--	--	--

2009 年 11 月～2010 年 3 月

現代高校生の生活と意識に関する調査

高校生徒文化研究会

研究代表者 青山学院大学教授

樋田大二郎

調査へのご協力をお願い

このアンケートは、高校生のみなさんが、日頃どのような生活をし、どのようなことを考えているかをおたずねするものです。答えたくない質問には答えなくても構いません。みなさんに無記名で記入していただいたあと、結果はすべて統計的に処理しますので、みなさんの回答が誰かに知られるようなことは、決してありません。

それでは、ありのまま、思うままにお答えください。

Q 1. 学校・クラス 高校 2 年 組

Q 2. 学科

コース(系)

Q 3. 性別

1. 男 2. 女

Q 4. きょうだい数

兄 [] 人、姉 [] 人、弟 [] 人、妹 [] 人

Q 5. あなたはふだん、次のことをどのくらいしますか。A～Dのそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけて下さい。(ただし、土曜日、休日をのぞいた平日の平均を考えて下さい。)

	ほとんど しない	30分 くらいまで	30分以上 1時間未満	1時間以上 2時間未満	2時間以上 3時間未満	3時間以上 4時間未満	4時間以上 5時間未満	5時間以上
A. 家で勉強する	1	2	3	4	5	6	7	8
B. テレビを見る	1	2	3	4	5	6	7	8
C. 電話で話をしたり メールをする	1	2	3	4	5	6	7	8
	ほとんど ない	10通 以内	11通～ 30通	31通～ 50通	51通～ 70通	71通～ 90通	91通 以上	
D. 送信するメール数	1	2	3	4	5	6	7	

A. 部活動 週 日 → 1. 運動部 2. 文化部

B. 塾・予備校・家庭教師 週 日 → 一週間合計 時間

C. 通信教育 1. やっている 2. やっていない

	全然 ない	5 日 以内	6 日～ 10 日	11 日～ 20 日	21 日～ 30 日	31 日～ 50 日	51 日 以上
欠席日数	1	2	3	4	5	6	7
(病気や公欠をのぞく)							

A. 学校での今の成績は、どのくらいですか。

1 2 3 4 5 6 7 8 9
(上位) (中位) (下位)

B. 今の成績は別として、あなたの本当の能力からすると、あなたの成績は、どのくらいだと思いますか。

1 2 3 4 5 6 7 8 9
(上位) (中位) (下位)

C. 中学校卒業時の（あなたの中学校の中での）成績はどのくらいでしたか。

1 2 3 4 5 6 7 8 9
(上位) (中位) (下位)

A. 学校の中に親しい友人がいる	1. はい	2. いいえ
B. 学校の外に親しい友人がいる	1. はい	2. いいえ
C. 学年のちがう友人がいる	1. はい	2. いいえ
D. 異性の友人がいる	1. はい	2. いいえ
E. 学校外の友人とのほうが気が合う	1. はい	2. いいえ
F. 休みの日に友人とあそびに行くことがよくある	1. はい	2. いいえ
G. 友人の家へよくあそびに行く	1. はい	2. いいえ
H. 友人とは表面的なつきあいが多い	1. はい	2. いいえ
I. つきあっている彼氏・彼女がいる	1. はい	2. いいえ

Q 1 0. あなたの学校の教育面の特色と思われることは何ですか。A～Lのそれぞれについてあてはまる番号に○をつけて下さい。

A. 部活動に力を入れている	1. はい	2. いいえ
B. 校則を守らせることに力を入れている	1. はい	2. いいえ
C. 教科の指導に力を入れている	1. はい	2. いいえ
D. 受験指導に力を入れている	1. はい	2. いいえ
E. 就職指導に力を入れている	1. はい	2. いいえ
F. 体育祭・文化祭などの行事に力を入れている	1. はい	2. いいえ
G. 授業の内容をできるだけやさしくしている	1. はい	2. いいえ
H. 生徒の興味・関心に応じた指導に力を入れている	1. はい	2. いいえ
I. 自分で調べたり体験したりする授業に力を入れている	1. はい	2. いいえ
J. 授業では仕事についたときに役立つ知識や技術が身につく	1. はい	2. いいえ
K. 授業では論理的に考えたり、説明したりする力が身につく	1. はい	2. いいえ
L. 授業では将来の職業生活についての見通しが身につく	1. はい	2. いいえ

Q 1 1. あなたの学校の規則についてうかがいます。A～Fのそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけて下さい。

A. 校則は校則だから当然守るべきだと思う	1. はい	2. いいえ
B. きちんとした社会人になるために規則は守るべきだ	1. はい	2. いいえ
C. 注意や罰 ^{ばつ} を受けるから仕方なく規則に従っている	1. はい	2. いいえ
D. 集団生活をうまくやっていくために規則を守るべきだ	1. はい	2. いいえ
E. 先生からよく見られるためにも規則に従っている	1. はい	2. いいえ
F. 校則がなくてもあまり問題はおこらないと思う	1. はい	2. いいえ

Q 1 2. あなたの1ヶ月のおこづかいについてうかがいます。だいたいの平均金額を□に記入してください。

A. 家からもらうおこづかい 約 万 千円

B. アルバイト 1. していない 2. している → 月収にして 約 万 千円

Q 1 3. あなたは次のことについて興味・関心をもっていますか。A～Eのそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけて下さい。

A. ゲームセンター・パチンコ	1. はい	2. いいえ
B. 茶髪・長髪・パーマ・リーゼントなどヘアスタイル	1. はい	2. いいえ
C. 喫煙 ^{きつえん}	1. はい	2. いいえ
D. 飲酒	1. はい	2. いいえ
E. ボランティア活動	1. はい	2. いいえ

Q 1 4. 次のことがらはあなたにどの程度あてはまりますか。A～Kのそれぞれについてあてはまる番号一つに○をつけて下さい。

	とても あてはまる	まあ あてはまる	あまり あてはまらない	全然 あてはまらない
A. 制服のスカートを短くしたり 変形した制服を着たりする……………	1 —————	2 ————	3 —————	4
B. ファッションや流行を意識する……………	1 —————	2 ————	3 —————	4
C. 先生にどう思われているか気になる……………	1 —————	2 ————	3 —————	4
D. 友だちにどう思われているか気になる……………	1 —————	2 ————	3 —————	4
E. 制服も街に行くときのファッション になると思う……………	1 —————	2 ————	3 —————	4
F. 自分の趣味や関心のあることを インターネットや本・雑誌で調べる……………	1 —————	2 ————	3 —————	4
G. 自分の趣味や関心のあることを誰かと 情報交換する……………	1 —————	2 ————	3 —————	4
H. 小中学校のときからの友達とのつきあいがある……………	1 —————	2 ————	3 —————	4
I. 友達とメールをやりとりしていないと不安になる……………	1 —————	2 ————	3 —————	4
J. 自分のブログやプロフをもっている……………	1 —————	2 ————	3 —————	4
K. 靴のかかとを踏んで歩く……………	1 —————	2 ————	3 —————	4

Q 1 5. あなたの保護者について伺います。A～Fのそれぞれについてあてはまる番号一つに○をつけて下さい。

	とても あてはまる	まあ あてはまる	あまり あてはまらない	全然 あてはまらない
A. あなたが大学へ行くことを望んでいる……………	1 —————	2 ————	3 —————	4
B. あなたが高卒後、地元に進学・就職すること を望んでいる……………	1 —————	2 ————	3 —————	4
C. 将来的には、いつかあなたが実家のある地域で 働くことを望んでいる……………	1 —————	2 ————	3 —————	4
D. 家庭はあたたかい感じがする……………	1 —————	2 ————	3 —————	4
E. 晩ごはんを保護者といっしょに食べる……………	1 —————	2 ————	3 —————	4
F. 子どものころあなたをかわいがってくれた……………	1 —————	2 ————	3 —————	4

Q 1 6. 授業や勉強のことについてうかがいます。A～Rのそれぞれについてあてはまる番号に○をつけて下さい。

A. 先生の授業を熱心に聞いているほうだ……………	1. はい	2. いいえ
B. 授業でわからない点は、いつまでも そのまましておかないほうだ……………	1. はい	2. いいえ
C. 高校での勉強は、自分の興味・関心にあわないものが多い……………	1. はい	2. いいえ
D. 先生の授業の進め方が早すぎて、ついていけない科目が多い……………	1. はい	2. いいえ
E. 先生や親の期待にこたえるために、勉強 しなければならないと思うことがある……………	1. はい	2. いいえ

F. 授業がきっかけとなって、さらにくわしい ことを知りたくなることがある	1. はい	2. いいえ
G. どうして、こんなことまで勉強しなければ ならないのかと疑問に思うことがある	1. はい	2. いいえ
H. 試験が終わると勉強したことをすぐ忘れてしまうほうだ	1. はい	2. いいえ
I. 教科書の内容がむずかしすぎて、ついていけない科目が多い ..	1. はい	2. いいえ
J. いくら勉強しても、大切なものが身についていない と思うことがある	1. はい	2. いいえ
K. 英単語を覚えるとき、くり返し書いて覚える	1. はい	2. いいえ
L. 家での勉強は塾の勉強や市販の教材を使う勉強が中心だ	1. はい	2. いいえ
M. 勉強方法について友人と話す	1. はい	2. いいえ
N. 高卒後の進路について友人と話す	1. はい	2. いいえ
O. 先輩から勉強方法を教えてもらう	1. はい	2. いいえ
P. 小学校では、自分で調べたり体験したりする授業が楽しかった ..	1. はい	2. いいえ
Q. 中学校では、自分で調べたり体験したりする授業が楽しかった ..	1. はい	2. いいえ
R. 高校の授業の中で、自分で調べたり体験したりする授業は楽しい ..	1. はい	2. いいえ

Q 17. 次のような意見について、あなたはどのように思いますか。A～Kのそれぞれについてあてはまる番号一つに○をつけて下さい。

	とても そう思う	どちらかと いえば そう思う	どちらかと いえば そう思わない	全然 そう思わない
A. 現在の高校での勉強は暗記中心だ	1 ———	2 ———	3 ———	4
B. 学校では勉強のできる生徒が幅を きかせている	1 ———	2 ———	3 ———	4
C. 高校生である以上、勉強すべきだ	1 ———	2 ———	3 ———	4
D. 努力すれば、だれでもよい成績を とることができる	1 ———	2 ———	3 ———	4
E. いまの日本の社会では、学校での 成績によって将来が決まる	1 ———	2 ———	3 ———	4
F. いまの学校の試験では、本当の能力は はかれない	1 ———	2 ———	3 ———	4
G. 高校での勉強は、将来、職業や生活 に役立つ	1 ———	2 ———	3 ———	4
H. 現在の高校での勉強は、受験に役立 つだけだ	1 ———	2 ———	3 ———	4
I. 勉強をなまけて成績の悪い者が、 将来、損をするのはしかたないことだ	1 ———	2 ———	3 ———	4
J. 今の日本では、学歴があれば自分の 望む生き方を選ぶことができる	1 ———	2 ———	3 ———	4
K. あくせく勉強してよい学校や会社に入っても、 将来の生活に大した変わりはない	1 ———	2 ———	3 ———	4

Q 1 8. あなたの学校生活はどの程度充実していますか。A～Cのそれぞれについてあてはまる番号一つに○をつけて下さい。

	非常に 充実している	やや 充実している	あまり 充実していない	全然 充実していない
A. 部活動……………	1 ———	2 ———	3 ———	4
B. 学校行事（文化祭、体育祭、合唱大会、 スポーツ大会など）……………	1 ———	2 ———	3 ———	4
C. 学校での友人とのつきあい……………	1 ———	2 ———	3 ———	4

Q 1 9. あなたの学校には、次のような先生がどのくらいいますか。A～Iのそれぞれについてあてはまる番号一つに○をつけて下さい。

	たくさんいる	少しいる	ほとんどいない
A. 多少の校則違反はおおめにみる先生 ……………	1 ———	2 ———	3
B. 授業中、成績のよい生徒を中心に指名する先生 ……………	1 ———	2 ———	3
C. 生徒がわかるまで、ていねいに教える先生 ……………	1 ———	2 ———	3
D. 道で会うと声をかけてくる先生 ……………	1 ———	2 ———	3
E. 授業中の生徒のおしゃべりをあまりしからない先生 ……………	1 ———	2 ———	3
F. 生徒の意見を大事にする先生 ……………	1 ———	2 ———	3
G. 細かいことまで口うるさい先生 ……………	1 ———	2 ———	3
H. 生徒から信頼されている先生 ……………	1 ———	2 ———	3
I. 生徒と友達のように接する先生 ……………	1 ———	2 ———	3

Q 2 0. あなたは次のように感じる時がありますか。A～Kのそれぞれについてあてはまる番号一つに○をつけて下さい。

	非常に 感じる	やや 感じる	あまり 感じない	全く 感じない
A. できることならほかの高校にかわりたい…………	1 ———	2 ———	3 ———	4
B. 今いるクラスにとけ込めない…………	1 ———	2 ———	3 ———	4
C. 学校を休みたいという気持ちになる…………	1 ———	2 ———	3 ———	4
D. 早く社会に出て働きたい…………	1 ———	2 ———	3 ———	4
E. この学校での生活にはりあいを感じる…………	1 ———	2 ———	3 ———	4
F. この学校のやり方に不満を感じる…………	1 ———	2 ———	3 ———	4
G. 学校にいる時よりも学校の外での生活 のほう楽しい…………	1 ———	2 ———	3 ———	4
H. この学校の生徒であることは誇りである…………	1 ———	2 ———	3 ———	4
I. 学校生活は楽しい…………	1 ———	2 ———	3 ———	4
J. 先生に親しみを感じる…………	1 ———	2 ———	3 ———	4
K. 先生に相談をしたり、個別に指導を受けている…………	1 ———	2 ———	3 ———	4

Q 2 1. あなたは次のように感じるがありますか。A～Mのそれぞれについて、あてはまる番号一つに○をつけて下さい。

	非常に 感じる	やや やや感じる	あまり 感じない	全く 感じない
A. 社会に出てからうまくやっていける かどうか心配だ……………	1 ———	2 ———	3 ———	4
B. 将来の自分と今の学校生活がどうつ ながるのかわからない……………	1 ———	2 ———	3 ———	4
C. 将来のためを考えるよりも今の生活 を楽しみたい……………	1 ———	2 ———	3 ———	4
D. 自分には人よりすぐれたところがある……………	1 ———	2 ———	3 ———	4
E. たいていのことはうまくこなすこと ができる……………	1 ———	2 ———	3 ———	4
F. こつこつ努力をすれば、そこそこ幸せな 生活ができる……………	1 ———	2 ———	3 ———	4
G. 将来、安定した生活よりも、やりたいことが できることのほうが重要だ……………	1 ———	2 ———	3 ———	4
H. 正社員であれば会社や職種にはこだわらない…	1 ———	2 ———	3 ———	4
I. 困ったことがあっても、たいていのことは 解決できる……………	1 ———	2 ———	3 ———	4
J. まわりに相談できる人がいない……………	1 ———	2 ———	3 ———	4
K. 家族のことで心配や悩みがある……………	1 ———	2 ———	3 ———	4
L. 男は男らしく、女は女らしくするほうがよい…	1 ———	2 ———	3 ———	4
M. 将来、親と同じレベルの生活を維持することは 難しい……………	1 ———	2 ———	3 ———	4

Q 2 2. あなたが希望する卒業後の進路についてお聞きします。あなたの希望している進路は下の1～8のうちどれですか。現在と高校入学時、それぞれについて下の選択肢のなかから一つだけ選んで□に番号を記入して下さい。

A. 現在…………… (その他の場合、具体的に：……………)

B. 高校入学時…………… (その他の場合、具体的に：……………)

- | | | |
|--------------|-------------|---------|
| 1. 国公立大学 | 2. 私立大学 | 3. 短期大学 |
| 4. 専門学校・各種学校 | 5. 家事・家の手伝い | 6. 就職 |
| 7. フリーター | 8. その他 | |

Q 2 3. 高校卒業直後の進路についてお聞きします。進路を選ぶ際につぎのことがらを重視しますか。A～Bのそれぞれについて、あてはまる番号一つに○をつけて下さい。

	とても あてはまる	まあ あてはまる	あまり あてはまらない	全然 あてはまらない
A. 自宅から通えること	1 ———	2 ———	3 ———	4
B. 家族に経済的な負担をかけないこと	1 ———	2 ———	3 ———	4

Q 2 4. [この質問は高校卒業後に進学を希望している人のみお答え下さい] あなたは、進路についてどのように考えていますか。あてはまる番号すべてに○をつけて下さい。

1. 難関大学・難関学部に進学したい
2. そんなにレベルは高くないが、どうしても入りたい学部や学校がある
3. 将来何をやりたいかわからないが、とりあえず進学しておきたい
4. あくせく勉強しないでも、どこかに入学できればよい
5. 偏差値よりも学校の個性を見て選びたい
6. 一流といわれる大学には、努力しても入れないと思う
7. 学部にはとらわれずとにかく一流の大学に入っておきたい
8. 本当の勝負は、高校入試ではなくて大学入試だと思う
9. できれば推薦で進学したい
10. 大学を目指すとしても推薦入試やAO入試でなければ受験できない
11. 奨学金を受けられることが条件だ

Q 2 5. [ここからはすべての人がお答え下さい] あなたの将来の職業についてうかがいます。将来の職業を選ぶとき、次のことをどのくらい重視しますか。以下のA～Fのそれぞれについて、あてはまる番号一つに○をつけてください。

	とても 重視する	やや 重視する	あまり 重視しない	全然 重視しない
A. 安定感があること	1 ———	2 ———	3 ———	4
B. 社会的地位が高いこと	1 ———	2 ———	3 ———	4
C. 社会の役に立つこと	1 ———	2 ———	3 ———	4
D. 自分の趣味・関心をいかせること	1 ———	2 ———	3 ———	4
E. 高い収入が得られること	1 ———	2 ———	3 ———	4
F. 専門的な技能・技術がいかせること	1 ———	2 ———	3 ———	4

Q 2 6. あなたの希望する仕事についてお聞きします。あなたが今一番めざしている職業は何ですか。下の□に記入して下さい。

一番めざしている職業

Q 2 7. 将来、どの地域へ就職を希望しますか。あてはまる番号を選んで、一つ○をつけてください。

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1. 自宅から通える範囲の県内 | 2. 自宅からは通えないが県内 |
| 3. 近隣の都道府県 | 4. 東京を中心とする首都圏 |
| 5. 名古屋を中心とする中京圏 | 6. 大阪を中心とする京阪神圏 |
| 7. 仙台圏 | 8. 上記1～7以外の日本国内 |
| 9. 海外 | |

以下の質問はさしつかえがなければ、お答え下さい。

Q 2 8. あなたのご両親（または、それにかわる人）は、どのような職業についていますか。おとうさん、おかあさんのそれぞれについてあてはまる番号を一つ選んで、下の口の中に記入して下さい。

父親 (その他の場合、具体的に：)

母親 (その他の場合、具体的に：)

1. 専門的・技術的な仕事（医師・技術者・教員・住職など）
2. 管理的な仕事（役所や会社で課長以上の役職に就いている人）
3. 事務的な仕事（役所や会社、商店などで事務的な仕事をしている人）
4. 販売関係の仕事（店員、セールスマン、外交職員など）
5. 農林漁業
6. 自営商工業（小売店主や、工場経営者など）
7. 運輸・通信従業者（運転手、郵便配達、鉄道関係など）
8. 技術工・労務関係の仕事（工員、または大工、左官などの職人及び人夫など）
9. サービス関係の仕事（理髪師、ホテル・旅館の従業員など）
10. 専業主婦・主夫
11. 父（母）はいない
12. その他

Q 2 9. あなたのご両親が最後に卒業された学校はどれですか。お父さま、お母さまのそれぞれについてあてはまる番号を一つ選んで、下の口の中に記入して下さい。

父親

母親

1. 中学校
2. 高等学校
3. 短大、各種・専門学校、高専
4. 大学、大学院
5. その他
6. 父（母）はいない

以上でおわりです。ご協力ありがとうございました。

Appendix2 : 専門学科調査の調査票

高校生の学校生活と進路意識に関する調査

お茶の水女子大学
グローバル COE 公募研究 中西啓喜

このアンケートは、みなさんが日頃どのような生活をし、どのようなことを考えているかをお尋ねするものです。みなさんに記入していただいたあと、結果は統計的に処理しますので、みなさんの回答内容が誰かに知られるようなことは決してありません。答えは、特に指示のないかぎり番号に○をつけるか、[] に記入してください。

それでは、ありのまま、思うままにお答えください。

●まず、あなたご自身のことについておうかがいします。

Q 1. はじめに、あなたご自身の基本的なことについておうかがいします。

- A. 学年・組 [] 年 [] 組
 B. 学科・コース [] 科 [] コース
 C. 文理別…… 1. 文系 2. 理系 3. わかれていない 4. どちらでもない
 D. 出身中学の所在地
 []
 E. 性別…… 1. 男 2. 女

●あなたの家での生活についておうかがいします。

Q 2. あなたは、家で家族とどのような話をしますか。A～Gについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	よく 話す	ときどき 話す	あまり 話さない	まったく 話さない
A. 学校の成績や授業のこと……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----
B. 先生のこと……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----
C. 友だちのこと……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----
D. あそびやしゅみのこと……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----
E. 社会のできごと……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----
F. 自分のなやみごと……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----
G. 将来の仕事のこと……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----

Q 3. あなたは、次のA～Fのことを家でしていますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	毎日 する	だいたい する	あまり しない	まったく しない
A. 朝、自分でおきる……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----
B. 朝食を食べる……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----
C. 朝、歯をみがく……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----
D. 「ってきます」「ただいま」のあいさつをする……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----
E. 前の日に学校の用意をする……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----
F. きまった時間にねる……………	1 -----	2 -----	3 -----	4 -----

Q 4. あなたは、自分だけが使うものとして、次のようなものを持っていますか。持っているものがあれば、いくつでも○をしてください。

- | | |
|------------|-------------|
| 1. テレビ | 4. 携帯電話・PHS |
| 2. テレビゲーム機 | 5. 勉強机 |
| 3. パソコン | 6. 自分だけの部屋 |

Q 5. あなたの家では、次のA～Kのようなことがありますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	とても あてはまる	まあ あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
A. 家の人はテレビのニュース番組をみる……………	1	2	3	4
B. 家の人は私に「勉強しなさい」という……………	1	2	3	4
C. 家の人に勉強をみてもらうことがある……………	1	2	3	4
D. 家の人が手作りのおかしをつくってくれる……………	1	2	3	4
E. 小さいとき、家の人に絵本を読んでもらった……………	1	2	3	4
F. 家の人に博物館や美術館に連れていってもらったことがある	1	2	3	4
G. 家の人はスポーツ新聞を読む……………	1	2	3	4
H. 家の人はパチンコに行くことがある……………	1	2	3	4
I. 家には本がたくさんある（マンガを除く）……………	1	2	3	4
J. お兄さんやお姉さんがいる……………	はい 1	いいえ 2		

Q 6. あなたの保護者の方は、あなたの高校卒業後の進路についてどのように考えていると思いますか。以下の中からもっとも当てはまる番号1つに○を付けてください。

- 進学することを強く希望している
- どちらかといえば進学することを希望している
- どちらかといえば就職することを希望している
- 就職することを強く希望している
- あなたの判断のみに委ねている

●あなたの家での勉強についておうかがいします。

Q 7. あなたは、家で週のうち何日ぐらい勉強しますか。あてはまる番号に○をつけてください。

- | ほとんど
毎日する | 週に
4～5日する | 週に
2～3日する | ほとんど
しない |
|--------------|--------------|--------------|-------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |

Q 8. あなたは学校のある日に、次のA～Fのことをだいたいどのくらいしていますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	ほとんどしない	15分まで	30分まで	1時間まで	2時間まで	3時間まで	3時間以上
A. 家で勉強する	1	2	3	4	5	6	7
B. テレビをみる	1	2	3	4	5	6	7
C. テレビゲームをする	1	2	3	4	5	6	7
D. 友だちと外で遊ぶ	1	2	3	4	5	6	7
E. マンガや雑誌をよむ	1	2	3	4	5	6	7
F. 読書（マンガ・雑誌を のぞく）をする	1	2	3	4	5	6	7

Q9. あなたの中学3年時の勉強の成績は、当時のクラスの中でどのあたりでしたか。また、現在のクラスの中ではどのあたりですか。それぞれについて下の数字の中で当てはまる番号に○をつけて下さい。

a. 中学3年時のクラスの中での成績

上の方			真ん中				下の方		
10	09	08	07	06	05	04	03	02	01

b. 現在のクラスの中での普通科目の成績（国語・数学・理科・社会・英語）

上の方			真ん中				下の方		
10	09	08	07	06	05	04	03	02	01

※専門学科の生徒のみお答えください。※

c. 現在のクラスの中での専門科目の成績（商業・工業・農業・福祉・情報処理など）

上の方			真ん中				下の方		
10	09	08	07	06	05	04	03	02	01

●あなたのこれからの進路についておうかがいします。

Q10. 現在あなたが考えている高校卒業後の進路で、あてはまる番号1つに○をつけてください。

- | | |
|--------------|---------------------|
| 1. 国公立の四年制大学 | 6. 家業を手伝う、または継ぐ |
| 2. 私立の四年制大学 | 7. これからの成績次第で決める |
| 3. 短期大学 | 8. まだ決めていないが、就職はしない |
| 4. 専門学校・各種学校 | 9. まだ決めていないが、進学はしない |
| 5. 就職（正社員） | 10. その他 [具体的に] |

▼以下のQ11～Q12a-1については、Q10で1～4を選んだ方（進学希望者）におうかがいします。それ以外の方は、Q12b-1へすすんでください。

Q11. あなたは、あなたの希望する進学先に、どのような方法で試験を受けようと考えていますか。以下の中から、あてはまるもの1つに○をつけてください。

- 希望する学校の一般入試（センター入試を含む）を受ける
- 推薦入試（指定校推薦を含む）やAO入試などの方法で試験を受け、不合格なら一般入試を受ける
- 推薦入試（指定校推薦を含む）やAO入試などの方法で試験を受け、不合格なら就職する

Q12a-1. 進学するとしたらどこに住みたいですか。 どちらか1つに○をつけてください。

- | | |
|-----------------------|---------------------|
| 1 現在住んでいる地域→（Q12b-1へ） | 2 それ以外の地域→（Q12a-2へ） |
|-----------------------|---------------------|

Q12a-2. 【Q12a-1で、それ以外の地域を選択した方への質問です。】

それは、どこでしょうか。もっとも当てはまる番号1つに○をつけてください。

- | | |
|-----------------|---------------|
| 1. 県内 | 5. 東京などの首都圏方面 |
| 2. 名古屋方面 | 6. その他 [具体的に] |
| 3. それ以外の東海地区 | 7. どこでも良い |
| 4. 大阪、京都などの関西方面 | |

▼ここからは、全員答えてください

Q12b-1. 就職するときはどこに住みたいですか。 どちらか1つに○をつけてください。

- | | |
|------------------------|----------------------|
| 1 現在住んでいる地域→ (Q12c-1へ) | 2 それ以外の地域→ (Q12b-2へ) |
|------------------------|----------------------|

Q12b-2. 【Q12b-1で、それ以外の地域を選択した方への質問です。】

それは、どこでしょうか。もっとも当てはまる番号1つに○をつけてください。

- | | | |
|-----------------|---------------|---|
| 1. 県内 | 5. 東京などの首都圏方面 |] |
| 2. 名古屋方面 | 6. その他 [具体的に] | |
| 3. それ以外の東海地区 | 7. どこでも良い | |
| 4. 大阪、京都などの関西方面 | | |

Q12c-1. 65歳くらいになったらどこに住みたいですか。 どちらか1つに○をつけてください。

- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1 現在住んでいる地域→ (Q13へ) | 2 それ以外の地域→ (Q12c-2へ) |
|---------------------|----------------------|

【(c-2)で、それ以外の地域を選択した方への質問です。】

それは、どこでしょうか。もっとも当てはまる番号1つに○をつけてください。

- | | | |
|-----------------|---------------|---|
| 1. 県内 | 5. 東京などの首都圏方面 |] |
| 2. 名古屋方面 | 6. その他 [具体的に] | |
| 3. それ以外の東海地区 | 7. どこでも良い | |
| 4. 大阪、京都などの関西方面 | | |

Q13. あなたが今住んでいる地域についておたずねします。AからCのそれぞれについて、もっとも当てはまる番号1つに○をつけてください。

- | | そう
思う | やや
そう思う | どちらとも
いえない | あまり
そう思わない | そう
思わない |
|---|----------|------------|---------------|---------------|------------|
| A. 今住んでいる地域を出て、
大都市での暮らしを経験してみたい | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| B. 今住んでいる地域のために、何か役立ちたい | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| C. 今住んでいる地域が好きである | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

Q14. あなたは家族について、どのように考えていますか。AからDのそれぞれについて、もっとも当てはまる番号1つに○をつけてください。

- | | そう
思う | やや
そう思う | どちらとも
いえない | あまり
そう思わない | そう
思わない |
|---|----------|------------|---------------|---------------|------------|
| A. 親が高齢になったらできれば一緒に暮らしたい | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| B. 自分の進路のことでは、
なるべく親に経済的な負担をかけたくない | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| C. 歳をとった親の面倒をみるのは、子どもの義務だ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| D. きょうだいのうち一人は、親のもとに帰るべきだ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

Q15. あなたが高校卒業後の進路を選ぶ際、次のことがらをどの程度考えに入れていきますか。それぞれについてあてはまる番号に○をつけてください。

	とても あてはまる	やや あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
A. 自分の興味や関心	1	2	3	4
B. 自分の成績	1	2	3	4
C. 家庭の状況	1	2	3	4
D. 現在の学校のコース（商業科、工業科、福祉科など）	1	2	3	4
E. 将来の職業とのつながり	1	2	3	4
F. 進学する学校や就く職の地位が高いこと	1	2	3	4
G. 実家から近いこと（地元であること）	1	2	3	4

Q16. 次のことがらはあなたにどの程度あてはまりますか。それぞれについてあてはまる番号一つに○をつけて下さい。

	とても あてはまる	やや あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
A. 資格（英語検定や簿記検定など）をたくさんとりたい	1	2	3	4
B. 部活動への参加は、進路の決定に役立つと思う	1	2	3	4
C. 高校に入ってから、中学のときよりも 勉強に自信が持てるようになった	1	2	3	4
D. 服装や行動が乱れで、この高校のイメージが悪くなると 自分たちの進路が不利になると思う	1	2	3	4
E. 高校を選ぶ時に、この高校の大学推薦枠に 魅力を感じた	1	2	3	4
F. これまでの卒業生が築き上げてきた進路実績を 自分たちで壊したくない	1	2	3	4
G. 将来良い生活を送るために今たくさん勉強したい	1	2	3	4

※以下は、専門学科の生徒のみお答えください。※

H. 専門科目の勉強は楽しいと感じる	1	2	3	4
I. 高校を卒業した後も、もっと現在の専門領域 について勉強したい	1	2	3	4
J. 高卒後、進学するよりも自分の知識・技能を 生かした職業に就きたい	1	2	3	4

●現在のあなたの考えについておうかがいします。

Q17. あなたは、この高校への進学をどの程度希望していましたか。あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。

- 積極的に希望していた
- 他の学校でもよかったが、たまたまこの学校へ進学することになった
- ほんとうは、この学校に進学したくなかった

Q18. あなたは以下にあげる事柄について、どの程度、満足していますか。

	満足 している	どちらかといえば 満足している	どちらかといえば 満足していない	満足 していない
A. 現在の成績	1	2	3	4
B. 学校の先生	1	2	3	4
C. 学校での友人関係	1	2	3	4
D. 現在の家族関係	1	2	3	4
E. 現在の生活全般	1	2	3	4
F. 今の日本社会	1	2	3	4
G. 現在、住んでいる地域	1	2	3	4

Q19. あなたは、以下のことについてどのように思いますか。A～Iそれぞれについて、あてはまる番号1つに○をつけてください。

	とても あてはまる	やや あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
A. 自分には人よりすぐれたところがある……………	1	2	3	4
B. どうしてこんなことまで勉強しなければならないのかと 疑問に思うことがある……………	1	2	3	4
C. たいていのことはうまくこなすことができる……………	1	2	3	4
D. 将来の自分と今の学校生活がどうつながるのかわからない…	1	2	3	4
E. 今の日本では、学歴があれば自分の 望む生き方を選ぶことができる……………	1	2	3	4
F. 早く社会に出て働きたい……………	1	2	3	4
G. この学校に入って、自分の可能性が高まった……………	1	2	3	4

Q20. あなたが働く場合、次のことがらはどのくらい重要だと思いますか。A～Hについて、あてはまる番号1つに○をつけてください。

	かなり 重要である	やや 重要である	どちらとも いえない	あまり重要 ではない	まったく 重要ではない
A. 高い収入を得ること……………	1	2	3	4	5
B. 高い地位につくこと……………	1	2	3	4	5
C. 打ち込めるものをもつこと……………	1	2	3	4	5
D. 人並みに暮らすこと……………	1	2	3	4	5
E. 趣味を楽しむこと……………	1	2	3	4	5
F. のんびり暮らすこと……………	1	2	3	4	5
G. 周囲の人とうまくやっていくこと……………	1	2	3	4	5
H. 仕事に生きること……………	1	2	3	4	5

Q21. あなたは自分の勤め先を選ぶとき、次のそれぞれの条件をどの程度重視したいと思いますか。A～Fの各項目についてあてはまる番号に○をつけてください。

	重視 している	どちらかといえば 重視している	どちらかといえば 重視していない	重視 していない
A. 自分の知識や技術を活かせる……………	1	2	3	4
B. 失業のおそれがない……………	1	2	3	4
C. 高い収入が得られる……………	1	2	3	4
D. 拘束（こうそく）時間が短い・休日が多い……………	1	2	3	4
E. 最先端の情報に触れることができる……………	1	2	3	4
F. 社会に役立つ……………	1	2	3	4

Q22. 日本で成功するためには何が必要だと思いますか。以下の項目のうちから、3つまで選んで○をつけてください。

1. 生まれ（家庭環境）	2. 生まれつきの能力（才能）	3. 努力
4. よい学歴	5. 運やチャンス	6. 性別
7. 容姿（見た目）	8. コネや人脈	

長い時間、面倒な質問にお答え下さいまして、ありがとうございました。
お手数ですが、最後に記入もれなどがないか、もう一度、確認してください。

Appendix3 : 生徒文化調査の基礎集計表

		1979年						1997年						2009年					
		性別		トラック				性別		トラック				性別		トラック			
		男	女	トップ校	セカンド校	専門学校		男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門学校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門学校
	N	493	257	250	250	250	1025	1087	375	500	625	625	968	1027	375	487	601	544	
家で勉強する	無回答	0.2	1.6	0.8	1.2	0.0	1.6	0.7	0.3	1.0	0.6	2.4	0.4	0.3	0.5	0.2	0.5	0.2	
	ほとんどしない	22.1	8.2	2.8	4.8	44.4	43.9	30.7	4.5	11.2	34.7	79.8	32.7	24.9	3.2	6.8	30.0	64.5	
	30分くらいまで	6.7	5.4	2.0	2.4	14.4	9.3	7.7	4.0	7.2	11.5	9.0	11.3	9.2	1.3	4.5	15.1	15.8	
	30分以上1時間未満	11.0	10.5	2.4	7.2	22.8	12.2	15.5	8.5	18.4	22.2	5.4	15.1	14.0	3.7	16.2	21.6	12.5	
	1時間以上2時間未満	16.4	18.7	16.0	22.8	12.8	17.5	25.0	28.8	39.2	21.6	2.4	21.7	23.4	22.4	41.9	22.5	5.5	
	2時間以上3時間未満	20.7	30.7	34.4	34.4	3.6	11.2	15.2	36.0	18.6	8.0	0.5	14.3	22.7	50.9	25.3	8.8	1.3	
	3時間以上4時間未満	14.6	17.9	28.0	18.4	0.8	2.9	4.6	14.4	4.0	1.0	0.0	3.9	5.4	17.3	4.7	1.0	0.0	
	4時間以上5時間未満	7.5	5.4	12.4	7.6	0.4	0.6	0.5	2.4	0.2	0.2	0.0	0.6	0.1	0.5	0.2	0.5	0.2	
5時間以上	0.8	1.6	1.2	1.2	0.8	0.9	0.0	1.1	0.2	0.2	0.5	0.0	0.1	0.0	0.2	0.0	0.0		
テレビを見る	無回答	0.4	0.4	0.8	0.4	0.0	2.4	1.4	1.3	3.8	0.8	1.9	0.6	0.7	0.8	0.6	0.5	0.7	
	ほとんどしない	2.2	5.1	2.4	4.8	2.4	4.2	2.6	3.7	3.6	2.7	3.8	8.5	7.1	11.7	6.8	7.2	6.6	
	30分くらいまで	4.1	8.2	7.2	7.6	1.6	4.4	3.1	5.3	4.2	3.5	2.9	9.5	7.5	12.5	9.2	7.2	6.4	
	30分以上1時間未満	19.5	27.6	28.0	24.8	14.0	12.7	15.6	25.6	13.2	10.7	11.5	16.7	18.0	26.1	18.5	15.6	12.5	
	1時間以上2時間未満	38.7	36.6	41.2	42.0	30.8	30.3	36.6	41.9	41.6	32.0	23.5	37.8	35.1	37.9	40.7	38.1	29.6	
	2時間以上3時間未満	24.3	19.1	17.2	16.8	33.6	23.0	22.9	16.3	21.8	27.0	23.5	17.7	18.5	9.3	18.9	19.6	21.7	
	3時間以上4時間未満	6.7	3.1	2.4	2.4	11.6	11.4	10.9	3.5	8.2	12.8	16.6	5.8	7.9	1.6	3.7	7.7	12.3	
	4時間以上5時間未満	1.8	0.0	0.0	0.4	3.2	5.5	3.7	1.1	1.8	5.3	8.2	1.5	2.3	0.0	0.6	2.3	4.0	
5時間以上	2.2	0.0	0.8	0.8	2.8	6.0	3.1	1.3	1.8	5.1	8.0	1.9	2.9	0.0	1.0	1.8	6.1		
電話で話をしたりメールをする	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.0	3.7	2.4	4.0	0.0	3.6	0.4	0.5	0.5	0.4	0.7	0.2	
	ほとんどしない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	58.7	42.1	61.6	46.0	0.0	43.2	31.7	16.9	32.0	24.4	22.3	20.0	
	30分くらいまで	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	22.4	21.8	20.4	24.4	0.0	21.2	30.6	23.5	34.4	30.6	22.5	23.7	
	30分以上1時間未満	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	9.6	19.7	9.6	17.6	0.0	17.6	18.6	23.0	20.5	22.8	22.1	17.8	
	1時間以上2時間未満	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.4	10.8	4.8	7.2	0.0	10.8	12.6	17.5	9.1	14.4	18.0	16.7	
	2時間以上3時間未満	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.4	1.1	0.8	0.8	0.0	2.0	3.0	9.7	2.7	5.5	8.2	8.3	
	3時間以上4時間未満	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.4	0.0	0.0	0.8	0.9	4.9	0.5	1.0	3.7	5.7	
	4時間以上5時間未満	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	1.2	0.0	0.2	0.7	2.8	
5時間以上	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	1.3	2.8	0.3	0.6	2.0	4.8		
送信するメール数	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.3	1.1	0.0	0.3	0.0	
	ほとんどない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	27.6	14.4	27.7	20.1	20.0	17.5	
	10通以内	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	40.4	41.9	50.1	46.8	35.9	35.7	
	11通～30通	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	23.5	29.6	16.5	26.3	30.4	29.4	
	31通～50通	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.2	9.2	3.2	4.1	8.2	11.9	
	51通～70通	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7	3.1	1.1	2.3	3.2	2.6	
	71通～90通	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.9	0.0	0.0	1.2	0.9	
	91通以上	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.1	0.7	0.3	0.4	0.8	2.0	
部活動（週当たりの日数）	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2	3.1	0.8	1.2	4.3	1.6	4.2	6.3	2.9	4.3	7.5	5.3	
	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	27.1	29.0	22.7	29.4	45.0	13.4	10.0	7.3	5.9	5.7	12.6	8.6	
	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.9	15.2	6.4	8.6	8.6	22.2	3.8	12.8	7.7	5.3	14.0	5.5	
	2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5	5.2	4.3	4.0	3.7	2.2	2.7	6.4	5.3	4.9	2.5	6.4	
	3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.5	3.6	5.9	3.6	1.0	4.6	2.6	4.6	1.9	2.9	3.5	5.7	
	4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.0	3.7	6.4	5.6	1.1	3.5	1.9	2.1	1.3	1.4	1.7	3.3	
	5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	9.1	8.6	13.3	9.8	5.9	8.3	9.4	11.2	11.2	8.2	11.5	10.1	
	6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	28.0	16.8	27.5	32.6	11.4	21.6	40.3	31.3	48.0	48.3	27.0	25.7	
7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	16.8	14.7	12.8	5.2	19.0	22.4	25.1	18.0	15.7	18.9	19.8	29.2		
部活動（運動部か文化部か）	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	11.6	12.7	7.3	9.4	17.5	12.1	
	運動部	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	71.0	38.5	59.0	62.0	53.2	45.0	
	文化部	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	17.4	48.8	33.7	28.5	29.3	42.8	
塾・予備校・家庭教師（週当たりの日数）	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	19.3	27.8	11.5	15.6	27.1	35.3	
	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	65.9	53.0	57.3	56.7	60.9	61.4	
	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.5	9.5	15.7	11.9	4.5	1.5	
	2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.1	7.3	11.2	11.9	6.0	1.7	
	3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.1	1.6	3.2	1.6	1.0	0.2	
	4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.5	0.8	0.8	0.2	0.0	
	5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.4	0.0	0.0	
	6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.3	0.2	0.0	0.0	
7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.1	0.0	0.8	0.3	0.0		

		1979年					1997年					2009年						
		性別		トラック			性別		トラック			性別		トラック				
		男	女	トップ校	セカンド校	専門校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門校
	N	493	257	250	250	250	1025	1087	375	500	625	625	968	1027	375	487	601	544
塾・予備校・家庭教師（週当たりの時間）	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	28.1	38.8	20.0	22.6	39.4	45.8
	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	57.0	42.2	48.8	49.7	48.8	50.7
	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.6	0.8	0.4	0.7	0.4
	2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.9	8.2	13.3	10.9	3.3	1.7
	3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.7	3.9	7.5	5.7	3.2	0.4
	4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.7	3.0	3.5	5.7	2.3	0.4
	5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	1.0	1.6	1.0	0.7	0.2
	6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	1.5	2.7	1.0	1.0	0.2
	7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.3	0.2	0.0	0.0
	8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.3	0.8	0.6	0.0	0.2
	9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.3	0.5	0.2	0.2	0.0
	10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.2	0.0	0.6	0.0	0.0
	12	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0
	14	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.2	0.2	0.0
	15	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.3	0.2	0.0	0.0
	16	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.2	0.0	0.2
	19	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0
	21	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0
	60	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.2	0.0
	90	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0
通信教育	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.3	2.7	7.2	1.6	3.2	2.1	2.5	2.1	0.8	2.3	1.8	3.9
	やっている	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.9	16.4	37.6	21.6	17.3	2.1	7.9	10.4	15.5	15.8	7.8	0.7
	やっていない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	81.8	80.9	55.2	76.8	79.5	95.7	89.7	87.4	83.7	81.9	90.3	95.4
欠席日数（病欠や公欠をのぞく）	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.6	0.0	0.6	0.8	0.4
	全然ない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	60.1	57.2	62.7	56.9	58.1	58.1
	5日以内	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	34.4	33.8	32.0	34.3	34.6	34.6
	6日～10日	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.2	6.2	3.5	7.0	4.8	5.3
	11日～20日	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	1.1	0.8	0.8	0.7	0.7
	21日～30日	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.7	0.8	0.0	0.5	0.4
	31日～50日	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.3	0.0	0.0	0.2	0.6
	51日以上	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.2	0.3	0.4	0.3	0.0
学校での今の成績は、どのくらいですか	無回答	1.6	0.8	1.6	1.2	1.2	0.4	1.4	2.7	0.6	0.3	0.8	0.4	0.4	0.5	0.6	0.5	0.0
	上位	3.7	1.2	5.2	2.0	1.2	4.2	2.3	2.9	2.2	3.2	4.2	3.0	2.0	2.7	2.1	2.8	2.6
	2	8.7	5.1	10.0	4.4	8.0	4.9	5.2	4.5	4.6	4.8	6.1	6.7	5.5	6.9	4.3	5.7	7.5
	3	11.8	11.7	14.4	10.0	10.8	10.5	12.8	9.6	9.2	12.8	13.8	12.0	13.4	16.5	13.1	11.3	11.2
	4	12.0	19.1	13.6	18.8	10.8	14.2	12.9	17.3	16.8	11.8	10.2	13.8	11.5	15.2	13.1	11.3	11.8
	中位	20.7	24.1	20.0	20.0	25.6	17.8	22.9	18.1	22.0	21.1	19.5	17.9	19.6	18.9	17.0	20.1	18.8
	6	12.0	17.9	12.4	16.0	13.6	13.0	11.8	11.5	11.6	13.0	12.8	10.0	11.0	8.3	10.9	10.5	11.8
	7	13.2	10.9	11.6	12.0	13.6	12.1	13.2	12.8	14.0	12.0	12.6	16.2	14.9	9.6	18.1	16.1	16.5
	8	7.9	4.3	4.8	9.2	6.0	10.2	10.5	7.7	10.4	10.9	11.4	9.7	12.5	11.2	11.3	11.6	10.1
	下位	8.5	5.1	6.4	6.4	9.2	12.7	7.0	12.8	8.6	10.1	8.6	10.2	9.3	10.1	9.4	10.0	9.7
今の成績は別として、あなたの本当の能力からすると、あなたの成績は、どのくらいだと思いますか	無回答	0.8	1.6	2.0	0.4	0.8	0.5	1.3	2.4	0.4	0.8	0.6	0.7	0.6	0.8	1.0	0.7	0.2
	上位	11.6	3.9	12.8	6.0	8.0	10.8	3.6	5.6	8.0	5.1	9.4	6.5	2.2	4.3	3.5	4.5	4.8
	2	13.8	7.0	15.2	11.2	8.0	10.1	5.8	11.2	8.8	6.1	7.2	8.3	4.5	8.8	7.4	4.7	5.9
	3	19.5	23.7	16.4	29.6	16.8	19.4	15.6	21.9	19.6	16.0	14.2	13.7	10.6	18.1	14.6	9.3	8.6
	4	16.2	23.0	19.2	17.2	19.2	14.3	14.3	15.2	15.8	15.0	11.8	15.9	13.2	16.0	15.4	13.6	13.8
	中位	24.1	29.2	24.0	23.2	30.4	27.1	36.3	27.7	31.0	32.6	34.1	28.3	31.1	22.9	31.0	32.4	30.0
	6	5.7	7.0	4.8	6.4	7.2	6.0	9.5	5.3	7.0	9.1	8.3	8.2	13.0	8.8	9.4	13.6	9.7
	7	3.4	1.2	1.6	1.2	5.2	5.5	7.5	5.3	5.0	6.6	8.2	8.7	11.6	9.9	9.0	9.2	12.5
	8	2.4	1.2	1.6	2.4	2.0	2.1	3.7	1.6	2.2	3.5	3.8	5.4	7.7	6.7	4.7	7.2	7.4
	下位	2.4	2.3	2.4	2.4	2.4	4.1	2.5	3.7	2.2	5.1	2.2	4.3	5.6	3.7	3.9	4.8	7.2
中学校卒業時の（あなたの中学校の中での）成績はどのくらいでしたか	無回答	1.8	1.2	2.4	0.8	1.6	0.6	1.2	1.9	0.8	1.0	0.5	0.3	0.4	0.3	0.6	0.5	0.0
	上位	17.6	18.7	49.6	3.6	0.8	10.4	10.1	47.5	5.6	1.6	0.5	9.6	7.4	35.5	6.4	0.5	0.4
	2	20.3	36.2	34.4	41.2	1.6	14.8	14.6	34.7	30.0	3.8	1.6	12.0	17.6	38.7	26.7	3.8	0.7
	3	17.4	16.7	9.2	33.6	8.8	16.5	14.3	10.1	32.4	14.2	5.8	17.8	14.7	13.6	36.3	10.1	6.6
	4	12.8	9.3	0.8	11.6	22.4	13.1	13.9	2.9	15.0	21.0	11.0	13.2	12.7	3.7	15.2	19.8	9.6
	中位	18.3	11.7	1.6	3.6	42.8	17.5	22.2	1.6	10.6	33.1	25.0	18.3	16.7	3.2	9.2	29.8	21.0
	6	7.5	3.5	0.0	2.0	16.4	9.7	10.1	0.3	2.4	13.1	18.2	8.5	9.1	0.8	1.6	13.5	15.3
	7	2.2	0.8	0.0	1.6	3.6	8.3	8.0	0.3	1.6	7.5	18.9	10.4	11.0	1.9	2.5	13.1	21.5
	8	0.8	1.2	0.8	1.2	0.8	5.1	3.8	0.0	1.6	2.4	11.2	6.3	6.6	1.3	0.8	6.3	15.3
	下位	1.2	0.8	1.2	0.8	1.2	4.1	1.8	0.8	0.0	2.2	7.4	3.6	3.9	1.1	0.6	2.5	9.7

		1979年					1997年					2009年						
		性別		トラック			性別		トラック			性別		トラック				
		男	女	トップ校	セカンド校	専門学校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門学校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門学校
	N	493	257	250	250	250	1025	1087	375	500	625	625	968	1027	375	487	601	544
学校の中に親しい友人がいる	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.3	0.0	0.0	0.2	0.3	0.1	0.3	0.2	0.3	0.0
	はい	91.7	96.9	92.0	96.0	92.4	92.4	97.2	94.1	96.8	95.5	93.0	93.9	98.1	97.6	96.3	96.8	94.1
	いいえ	8.3	3.1	8.0	4.0	7.6	7.5	2.7	5.6	3.2	4.5	6.9	5.8	1.8	2.1	3.5	2.8	5.9
学校の外に親しい友人がいる	無回答	0.2	0.0	0.0	0.4	0.0	0.2	0.1	0.3	0.0	0.2	0.2	0.2	0.1	0.0	0.2	0.3	0.0
	はい	82.8	88.3	81.6	81.6	90.8	91.7	95.1	91.2	93.8	93.8	93.9	94.0	97.3	95.2	96.3	95.7	95.6
	いいえ	17.0	11.7	18.4	18.0	9.2	8.1	4.8	8.5	6.2	6.1	5.9	5.8	2.6	4.8	3.5	4.0	4.4
学年のちがう友人がいる	無回答	0.6	0.0	0.4	0.0	0.8	0.1	0.2	0.0	0.0	0.2	0.3	0.2	0.2	0.0	0.2	0.5	0.0
	はい	48.9	54.1	48.8	49.6	53.6	66.1	66.7	64.8	62.0	67.7	69.4	67.3	63.7	63.2	63.0	68.2	66.0
	いいえ	50.5	45.9	50.8	50.4	45.6	33.8	33.1	35.2	38.0	32.2	30.2	32.5	36.1	36.8	36.8	31.3	34.0
異性の友人がいる	無回答	0.2	0.4	0.4	0.4	0.0	0.3	0.2	0.0	0.0	0.3	0.5	0.4	0.4	0.5	0.2	0.7	0.2
	はい	34.9	45.5	32.4	39.6	43.6	60.4	65.5	61.3	59.8	63.2	66.6	66.5	70.2	65.9	67.4	70.4	69.3
	いいえ	64.9	54.1	67.2	60.0	56.4	39.3	34.3	38.7	40.2	36.5	33.0	33.1	29.4	33.6	32.4	29.0	30.5
学校外の友人とのほうが気が合う	無回答	0.2	0.0	0.0	0.0	0.4	1.2	0.9	1.1	1.0	1.1	1.0	1.3	1.8	1.3	2.7	1.3	0.9
	はい	35.5	25.7	23.2	29.6	43.6	39.2	30.3	27.2	31.8	36.5	39.7	43.7	36.4	31.2	41.7	38.1	46.7
	いいえ	64.3	74.3	76.8	70.4	56.0	59.6	68.8	71.7	67.2	62.4	59.4	55.0	61.8	67.5	55.6	60.6	52.4
休みの日に友人とあそびに行くことがよくある	無回答	0.2	0.4	0.8	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.2	0.0	0.3	0.7	0.1	0.3	0.4	0.8	0.0
	はい	48.1	49.4	37.6	47.6	60.4	52.4	51.4	36.5	52.4	57.9	54.7	38.6	47.7	33.1	40.2	49.3	46.1
	いいえ	51.7	50.2	61.6	52.4	39.6	47.3	48.6	63.5	47.4	42.1	45.0	60.6	52.2	66.7	59.3	49.9	53.9
友人の家へよくあそびに行く	無回答	0.2	0.4	0.4	0.0	0.4	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.5	0.3	0.0	0.4	0.8	0.2
	はい	47.9	34.2	33.6	40.0	56.0	48.4	35.0	26.7	35.8	49.0	47.7	37.1	30.2	17.6	31.2	41.4	37.9
	いいえ	51.9	65.4	66.0	60.0	43.6	51.5	65.0	73.3	64.2	51.0	52.2	62.4	69.5	82.4	68.4	57.7	61.9
友人とは表面的なつきあが多い	無回答	0.2	0.4	0.4	0.0	0.4	0.9	0.4	1.3	0.6	0.3	0.5	1.0	0.6	0.0	0.6	1.5	0.7
	はい	47.7	34.2	45.6	40.4	43.2	39.5	32.1	32.8	39.0	32.5	38.1	38.3	26.9	30.4	33.3	29.3	36.9
	いいえ	52.1	65.4	54.0	59.6	56.4	59.6	67.5	65.9	60.4	67.2	61.4	60.6	72.5	69.6	66.1	69.2	62.3
つきあっている彼氏・彼女がいる	無回答	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	0.5	0.2	0.0	0.4	0.2	0.6	0.5	0.9	0.3	0.4	1.8	0.0
	はい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.6	21.3	13.1	16.6	19.2	21.6	13.8	17.9	14.4	15.6	18.5	14.7
	いいえ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	84.9	78.6	86.9	83.0	80.6	77.8	85.6	81.2	85.3	84.0	79.7	85.3
部活動に力を入れている	無回答	0.0	0.4	0.0	0.4	0.0	0.2	0.2	0.3	0.2	0.2	0.2	0.5	0.1	0.5	0.0	0.5	0.2
	はい	32.3	21.8	10.8	12.0	63.2	53.1	50.6	27.2	26.8	67.4	71.0	62.5	65.1	52.0	43.5	77.9	74.6
	いいえ	67.7	77.8	89.2	87.6	36.8	46.7	49.2	72.5	73.0	32.5	28.8	37.0	34.8	47.5	56.5	21.6	25.2
校則を守らせることに力を入れている	無回答	0.0	0.4	0.0	0.4	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.6	0.3	0.3	0.4	0.8	0.2
	はい	48.7	38.1	17.2	46.8	71.2	50.8	58.0	44.8	30.6	70.9	62.9	72.1	77.1	66.4	53.0	85.0	88.2
	いいえ	51.3	61.5	82.8	52.8	28.8	49.0	42.0	55.2	69.4	29.1	36.8	27.3	22.6	33.3	46.6	14.1	11.6
教科の指導に力を入れている	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.3	0.0	0.2	0.2	0.6	0.3	0.5	0.0	0.0	0.8	0.6
	はい	62.3	71.6	91.6	73.2	31.6	55.0	63.6	92.8	68.0	60.5	31.7	74.9	75.5	98.1	85.2	67.1	59.6
	いいえ	37.7	28.4	8.4	26.8	68.4	44.7	36.2	7.2	31.8	39.4	67.7	24.8	24.1	1.9	14.8	32.1	39.9
受験指導に力を入れている	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.3	0.0	0.2	0.2	0.6	0.3	0.5	0.0	0.0	1.0	0.4
	はい	55.6	68.9	92.0	74.8	13.6	61.0	70.0	94.7	76.8	68.8	36.0	73.5	79.3	98.7	89.3	67.6	59.6
	いいえ	44.4	31.1	8.0	25.2	86.4	38.7	29.7	5.3	23.0	31.0	63.4	26.2	20.3	1.3	10.7	31.4	40.1
就職指導に力を入れている	無回答	0.0	0.4	0.0	0.4	0.0	0.5	0.3	0.0	0.4	0.3	0.6	0.8	0.7	0.5	0.0	1.7	0.6
	はい	35.5	19.5	2.0	0.8	87.2	33.9	23.5	2.7	3.2	25.3	67.5	40.6	35.0	6.4	3.7	38.8	88.6
	いいえ	64.5	80.2	98.0	98.8	12.8	65.7	76.3	97.3	96.4	74.4	31.8	58.6	64.4	93.1	96.3	59.6	10.8
体育祭・文化祭などの行事に力を入れている	無回答	0.0	0.4	0.0	0.4	0.0	0.5	0.1	0.3	0.4	0.0	0.5	0.1	0.4	0.0	0.0	0.7	0.2
	はい	52.5	44.4	33.2	35.2	80.8	49.4	53.6	45.3	54.8	48.6	55.7	63.9	65.0	61.1	67.6	56.7	72.4
	いいえ	47.5	55.3	66.8	64.4	19.2	50.1	46.3	54.4	44.8	51.4	43.8	36.0	34.6	38.9	32.4	42.6	27.4
授業の内容をできるだけやさしくしている	無回答	0.4	0.8	0.0	0.8	0.8	0.6	0.6	0.0	0.6	0.5	1.0	0.5	0.6	0.5	0.4	0.8	0.4
	はい	30.0	21.4	7.2	19.2	54.8	37.3	29.9	14.1	18.8	35.5	54.6	49.2	39.3	17.1	37.8	53.4	58.1
	いいえ	69.6	77.8	92.8	80.0	44.4	62.1	69.5	85.9	80.6	64.0	44.5	50.3	60.1	82.4	61.8	45.8	41.5
生徒の興味・関心に応じた指導に力を入れている	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.6	0.3	1.2	0.2	1.0	0.6	0.9	0.8	0.4	1.0	0.7
	はい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	22.0	20.4	10.7	13.4	26.2	28.6	43.9	34.7	44.5	33.1	37.6	42.5
	いいえ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	77.2	79.0	89.1	85.4	73.6	70.4	55.5	64.5	54.7	66.5	61.4	56.8
自分で調べたり体験したりする授業に力を入れている	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.6	0.3	0.0	1.0	0.9
	はい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	36.6	29.4	23.2	28.3	32.4	44.1
	いいえ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	62.8	70.0	76.5	71.7	66.6	55.0
授業では仕事についたときに役立つ知識や技術が身につく	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.5	0.3	0.0	1.0	0.6
	はい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	46.6	38.2	24.5	21.6	35.8	80.1
	いいえ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	52.9	61.3	75.2	78.4	63.2	19.3
授業では論理的に考えたり、説明したりする力が身につく	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.7	0.3	0.2	1.2	0.6
	はい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	54.0	46.3	77.1	53.0	41.4	37.9
	いいえ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	45.5	53.1	22.7	46.8	57.4	61.6
授業では将来の職業生活についての見通しが身につく	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.8	0.3	0.2	1.8	0.6
	はい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	36.5	28.7	20.3	15.4	27.3	61.8
	いいえ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	62.7	70.5	79.5	84.4	70.9	37.7

		1979年					1997年					2009年						
		性別		トラック			性別		トラック			性別		トラック				
		男	女	トップ校	セカンド校	専門学校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門学校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門学校
	N	493	257	250	250	250	1025	1087	375	500	625	625	968	1027	375	487	601	544
校則は校則だから当然守るべきだと思う	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.6	0.8	0.0	0.5	0.3	0.5	0.6	0.5	0.4	0.8	0.4
	はい	74.8	75.9	78.4	72.8	74.4	58.3	50.0	66.4	51.6	49.9	52.8	77.9	75.5	75.2	72.7	78.4	79.0
	いいえ	25.2	24.1	21.6	27.2	25.6	41.5	49.5	32.8	48.4	49.6	46.9	21.6	24.0	24.3	26.9	20.8	20.6
きちんとした社会人になるために規則は守るべきだ	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.6	0.5	0.6	0.3	0.3	0.2	0.5	0.3	0.2	0.8	0.0
	はい	74.2	76.7	68.4	78.8	78.0	73.6	77.0	79.7	73.2	72.6	77.0	91.0	93.2	92.8	90.1	92.0	93.6
	いいえ	25.8	23.3	31.6	21.2	22.0	26.1	22.4	19.7	26.2	27.0	22.7	8.8	6.3	6.9	9.7	7.2	6.4
注意や罰を受けるから仕方なく規則に従っている	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.4	0.5	0.2	0.2	0.3	0.4	0.8	0.8	0.6	0.8	0.2
	はい	37.5	28.4	20.8	34.4	48.0	52.1	56.5	35.5	48.4	63.7	61.4	52.5	57.2	40.8	50.9	59.4	63.2
	いいえ	62.5	71.6	79.2	65.6	52.0	47.7	43.1	64.0	51.4	36.2	38.2	47.1	42.1	58.4	48.5	39.8	36.6
集団生活をうまくやっていくために規則を守るべきだ	無回答	0.2	0.4	0.0	0.4	0.4	0.3	0.6	0.5	0.4	0.5	0.5	0.4	0.7	0.5	0.2	1.0	0.4
	はい	87.0	87.5	88.4	90.0	83.2	72.5	76.0	83.5	78.6	72.2	67.2	88.5	86.6	90.7	86.4	87.5	86.4
	いいえ	12.8	12.1	11.6	9.6	16.4	27.2	23.4	16.0	21.0	27.4	32.3	11.1	12.8	8.8	13.3	11.5	13.2
先生からよく見られるためにも規則に従っている	無回答	0.0	0.4	0.0	0.0	0.4	0.3	0.8	0.8	0.2	0.6	0.6	0.6	0.7	0.8	0.6	1.0	0.2
	はい	22.5	18.7	12.4	20.4	30.8	28.1	27.7	18.9	24.8	29.0	34.9	46.4	45.4	37.3	40.7	52.4	48.5
	いいえ	77.5	80.9	87.6	79.6	68.8	71.6	71.5	80.3	75.0	70.4	64.5	53.0	53.9	61.9	58.7	46.6	51.3
校則がなくてもあまり問題は起こらないと思う	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.5	0.8	0.2	0.2	0.6	0.5	0.7	0.5	0.6	1.0	0.2
	はい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	48.6	61.7	54.7	58.2	57.3	51.7	42.6	40.5	39.5	46.0	40.9	39.3
	いいえ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	51.0	37.8	44.5	41.6	42.6	47.7	56.9	58.8	60.0	53.4	58.1	60.5
アルバイト（しているかしていないか）	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.0	2.9	3.9	3.8	5.0
	していない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	86.8	87.8	84.8	87.3	89.0	87.1
	している	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	9.2	8.2	12.3	8.8	7.2	7.9
ゲームセンター・パチンコ	無回答	0.2	0.0	0.4	0.0	0.0	1.1	0.9	1.6	1.2	0.5	1.0	0.4	0.8	0.5	0.2	0.8	0.7
	はい	40.6	11.7	24.0	28.8	39.2	46.4	15.8	18.7	21.4	32.5	43.7	33.3	20.7	16.3	22.0	28.6	36.9
	いいえ	59.2	88.3	75.6	71.2	60.8	52.5	83.3	79.7	77.4	67.0	55.4	66.3	78.5	83.2	77.8	70.5	62.3
茶髪・長髪・パーマ・リーゼントなどヘアスタイル	無回答	0.2	0.0	0.4	0.0	0.0	0.9	0.9	1.6	1.2	0.6	0.5	0.5	0.5	0.8	0.2	0.8	0.2
	はい	20.9	25.3	13.2	25.2	28.8	32.4	43.4	22.4	26.6	48.2	46.6	30.0	58.4	33.3	45.4	48.8	47.4
	いいえ	78.9	74.7	86.4	74.8	71.2	66.7	55.7	76.0	72.2	51.2	53.0	69.5	41.1	65.9	54.4	50.4	52.4
喫煙	無回答	0.2	0.0	0.4	0.0	0.0	1.0	0.9	1.3	1.2	0.5	1.0	0.4	0.9	0.3	0.2	1.3	0.6
	はい	23.7	11.3	12.0	16.8	29.6	21.9	6.9	5.1	5.8	14.2	26.2	5.3	2.2	0.8	3.3	3.2	6.8
	いいえ	76.1	88.7	87.6	83.2	70.4	77.2	92.2	93.6	93.0	85.3	72.8	94.3	96.9	98.9	96.5	95.5	92.6
飲酒	無回答	0.2	0.0	0.4	0.0	0.0	1.0	1.0	1.3	1.0	0.5	1.3	0.4	0.8	0.3	0.2	1.2	0.6
	はい	41.0	28.4	38.0	35.2	36.8	47.0	28.2	27.7	36.6	36.3	44.8	23.3	18.7	19.5	21.1	20.0	23.3
	いいえ	58.8	71.6	61.6	64.8	63.2	52.0	70.7	70.9	62.4	63.2	53.9	76.2	80.5	80.3	78.6	78.9	76.1
ボランティア活動	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.7	0.5	0.2	1.0	0.4
	はい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	20.1	33.4	25.1	26.9	25.5	30.3
	いいえ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	79.4	65.9	74.4	72.9	73.5	69.3
制服のスカートを短くしたり変形した制服を着たりする	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.3	0.0	0.0	0.5	0.6	0.2	0.1	0.0	0.2	0.2	0.2
	とてもあてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.5	8.6	5.1	7.6	5.6	8.0	1.8	7.5	1.3	7.4	4.8	4.6
	まああてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	13.0	48.9	31.5	40.2	30.4	25.4	4.8	36.5	21.9	32.0	18.6	13.2
	あまりあてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	22.8	27.5	26.4	27.4	22.4	25.8	21.0	27.4	25.6	21.6	27.6	21.9
	全然あてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	59.3	14.6	37.1	24.8	41.1	40.2	72.3	28.5	51.2	38.8	48.8	60.1
ファッションや流行を意識する	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.2	0.3	0.2	0.3	0.5	0.5	0.1	0.3	0.2	0.5	0.2
	とてもあてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	17.8	20.1	15.7	17.6	19.4	21.6	6.8	18.5	9.3	11.7	14.5	14.3
	まああてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	36.0	52.3	41.1	47.8	45.1	42.9	29.2	48.5	39.7	45.8	37.9	34.2
	あまりあてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	30.3	22.4	29.9	26.6	24.6	25.6	35.0	22.2	28.3	29.0	26.6	30.0
	全然あてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	15.4	5.0	13.1	7.8	10.6	9.4	28.4	10.7	22.4	13.3	20.5	21.3
先生にどう思われているか気になる	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.2	0.2	0.1	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2
	とてもあてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.1	5.5	6.4	4.4	6.9	9.0	9.0	9.2	6.4	7.6	9.7	11.8
	まああてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	23.1	27.0	24.8	23.6	26.9	24.6	30.3	36.8	38.7	30.8	33.6	32.4
	あまりあてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	39.5	47.9	46.9	51.0	40.3	39.5	33.3	37.8	36.8	42.5	30.9	33.6
	全然あてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	29.1	19.5	21.9	21.0	25.8	26.7	27.4	16.0	17.9	18.9	25.6	22.1
友だちにどう思われているか気になる	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.2	0.2	0.4	0.0	0.0	0.4	0.3	0.4
	とてもあてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	24.2	31.4	27.7	26.4	30.6	26.9	22.5	27.8	28.3	23.2	24.3	25.9
	まああてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	45.4	49.6	50.4	50.4	46.2	44.2	46.3	51.5	52.5	51.1	49.1	44.3
	あまりあてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	20.3	15.6	17.6	16.6	17.8	19.5	18.9	15.0	12.8	19.1	16.6	18.6
	全然あてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	10.0	3.4	4.3	6.6	5.3	9.3	12.1	5.3	6.4	6.2	9.7	10.8
制服も街に行くときのファッションになると思う	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.1	0.5	0.0	0.3	0.5	0.6	0.4	0.3	0.6	0.8	0.2
	とてもあてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.5	8.9	4.5	6.8	6.4	10.1	6.1	12.1	7.5	11.3	8.8	8.8
	まああてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	18.1	32.1	21.9	32.8	25.9	21.0	24.5	37.0	32.5	38.2	30.4	23.5
	あまりあてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	39.9	39.0	43.7	37.4	37.6	40.2	40.5	31.4	36.3	35.5	36.8	34.6
	全然あてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	35.9	19.9	29.3	23.0	29.8	28.3	28.3	19.2	23.5	14.4	23.1	32.9

		1979年					1997年					2009年						
		性別		トラック			性別		トラック			性別		トラック				
		男	女	トップ校	セカンド校	専門校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門校
	N	493	257	250	250	250	1025	1087	375	500	625	625	968	1027	375	487	601	544
自分の趣味や関心のあることをインターネットや本・雑誌で調べる	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.1	0.0	0.2	0.2	0.2
	とてもあてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	40.5	45.7	39.5	43.5	42.9	45.8
	まああてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	39.3	39.2	44.5	40.9	36.8	36.6
	あまりあてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.7	12.8	12.5	12.9	16.0	12.9
	全然あてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.4	2.2	3.5	2.5	4.2	4.6
自分の趣味や関心のあることを誰かと情報交換する	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.2	0.0	0.0	0.3	0.2
	とてもあてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	27.5	36.5	30.7	30.4	34.3	32.7
	まああてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	41.4	38.8	42.4	40.7	40.4	37.1
	あまりあてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	22.7	20.6	22.9	23.8	18.8	22.1
	全然あてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.3	3.9	4.0	5.1	6.2	7.9
小中学校のときからの友達とのつきあいがある	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.3	0.3	0.4	0.3	0.6
	とてもあてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	55.0	72.1	59.5	64.7	64.7	65.3
	まああてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	32.0	22.1	31.5	28.1	25.5	24.1
	あまりあてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.3	3.9	6.1	4.3	6.8	6.4
	全然あてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.2	1.7	2.7	2.5	2.7	3.7
友達とメールをやりとりしてないと不安になる	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.4	0.3	0.0	0.7	0.6
	とてもあてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.2	3.1	1.9	1.8	3.5	3.1
	まああてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.2	10.8	6.7	9.2	11.0	10.5
	あまりあてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	36.7	46.3	41.9	46.4	38.4	40.4
	全然あてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	52.6	39.3	49.3	42.5	46.4	45.4
自分のブログやプロフをもっている	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.4	0.0	0.0	0.8	0.4
	とてもあてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.9	30.0	16.8	19.9	22.5	18.6
	まああてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.9	20.3	12.0	15.0	14.3	13.4
	あまりあてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.9	9.2	6.9	8.2	8.7	8.1
	全然あてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	77.0	40.2	64.3	56.9	53.7	59.6
靴のかかとを踏んで歩く	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.2	0.0	0.0	0.2	0.4
	とてもあてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.6	5.9	3.2	9.4	6.5	5.3
	まああてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	12.5	13.0	7.2	18.3	14.5	9.9
	あまりあてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	17.7	19.4	18.4	21.1	15.8	18.9
	全然あてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	63.1	61.4	71.2	51.1	63.1	65.4
あなたが大学へ行くことを望んでいる	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.1	0.0	0.0	0.5	0.6
	とてもあてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	50.4	45.2	76.8	69.2	38.9	18.2
	まああてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	28.8	28.5	21.3	26.5	35.3	28.1
	あまりあてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	11.0	14.7	1.6	3.7	15.6	25.7
	全然あてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	9.3	11.5	0.3	0.6	9.7	27.4
あなたが高卒後、地元に進学・就職することを望んでいる	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.1	0.0	0.0	0.5	0.6
	とてもあてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	17.3	19.0	6.7	14.0	21.6	25.7
	まああてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	23.8	26.6	12.5	19.3	29.5	34.4
	あまりあてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	29.3	28.0	34.9	31.2	26.8	24.6
	全然あてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	29.1	26.3	45.9	35.5	21.6	14.7
将来的には、いつかあなたが実家のある地域で働くことを望んでいる	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.6	0.8	0.4	0.8	0.6
	とてもあてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	11.0	13.3	12.8	8.8	13.5	13.2
	まああてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	24.6	27.7	22.9	26.9	27.3	26.8
	あまりあてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	41.1	40.5	44.0	44.4	37.3	39.3
	全然あてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	22.6	17.9	19.5	19.5	21.1	20.0
家庭はあたたかい感じがする	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.2	0.5	0.2	0.8	0.9
	とてもあてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	28.1	36.2	33.9	31.0	31.3	33.3
	まああてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	51.5	43.6	49.3	50.7	46.4	44.7
	あまりあてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	12.8	13.8	12.5	12.7	14.5	12.9
	全然あてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.5	6.1	3.7	5.3	7.0	8.3
晩ごはんを保護者といっしょに食べる	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.2	0.5	0.4	0.3	0.6
	とてもあてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	41.4	50.4	55.2	48.3	41.9	42.6
	まああてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	35.1	29.1	29.6	35.1	31.3	31.6
	あまりあてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	15.3	13.7	10.9	11.1	19.5	14.3
	全然あてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.4	6.5	3.7	5.1	7.0	10.8
子どものころあなたをかわいがってくれた	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.4	0.3	0.2	0.8	0.7
	とてもあてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	40.9	56.2	57.9	50.7	45.3	44.3
	まああてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	49.2	37.9	38.7	43.7	46.4	43.4
	あまりあてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.6	4.0	2.9	4.3	5.2	7.7
	全然あてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.6	1.6	0.3	1.0	2.3	3.9
先生の授業を熱心に聞いているほうだ	無回答	0.2	0.0	0.4	0.0	0.0	0.5	0.1	0.0	0.2	0.6	0.2	0.3	0.1	0.0	0.2	0.3	0.2
	はい	37.9	44.7	50.0	42.0	28.8	45.6	46.9	64.5	50.4	41.4	36.8	60.7	67.8	76.3	64.9	62.2	57.7
	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	いいえ	61.9	55.3	49.6	58.0	71.2	54.0	53.0	35.5	49.4	57.9	63.0	38.9	32.1	23.7	34.9	37.4	42.1

		1979年					1997年					2009年						
		性別		トラック			性別		トラック			性別		トラック				
		男	女	トップ校	セカンド校	専門学校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門学校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門学校
	N	493	257	250	250	250	1025	1087	375	500	625	625	968	1027	375	487	601	544
授業でわからない点は、いつまでもそのままにしておかないほうだ	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.3	0.2	0.3	0.1	0.3	0.0	0.3	0.2
	はい	36.5	40.1	44.0	34.4	34.8	34.3	32.3	46.1	33.6	27.7	31.0	46.9	42.9	57.9	45.2	39.8	41.4
	いいえ	63.5	59.9	56.0	65.6	65.2	65.4	67.7	53.9	66.4	72.0	68.8	52.8	57.0	41.9	54.8	59.9	58.5
高校での勉強は、自分の興味・関心にあわないものが多い	無回答	0.6	0.0	0.4	0.4	0.4	0.2	0.0	0.0	0.0	0.2	0.2	0.3	0.1	0.0	0.0	0.3	0.4
	はい	54.6	46.3	46.0	52.0	57.2	62.8	57.5	49.9	62.6	66.1	58.2	52.9	48.2	38.1	52.8	56.2	50.6
	いいえ	44.8	53.7	53.6	47.6	42.4	37.0	42.5	50.1	37.4	33.8	41.6	46.8	51.7	61.9	47.2	43.4	49.1
先生の授業の進め方が早すぎて、ついていけない科目が多い	無回答	0.2	0.4	0.4	0.4	0.0	0.2	0.1	0.0	0.0	0.2	0.3	0.3	0.1	0.3	0.0	0.2	0.4
	はい	37.5	35.8	36.0	42.0	32.8	41.1	48.3	42.9	45.8	49.0	41.0	37.8	44.8	37.9	39.4	47.1	39.5
	いいえ	62.3	63.8	63.6	57.6	67.2	58.7	51.6	57.1	54.2	50.9	58.7	61.9	55.1	61.9	60.6	52.7	60.1
先生や親の期待にこたえるために、勉強しなければならないと思うことがある	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.2	0.2	0.2	0.1	0.3	0.0	0.2	0.2
	はい	65.1	64.2	59.2	68.8	66.4	44.7	45.4	48.5	51.0	43.7	39.5	54.5	56.1	59.2	56.9	56.9	49.4
	いいえ	34.9	35.8	40.8	31.2	33.6	55.1	54.6	51.5	49.0	56.2	60.3	45.2	43.8	40.5	43.1	42.9	50.4
授業がきっかけとなって、さらにくわしいことを知りたくなることがある	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.1	0.0	0.2	0.2	0.2	0.3	0.1	0.0	0.2	0.2	0.4
	はい	56.4	55.3	64.0	57.6	46.4	46.8	44.8	61.6	51.0	44.3	33.8	44.7	47.2	58.9	46.2	41.4	42.1
	いいえ	43.6	44.7	36.0	42.4	53.6	53.0	55.1	38.4	48.8	55.5	66.1	55.0	52.7	41.1	53.6	58.4	57.5
どうして、こんなことまで勉強しなければならないのかと疑問に思うことがある	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.2	0.0	0.0	0.3	0.3	0.2	0.1	0.3	0.0	0.2	0.2
	はい	68.8	74.3	72.4	74.4	65.2	79.7	87.9	76.3	87.6	85.6	83.8	77.9	85.6	78.1	83.6	82.9	81.4
	いいえ	31.2	25.7	27.6	25.6	34.8	20.1	12.0	23.7	12.4	14.1	15.8	21.9	14.3	21.6	16.4	17.0	18.4
試験が終わると勉強したことをすぐ忘れてしまうほう	無回答	0.4	0.0	0.4	0.0	0.4	0.3	0.6	0.0	0.2	1.0	0.3	0.2	0.2	0.5	0.0	0.2	0.2
	はい	79.1	86.4	78.0	81.6	85.2	77.9	88.8	75.5	83.0	86.7	85.3	76.5	85.9	75.7	78.6	84.9	83.5
	いいえ	20.5	13.6	21.6	18.4	14.4	21.9	10.7	24.5	16.8	12.3	14.4	23.2	13.9	23.7	21.4	15.0	16.4
教科書の内容がむずかしすぎて、ついていけない科目が多い	無回答	0.2	0.4	0.4	0.4	0.0	0.3	0.0	0.3	0.0	0.2	0.2	0.6	0.1	0.5	0.2	0.3	0.4
	はい	31.2	26.8	21.2	33.2	34.8	40.2	49.8	37.1	44.8	51.2	44.3	40.0	47.0	43.1	52.1	52.1	42.5
	いいえ	68.6	72.8	78.4	66.4	65.2	59.5	50.2	62.7	55.2	48.6	55.5	59.4	52.9	66.9	56.7	47.6	57.2
いくら勉強しても、大切なものが身についていないと思うことがある	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.1	0.3	0.0	0.3	0.3	0.2	0.1	0.3	0.0	0.2	0.2
	はい	85.0	87.5	87.6	86.8	83.2	79.7	85.8	80.5	85.4	84.3	80.6	73.2	78.5	70.4	78.4	80.0	73.2
	いいえ	15.0	12.5	12.4	13.2	16.8	19.9	14.1	19.2	14.6	15.4	19.0	26.5	21.4	29.3	21.6	19.8	26.7
英単語を覚えるとき、くり返し書いて覚える	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.2	0.3	0.0	0.2	0.2
	はい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	43.2	51.0	45.3	45.8	45.8	50.9
	いいえ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	56.7	48.8	54.4	54.2	54.1	48.9
家での勉強は塾の勉強や市販の教材を使う勉強が中心だ	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.1	0.3	0.0	0.2	0.2
	はい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	10.3	6.2	5.6	9.0	11.3	5.9
	いいえ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	89.5	93.7	94.1	91.0	88.5	93.9
勉強方法について友人と話す	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.1	0.3	0.2	0.2	0.2
	はい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	42.5	51.6	66.4	53.2	39.3	36.9
	いいえ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	57.2	48.3	33.3	46.6	60.6	62.9
高卒後の進路について友人と話す	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.1	0.3	0.0	0.2	0.2
	はい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	60.0	79.1	69.6	66.3	71.2	71.5
	いいえ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	39.8	20.8	30.1	33.7	28.6	28.3
先輩から勉強方法を教えてもらう	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.2	0.5	0.0	0.3	0.2
	はい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	18.2	18.3	24.8	20.7	16.1	13.8
	いいえ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	81.5	81.5	74.7	79.3	83.5	86.0
小学校では、自分で調べたり体験したりする授業が楽しかった	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.3	0.8	0.0	0.3	0.2	
	はい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	62.9	65.8	60.5	64.5	65.1	66.7
	いいえ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	36.8	33.9	38.7	35.5	34.6	33.1
中学校では、自分で調べたり体験したりする授業が楽しかった	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.4	0.8	0.0	0.5	0.2	
	はい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	55.1	51.7	53.3	54.6	52.2	54.2
	いいえ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	44.6	47.9	45.9	45.4	47.3	45.6
高校の授業の中で、自分で調べたり体験したりする授業は楽しい	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.6	1.1	0.0	0.5	0.4	
	はい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	41.4	40.0	41.9	35.7	36.3	49.3
	いいえ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	58.3	59.4	57.1	64.3	63.2	50.4
現在の高校での勉強は暗記中心だ	無回答	0.2	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.2	0.0	0.2	0.1	0.3	0.0	0.0	0.4
	とてもそう思う	40.2	37.0	36.8	36.0	44.4	25.9	21.1	23.7	26.0	22.2	22.4	22.8	21.8	20.5	22.6	27.2	
	どちらかといえばそう思う	44.6	52.5	46.8	52.0	43.2	49.1	59.1	53.3	54.4	57.3	51.5	52.2	57.3	53.6	54.0	57.9	52.6
	どちらかといえばそう思わない	11.2	10.1	13.2	10.8	8.4	17.7	17.3	18.1	17.2	15.5	19.0	20.4	19.3	26.7	23.0	17.0	15.4
	全然そう思わない	3.9	0.4	2.8	1.2	4.0	7.4	2.5	4.8	2.4	4.8	7.0	4.4	1.6	2.4	2.5	2.5	4.4
学校では勉強のできる生徒が幅をきかせている	無回答	0.4	0.4	0.0	0.8	0.4	0.0	0.3	0.0	0.0	0.3	0.2	0.1	0.8	0.0	0.2	1.0	0.4
	とてもそう思う	9.5	8.6	12.4	8.4	6.8	8.0	8.3	14.4	7.6	6.2	6.7	12.5	13.6	20.5	11.5	14.1	8.1
	どちらかといえばそう思う	19.7	21.0	25.6	16.8	18.0	17.7	26.2	23.7	21.2	24.0	20.0	37.1	40.2	34.9	39.8	38.6	40.4
	どちらかといえばそう思わない	36.9	46.3	40.8	47.6	32.0	41.4	45.7	40.3	45.8	43.8	43.7	35.8	34.3	31.2	33.7	36.6	37.1
	全然そう思わない	33.5	23.7	21.2	26.4	42.8	38.0	19.5	21.6	25.4	25.6	29.4	14.5	11.1	13.3	14.8	9.7	14.0

		1979年					1997年					2009年						
		性別		トラック			性別		トラック			性別		トラック				
		男	女	トップ校	セカンド校	専門校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門校
	N	493	257	250	250	250	1025	1087	375	500	625	625	968	1027	375	487	601	544
高校生である以上、勉強すべきだ	無回答	0.0	0.4	0.0	0.4	0.0	1.1	1.7	1.6	0.0	2.4	1.4	0.4	0.4	0.3	0.2	0.3	0.7
	とてもそう思う	13.2	17.5	17.6	16.4	10.0	17.8	13.7	24.0	16.6	16.3	9.6	30.3	27.2	37.3	37.4	26.5	16.9
	どちらかといえばそう思う	52.3	66.5	60.8	59.6	51.2	42.3	51.2	56.3	56.4	45.1	35.5	50.4	54.0	53.3	54.7	50.9	50.9
	どちらかといえばそう思わない	23.9	11.7	16.8	17.6	24.8	25.6	24.5	13.3	21.6	24.3	35.2	13.7	14.6	6.7	10.3	14.3	22.8
	全然そう思わない	10.5	3.9	4.8	6.0	14.0	13.3	8.8	4.8	5.4	11.8	18.2	5.2	3.8	2.4	1.8	4.2	8.6
努力すれば、だれでもよい成績をとることができる	無回答	0.6	0.0	0.0	0.4	0.8	0.4	1.7	0.8	0.2	1.4	1.4	0.3	0.3	0.5	0.0	0.2	0.6
	とてもそう思う	55.8	43.2	44.8	53.2	56.4	41.1	35.1	37.3	37.6	39.2	37.8	42.4	34.0	36.5	37.4	38.3	39.0
	どちらかといえばそう思う	32.5	45.9	38.8	37.6	34.8	40.6	47.1	42.9	45.0	42.4	45.1	37.0	45.0	43.2	41.9	40.4	40.1
	どちらかといえばそう思わない	6.9	9.3	12.0	6.4	4.8	11.6	13.4	14.9	13.0	12.3	10.7	13.3	16.8	15.7	15.4	15.8	13.6
	全然そう思わない	4.3	1.6	4.4	2.4	3.2	6.3	2.8	4.0	4.2	4.6	5.0	7.0	3.9	4.0	5.3	5.3	6.8
いまの日本の社会では、学校での成績によって将来が決まる	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.2	0.3	0.4	0.0	0.5	0.3	0.1	0.3	0.0	0.2	0.4
	とてもそう思う	41.0	33.1	28.8	38.0	48.0	35.8	32.5	36.0	34.0	34.7	32.5	30.7	23.6	15.2	23.8	32.1	32.4
	どちらかといえばそう思う	36.7	37.7	46.0	35.2	30.0	35.0	42.0	40.5	44.6	35.8	35.7	36.1	41.4	41.9	38.8	37.4	38.1
	どちらかといえばそう思わない	12.2	19.1	16.8	16.4	10.4	18.0	19.0	17.6	13.8	20.5	20.6	21.1	26.6	31.2	27.5	21.5	18.4
	全然そう思わない	10.1	10.1	8.4	10.4	11.6	10.7	6.3	5.6	7.2	9.0	10.7	11.9	8.4	11.5	9.9	8.8	10.8
いまの学校の試験では、本当の能力ははかれない	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.6	0.3	0.6	0.5	0.5	0.3	0.4	0.5	0.0	0.3	0.6
	とてもそう思う	46.2	37.4	37.6	41.6	50.4	36.4	25.3	32.0	32.8	30.2	28.5	24.7	18.5	18.1	24.8	21.0	21.1
	どちらかといえばそう思う	34.7	40.9	39.2	37.2	34.0	36.9	43.4	37.3	42.6	43.7	36.5	37.9	38.5	36.5	38.4	40.4	37.1
	どちらかといえばそう思わない	15.8	17.9	19.2	17.6	12.8	19.4	28.4	26.9	21.6	21.3	27.4	32.0	39.2	41.3	32.6	33.8	36.6
	全然そう思わない	3.2	3.9	4.0	3.6	2.8	7.0	2.2	3.5	2.4	4.3	7.2	5.1	3.4	3.5	4.1	4.5	4.6
高校での勉強は、将来、職業や生活に役立つ	無回答	0.0	0.4	0.4	0.0	0.0	0.1	0.1	0.3	0.0	0.0	0.2	0.5	0.4	0.3	0.2	0.5	0.7
	とてもそう思う	9.3	7.0	8.4	4.4	12.8	9.8	7.1	9.9	5.0	8.3	10.4	18.2	13.1	9.7	14.1	14.1	23.2
	どちらかといえばそう思う	34.9	28.0	29.6	24.8	43.2	33.1	29.8	34.7	24.0	28.8	37.8	42.4	43.3	42.7	41.7	39.9	47.4
	どちらかといえばそう思わない	36.5	50.2	44.0	50.4	29.2	39.3	49.5	44.5	53.2	46.4	35.8	28.3	35.1	33.9	39.4	33.6	21.7
	全然そう思わない	19.3	14.4	17.6	20.4	14.8	17.8	13.5	10.7	17.8	16.5	15.8	10.6	8.1	8.8	9.0	11.8	7.0
現在の高校での勉強は、受験に役立つだけだ	無回答	0.0	0.4	0.4	0.0	0.0	0.4	0.6	0.3	0.2	0.5	0.8	0.5	0.3	0.3	0.0	0.5	0.7
	とてもそう思う	31.0	30.7	29.6	44.0	19.2	32.1	25.8	28.0	38.6	29.4	21.1	28.0	23.9	28.7	33.3	33.3	16.0
	どちらかといえばそう思う	28.8	40.9	42.8	34.4	21.6	36.0	42.9	40.8	45.2	44.5	28.8	37.1	45.8	43.5	46.2	42.1	34.9
	どちらかといえばそう思わない	30.4	20.6	22.8	18.4	40.0	24.9	27.0	27.2	12.8	21.8	40.3	27.8	26.4	27.2	22.6	20.6	38.1
	全然そう思わない	9.7	7.4	4.4	3.2	19.2	6.6	3.8	3.7	3.2	3.8	9.0	6.6	3.7	4.0	2.5	3.5	10.3
勉強をなまけて成績の悪い者が、将来、損そんをするのはしかたないことだ	無回答	0.2	0.0	0.0	0.4	0.0	0.5	0.1	0.0	0.6	0.2	0.3	0.1	0.3	0.0	0.0	0.2	0.6
	とてもそう思う	17.2	14.4	15.6	13.6	19.6	21.7	14.9	22.4	16.6	18.9	16.2	34.5	27.1	30.4	33.9	30.4	28.1
	どちらかといえばそう思う	41.8	44.7	43.2	42.4	42.8	38.2	42.8	43.5	43.6	37.8	39.2	41.4	44.3	47.2	44.8	41.8	40.1
	どちらかといえばそう思わない	26.2	30.4	32.0	30.4	20.4	23.8	32.0	24.3	29.4	29.6	27.8	16.9	22.9	17.9	16.8	20.8	23.2
	全然そう思わない	14.6	10.5	9.2	13.2	17.2	15.8	10.2	9.9	9.8	13.6	16.5	7.0	5.5	4.5	4.5	6.8	8.1
今の日本では、学歴があれば自分の望む生き方を選ぶことができる	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.2	0.5	0.2	0.2	0.2	0.3	0.4	0.0	0.0	0.5	0.7
	とてもそう思う	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	22.7	18.2	16.8	18.2	21.8	23.0	19.3	16.4	11.5	15.6	20.5	20.8
	どちらかといえばそう思う	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	31.1	34.1	32.0	36.0	34.4	28.6	34.9	33.8	33.9	34.7	35.4	33.1
	どちらかといえばそう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	28.3	33.9	32.3	32.4	29.1	31.5	30.3	36.8	38.1	34.3	31.9	32.0
	全然そう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	17.6	13.5	18.4	13.2	14.6	16.6	15.2	12.7	16.5	15.4	11.6	13.4
あくせく勉強してよい学校や会社に入っても、将来の生活に大した変わりはない	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.1	0.5	0.0	0.0	0.5	0.6
	とてもそう思う	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	15.8	14.5	12.0	13.0	14.9	19.4	11.7	12.8	11.7	10.5	12.5	13.6
	どちらかといえばそう思う	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	33.4	43.3	34.4	40.0	41.4	36.6	31.1	38.2	25.3	37.4	38.1	35.1
	どちらかといえばそう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	36.8	35.7	40.5	37.8	35.2	33.3	43.4	41.0	49.6	42.5	39.4	39.7
	全然そう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.0	6.2	12.8	9.0	8.3	10.6	13.7	7.6	13.3	9.7	9.5	11.0
部活動	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	1.6	0.8	1.6	1.8	0.5	0.8	1.0	0.5	0.8	1.5	0.6
	非常に充実している	11.8	11.3	11.2	7.2	16.4	21.4	14.3	23.2	16.4	14.6	19.0	33.8	30.1	38.4	27.5	28.1	34.9
	やや充実している	34.5	34.2	36.0	31.2	36.0	29.9	29.0	37.9	31.2	23.4	28.6	35.2	38.0	43.2	40.0	36.1	29.6
	あまり充実していない	33.1	33.5	30.8	38.8	30.0	22.1	28.6	21.1	26.4	26.6	26.2	14.0	16.7	10.7	19.1	15.0	16.2
	全然充実していない	20.7	21.0	22.0	22.8	17.6	26.0	26.6	17.1	24.4	33.8	25.6	16.1	14.3	7.2	12.5	19.3	18.8
学校行事（文化祭、体育祭、合唱大会、スポーツ大会など）	無回答	0.2	0.0	0.0	0.0	0.4	0.4	0.6	0.3	0.4	0.6	0.5	0.1	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0
	非常に充実している	30.4	36.2	33.2	37.2	26.8	18.4	18.6	18.4	22.6	17.3	16.8	24.0	24.1	26.9	23.8	22.0	24.3
	やや充実している	42.4	43.6	42.4	39.6	46.4	31.7	40.1	39.5	35.2	33.9	36.6	40.8	47.9	44.5	47.0	48.3	37.9
	あまり充実していない	16.0	15.2	17.2	15.2	14.8	27.3	27.2	27.2	27.6	29.0	25.1	23.8	21.1	21.9	22.0	21.3	24.6
	全然充実していない	11.0	5.1	7.2	8.0	11.6	22.1	13.5	14.7	14.2	19.2	21.0	11.4	6.8	6.7	7.0	8.5	13.2
学校での友人とのつきあい	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.6	0.5	0.6	0.6	0.3	0.3	0.2	0.0	0.4	0.2	0.4
	非常に充実している	36.5	49.8	33.6	44.8	44.8	30.4	38.5	27.2	30.8	40.3	36.8	34.7	42.3	36.3	35.7	40.9	40.3
	やや充実している	45.8	40.5	48.0	42.4	41.6	45.7	47.7	52.0	50.8	41.1	45.1	50.8	48.5	53.6	52.2	49.9	44.3
	あまり充実していない	14.0	7.0	14.8	10.0	16.4	11.2	11.2	17.1	14.8	12.6	12.2	10.3	6.5	8.5	9.4	6.3	9.6
	全然充実していない	3.7	2.7	3.6	2.8	3.6	7.0	2.1	3.2	3.0	5.3	5.6	3.8	2.5	1.6	2.3	2.7	5.5

		1979年					1997年					2009年						
		性別		トラック			性別		トラック			性別		トラック				
		男	女	トップ校	セカンド校	専門校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門校
	N	493	257	250	250	250	1025	1087	375	500	625	625	968	1027	375	487	601	544
多少の校則違反はおおめにみる先生	無回答	0.2	0.4	0.0	0.0	0.8	0.4	0.3	0.5	0.2	0.5	0.2	0.1	0.3	0.3	0.0	0.3	0.2
	たくさんいる	21.5	25.3	42.8	14.4	11.2	18.2	18.9	36.0	30.4	7.2	10.6	13.0	8.7	19.2	15.0	6.8	5.5
	少しいる	61.7	59.5	50.0	64.8	64.8	55.5	52.3	50.1	57.0	50.4	56.6	61.1	61.1	61.1	68.6	65.9	48.7
	ほとんどいない	16.6	14.8	7.2	17.6	23.2	25.9	28.5	13.3	12.4	41.9	32.6	25.8	29.9	19.5	16.4	27.0	45.6
授業中、成績のよい生徒を中心に指名する先生	無回答	0.4	0.0	0.0	0.0	0.8	0.5	0.1	0.0	0.2	0.5	0.3	0.1	0.3	0.0	0.0	0.5	0.2
	たくさんいる	16.8	10.9	8.0	20.8	15.6	14.2	14.6	13.1	14.6	18.6	11.2	8.2	9.9	12.3	4.7	12.1	7.4
	少しいる	54.0	59.9	61.2	50.8	56.0	44.0	48.5	44.0	49.8	46.7	44.5	43.8	44.3	51.5	38.0	47.9	39.7
	ほとんどいない	28.8	29.2	30.8	28.4	27.6	41.3	36.8	42.9	35.4	34.2	44.0	47.9	45.5	36.3	57.3	39.4	52.8
生徒がわかるまで、ていねいに教える先生	無回答	0.6	0.0	0.0	0.0	1.2	0.4	0.3	0.5	0.4	0.3	0.2	0.0	0.3	0.0	0.0	0.5	0.0
	たくさんいる	10.1	11.3	14.4	11.6	5.6	12.4	17.0	35.2	15.4	8.5	8.6	26.4	26.7	49.3	29.8	18.1	17.5
	少しいる	50.7	55.3	57.2	52.4	47.2	56.4	54.6	49.6	62.4	53.1	55.2	58.1	57.7	41.6	56.9	64.4	62.7
	ほとんどいない	38.5	33.5	28.4	36.0	46.0	30.8	28.2	14.7	21.8	38.1	36.0	15.5	15.3	9.1	13.3	17.0	19.9
道で会うと声をかけてくる先生	無回答	0.6	0.0	0.0	0.4	0.8	1.3	1.3	2.1	1.4	1.3	0.6	0.2	0.7	0.5	0.2	0.8	0.2
	たくさんいる	1.8	2.7	2.8	0.8	2.8	8.0	5.2	6.9	6.4	5.3	7.8	14.6	8.5	15.2	9.9	9.3	13.1
	少しいる	42.6	47.9	43.2	42.0	48.0	45.0	45.9	48.0	51.2	41.3	43.5	52.9	53.4	52.5	58.7	52.9	48.3
	ほとんどいない	55.0	49.4	54.0	56.8	48.4	45.8	47.7	42.9	41.0	52.2	48.0	32.3	37.5	31.7	31.2	36.9	38.4
授業中の生徒のおしゃべりをあまりしからない先生	無回答	0.4	0.0	0.4	0.0	0.4	0.5	0.2	0.3	0.6	0.3	0.2	0.1	0.2	0.3	0.0	0.3	0.0
	たくさんいる	8.1	13.6	14.0	7.2	8.8	8.3	4.0	8.5	4.4	4.8	7.7	7.7	4.9	4.0	5.1	8.7	6.3
	少しいる	65.7	60.3	64.4	67.6	59.6	56.2	55.2	43.2	57.6	58.1	59.5	55.9	53.5	36.3	47.2	62.2	65.4
	ほとんどいない	25.8	26.1	21.2	25.2	31.2	35.0	40.7	48.0	37.4	36.8	32.6	36.3	41.5	59.5	47.6	28.8	28.3
生徒の意見を大事にする先生	無回答	0.2	0.0	0.0	0.0	0.4	0.5	0.5	0.5	0.6	0.3	0.5	0.4	0.4	0.3	0.0	0.7	0.6
	たくさんいる	10.1	8.9	15.6	9.2	4.4	9.9	10.7	20.8	11.0	6.7	7.2	20.4	20.0	31.2	22.4	16.5	14.7
	少しいる	60.2	65.8	65.6	60.8	60.0	59.8	54.7	63.7	63.2	50.7	54.6	62.4	62.5	58.1	62.0	63.4	64.2
	ほとんどいない	29.4	25.3	18.8	30.0	35.2	29.9	34.1	14.9	25.2	42.2	37.8	16.8	17.1	10.4	15.6	19.5	20.6
細かいことまで口うるさい先生	無回答	0.2	0.0	0.0	0.0	0.4	0.4	0.2	0.3	0.2	0.5	0.2	0.1	0.2	0.0	0.0	0.3	0.2
	たくさんいる	31.0	26.1	16.0	32.4	39.6	36.5	40.2	20.5	26.0	50.4	47.4	30.4	33.4	25.3	27.7	31.1	41.2
	少しいる	51.5	59.9	55.2	56.8	51.2	49.8	50.0	59.2	62.2	40.2	43.8	59.4	56.7	64.0	62.4	59.4	48.5
	ほとんどいない	17.2	14.0	28.8	10.8	8.8	13.4	9.7	20.0	11.6	9.0	8.6	10.1	9.7	10.7	9.9	9.2	10.1
生徒から信頼されている先生	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.2	0.3	0.0	0.3	0.0	0.2	0.3	0.0
	たくさんいる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.6	8.8	20.8	9.0	4.2	4.2	25.0	22.6	38.7	21.4	18.1	22.1
	少しいる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	62.8	63.1	68.8	71.4	56.3	59.0	62.5	62.8	54.1	64.9	66.1	62.1
	ほとんどいない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	29.3	28.1	10.4	19.6	39.4	36.5	12.5	14.3	7.2	13.6	15.5	15.8
生徒と友達のように接する先生	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.5	0.0
	たくさんいる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	12.4	12.7	7.7	14.8	13.5	12.7
	少しいる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	63.2	65.1	57.3	61.6	69.1	65.8
	ほとんどいない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	24.4	21.9	34.9	23.6	17.0	21.5
できることならほかの高校にかわりたい	無回答	0.2	0.0	0.0	0.0	0.4	0.4	0.0	0.0	0.0	0.3	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	非常に感じる	9.5	6.2	4.4	7.6	13.2	18.5	16.7	7.5	12.2	23.2	22.7	16.0	12.9	7.5	12.7	16.8	17.8
	やや感じる	36.7	35.4	30.4	42.8	35.6	27.4	34.3	22.4	30.4	35.0	32.3	27.9	28.5	21.6	28.3	27.1	34.2
	あまり感じない	21.5	31.5	26.4	27.2	21.2	30.9	30.8	39.5	35.8	26.4	26.1	34.1	37.1	40.5	36.1	37.1	30.1
今いるクラスにとけ込めない	全く感じない	32.0	26.8	38.8	22.4	29.6	22.7	18.1	30.7	21.6	15.0	18.6	22.0	21.5	30.4	22.8	19.0	17.8
	無回答	0.2	0.0	0.0	0.0	0.4	0.4	0.1	0.0	0.2	0.3	0.3	0.1	0.1	0.0	0.2	0.2	0.0
	非常に感じる	6.3	5.1	5.2	5.6	6.8	6.5	3.6	3.5	4.0	5.8	6.4	2.9	3.0	1.9	2.7	3.8	2.9
	やや感じる	20.1	26.5	22.0	26.0	18.8	15.1	19.2	16.8	15.0	19.2	17.8	16.6	15.4	14.1	17.2	16.0	16.5
学校を休みたいという気持ちになる	あまり感じない	39.6	36.2	42.8	35.6	36.8	45.8	47.8	48.3	53.4	45.0	42.1	49.1	50.2	53.3	52.4	49.9	43.9
	全く感じない	33.9	32.3	30.0	32.8	37.2	32.2	29.3	31.5	27.4	29.8	33.4	31.3	31.3	30.7	27.5	30.1	36.6
	無回答	0.2	0.0	0.0	0.0	0.4	0.7	0.0	0.3	0.2	0.3	0.5	0.1	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0
	非常に感じる	15.6	15.2	10.0	15.6	20.8	22.0	20.2	13.1	17.0	26.2	24.5	13.7	17.1	8.8	14.2	18.8	18.0
早く社会に出て働きたい	やや感じる	42.4	53.7	45.2	52.8	40.8	35.7	46.1	38.7	47.2	39.7	38.6	31.8	38.4	32.5	39.6	33.9	34.2
	あまり感じない	23.5	18.7	24.8	21.2	19.6	26.1	25.1	32.0	25.8	22.7	24.6	31.6	27.7	36.5	27.3	30.4	25.6
	全く感じない	18.3	12.5	20.0	10.4	18.4	15.5	8.6	18.4	9.8	11.0	11.8	22.7	16.8	22.1	18.7	16.8	22.2
	無回答	0.4	0.4	0.8	0.0	0.4	0.3	0.2	0.0	0.2	0.5	0.2	0.1	0.1	0.3	0.0	0.0	0.2
この学校での生活にはりあいを感じる	非常に感じる	16.6	11.7	9.6	10.8	24.4	17.9	21.8	16.5	13.2	21.8	25.9	15.0	19.6	12.0	16.2	18.6	21.0
	やや感じる	31.2	37.7	30.4	37.8	32.4	28.0	29.1	22.9	31.6	27.4	30.6	25.6	29.3	22.7	27.3	29.0	29.4
	あまり感じない	28.2	24.9	31.6	27.2	22.4	31.7	34.1	39.7	34.4	31.2	29.3	36.3	33.4	41.3	34.5	33.3	32.2
	全く感じない	23.5	25.3	27.6	24.4	20.4	22.1	14.8	20.8	20.6	19.2	14.1	23.0	17.6	23.7	22.0	19.1	17.3
この学校での生活にはりあいを感じる	無回答	0.2	0.0	0.0	0.0	0.4	0.7	0.4	0.3	0.8	0.6	0.3	0.2	1.7	0.8	1.6	1.0	0.6
	非常に感じる	7.7	10.5	14.8	4.4	6.8	6.0	4.4	9.6	4.0	4.5	4.3	7.6	7.8	13.1	5.1	6.5	7.9
	やや感じる	43.8	49.4	52.0	45.6	39.6	26.6	22.4	35.5	26.6	18.9	21.6	34.4	31.6	43.2	31.8	27.3	33.3
	あまり感じない	35.1	31.1	26.8	36.8	37.6	49.7	58.4	44.5	55.8	57.6	55.0	46.3	48.1	37.6	47.8	54.6	45.0
	全く感じない	13.2	8.9	6.4	13.2	15.6	17.1	14.4	10.1	12.8	18.4	18.7	11.5	10.8	5.3	13.6	10.6	13.2

		1979年					1997年					2009年						
		性別		トラック			性別		トラック			性別		トラック				
		男	女	トップ校	セカンド校	専門校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門校
	N	493	257	250	250	250	1025	1087	375	500	625	625	968	1027	375	487	601	544
この学校のやり方に不満を感じる	無回答	0.2	0.0	0.0	0.0	0.4	0.6	0.1	0.3	0.6	0.3	0.2	0.3	0.6	0.5	0.2	0.5	0.6
	非常に感じる	27.0	14.4	13.2	27.6	27.2	20.3	19.3	8.3	12.6	27.8	24.6	15.1	15.0	8.8	13.3	15.3	20.6
	やや感じる	39.1	50.6	48.4	40.4	40.4	31.4	37.1	31.7	34.6	36.8	33.1	27.4	32.5	33.0	30.0	32.8	33.1
	あまり感じない	24.3	26.8	29.6	24.0	22.0	36.6	36.8	48.0	45.0	28.5	31.4	43.8	41.2	54.7	44.1	42.4	32.4
	全く感じない	9.3	8.2	8.8	8.0	10.0	11.1	6.7	11.7	7.2	6.6	10.7	13.4	10.7	14.1	12.3	9.0	13.4
学校にいる時よりも学校の外での生活のほうが楽しい	無回答	0.2	0.0	0.0	0.0	0.4	0.5	0.1	0.3	0.2	0.3	0.3	0.2	0.4	0.8	0.0	0.5	0.0
	非常に感じる	33.9	17.1	18.4	25.6	40.4	32.6	29.0	16.5	21.2	37.4	40.3	28.3	26.7	16.0	24.2	30.6	34.9
	やや感じる	42.4	40.1	44.0	42.0	38.8	37.2	32.4	30.1	37.2	36.3	33.9	33.9	34.5	33.9	35.5	34.3	33.6
	あまり感じない	19.3	32.7	30.8	26.0	14.8	23.5	34.6	45.1	36.8	21.1	21.4	31.1	32.2	39.5	34.3	29.8	25.6
	全く感じない	4.3	10.1	6.8	6.4	5.6	6.2	4.0	8.0	4.6	4.8	4.0	6.5	6.2	9.9	6.0	4.8	5.9
この学校の生徒であることは誇りである	無回答	0.6	0.0	0.8	0.0	0.4	1.2	1.7	1.1	1.6	1.4	1.4	0.1	0.4	0.5	0.0	0.5	0.0
	非常に感じる	17.0	23.0	31.2	8.4	17.6	9.1	7.6	19.5	6.6	4.0	7.5	11.9	13.2	22.9	8.2	7.3	15.3
	やや感じる	38.1	42.8	40.8	41.6	36.8	21.4	25.7	34.1	25.0	17.6	21.9	30.9	37.7	43.5	34.9	29.8	32.5
	あまり感じない	29.0	25.7	19.2	33.2	31.2	43.4	45.5	33.3	50.8	47.2	43.5	37.5	36.4	25.1	42.9	43.6	32.5
	全く感じない	15.2	8.6	8.0	16.8	14.0	25.0	19.5	12.0	16.0	29.8	25.6	19.6	12.3	8.0	14.0	18.8	19.7
学校生活は楽しい	無回答	0.2	0.0	0.0	0.0	0.4	0.7	1.3	1.1	0.8	1.1	1.0	0.5	0.0	0.3	0.0	0.5	0.2
	非常に感じる	20.1	38.9	32.4	24.4	22.8	10.7	13.3	15.7	13.4	10.9	10.1	21.0	28.0	26.1	25.3	24.1	23.5
	やや感じる	55.0	51.4	54.4	58.0	48.8	42.6	47.4	52.3	47.0	44.8	39.2	51.3	50.4	53.6	52.8	50.1	48.0
	あまり感じない	16.6	6.6	8.4	12.4	18.8	34.6	30.5	27.2	31.6	31.8	37.3	21.2	16.9	16.5	18.3	20.1	20.4
	全く感じない	8.1	3.1	4.8	5.2	9.2	11.3	7.5	3.7	7.2	11.4	12.5	6.0	4.6	3.5	3.7	5.2	7.9
先生に親しみを感じる	無回答	0.2	0.0	0.0	0.0	0.4	0.8	0.4	0.0	0.4	1.1	0.5	0.1	0.4	0.3	0.0	0.2	0.6
	非常に感じる	4.3	7.4	9.2	3.2	3.6	5.5	4.1	5.9	4.8	4.6	4.3	6.6	8.2	6.0	7.7	8.0	7.9
	やや感じる	28.4	35.4	34.0	29.6	28.8	24.6	27.6	32.5	30.8	24.3	20.2	36.8	39.1	42.4	42.7	34.6	34.6
	あまり感じない	40.6	32.7	40.4	38.0	35.2	45.6	46.1	49.1	47.8	41.1	46.9	40.3	37.8	38.1	37.8	42.6	36.8
	全く感じない	26.6	24.5	16.4	29.2	32.0	23.6	21.8	12.5	16.2	28.8	28.2	16.2	14.5	11.5	13.6	14.6	20.2
先生に相談をしたり、個別に指導を受けている	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.2	0.3	0.2	0.3	0.0
	非常に感じる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.5	3.3	5.6	2.1	4.2
	やや感じる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	13.7	16.4	19.5	11.7	13.1	17.3
	あまり感じない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	43.8	41.7	44.5	45.8	42.3	39.0
	全く感じない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	38.7	38.5	30.1	40.2	41.6	39.5
社会に出てからうまくやっていけるかどうか心配だ	無回答	0.4	0.0	0.4	0.0	0.4	0.6	0.2	0.3	0.6	0.3	0.3	0.0	0.1	0.0	0.0	0.2	0.0
	非常に感じる	26.6	32.7	24.4	30.4	31.2	31.9	28.9	28.5	28.2	31.8	31.8	38.3	39.0	33.9	35.5	42.1	41.0
	やや感じる	47.3	44.7	46.4	44.4	48.4	44.8	50.7	49.1	48.0	47.5	47.0	43.9	48.2	49.9	48.0	43.4	44.9
	あまり感じない	18.5	19.8	22.4	19.2	15.2	15.6	17.4	18.9	18.0	14.4	16.0	13.9	10.9	13.1	14.2	12.0	10.8
	全く感じない	7.3	2.7	6.4	6.0	4.8	7.1	2.9	3.2	5.2	5.9	4.8	3.8	1.8	3.2	2.3	2.3	3.3
将来の自分と今の学校生活がどうつながるのかわからない	無回答	0.4	0.0	0.4	0.0	0.4	0.6	0.2	0.3	0.4	0.5	0.3	0.0	0.2	0.0	0.0	0.3	0.0
	非常に感じる	21.5	24.5	21.6	23.2	22.8	25.7	24.0	22.1	22.2	28.6	24.6	27.6	29.1	21.9	27.9	33.4	27.6
	やや感じる	41.2	39.7	40.8	41.2	40.0	45.3	47.2	44.3	48.8	44.0	48.0	48.3	48.2	50.4	51.1	45.4	47.2
	あまり感じない	30.4	30.4	29.6	30.8	30.8	21.2	25.2	28.5	23.8	21.4	21.3	20.0	20.0	22.9	17.7	18.3	22.2
	全く感じない	6.5	5.4	7.6	4.8	6.0	7.3	3.4	4.8	4.8	5.4	5.8	4.0	2.5	4.8	3.3	2.5	2.9
将来のために考えるよりも今の生活を楽しみたい	無回答	1.0	0.0	0.8	0.4	0.8	1.0	0.3	0.5	1.2	0.3	0.5	0.2	0.2	0.5	0.0	0.3	0.0
	非常に感じる	20.5	10.5	12.0	14.4	24.8	19.1	12.1	8.5	10.6	14.4	24.8	21.9	13.5	11.7	15.0	21.3	19.7
	やや感じる	41.4	45.5	44.0	42.4	42.0	38.1	37.3	31.7	42.4	39.8	35.4	41.4	45.9	42.4	43.9	42.8	46.0
	あまり感じない	29.8	38.1	35.6	34.4	28.0	33.1	44.8	50.9	40.0	38.1	32.2	30.9	36.2	40.0	36.1	32.4	28.1
	全く感じない	7.3	5.8	7.6	8.4	4.4	8.7	5.6	8.3	5.8	7.4	7.2	5.6	4.2	5.3	4.9	3.2	6.3
自分には人よりすぐれたところがある	無回答	0.8	0.0	0.8	0.4	0.4	0.8	0.4	0.5	0.8	0.5	0.5	0.5	0.2	0.5	0.2	0.5	0.2
	非常に感じる	11.4	3.5	8.4	8.4	9.2	16.9	4.0	9.3	9.0	9.9	12.8	12.2	4.3	7.5	7.6	8.0	9.0
	やや感じる	35.9	29.2	39.2	33.6	28.0	33.3	24.6	33.3	29.2	25.6	29.0	31.9	25.1	36.3	31.8	23.3	25.4
	あまり感じない	42.8	54.1	43.6	48.0	48.4	36.5	54.9	44.3	49.8	47.4	41.8	42.6	51.0	42.7	46.4	50.4	46.7
	全く感じない	9.1	13.2	8.0	9.6	14.0	12.6	16.2	12.5	11.2	16.6	16.0	12.8	19.4	13.1	14.0	17.8	18.8
たいいていことはうまくこなすことができる	無回答	0.6	0.4	0.8	0.4	0.4	0.9	0.3	0.5	0.8	0.3	0.6	0.3	0.2	0.3	0.2	0.2	0.4
	非常に感じる	6.7	2.7	4.4	5.2	6.4	8.6	2.5	5.3	5.8	4.5	6.6	6.0	2.9	6.4	4.1	4.2	3.5
	やや感じる	39.8	30.4	34.8	39.6	35.2	36.9	28.3	36.5	31.2	31.5	32.2	35.1	31.3	37.1	36.1	27.6	33.3
	あまり感じない	43.4	54.1	49.2	46.4	45.6	42.6	55.7	46.7	51.4	51.4	46.6	47.6	49.3	44.5	46.6	53.2	48.2
	全く感じない	9.5	12.5	10.8	8.4	12.4	11.0	13.2	10.9	10.8	12.3	14.1	11.0	16.4	11.7	12.9	14.8	14.7

		1979年					1997年					2009年						
		性別		トラック			性別		トラック			性別		トラック				
		男	女	トップ校	セカンド校	専門学校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門学校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門学校
	N	493	257	250	250	250	1025	1087	375	500	625	625	968	1027	375	487	601	544
こつこつ努力をすれば、そこそ幸せな生活ができる	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.2	0.3	0.2	0.2	0.0
	非常に感じる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	26.5	20.6	22.1	19.7	25.0	25.9
	やや感じる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	59.0	66.0	67.7	65.9	60.4	59.0
	あまり感じない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	11.3	11.1	8.3	11.9	12.5	11.0
	全く感じない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.1	2.0	1.6	2.3	2.0	4.0
将来、安定した生活よりも、やりたいことができることのほうが重要だ	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.3	0.0	0.0	0.5	0.2
	非常に感じる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	23.1	17.6	19.7	20.7	20.0	20.8
	やや感じる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	37.8	38.3	39.7	39.8	36.3	37.5
	あまり感じない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	33.0	38.0	35.7	34.1	37.6	34.0
	全く感じない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.0	5.8	4.8	5.3	5.7	7.5
正社員であれば会社や職種にはこだわらない	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.3	0.0	0.4	0.3	0.6
	非常に感じる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.1	2.9	1.9	3.9	7.0	3.9
	やや感じる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	20.7	12.6	14.1	11.1	17.8	21.7
	あまり感じない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	48.3	58.7	55.2	56.7	54.1	49.1
	全く感じない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	24.5	25.5	28.8	27.9	20.8	24.8
困ったことがあっても、たいていのことは解決できる	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.2	0.3	0.0	0.3	0.6
	非常に感じる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	9.3	6.6	7.2	9.0	7.2	8.3
	やや感じる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	51.1	50.1	54.4	52.2	48.9	48.2
	あまり感じない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	34.6	39.5	34.7	37.0	39.6	36.6
	全く感じない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.5	3.5	3.5	1.8	4.0	6.4
まわりに相談できる人がいない	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.1	0.3	0.2	0.2	0.2
	非常に感じる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.1	2.6	3.5	2.7	3.0	5.9
	やや感じる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	17.0	14.8	15.2	14.6	14.3	19.5
	あまり感じない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	52.1	43.6	52.0	48.7	47.9	43.6
	全く感じない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	25.5	38.9	29.1	33.9	34.6	30.9
家族のことで心配や悩みがある	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.2	0.3	0.2	0.3	0.7
	非常に感じる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.4	10.1	6.4	6.6	11.6	7.5
	やや感じる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	18.9	22.8	21.3	20.1	20.1	22.6
	あまり感じない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	39.2	35.7	42.7	38.2	36.1	34.6
	全く感じない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	34.9	31.2	29.3	34.9	31.8	34.6
男は男らしく、女は女らしくするほうがよい	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.3	0.3	0.0	0.3	0.4
	非常に感じる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	21.3	7.6	8.3	9.2	19.3	17.5
	やや感じる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	38.6	26.0	32.0	30.0	33.1	33.1
	あまり感じない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	27.0	46.3	40.0	42.5	33.4	33.5
	全く感じない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	12.9	19.8	19.5	18.3	13.8	15.6
将来、親と同じレベルの生活を維持することは難しい	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.6	0.8	0.0	0.8	0.2
	非常に感じる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	10.5	8.5	7.2	6.8	11.6	10.8
	やや感じる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	33.2	27.8	23.5	30.4	33.3	32.2
	あまり感じない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	43.0	51.8	55.5	48.9	44.8	43.9
	全く感じない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	13.0	11.4	13.1	14.0	9.5	12.9
進路希望(現在)	無回答	1.2	0.4	0.4	0.4	2.0	5.0	2.7	2.7	3.6	3.0	5.6	0.4	0.6	0.0	0.0	1.3	0.4
	就職	23.9	16.0	0.0	3.2	60.4	18.0	11.9	0.5	1.0	6.6	42.6	17.1	9.6	0.0	0.4	6.5	38.2
	家事・家の手伝い	0.8	0.0	0.0	0.0	1.6	0.4	0.3	0.3	0.6	0.0	0.5	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.2
	専門学校・各種学校	6.1	8.6	0.8	5.2	14.8	11.9	19.5	1.9	4.8	23.2	25.8	9.4	19.5	0.0	3.5	20.1	25.4
	短期大学	0.6	9.7	0.0	7.6	3.6	2.8	12.1	0.0	2.8	15.2	8.5	2.3	8.1	0.4	0.0	8.5	8.6
	4年制大学（私立）	11.0	3.1	1.2	12.8	10.8	14.1	9.4	4.8	11.0	17.6	10.2	12.3	8.9	3.2	4.3	19.1	9.9
	4年制大学（国公立）	56.4	62.3	97.6	70.8	6.8	47.8	44.2	89.9	76.2	34.4	6.9	55.7	51.4	96.0	91.2	41.8	13.2
	その他	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.8	1.8	0.4	0.6	2.7	4.0
希望進路 (高校入学時)	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.7	0.0	0.2	1.3	0.7
	国公立大学	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	63.6	57.8	95.2	91.6	54.4	16.0
	私立大学	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.6	4.7	2.4	2.9	7.8	5.9
	短期大学	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	6.3	0.0	0.6	6.0	6.6
	専門学校・各種学校	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.4	17.2	1.1	3.1	18.0	23.0
	家事・手伝い	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0
	就職	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	18.3	11.5	0.0	1.0	9.3	43.4
	フリーター	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.3	0.0	0.0	0.5	1.5
	その他	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.5	1.5	1.3	0.6	2.5	2.9
自宅から通えること	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.2	0.0	0.4	0.2	0.0
	とてもあてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.6	12.8	3.5	7.2	17.1	22.4
	まああてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	23.9	25.7	12.3	17.0	30.9	34.0
	あまりあてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	29.1	29.7	33.3	33.9	26.5	25.7
	全然あてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	32.3	31.6	50.9	41.5	25.3	17.8

		1979年					1997年					2009年						
		性別		トラック			性別		トラック			性別		トラック				
		男	女	トップ校	セカンド校	専門校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門校
	N	493	257	250	250	250	1025	1087	375	500	625	625	968	1027	375	487	601	544
家族に経済的な負担をかけないこと	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.2	0.3	0.4	0.3	0.7
	とてもあてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	33.1	36.3	24.5	33.1	39.4	37.7
	まああてはまる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	46.3	48.7	52.3	46.6	45.4	48.0
	あまりあてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	13.5	10.6	16.3	15.4	9.2	9.2
	全然あてはまらない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.4	4.2	6.7	4.5	5.7	4.4
進学に際して重視すること	難関大学・難関学部に進学したい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	25.7	17.8	63.9	22.8	5.4	4.8
	そんなにレベルは高くないが、どうしても入りたい学部や学校がある	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	28.3	33.1	24.1	29.5	33.3	35.2	29.2	38.4	31.6	32.7	35.7	35.4
	将来何をやりたいかわからないが、とりあえず進学しておきたい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	41.6	31.5	34.4	42.8	29.4	40.0	52.2	37.8	51.1	49.5	41.4	36.9
	あくせく勉強しないでも、どこかに入学できればよい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	10.5	8.8	5.7	8.7	11.7	11.6	9.6	6.5	5.1	5.0	8.9	12.6
	偏差値よりも学校の個性を見て選びたい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	25.3	29.1	26.0	29.3	25.1	29.3	20.6	26.6	22.5	19.7	21.3	34.8
	一流といわれる大学には、努力しても入れないと思う	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	25.8	34.3	20.1	35.3	34.9	26.6	27.4	31.8	17.0	31.1	35.2	28.5
	学部にはとらわれずとにかく一流の大学に入っておきたい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.2	2.3	6.5	4.4	3.0	2.7	6.0	2.0	9.7	3.7	1.8	3.0
	本当の勝負は、高校入試ではなくて大学入試だと思う	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	35.8	36.5	55.0	47.0	31.3	8.7	44.8	46.0	68.3	61.9	34.3	18.0
	できれば推薦で進学したい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	41.6	46.6	16.0	38.5	54.9	66.3	29.1	40.2	8.8	17.0	45.2	64.3
	大学を目指すとしても推薦入試や入試でなければ受験できない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.9	7.6	1.2	0.8	8.9	15.9
奨学金を受けられることが条件だ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	11.0	15.0	10.0	12.2	12.5	18.6	
安定感があること	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.2	0.3	0.6	0.7	0.4
	とても重視する	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	47.4	46.2	42.7	42.7	48.3	51.1
	やや重視する	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	43.5	47.7	49.3	48.9	44.4	42.1
	あまり重視しない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.2	5.4	5.3	7.0	5.7	5.1
	全然重視しない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.1	0.6	2.4	0.8	1.0	1.3
社会的地位が高いこと	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.4	0.0	0.6	0.8	0.6
	とても重視する	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.4	7.4	14.4	9.2	10.6	9.9
	やや重視する	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	41.6	39.0	42.1	40.5	37.8	41.5
	あまり重視しない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	36.4	47.5	38.7	42.7	44.3	41.4
	全然重視しない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.9	5.6	4.8	7.0	6.5	6.6
社会の役に立つこと	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.3	0.0	0.4	0.7	0.7
	とても重視する	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	28.1	23.0	30.7	22.2	24.0	26.1
	やや重視する	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	46.1	52.7	48.8	55.0	49.8	45.2
	あまり重視しない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	19.1	21.5	19.2	18.9	21.1	21.3
	全然重視しない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.0	2.5	1.3	3.5	4.5	6.6
自分の趣味・関心をいかせること	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.1	0.0	0.2	0.5	0.6
	とても重視する	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	49.4	54.8	52.8	49.5	54.4	51.7
	やや重視する	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	40.8	39.4	40.8	43.1	38.4	39.0
	あまり重視しない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.5	5.2	6.1	6.2	6.0	6.8
	全然重視しない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7	0.5	0.3	1.0	0.7	2.0
高い収入が得られること	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.2	0.3	0.6	0.7	0.4
	とても重視する	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	34.2	23.4	21.9	26.9	30.4	32.5
	やや重視する	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	50.4	60.1	60.5	58.9	55.1	49.4
	あまり重視しない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	12.3	15.5	14.9	12.9	12.3	15.8
	全然重視しない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.3	0.9	2.4	0.6	1.5	1.8

		1979年					1997年					2009年							
		性別		トラック			性別		トラック			性別		トラック					
		男	女	トップ校	セカンド校	専門学校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門学校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門学校	
	N	493	257	250	250	250	1025	1087	375	500	625	625	968	1027	375	487	601	544	
専門的な技能・技術がいかせること	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.1	0.3	0.6	0.5	0.4	
	とても重視する	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	23.5	23.1	23.2	19.5	22.1	27.8	
	やや重視する	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	45.8	45.8	45.9	44.8	46.1	46.5	
	あまり重視しない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	25.6	28.0	28.3	30.4	28.8	20.6	
	全然重視しない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.3	3.0	2.4	4.7	2.5	4.8	
将来の就職希望地域	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.9	2.2	4.5	2.1	2.0	2.4	
	自宅から通える範囲の県内	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	33.6	29.1	14.9	21.4	33.9	48.5	
	自宅からは通えないが県内	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	9.5	10.2	7.5	8.6	11.6	10.7	
	近隣の都道府県	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	18.2	20.2	17.1	28.3	17.5	14.5	
	東京を中心とする首都圏	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	16.9	18.0	29.6	20.3	13.6	10.8	
	名古屋を中心とする中京圏	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.4	5.6	5.9	7.0	6.2	4.8	
	大阪を中心とする京阪神圏	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.8	9.8	11.5	5.1	9.2	4.4	
	仙台圏	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.4	1.3	0.8	0.2	0.0	
	上記1～7以外の日本国内	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.3	2.8	4.8	4.5	4.3	2.8	
	海外	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.9	1.7	2.9	1.8	1.5	1.1	
父親職業	無回答	4.7	3.5	1.6	4.0	7.2	18.0	11.5	10.1	14.2	15.4	17.1	18.7	21.3	10.4	15.4	33.8	16.0	
	専門的・技術的な仕事（医師・技術者・教員・住職など）	12.4	11.3	19.2	11.6	5.2	18.1	14.8	24.5	14.8	16.2	13.6	20.1	15.7	27.5	19.1	12.6	15.4	
	管理的な仕事（役所や会社で課長以上の役職に就いている人）	14.8	19.8	22.0	18.0	9.6	14.6	15.8	25.9	21.2	13.3	6.1	15.4	13.3	22.4	19.1	10.8	8.8	
	事務的な仕事（役所や会社、商店などで事務的な仕事をしている人）	13.2	16.7	15.2	17.6	10.4	10.6	11.2	9.9	15.6	10.1	8.6	9.1	10.4	11.7	11.5	9.0	7.7	
	販売関係の仕事（店員、セールスマン、外交職員など）	6.1	7.0	5.6	7.2	6.4	4.5	8.0	5.6	6.4	6.1	6.7	4.9	3.6	3.2	3.9	3.0	6.4	
	農林漁業	5.1	3.5	4.4	2.4	6.8	1.0	1.1	1.1	0.4	1.3	1.3	0.9	1.0	0.8	1.2	1.2	0.6	
	自営商工業（小売店主や、工場経営者など）	12.8	11.7	10.4	14.4	12.4	7.1	7.9	5.6	6.2	9.1	8.2	5.8	7.9	5.6	8.0	4.8	9.0	
	運輸・通信従業者（運転手、郵便配達、鉄道関係など）	6.3	3.5	4.0	4.4	7.6	3.8	5.9	4.0	4.2	5.4	5.3	5.7	4.4	4.3	4.1	6.3	4.8	
	技術工・労務関係の仕事（工員、または大工、左官などの職人及びサービス関係の仕事（理髪師、ホテル・旅館の従業員など）	23.3	18.7	15.6	18.0	31.6	16.0	17.0	10.1	11.8	15.8	24.6	11.4	13.5	8.5	10.5	12.0	17.5	
	専業主婦・主夫	1.4	4.3	2.0	2.4	2.8	2.9	3.4	2.1	2.6	3.0	4.5	1.5	1.1	1.1	1.8	0.7	1.7	
	父（母）はいない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.3	0.3	0.2	0.0	0.4	
	その他	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.2	3.3	1.1	2.6	4.3	4.0	2.9	3.2	2.1	2.7	3.0	4.0
	母親職業	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	19.4	19.8	9.1	15.2	33.4	15.8
		専門的・技術的な仕事（医師・技術者・教員・住職など）	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	17.7	18.6	24.3	22.2	14.5	14.2
管理的な仕事（役所や会社で課長以上の役職に就いている人）		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	1.5	1.6	1.0	1.0	1.1	
事務的な仕事（役所や会社、商店などで事務的な仕事をしている人）		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	18.8	19.3	24.5	22.0	16.0	15.8	
販売関係の仕事（店員、セールスマン、外交職員など）		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.8	7.6	3.5	7.6	7.8	12.3	
農林漁業		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.2	0.2	
自営商工業（小売店主や、工場経営者など）		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.8	4.4	2.9	3.1	2.7	5.5	
運輸・通信従業者（運転手、郵便配達、鉄道関係など）		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.6	0.0	0.4	0.7	1.3	
技術工・労務関係の仕事（工員、または大工、左官などの職人及びサービス関係の仕事（理髪師、ホテル・旅館の従業員など）		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.0	2.7	3.2	2.3	3.3	4.8	
専業主婦・主夫		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	11.6	10.3	16.5	14.2	6.0	9.6	
父（母）はいない		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	1.3	1.1	0.6	1.0	1.3	
その他		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.1	8.4	6.9	5.5	8.2	9.9	

		1979年					1997年					2009年						
		性別		トラック			性別		トラック			性別		トラック				
		男	女	トップ校	セカンド校	専門学校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門学校	男	女	トップ校	セカンド校	サード校	専門学校
	N	493	257	250	250	250	1025	1087	375	500	625	625	968	1027	375	487	601	544
父親学歴	無回答	3.2	3.1	0.8	3.2	5.6	7.3	4.0	1.3	4.4	5.3	9.4	17.8	17.3	7.7	11.3	33.4	12.5
	中学校	27.4	26.1	19.2	24.4	37.2	6.5	6.9	2.4	3.2	6.4	12.5	1.2	2.6	0.5	1.6	2.2	3.1
	高等学校	45.0	43.2	42.8	47.2	43.2	42.3	45.7	31.2	41.4	46.4	51.2	34.3	31.5	20.8	30.4	30.9	44.9
	短大、各種・専門学校、高専	1.0	3.1	1.2	2.4	1.6	7.8	8.3	7.5	7.2	8.8	8.6	8.9	8.9	8.3	8.0	9.5	9.4
	大学、大学院	20.7	22.6	35.2	20.4	8.4	32.4	32.4	55.7	42.0	29.8	13.4	33.8	35.2	61.1	46.2	20.1	21.9
	その他	0.8	0.0	0.0	0.8	0.8	1.6	0.6	0.5	0.2	1.1	1.9	1.2	0.6	0.0	0.2	1.2	1.8
	父（母）はいない	1.8	1.9	0.8	1.6	3.2	2.0	2.2	1.3	1.6	2.2	2.9	2.8	3.9	1.6	2.3	2.7	6.4
母親学歴	無回答	3.0	1.9	0.8	2.4	4.8	7.7	3.3	1.3	4.2	5.3	9.1	17.7	16.6	8.0	11.9	31.9	11.8
	中学校	33.3	28.8	24.8	26.0	44.4	2.9	3.7	1.6	1.8	2.9	5.9	1.0	1.3	0.0	0.8	1.0	2.6
	高等学校	52.5	54.1	56.8	58.8	43.6	51.8	52.5	42.7	49.2	52.6	59.5	37.7	38.1	26.9	35.7	34.9	50.4
	短大、各種・専門学校、高専	3.0	5.4	6.8	3.2	1.6	21.6	26.8	28.0	26.6	28.3	16.2	23.5	26.4	28.8	29.8	20.3	23.3
	大学、大学院	6.7	9.7	10.4	8.8	4.0	14.1	12.0	25.1	17.4	8.6	6.9	17.9	16.2	36.0	20.5	10.1	8.1
	その他	1.2	0.0	0.4	0.8	1.2	1.3	1.1	0.5	0.6	1.6	1.6	1.7	0.7	0.0	0.8	1.0	2.4
	父（母）はいない	0.2	0.0	0.0	0.0	0.4	0.6	0.6	0.8	0.2	0.6	0.8	0.6	0.9	0.3	0.4	0.7	1.4

Appendix4 : 専門学科調査の基礎集計表

	普通科	商業に 関する学科	工業に 関する学科	農業に 関する学科	水産に 関する学科	その他・ 総合学科	その他・ 福祉関係	全体
N	834	235	424	254	88	98	39	1972
性別								
男子	41.0	28.1	88.8	32.8	60.2	52.0	2.6	49.3
女子	59.0	71.9	11.2	67.2	39.8	48.0	97.4	50.7
家庭での会話__学校の成績や授業のこと								
よく話す	18.7	19.2	10.4	10.3	7.0	12.4	30.8	15.3
時々話す	48.0	44.4	47.8	49.0	34.9	40.2	43.6	46.6
あまり話さない	27.4	30.8	30.7	34.4	31.4	35.1	20.5	29.9
全く話さない	5.9	5.6	11.1	6.3	26.7	12.4	5.1	8.3
家庭での会話__先生のこと								
よく話す	8.7	8.5	5.0	7.9	4.6	6.2	23.1	7.7
時々話す	32.3	27.4	27.3	27.2	20.7	22.7	35.9	29.0
あまり話さない	42.8	43.2	40.5	45.3	43.7	50.5	35.9	43.0
全く話さない	16.2	20.9	27.3	19.7	31.0	20.6	5.1	20.3
家庭での会話__友だちのこと								
よく話す	28.9	32.9	17.3	23.2	21.8	24.7	56.4	26.2
時々話す	42.0	45.7	50.0	47.6	39.1	33.0	28.2	44.0
あまり話さない	22.1	16.2	21.8	23.2	23.0	32.0	15.4	21.9
全く話さない	7.0	5.1	10.9	5.9	16.1	10.3		7.9
家庭での会話__あそびやしゅみのこと								
よく話す	23.1	26.4	18.4	19.3	19.8	21.4	47.4	22.2
時々話す	34.8	34.9	34.5	41.7	23.3	33.7	23.7	34.9
あまり話さない	31.6	31.5	35.2	31.5	31.4	28.6	23.7	32.1
全く話さない	10.5	7.2	11.8	7.5	25.6	16.3	5.3	10.9
家庭での会話__社会のできごと								
よく話す	11.9	7.7	9.0	7.9	11.9	7.3	10.3	10.0
時々話す	35.7	28.8	30.3	27.4	21.4	26.0	30.8	31.5
あまり話さない	37.8	45.9	40.3	48.4	34.5	44.8	48.7	41.1
全く話さない	14.6	17.6	20.4	16.3	32.1	21.9	10.3	17.4
家庭での会話__自分のなやみごと								
よく話す	7.6	6.4	3.8	6.7	11.8	5.3	10.3	6.6
時々話す	20.0	21.5	18.0	20.9	9.4	18.9	28.2	19.5
あまり話さない	43.9	36.1	38.8	46.6	25.9	36.8	43.6	41.1
全く話さない	28.5	36.1	39.5	25.7	52.9	38.9	17.9	32.8

	普通科	商業に 関する学科	工業に 関する学科	農業に 関する学科	水産に 関する学科	その他・ 総合学科	その他・ 福祉関係	全体
N	834	235	424	254	88	98	39	1972
家庭での会話__将来の仕事のこと								
よく話す	17.3	20.1	13.7	16.9	20.7	21.4	30.8	17.5
時々話す	43.1	43.2	45.2	49.6	27.6	34.7	48.7	43.4
あまり話さない	30.1	30.3	29.3	27.2	27.6	31.6	17.9	29.3
全く話さない	9.4	6.4	11.8	6.3	24.1	12.2	2.6	9.8
生活習慣__朝、自分でおきる								
毎日する	36.3	45.5	35.4	37.4	55.2	44.9	30.8	38.5
だいたいする	35.5	28.9	37.7	33.1	24.1	20.4	46.2	33.8
あまりしない	21.9	17.9	21.9	23.6	18.4	25.5	17.9	21.6
全くしない	6.2	7.7	5.0	5.9	2.3	9.2	5.1	6.0
生活習慣__朝食を食べる								
毎日する	76.6	79.1	71.4	65.4	56.3	54.1	66.7	72.1
だいたいする	15.0	11.9	14.7	21.7	16.1	20.4	17.9	15.8
あまりしない	5.2	6.0	6.4	9.4	14.9	16.3	7.7	7.1
全くしない	3.2	3.0	7.6	3.5	12.6	9.2	7.7	5.0
生活習慣__朝、歯をみがく								
毎日する	85.1	89.8	78.8	84.3	74.7	80.6	87.2	83.6
だいたいする	10.1	7.2	13.2	11.8	13.8	11.2	10.3	10.9
あまりしない	3.6	1.7	5.7	2.4	5.7	7.1	2.6	3.9
全くしない	1.2	1.3	2.4	1.6	5.7	1.0		1.7
生活習慣__「いってきます」「ただいま」のあいさつをする								
毎日する	62.3	70.6	55.3	54.7	41.4	53.1	59.0	59.4
だいたいする	23.2	15.7	21.6	29.1	34.5	18.4	20.5	22.9
あまりしない	9.7	8.5	14.5	11.0	11.5	20.4	12.8	11.4
全くしない	4.8	5.1	8.6	5.1	12.6	8.2	7.7	6.3
生活習慣__前の日に学校の用意をする								
毎日する	28.7	35.3	23.3	25.6	17.2	23.7	23.1	27.1
だいたいする	33.2	25.5	20.7	30.7	25.3	24.7	28.2	28.4
あまりしない	24.4	25.1	28.1	28.0	25.3	18.6	41.0	25.8
全くしない	13.8	14.0	27.9	15.7	32.2	33.0	7.7	18.7

	普通科	商業に 関する学科	工業に 関する学科	農業に 関する学科	水産に 関する学科	その他・ 総合学科	その他・ 福祉関係	全体
N	834	235	424	254	88	98	39	1972
生活習慣__きまった時間にねる								
毎日する	7.2	8.9	6.6	9.8	9.2	10.2	5.1	7.8
だいたいする	31.5	28.9	28.1	27.2	19.5	17.3	33.3	28.7
あまりしない	42.1	33.6	37.5	34.6	32.2	33.7	35.9	38.1
全くしない	19.2	28.5	27.8	28.3	39.1	38.8	25.6	25.3
経済資本								
テレビ	34.6	43.4	55.1	46.9	64.4	54.1	48.7	44.2
テレビゲーム	40.8	43.4	68.8	38.2	57.5	44.9	28.2	47.5
パソコン	26.8	34.9	31.7	24.8	32.2	18.4	15.4	28.1
携帯電話・PHS	96.9	99.1	96.9	97.2	94.3	89.8	100.0	96.8
勉強机	86.1	77.4	72.3	75.6	58.6	46.9	61.5	77.1
自分だけの部屋	84.2	87.2	80.9	82.3	78.2	69.4	71.8	82.3
家の人はテレビのニュース番組をみる								
とてもあてはまる	56.5	58.5	49.3	44.4	45.9	51.0	56.4	52.7
まああてはまる	35.9	33.8	39.6	50.0	35.3	31.6	35.9	38.1
あまりあてはまらない	6.3	6.8	9.0	4.8	15.3	12.2	5.1	7.5
全くあてはまらない	1.3	0.9	2.1	0.8	3.5	5.1	2.6	1.7
家の人は私に「勉強しなさい」という								
とてもあてはまる	20.0	8.5	13.3	9.2	15.1	15.3	7.7	14.8
まああてはまる	30.2	29.5	30.6	29.5	26.7	24.5	28.2	29.6
あまりあてはまらない	33.3	36.3	37.2	41.4	31.4	32.7	41.0	35.7
全くあてはまらない	16.5	25.6	19.0	19.9	26.7	27.6	23.1	19.9
家の人に勉強をみてもらうことがある								
とてもあてはまる	1.4	2.1	1.2	2.4	2.3	2.0		1.6
まああてはまる	7.3	7.7	5.2	6.0	4.7	11.2	7.7	6.8
あまりあてはまらない	20.6	17.1	19.7	25.5	15.1	23.5	41.0	20.9
全くあてはまらない	70.7	73.1	73.9	66.1	77.9	63.3	51.3	70.7
家の人が手作りのおかしをつくってくれる								
とてもあてはまる	5.9	6.0	3.8	7.6	3.5	4.1	7.7	5.5
まああてはまる	19.7	22.3	20.1	20.7	12.9	19.4	20.5	20.0
あまりあてはまらない	30.7	32.2	33.6	33.9	22.4	31.6	28.2	31.6
全くあてはまらない	43.7	39.5	42.4	37.8	61.2	44.9	43.6	42.9

	普通科	商業に 関する学科	工業に 関する学科	農業に 関する学科	水産に 関する学科	その他・ 総合学科	その他・ 福祉関係	全体
N	834	235	424	254	88	98	39	1972
小さいとき、家の人に絵本を読んでもらった								
とてもあてはまる	36.1	39.1	20.9	30.9	17.4	20.4	50.0	30.8
まああてはまる	32.5	33.5	33.3	33.7	22.1	25.5	28.9	32.0
あまりあてはまらない	21.4	21.0	31.1	26.9	29.1	33.7	13.2	25.2
全くあてはまらない	10.0	6.4	14.7	8.4	31.4	20.4	7.9	12.0
家の人に博物館や美術館に連れていってもらったことがある								
とてもあてはまる	11.8	13.3	9.2	6.4	5.8	8.2	5.1	10.1
まああてはまる	24.8	19.3	20.4	18.5	10.5	10.2	23.1	20.8
あまりあてはまらない	27.2	30.0	32.0	28.9	23.3	27.6	23.1	28.6
全くあてはまらない	36.1	37.3	38.4	46.2	60.5	54.1	48.7	40.5
家の人にはスポーツ新聞を読む								
とてもあてはまる	11.5	16.7	16.1	14.0	19.8	16.3	12.8	14.2
まああてはまる	13.9	16.2	19.4	16.8	14.0	17.3	17.9	16.1
あまりあてはまらない	28.4	20.9	25.4	22.4	19.8	24.5	17.9	25.1
全くあてはまらない	46.3	46.2	39.1	46.8	46.5	41.8	51.3	44.6
家の人にはパチンコに行くことがある								
とてもあてはまる	10.0	10.7	10.9	11.6	16.3	16.3	10.3	11.2
まああてはまる	14.1	12.4	17.5	13.9	15.1	12.2	20.5	14.7
あまりあてはまらない	7.3	13.3	11.4	9.6	12.8	13.3	5.1	9.8
全くあてはまらない	68.5	63.5	60.2	64.9	55.8	58.2	64.1	64.3
家には本がたくさんある（マンガを除く）								
とてもあてはまる	19.2	17.5	11.9	12.0	19.8	12.2	28.2	16.2
まああてはまる	32.9	28.6	24.0	32.3	18.6	21.4	23.1	28.7
あまりあてはまらない	33.9	38.0	40.2	34.7	36.0	35.7	35.9	36.2
全くあてはまらない	14.1	15.8	23.8	21.1	25.6	30.6	12.8	18.9
お兄さんやお姉さんがいる								
あてはまる	50.4	54.0	61.4	64.2	64.4	64.0	40.5	55.9
あてはまらない	49.6	46.0	38.6	35.8	35.6	36.0	59.5	44.1
保護者の学歴期待								
進学することを強く希望している	42.5	15.2	3.8	4.0	2.4	13.5	12.8	22.2
どちらかといえば進学することを希望している	23.1	16.5	6.9	9.3	7.1	17.7	23.1	16.1
どちらかといえば就職することを希望している	5.7	23.4	26.6	23.9	22.4	21.9	17.9	16.4
就職することを強く希望している	3.0	10.0	27.3	18.2	34.1	15.6	7.7	13.1
あなたの判断のみに委ねている	25.6	35.1	35.4	44.5	34.1	31.3	38.5	32.2

	普通科	商業に 関する学科	工業に 関する学科	農業に 関する学科	水産に 関する学科	その他・ 総合学科	その他・ 福祉関係	全体
N	834	235	424	254	88	98	39	1972
学習日数								
ほとんど毎日	20.4	5.7	2.0	0.8	4.7	2.4		10.2
週に4～5日	19.0	6.1	3.5		1.2	6.1	10.3	10.1
週に2～3日	26.5	32.9	17.2	12.5	14.0	12.2	23.1	22.2
ほとんどしない	34.1	55.3	77.4	86.7	80.2	79.3	66.7	57.4
生活時間__家で勉強する								
ほとんどしない	32.6	48.3	72.0	82.4	77.0	76.5	64.1	54.1
15分まで	3.6	7.7	5.2	5.2	10.3	8.2	5.1	5.2
30分まで	10.2	13.2	8.6	4.8	4.6	6.1	12.8	9.1
1時間まで	23.7	18.8	7.8	7.2	3.4	8.2	7.7	15.6
2時間まで	20.8	10.7	5.0	0.4			5.1	11.3
3時間まで	7.8	0.4	0.5		1.1			3.5
3時間以上	1.2	0.9	1.0		3.4	1.0	5.1	1.1
生活時間__テレビをみる								
ほとんどしない	8.3	8.1	7.1	7.2	11.6	12.4	10.3	8.3
15分まで	1.9	0.4	1.4	2.0	3.5	2.1	2.6	1.7
30分まで	6.1	5.1	4.0	4.0	3.5	4.1	2.6	5.0
1時間まで	21.1	18.4	16.4	12.4	18.6	9.3	10.3	17.7
2時間まで	28.6	20.5	30.6	23.7	12.8	20.6	10.3	26.0
3時間まで	16.5	18.8	16.9	19.7	12.8	14.4	23.1	17.1
3時間以上	17.5	28.6	23.5	30.9	37.2	37.1	41.0	24.1
生活時間__テレビゲームをする								
ほとんどしない	72.4	76.1	44.9	69.9	48.8	56.1	89.7	65.1
15分まで	1.3	2.1	1.4	2.0	4.7	6.1		1.9
30分まで	4.1	4.7	6.4	7.6	5.8	3.1	2.6	5.1
1時間まで	9.9	7.7	15.3	10.8	14.0	11.2	2.6	11.0
2時間まで	6.2	3.8	16.9	3.6	7.0	11.2		8.1
3時間まで	2.2	2.1	4.3	3.6	1.2	1.0		2.7
3時間以上	3.9	3.4	10.7	2.4	18.6	11.2	5.1	6.2

	普通科	商業に 関する学科	工業に 関する学科	農業に 関する学科	水産に 関する学科	その他・ 総合学科	その他・ 福祉関係	全体
N	834	235	424	254	88	98	39	1972
生活時間__友だちと外で遊ぶ								
ほとんどしない	70.1	61.1	47.7	55.4	38.1	33.3	55.3	58.8
15分まで	1.6	2.1	1.9	1.2		7.3	2.6	1.9
30分まで	2.9	2.1	2.4	2.0	4.8	3.1		2.6
1時間まで	5.2	3.8	8.9	7.2	7.1	6.3	7.9	6.3
2時間まで	4.6	5.6	9.4	8.4	9.5	10.4	10.5	6.8
3時間まで	5.3	5.1	7.7	5.2	1.2	8.3		5.7
3時間以上	10.3	20.1	22.1	20.5	39.3	31.3	23.7	17.9
生活時間__マンガや雑誌をよむ								
ほとんどしない	31.4	23.8	22.8	31.1	23.3	30.2	31.6	28.2
15分まで	9.0	11.1	7.6	11.6	5.8	9.4	5.3	9.1
30分まで	17.7	19.1	14.0	13.5	18.6	12.5	21.1	16.4
1時間まで	25.2	27.2	28.5	22.7	16.3	24.0	26.3	25.4
2時間まで	10.4	8.5	15.7	13.5	16.3	11.5	10.5	12.0
3時間まで	2.4	5.5	3.6	4.8	1.2	2.1	2.6	3.3
3時間以上	3.9	4.7	7.8	2.8	18.6	10.4	2.6	5.6
生活時間__読書（マンガ・雑誌をのぞく）をする								
ほとんどしない	65.0	62.8	69.0	76.0	51.7	72.4	71.8	66.9
15分まで	8.2	7.7	7.3	6.0	11.5	5.1	5.1	7.6
30分まで	10.1	12.8	7.3	4.8	9.2	5.1	10.3	8.9
1時間まで	8.8	9.0	7.8	6.4	4.6	8.2	5.1	8.0
2時間まで	4.7	4.7	3.3	2.8	5.7	7.1	7.7	4.4
3時間まで	1.4	1.3	2.8	1.6	3.4			1.7
3時間以上	1.7	1.7	2.4	2.4	13.8	2.0		2.5
中学3年時の成績								
平均値	7.1	6.5	5.3	5.4	3.3	3.7	5.7	6.1
標準偏差	2.1	2.1	1.9	2.0	2.0	1.9	2.1	2.3
現在の成績								
平均値	4.8	5.3	5.5	5.3	5.2	5.0	5.1	5.1
標準偏差	2.3	2.4	2.4	2.5	2.8	2.3	2.3	2.4
専門科目の成績								
平均値	—	5.7	5.6	5.8	5.4	3.9	5.4	5.5
標準偏差	—	2.5	2.3	2.4	3.0	1.8	2.4	2.4

	普通科	商業に 関する学科	工業に 関する学科	農業に 関する学科	水産に 関する学科	その他・ 総合学科	その他・ 福祉関係	全体
N	834	235	424	254	88	98	39	1972
希望進路								
国公立四年制大学	47.9	12.1	2.6	0.8		4.2	5.1	22.8
私立四年制大学	14.8	18.2	2.9	1.6	1.2	4.2	7.7	9.7
短期大学	4.2	6.1	0.7	3.3	2.4	3.1	20.5	3.8
専門・各種学校	11.0	16.9	9.7	18.8	18.8	19.8	20.5	13.4
就職	7.1	27.3	61.8	50.6	50.6	40.6	25.6	30.8
家業を継ぐ	0.4		1.4	0.4	2.4	2.1		0.7
成績次第	7.1	7.8	10.7	10.6	10.6	9.4	10.3	8.7
就職はしない	3.7	4.8	1.0	3.7		2.1	2.6	3.0
進学はしない	2.5	5.2	8.3	8.6	9.4	8.3	5.1	5.5
その他	1.2	1.7	1.0	1.6	4.7	6.3	2.6	1.7
入試方法								
一般受験	63.4	5.7	25.0	10.9	36.8	19.4		47.2
推薦後、不合格なら一般入試	34.9	82.8	51.6	74.5	47.4	64.5	71.4	46.3
推薦後、不合格なら就職	1.7	11.5	23.4	14.5	15.8	16.1	28.6	6.4
進学者の地域移動__1								
現在住んでいる地域	32.0	20.3	21.9	30.0	22.7	23.3	42.9	29.5
それ以外の地域	68.0	79.7	78.1	70.0	77.3	76.7	57.1	70.5
進学者の地域移動__2								
調査県内	10.5	5.9	6.3	9.5	7.7	18.2	25.0	10.0
名古屋方面	32.9	40.0	41.7	40.5	38.5	40.9	25.0	35.3
それ以外の東海地区	3.4	2.4	4.2	11.9	7.7			3.8
関西方面	25.9	35.3	18.8	31.0	23.1	4.5	25.0	26.1
首都圏方面	11.7	3.5	12.5			36.4	16.7	10.6
その他	2.7	3.5	4.2	4.8			8.3	3.0
どこでも良い	12.9	9.4	12.5	2.4	23.1			11.2
就職者の地域移動__1								
現在住んでいる地域	37.0	41.8	45.7	49.4	24.7	41.1	38.9	40.8
それ以外の地域	63.0	58.2	54.3	50.6	75.3	58.9	61.1	59.2

	普通科	商業に 関する学科	工業に 関する学科	農業に 関する学科	水産に 関する学科	その他・ 総合学科	その他・ 福祉関係	全体
N	834	235	424	254	88	98	39	1972
就職者の地域移動__ 2								
調査県内	14.4	15.8	24.2	25.0	14.3	11.5	38.1	18.0
名古屋方面	23.9	27.5	30.6	27.6	38.1	23.1	19.0	26.8
それ以外の東海地区	1.6	0.8	3.2	3.4	3.2			2.0
関西方面	18.8	20.8	4.6	13.8	14.3	15.4	23.8	15.2
首都圏方面	14.0	10.8	8.7	6.0	3.2	17.3	4.8	11.1
その他	3.3	2.5	1.4	3.4	3.2	1.9	4.8	2.8
どこでも良い	23.9	21.7	27.4	20.7	23.8	30.8	9.5	24.1
老後の居住地__ 1								
現在住んでいる地域	61.2	61.9	66.6	63.4	68.8	54.0	45.9	62.4
それ以外の地域	38.8	38.1	33.2	36.6	31.2	46.0	54.1	37.6
老後の居住地__ 2								
調査県内	15.9	20.0	21.4	23.5	29.2	15.0	20.0	19.0
名古屋方面	8.6	8.8	9.2	8.2	12.5	5.0	5.0	8.5
それ以外の東海地区	2.8	2.5	0.8	1.2	4.2	2.5		2.1
関西方面	12.1	15.0	5.3	11.8	12.5	12.5	35.0	11.8
首都圏方面	4.5	1.3	7.6	8.2		12.5		5.4
その他	15.9	20.0	8.4	17.6	4.2	12.5	25.0	14.8
どこでも良い	40.3	32.5	47.3	29.4	37.5	40.0	15.0	38.5
今住んでいる地域を出て、大都市での暮らしを経験してみたい								
そう思う	30.6	41.7	28.9	27.0	28.4	37.0	23.1	31.2
ややそう思う	32.2	28.3	23.7	36.9	33.0	16.3	35.9	29.8
どちらともいえない	16.2	10.9	22.7	20.1	15.9	18.5	17.9	17.6
あまりそう思わない	14.9	13.0	14.8	7.8	10.2	17.4	15.4	13.7
そう思わない	6.2	6.1	9.8	8.2	12.5	10.9	7.7	7.8
今住んでいる地域のために、何か役立ちたい								
そう思う	12.0	11.8	7.0	10.7	17.2	6.6	7.7	10.6
ややそう思う	27.4	21.5	20.0	31.0	20.7	16.5	35.9	24.9
どちらともいえない	36.6	34.2	39.0	40.9	27.6	36.3	35.9	37.0
あまりそう思わない	17.0	20.2	22.2	11.6	17.2	26.4	15.4	18.2
そう思わない	7.1	12.3	11.8	5.8	17.2	14.3	5.1	9.3

	普通科	商業に 関する学科	工業に 関する学科	農業に 関する学科	水産に 関する学科	その他・ 総合学科	その他・ 福祉関係	全体
N	834	235	424	254	88	98	39	1972
今住んでいる地域が好きである								
そう思う	39.7	46.1	35.1	47.3	42.5	35.5	41.0	40.4
ややそう思う	33.6	30.2	34.9	28.8	21.8	19.4	25.6	31.5
どちらともいえない	18.7	15.1	22.1	18.1	18.4	28.0	12.8	19.2
あまりそう思わない	4.8	5.2	3.6	3.3	6.9	7.5	17.9	4.9
そう思わない	3.3	3.4	4.3	2.5	10.3	9.7	2.6	4.0
家族関係__親が高齢になったらできれば一緒に暮らしたい								
そう思う	16.6	16.4	10.0	18.8	20.9	15.2	33.3	15.9
ややそう思う	30.1	28.4	23.6	30.2	24.4	25.0	30.8	28.0
どちらともいえない	39.5	37.1	43.9	36.7	29.1	39.1	23.1	39.0
あまりそう思わない	9.1	13.4	12.6	8.6	14.0	6.5	7.7	10.4
そう思わない	4.6	4.7	9.8	5.7	11.6	14.1	5.1	6.7
家族関係__自分の進路のことでは、なるべく親に経済的な負担をかけたくない								
そう思う	46.6	51.3	45.2	54.5	46.5	44.1	69.2	48.2
ややそう思う	35.5	28.6	36.0	33.7	29.1	22.6	28.2	33.5
どちらともいえない	15.0	14.1	15.0	8.9	16.3	21.5	2.6	14.2
あまりそう思わない	1.3	4.7	1.7	2.4	4.7	4.3		2.2
そう思わない	1.6	1.3	2.1	0.4	3.5	7.5		1.9
家族関係__歳をとった親の面倒をみるのは、子どもの義務だ								
そう思う	33.4	35.6	21.5	34.3	34.5	24.7	33.3	30.8
ややそう思う	38.1	37.3	42.0	35.1	24.1	26.9	38.5	37.3
どちらともいえない	22.9	20.2	27.9	24.9	25.3	32.3	12.8	24.3
あまりそう思わない	2.9	4.7	5.3	3.3	9.2	6.5	5.1	4.2
そう思わない	2.7	2.1	3.3	2.4	6.9	9.7	10.3	3.4
家族関係__きょうだいのうち一人は、親のもとに帰るべきだ								
そう思う	22.2	21.5	23.4	21.3	25.6	26.9	35.9	22.9
ややそう思う	24.5	22.3	23.6	23.8	23.3	19.4	17.9	23.5
どちらともいえない	35.7	36.5	38.7	41.4	26.7	33.3	15.4	36.2
あまりそう思わない	10.6	13.7	6.4	7.4	9.3	9.7	12.8	9.6
そう思わない	7.1	6.0	7.9	6.1	15.1	10.8	17.9	7.8

	普通科	商業に 関する学科	工業に 関する学科	農業に 関する学科	水産に 関する学科	その他・ 総合学科	その他・ 福祉関係	全体
N	834	235	424	254	88	98	39	1972
進路選択__自分の興味や関心								
とてもあてはまる	63.2	62.7	46.3	59.6	46.6	51.6	69.2	57.9
まああてはまる	30.9	31.8	43.9	33.9	37.5	33.3	30.8	34.6
あまりあてはまらない	5.2	4.7	8.6	6.1	14.8	8.6		6.5
全くあてはまらない	0.6	0.9	1.2	0.4	1.1	6.5		1.0
進路選択__自分の成績								
とてもあてはまる	46.5	45.1	37.2	36.6	34.1	33.3	33.3	41.6
まああてはまる	42.0	45.5	47.0	45.9	44.3	36.6	56.4	44.1
あまりあてはまらない	10.2	9.0	12.5	15.4	18.2	23.7	7.7	12.2
全くあてはまらない	1.3	0.4	3.4	2.0	3.4	6.5	2.6	2.1
進路選択__家庭の状況								
とてもあてはまる	28.2	27.9	20.2	21.5	27.6	23.7	30.8	25.4
まああてはまる	43.5	39.9	42.4	43.1	34.5	34.4	51.3	42.1
あまりあてはまらない	23.4	26.6	28.2	29.7	27.6	34.4	15.4	26.2
全くあてはまらない	4.8	5.6	9.2	5.7	10.3	7.5	2.6	6.3
進路選択__現在の学校のコース								
とてもあてはまる	15.3	22.4	32.0	22.0	17.4	15.4	43.6	21.3
まああてはまる	29.6	34.5	42.9	42.3	27.9	17.6	43.6	34.3
あまりあてはまらない	36.5	29.3	18.1	25.6	37.2	44.0	7.7	30.1
全くあてはまらない	18.6	13.8	7.0	10.2	17.4	23.1	5.1	14.3
進路選択__将来の職業とのつながり								
とてもあてはまる	53.8	44.6	35.0	37.3	31.0	34.4	66.7	44.9
まああてはまる	32.9	36.8	46.6	42.2	34.5	31.2	28.2	37.4
あまりあてはまらない	11.2	17.3	16.2	17.2	25.3	24.7	5.1	14.9
全くあてはまらない	2.2	1.3	2.2	3.3	9.2	9.7		2.8
進路選択__進学する学校や職の地位が高いこと								
とてもあてはまる	15.3	13.5	11.3	7.4	12.8	16.1	2.6	12.9
まああてはまる	37.1	34.8	45.0	29.9	27.9	21.5	25.6	36.2
あまりあてはまらない	38.1	39.6	34.6	43.0	36.0	40.9	48.7	38.4
全くあてはまらない	9.5	12.2	9.1	19.7	23.3	21.5	23.1	12.5

	普通科	商業に 関する学科	工業に 関する学科	農業に 関する学科	水産に 関する学科	その他・ 総合学科	その他・ 福祉関係	全体
N	834	235	424	254	88	98	39	1972
進路選択__実家から近いこと								
とてもあてはまる	14.3	18.5	13.9	13.5	8.0	17.2	12.8	14.5
まああてはまる	26.0	22.0	30.0	27.9	26.4	17.2	33.3	26.4
あまりあてはまらない	36.5	29.3	39.3	37.7	35.6	36.6	25.6	36.1
全くあてはまらない	23.2	30.2	16.8	20.9	29.9	29.0	28.2	23.0
資格をたくさんとりたい								
とてもあてはまる	28.9	59.2	37.2	33.1	42.0	32.3	28.2	35.6
まああてはまる	43.1	29.2	42.5	48.0	39.8	34.4	51.3	41.5
あまりあてはまらない	25.1	9.9	16.7	16.5	12.5	22.6	17.9	19.5
全くあてはまらない	2.9	1.7	3.6	2.4	5.7	10.8	2.6	3.3
部活動への参加は、進路の決定に役立つと思う								
とてもあてはまる	27.5	45.9	37.1	37.0	37.9	33.7	36.8	33.9
まああてはまる	37.3	36.1	42.9	43.1	36.8	29.3	36.8	38.7
あまりあてはまらない	28.7	13.7	13.8	16.7	18.4	26.1	15.8	21.3
全くあてはまらない	6.5	4.3	6.2	3.3	6.9	10.9	10.5	6.1
高校に入ってから、中学のときよりも勉強に自信が持てるようになった								
とてもあてはまる	6.4	10.3	12.6	11.7	20.5	18.3	15.4	10.3
まああてはまる	18.2	24.0	28.9	33.2	31.8	30.1	28.2	24.5
あまりあてはまらない	43.6	39.5	41.1	36.4	34.1	36.6	43.6	40.9
全くあてはまらない	31.8	26.2	17.4	18.6	13.6	15.1	12.8	24.3
服装や行動が乱れで、この高校のイメージが悪くなると自分たちの進路が不利になると思う								
とてもあてはまる	18.6	37.3	37.6	27.1	31.8	33.3	35.9	27.7
まああてはまる	38.8	45.9	38.6	45.3	39.8	30.1	46.2	40.2
あまりあてはまらない	33.4	11.6	18.1	23.5	22.7	24.7	12.8	24.9
全くあてはまらない	9.2	5.2	5.7	4.0	5.7	11.8	5.1	7.2
高校を選ぶ時に、この高校の大学推薦枠に魅力を感じた								
とてもあてはまる	2.8	10.7	2.9	0.4	6.9	8.6	7.7	4.0
まああてはまる	11.0	17.2	9.3	9.3	14.9	15.1	7.7	11.4
あまりあてはまらない	44.2	42.1	35.7	44.5	35.6	46.2	43.6	41.9
全くあてはまらない	42.0	30.0	52.1	45.7	42.5	30.1	41.0	42.7

	普通科	商業に 関する学科	工業に 関する学科	農業に 関する学科	水産に 関する学科	その他・ 総合学科	その他・ 福祉関係	全体
N	834	235	424	254	88	98	39	1972
これまでの卒業生が築き上げてきた進路実績を自分たちで壊したくない								
とてもあてはまる	15.4	30.5	27.1	15.3	46.0	18.3	35.9	21.6
まああてはまる	36.8	33.0	42.9	45.6	28.7	26.9	53.8	38.3
あまりあてはまらない	33.9	25.8	21.2	31.5	19.5	37.6	7.7	28.9
全くあてはまらない	13.9	10.7	8.8	7.7	5.7	17.2	2.6	11.2
将来良い生活を送るために今たくさん勉強したい								
とてもあてはまる	17.4	16.7	9.3	10.5	15.9	20.4	10.3	14.6
まああてはまる	47.1	41.6	40.0	41.1	37.5	22.6	48.7	42.6
あまりあてはまらない	29.3	30.9	39.8	38.3	31.8	34.4	35.9	33.4
全くあてはまらない	6.2	10.7	11.0	10.1	14.8	22.6	5.1	9.4
専門科目の勉強は楽しいと感じる								
とてもあてはまる	—	22.6	20.4	28.5	25.0	20.0	39.5	23.3
まああてはまる	—	37.5	35.6	44.3	48.1	25.7	50.0	39.1
あまりあてはまらない	—	28.6	32.0	19.7	11.5	37.1	10.5	27.1
全くあてはまらない	—	11.3	12.1	7.5	15.4	17.1		10.5
高校を卒業した後も、もっと現在の専門領域について勉強したい								
とてもあてはまる	—	8.4	10.3	13.7	11.5	14.7	31.6	11.6
まああてはまる	—	25.1	26.3	30.8	30.8	23.5	39.5	28.2
あまりあてはまらない	—	35.9	41.5	37.0	30.8	47.1	18.4	38.1
全くあてはまらない	—	30.5	21.9	18.5	26.9	14.7	10.5	22.1
高卒後、進学するよりも自分の知識・技能を生かした職業に就きたい								
とてもあてはまる	—	21.6	32.7	27.3	30.8	17.1	31.6	28.3
まああてはまる	—	27.5	40.7	37.0	26.9	31.4	28.9	35.8
あまりあてはまらない	—	29.3	17.3	23.3	21.2	34.3	26.3	22.6
全くあてはまらない	—	21.6	9.3	12.3	21.2	17.1	13.2	13.3
高校への入学について								
積極的に希望していた	61.2	65.7	66.1	70.7	51.9	30.2	77.8	62.8
他の学校でもよかったが、 たまたまこの学校へ進学することになった	33.7	29.1	30.0	25.8	37.7	54.0	22.2	32.0
ほんとうは、この学校に進学しなかった	5.1	5.2	3.9	3.6	10.4	15.9		5.2

	普通科	商業に 関する学科	工業に 関する学科	農業に 関する学科	水産に 関する学科	その他・ 総合学科	その他・ 福祉関係	全体
N	834	235	424	254	88	98	39	1972
満足度__現在の成績								
満足している	3.8	5.2	6.7	6.9	8.0	9.8	5.1	5.5
どちらかといえば満足している	15.3	27.5	27.4	33.5	27.3	31.5	25.6	23.2
どちらかといえば満足していない	41.2	37.8	43.0	35.5	45.5	42.4	46.2	40.8
満足していない	39.8	29.6	22.9	24.2	19.3	16.3	23.1	30.6
満足度__学校の先生								
満足している	11.5	9.5	6.0	8.1	19.5	7.6	10.3	9.8
どちらかといえば満足している	48.5	43.5	48.2	44.4	35.6	38.0	64.1	46.5
どちらかといえば満足していない	28.8	29.3	30.3	31.9	29.9	33.7	17.9	29.6
満足していない	11.2	17.7	15.5	15.7	14.9	20.7	7.7	14.0
満足度__学校での友人関係								
満足している	40.5	44.2	41.8	32.8	36.4	29.3	51.3	39.8
どちらかといえば満足している	47.1	41.6	46.3	49.0	33.0	48.9	33.3	45.7
どちらかといえば満足していない	9.0	10.3	9.3	15.0	20.5	13.0	15.4	10.8
満足していない	3.4	3.9	2.6	3.2	10.2	8.7		3.8
満足度__現在の家族関係								
満足している	38.5	48.5	36.3	35.9	28.7	30.4	35.9	38.0
どちらかといえば満足している	43.8	38.2	48.2	46.0	36.8	40.2	48.7	44.0
どちらかといえば満足していない	11.7	9.4	10.7	12.5	14.9	21.7	10.3	11.9
満足していない	6.1	3.9	4.8	5.6	19.5	7.6	5.1	6.1
満足度__現在の生活全般								
満足している	22.4	29.2	24.8	21.8	22.1	21.7	17.9	23.5
どちらかといえば満足している	47.4	42.9	50.7	50.0	41.9	40.2	43.6	47.2
どちらかといえば満足していない	23.0	19.7	18.0	21.0	24.4	25.0	30.8	21.6
満足していない	7.2	8.2	6.5	7.3	11.6	13.0	7.7	7.6
満足度__今の日本社会								
満足している	3.0	3.9	2.9	3.6	2.3	6.5	2.6	3.3
どちらかといえば満足している	25.5	19.0	22.5	30.6	14.9	18.5	20.5	23.8
どちらかといえば満足していない	44.0	49.1	40.7	44.0	39.1	42.4	56.4	43.8
満足していない	27.5	28.0	34.0	21.8	43.7	32.6	20.5	29.0

	普通科	商業に 関する学科	工業に 関する学科	農業に 関する学科	水産に 関する学科	その他・ 総合学科	その他・ 福祉関係	全体
N	834	235	424	254	88	98	39	1972
満足度__現在、住んでいる地域								
満足している	28.5	38.2	29.6	38.7	30.7	29.3	30.8	31.4
どちらかといえば満足している	50.4	38.2	48.9	44.0	31.8	39.1	38.5	46.2
どちらかといえば満足していない	15.9	18.5	14.8	13.7	20.5	20.7	20.5	16.2
満足していない	5.2	5.2	6.7	3.6	17.0	10.9	10.3	6.2
自分には人よりすぐれたところがある								
とてもあてはまる	7.1	8.3	9.3	3.6	8.1	10.9	10.3	7.5
まああてはまる	26.9	28.9	35.7	25.4	23.3	17.4	7.7	27.9
あまりあてはまらない	50.6	46.1	45.0	52.0	39.5	53.3	48.7	48.6
全くあてはまらない	15.5	16.7	10.0	19.0	29.1	18.5	33.3	16.0
どうしてこんなことまで勉強しなければならないのかと疑問に思うことがある								
とてもあてはまる	30.0	36.2	36.0	34.5	35.6	22.8	35.9	32.7
まああてはまる	42.9	39.7	39.0	44.6	27.6	31.5	48.7	40.8
あまりあてはまらない	21.2	19.7	19.5	16.1	28.7	30.4	15.4	20.6
全くあてはまらない	5.8	4.4	5.5	4.8	8.0	15.2		5.9
たいていのことはうまくこなすことができる								
とてもあてはまる	4.4	4.8	5.2	4.4	3.5	6.5	2.6	4.7
まああてはまる	30.1	35.4	36.1	32.7	24.4	19.6	17.9	31.4
あまりあてはまらない	50.0	50.7	51.3	51.6	46.5	52.2	61.5	50.8
全くあてはまらない	15.5	9.2	7.4	11.3	25.6	21.7	17.9	13.2
将来の自分と今の学校生活がどうつながるのかわからない								
とてもあてはまる	17.5	17.1	19.0	19.8	27.6	18.5	7.7	18.4
まああてはまる	38.7	41.2	39.3	40.3	24.1	28.3	30.8	38.0
あまりあてはまらない	37.2	34.6	34.0	31.9	40.2	40.2	43.6	35.9
全くあてはまらない	6.6	7.0	7.6	8.1	8.0	13.0	17.9	7.7
今の日本では、学歴があれば自分の望む生き方を選ぶことができる								
とてもあてはまる	9.5	10.0	9.5	9.7	6.9	9.9	7.7	9.5
まああてはまる	32.3	33.6	30.2	29.6	23.0	24.2	23.1	30.6
あまりあてはまらない	44.6	45.0	43.2	46.6	49.4	52.7	38.5	45.1
全くあてはまらない	13.6	11.4	17.1	14.2	20.7	13.2	30.8	14.8

	普通科	商業に 関する学科	工業に 関する学科	農業に 関する学科	水産に 関する学科	その他・ 総合学科	その他・ 福祉関係	全体
N	834	235	424	254	88	98	39	1972
早く社会に出て働きたい								
とてもあてはまる	12.8	20.5	27.1	22.8	21.8	22.8	7.7	18.9
まああてはまる	29.8	32.8	34.7	35.8	34.5	26.1	25.6	31.9
あまりあてはまらない	42.0	31.9	33.0	29.7	28.7	38.0	43.6	36.5
全くあてはまらない	15.3	14.8	5.2	11.8	14.9	13.0	23.1	12.7
この学校に入って、自分の可能性が高まった								
とてもあてはまる	6.0	11.4	10.5	9.8	13.8	15.4	15.4	9.1
まああてはまる	30.9	38.0	42.7	38.6	34.5	18.7	38.5	35.0
あまりあてはまらない	49.9	37.6	38.7	37.8	39.1	50.5	33.3	43.7
全くあてはまらない	13.2	13.1	8.1	13.8	12.6	15.4	12.8	12.2
重要性__高い収入を得ること								
かなり重要	31.3	32.8	47.7	27.9	39.1	37.0	28.2	35.2
やや重要	49.3	55.0	39.7	51.8	36.8	26.1	56.4	46.7
どちらともいえない	13.2	7.9	8.8	13.8	18.4	26.1	7.7	12.4
あまり重要ではない	5.0	3.1	3.1	5.3	3.4	4.3	2.6	4.2
全く重要ではない	1.2	1.3	0.7	1.2	2.3	6.5	5.1	1.5
重要性__高い地位につくこと								
かなり重要	12.1	10.0	21.1	9.7	20.7	22.0	2.6	14.2
やや重要	27.1	30.1	32.5	28.3	26.4	17.6	25.6	28.3
どちらともいえない	38.7	38.4	31.1	39.7	36.8	42.9	30.8	37.1
あまり重要ではない	17.7	15.7	12.4	18.2	11.5	7.7	25.6	15.8
全く重要ではない	4.4	5.7	2.9	4.0	4.6	9.9	15.4	4.6
重要性__打ち込めるものをもつこと								
かなり重要	54.3	48.9	56.3	51.4	46.0	39.1	46.2	52.5
やや重要	35.0	36.7	33.7	36.0	31.0	23.9	46.2	34.6
どちらともいえない	8.1	11.8	8.3	10.1	16.1	26.1	7.7	10.1
あまり重要ではない	1.8	1.7	0.7	1.2	2.3	6.5		1.7
全く重要ではない	0.7	0.9	1.0	1.2	4.6	4.3		1.2
重要性__人並みに暮らすこと								
かなり重要	46.6	42.5	49.9	41.7	49.4	37.0	46.2	45.9
やや重要	38.8	44.7	36.3	43.3	29.9	31.5	43.6	38.9
どちらともいえない	11.4	9.6	11.2	11.3	12.6	20.7	10.3	11.6
あまり重要ではない	1.7	2.2	1.2	2.0	4.6	6.5		2.0
全く重要ではない	1.5	0.9	1.4	1.6	3.4	4.3		1.6

	普通科	商業に 関する学科	工業に 関する学科	農業に 関する学科	水産に 関する学科	その他・ 総合学科	その他・ 福祉関係	全体
N	834	235	424	254	88	98	39	1972
重要性__趣味を楽しむこと								
かなり重要	55.2	56.3	62.0	53.4	59.8	43.5	53.8	56.2
やや重要	32.8	34.1	30.6	34.0	24.1	25.0	35.9	31.9
どちらともいえない	10.1	7.9	5.7	8.5	11.5	20.7	10.3	9.2
あまり重要ではない	1.5	1.3	0.7	1.6	1.1	5.4		1.4
全く重要ではない	0.5	0.4	1.0	2.4	3.4	5.4		1.2
重要性__のんびり暮らすこと								
かなり重要	44.8	45.9	52.0	49.2	49.4	42.4	71.8	47.7
やや重要	36.7	34.9	34.7	34.1	28.7	22.8	20.5	34.4
どちらともいえない	13.3	13.5	11.6	10.6	12.6	20.7	7.7	12.8
あまり重要ではない	4.1	4.8	1.4	4.1	5.7	8.7		3.8
全く重要ではない	1.1	0.9	0.2	2.0	3.4	5.4		1.3
重要性__周囲の人とうまくやっていくこと								
かなり重要	61.7	67.5	67.7	60.2	60.9	41.8	69.2	62.7
やや重要	31.3	28.5	26.4	29.7	19.5	26.4	25.6	28.8
どちらともいえない	4.9	3.1	5.2	6.9	10.3	19.8	5.1	5.9
あまり重要ではない	1.2	0.4	0.2	1.6	4.6	6.6		1.3
全く重要ではない	1.0	0.4	0.5	1.6	4.6	5.5		1.2
重要性__仕事に生きること								
かなり重要	10.3	14.0	14.0	10.1	24.4	27.2	5.1	12.8
やや重要	23.9	23.1	25.2	28.3	18.6	16.3	12.8	23.8
どちらともいえない	41.7	40.2	39.0	41.3	38.4	33.7	41.0	40.4
あまり重要ではない	17.6	17.5	13.5	15.0	12.8	10.9	38.5	16.3
全く重要ではない	6.4	5.2	8.3	5.3	5.8	12.0	2.6	6.7
就職時の重視事項__自分の知識や技術を活かせる								
重視している	47.3	44.9	40.1	39.4	41.4	42.4	55.3	44.1
どちらかといえば重視している	43.7	43.2	48.9	49.6	41.4	31.5	42.1	44.8
どちらかといえば重視していない	7.5	10.6	9.5	8.1	12.6	22.8	2.6	9.3
重視していない	1.5	1.3	1.4	2.8	4.6	3.3		1.8
就職時の重視事項__失業のおそれがない								
重視している	47.3	45.4	57.0	42.7	46.5	29.3	47.4	47.7
どちらかといえば重視している	42.6	40.5	34.2	43.1	34.9	30.4	47.4	39.8
どちらかといえば重視していない	7.3	11.9	7.6	12.2	16.3	32.6	5.3	10.1
重視していない	2.8	2.2	1.2	2.0	2.3	7.6		2.4

	普通科	商業に 関する学科	工業に 関する学科	農業に 関する学科	水産に 関する学科	その他・ 総合学科	その他・ 福祉関係	全体
N	834	235	424	254	88	98	39	1972
就職時の重視事項__高い収入が得られる								
重視している	35.8	38.3	47.3	31.3	42.5	33.7	39.5	38.3
どちらかといえば重視している	47.9	49.8	41.3	53.7	39.1	27.2	44.7	46.0
どちらかといえば重視していない	14.1	10.6	9.7	12.2	13.8	30.4	13.2	13.2
重視していない	2.2	1.3	1.7	2.8	4.6	8.7	2.6	2.5
就職時の重視事項__拘束時間が短い・休日が多い								
重視している	21.7	28.8	33.0	24.0	26.7	22.0	21.1	25.5
どちらかといえば重視している	45.4	42.5	45.1	43.5	33.7	36.3	42.1	43.8
どちらかといえば重視していない	28.6	26.1	18.8	26.4	32.6	30.8	34.2	26.3
重視していない	4.3	2.7	3.1	6.1	7.0	11.0	2.6	4.5
就職時の重視事項__最先端の情報に触れることができる								
重視している	16.2	18.1	17.4	10.2	20.9	26.1	7.9	16.4
どちらかといえば重視している	30.9	29.5	38.4	34.6	36.0	31.5	18.4	32.8
どちらかといえば重視していない	41.3	47.1	36.0	43.5	34.9	34.8	57.9	40.9
重視していない	11.7	5.3	8.1	11.8	8.1	7.6	15.8	9.9
就職時の重視事項__社会に役立つ								
重視している	32.4	32.2	23.3	26.4	39.1	32.6	63.2	30.6
どちらかといえば重視している	43.7	40.5	44.4	48.0	31.0	28.3	26.3	42.4
どちらかといえば重視していない	18.8	25.1	25.7	21.1	18.4	31.5	7.9	21.7
重視していない	5.0	2.2	6.7	4.5	11.5	7.6	2.6	5.3
成功要因								
生まれ	14.9		18.6	18.7	24.7	18.7	23.7	15.1
能力	44.3		56.4	54.5	47.1	46.2	52.6	43.2
努力	65.7		71.7	80.1	69.4	74.7	63.2	61.4
よい学歴	28.0		25.0	29.3	28.2	30.8	39.5	24.5
運やチャンス	50.1		69.0	53.3	60.0	53.8	71.1	49.6
性別	2.2		2.6	2.8	12.9	4.4	2.6	2.7
容姿	16.3		18.6	17.9	27.1	20.9	23.7	15.9
コネや人脈	19.7		30.2	18.7	20.0	11.0	13.2	19.0